

令和4年度

「いわての復興教育」

実践事例集



令和5年3月
岩手県教育委員会

I いわての復興教育推進事業

●	1	いわての復興教育スクール〈沿岸〉	●
01		大船渡市立盛小学校	1
02		大船渡市立越喜来小学校	3
03		陸前高田市立高田小学校	6
04		大船渡市立末崎中学校	9
05		大船渡市立東朋中学校	11
06		釜石市立釜石中学校	15
07		宮古市立宮古小学校	18
08		宮古市立河南中学校	20
09		野田村立野田中学校	23
10		高田高等学校	27
11		大船渡高等学校定時制	30
12		釜石高等学校定時制	32
13		山田高等学校	35
14		宮古北高等学校	37
15		宮古水産高等学校	39
16		岩泉高等学校	41
17		久慈東高等学校	45
18		種市高等学校	48
19		宮古恵風支援学校	51
●	2	交流学習スクール	●
20		釜石市立釜石中学校	53
21		宮古市立田老第一中学校	56
22		野田村立野田小学校	58
23		山田高等学校	60
24		宮古商工高等学校商業校舎	62
25		宮古水産高等学校	65
26		久慈東高等学校	67

● 3 震災学習列車活用スクール ●

27	大船渡市立赤崎小学校	69
28	大船渡市立吉浜小学校	73
29	釜石市立釜石中学校	75
30	宮古市立山口小学校	78
31	山田町立山田小学校	82
32	岩泉町立小本小学校	85
33	宮古市立第二中学校	87
34	山田高等学校	91
35	種市高等学校	93
36	気仙光陵支援学校	96
37	久慈拓陽支援学校	98

II 学校安全総合支援事業（文部科学省事業）

● いわたの復興教育スクール〈内陸〉 ●

38	住田町立世田米中学校	102
39	盛岡市立桜城小学校	105
40	盛岡市立杜陵小学校	107
41	盛岡市立下橋中学校	109
42	盛岡市立巻堀小学校	111
43	盛岡市立好摩小学校	114
44	盛岡市立巻堀中学校	117
45	矢巾町立不動小学校	119
46	矢巾町立徳田小学校	122
47	矢巾町立矢巾中学校	125
48	八幡平市立田頭小学校	128
49	八幡平市立西根中学校	131
50	軽米高等学校	133
51	金ヶ崎高等学校	137
52	平舘高等学校	140
53	盛岡みたけ支援学校	143

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：大船渡市立盛小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は震災直後に校舎が避難所になり、その後校庭に仮設住宅が建てられた。児童には体力の低下や精神面での不安定さなど、様々な影響が見られたが、地域の復興とともに学校生活も落ち着きを取り戻してきた。

そこで、沿岸地方にある震災や復興に関わる施設の見学を通して、震災を語り継ぐための活動や復興に向けた努力を学ばせる機会とするために、本事業を活用した震災学習に取り組んでいる。

II 取組の概要

1 ねらい

- 東日本大震災の津波がいかに巨大であったかを知り、命を守るための避難について学ぶ。
- 東日本大震災によって犠牲になった方々を追悼・鎮魂するとともに、復興に向けて多くの人々が尽力してきたために今があることを知る。

2 具体的な取組

(1) 1・2年生

ア 大船渡市防災観光交流センター見学

新聞紙でスリッパを作ったり、すごろくのゲームをしたりしながら、災害時の望ましい行動について学んだ。



イ 岩手県立野外活動センター見学

震災以前は高田松原に立地していた同施設を見学し、ボッチャを体験しながら1・2年生の交流を深めてきた。

ウ 児童の感想

事後指導として初版副読本P64「家族で地震にそなえましょう」を扱い、家族で防災について考えてもらう機会とした。

- ・いつでもさいがいにそなえることがたいせつです。家に帰って、親といっしょにぼうさいグッズのかくにんをしようと思います。
- ・しんぶん紙でスリッパが作れることがびっくりしました。家に帰って作ってみました。わたしもいざというときにはスリッパを作って、こまっている人をたすけたいと思います。

(2) 3・4年生

ア いのちをつなぐ未来館・祈りのパーク見学
事前学習において改訂版副読本P62「そなえることを学ぶ場所」を扱った。当日は施設内の資料をもとに震災当時のことを学んだり、津波が到達した高さや犠牲になられた方のお名前を目にしたりして、津波の恐ろしさを実感した。



イ 釜石鶴住居復興スタジアム見学

スタジアムが整備された理由や、施設の特徴などを教えてもらった。グラウンドやロッカールームにも入らせてもらい、選手の気分を感じてきた。

ウ 児童の感想

- ・いれいひにはぎせいになられた方々の名前がぎざまわっていました。あまりにも多く、涙があふれそうになりました。11mもの津波が時速35kmのスピードでくるとは思いませんでした。私は学んだことを生かして、そなえるかくごをしながら、ひなんくんれんもしっかりしたいです。私は東日本大震災と同じようなことは二度と来ないように願っています。

(3) 4年生

ア 三陸鉄道についての調べ学習

改訂版副読本P42「沿岸部のまちを、人をむすぶ」を学習した後、三陸鉄道が震災後どのように復旧を遂げていったのか調べた。

- ・壊滅的な被害を受けたが、震災から5日後には一部路線で運行を再開した。
- ・列車が再運行したときは、地域や支援する方々が旗を振って見送った。など

イ 児童の感想（ふりかえり）

釜石市にある施設の見学と、三陸鉄道について調べた後、学習をふりかえった。

- ・多くの人たちがぎょう力して震災から復興をめざして力をあわせたことがわかりました。みんなできょう力して、一人ではできないことをみんなでやっていきたいです。

(4) 5年生

5年生はいわての復興教育推進事業を活用し、3年生時に釜石鶴住居復興スタジアムを見学した。4年生時には陸前高田市にある東日本大震災津波伝承館を見学し、防災学習を深めてきた。今年度は大船渡市にある防災学習館を見学し、震災当時のことを教えていただき、防災への意識をさらに深めた。これまでに学習したことをまとめ、学習発表会の場で地域の方に防災の大切さを発信しようとして計画した。

ア 事前学習

3グループに分かれて調べていくにあたり、復興副読本を活用し、何をテーマに調べるのか見通しをもたせた。

初版P44「日本の主な災害」

初版P46「地震のしくみと被害」

初版P48「津波のしくみと被害」

改訂版P58「大きな災害ではライフライン…」

改訂版P60「災害に備える」

イ 災害のしくみと過去の災害

津波が起こるメカニズムについて調べたことと、チリ地震津波を体験した家族から聞いた話を発表した。

- ・ぼくのおばあちゃんは当時10歳でした。盛川の水や海の水が引いたと思ったら、水が固まりとなって押し寄せてきたそうです。

ウ 危険な場所と災害時の行動

ハザードマップとは災害予想地図のことであり、自然災害が発生した時に、どこでどのような災害が起こるかを予想し、地図上に示したものであることを調べた。

盛川の近くは川の水があふれる危険があり、サンリアの辺りは水が詰まって出にくくなる危険性がある。盛小学校の学校坂は、道路が狭くなり、崩れる危険性がある。盛地区の避難場所は盛小学校、リアスホール、県営災害住宅の集会所などがあることを調べて発表した。

- ・災害から命を守るために、私たちはどのような行動をすればよいのでしょうか。一つ目は川などの水の近くに行かないこと、二つ目は水が来ない、できるだけ高い所に行くこと、三つ目は最新の気象情報を知るようにすること、四つ目は警報が発表されたら素早く行動することです。

エ 災害時に役立つ知恵

災害時に役立つグッズなどを調べて発表した。

【防災バッグ】

- ・ぼくのお家の防災バッグの中身は、災害用体ふきタオル、タオル、手回し式ラジオ、マスク、軍手、色々なスマホに使える充電器が入っています。特に大事だと思う物は、災害用体ふきタオルです。断水時は入浴できないからこれで体をふくことができるからです。

【防寒具】

- ・袋と新聞紙で防寒具を作ることができます。袋の中に丸めた新聞紙を入れます。その袋に足を入れると、足を温めることができます。



【ランタン】

- ・懐中電灯にレジ袋をかぶせるとランタンを作ることができます。また、水が入ったペットボトルの上に懐中電灯を置いてもランタンを作ることができます。

【防災食】

- ・災害時には電気が使えなくなったり、水が止まったりします。加熱できるビニル袋を使うと、スープとご飯を同時に作ることができるので節水にもつながります。

オ ふりかえり（発信：～伝えたい思い～）

命を育む豊かな地球。災害はとつぜんやってきて、私たちから大切な物をうばっていきます。過去の災害を学ぶこと、常に災害に備えること、一人ひとりが命を守るために、自分たちのできることをみんなで考えていきましょう。

私たちの命は、様々な困難を乗り越えてきたご先祖様の命とつながっています。生まれてきたこと、育ててもらったこと、そのすべてに感謝しながら私たちは生きていきます。

III 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 今年度は釜石方面を見学したことで、昨年度までの実践に加え、さらに広く・深く岩手の復興教育について学習することができた。
- (2) 様々な施設を見学したり、多くの方とふれ合ったりして、かかわりをもつことができた。

2 課題

- (1) 他教科と総合的に関連づけることをさらに吟味し、学習効果を高めるように計画する。
- (2) 復興教育のねらいと児童の興味関心とを結びつけた学習活動を計画する。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：大船渡市立越喜来小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 地域や学校の被災や復興の状況

当学区は、大船渡市の北部に位置し、夏涼しく冬温かく温暖な地域であり、東に起伏に富んだ海岸線とそれを取り巻く紺碧の海、三陸海岸の中でも景勝地である。越喜来湾を囲み、うに・あわびの採取、ワカメ、ほや、ホタテの養殖や定置網等の沿岸漁業がおこなわれている。また、西には夏虫山、今出山がそびえ、農業、畜産業の地として、広大な放牧場や観光施設を有し、のどかな景色が広がっている。

東日本大震災により、漁業関係は壊滅的な被害を受けたが、復興が進み震災前の状態に戻りつつある。また、公共施設や商店街も大きな被害を受けたが、復旧工事は少しずつ進み、浦浜地区には復興商店街や復興公営住宅が建設された。

学校施設については、全壊となった。このため統合予定であった崎浜小、甫嶺小とともに、平成 23 年 4 月 20 日より合同授業を甫嶺小校舎で開始した。翌平成 24 年 4 月 1 日には、3 校が統合した。平成 28 年 11 月 7 日より新校舎での授業が開始され、現在に至る。

2 児童の実態

子どもたちは震災の体験談を聞いたり当時の写真資料等を見たりする機会が多い。自然災害を身近なものと感じ、教訓を受け入れ備えている。避難訓練にも真剣さが感じられる。

しかし、一方で震災から 11 年が経ち、町の復興や記憶の風化とともに、どこか他人事のようにも感じ始めている。

そこで、陸前高田市の復興した街並みや施設を見学することで、11 年前の震災のできごとを振り返り、壊滅的な状況から力を合わせ復興に取り組んできた人々の熱い思い、力強さ、躍動感を子どもたちに感じ取らせていきたい。そして、この学習を通して、自分たちの暮らしている大船渡市や沿岸地域に対する誇りをもたせていきたい。

II 取組の概要

1 ねらい

- 施設見学を通して、児童自ら見たり聞いたりする活動を行い、東日本大震災について振り返り、学習を深める。
- 復興した町の様子を見学し、まちづくりへの参画意識を高め、地域の一員であることを自覚し、自然災害への心構え、自らの生き方、あり方等について学ぶ。

2 学団ごとの取り組み

(1) 「1・2年」「3・4年」共通の取り組み

気仙大工伝承館の見学

ア 「3.11 希望の灯り」の見学

気仙大工伝承館では、「3.11 希望の灯り」を中心に見学した。施設の方から次のことを聞いた。

- 1995 年 1 月 17 日に起こった阪神淡路大震災を機に神戸市につくられた「1.17 希望の灯り」が分灯されたものであること。
- 震災で失われた犠牲者の追悼と、復興への願いが込められているものであること。
- これからもこの灯りを大事に守ってほしい。灯りを守るということは平和を守ること、これから守っていくのは気仙地域に住んでいる子ども達であること。



イ 母屋の見学

母屋は、気仙大工左官の優れた建築技法を後世に伝えるために建設されたものである。昔の道具も展示されており子ども達は興味をもって見学したり、施設の方の話を聞いたりしていた。

- 昔の人は、生活をよりよくするための工夫を続けていた。
- 欄間を見ると小さな穴がある。これはネズミの通路である。昔の人は生き物を大事にし、共存の道を探っていた。
- もちろん新しいものも追い求めて欲しいが、このような優れた伝統も大切にしたい。



(2) 「3・4年」の取り組み

ア 「津波伝承館」の見学

津波伝承館は、写真やパネル、映像、遺物等で東日本大震災の事実を分かりやすく伝えている。また、そこから得られた教訓も伝えている。ガイドの方から次のような話を聞いた。

- ・この瞬間にも世界では、地震などの自然災害が頻発している。いつ何時発生してもおかしくないのが地震等の自然災害である。日頃からの備えを怠ってはならない。
- ・バス停やポンプ車を押し流し潰してしまうほど津波の力は巨大である。自分だけは大丈夫と思っはならない。大きな地震がきたらすぐに高いところに避難する。これを覚えておいて欲しい。
- ・越喜来小学校の新設避難階段を解説したパネルコーナーもある。ぜひ観てほしい。
- ・東日本大震災では、お互いに大変なところを助け合った。そして世界の国々からも大きな支援を受けた。助け合いの気持ちを大切にしたい。



イ 県立野外活動センター・ニュースポーツ体験

再開された県立野外活動センターへ行き、施設見学を行うとともに体育館をお借りしてニュースポーツ体験（キンボール）を行った。

移動途中で復興した街並みを観たり、再建された県立野外活動センターを観たり、子ども達は復興の様子を感じとっていた。



ウ 児童の感想から

- ・14時46分に地震が発生、すぐに津波警報がだされたけど、避難している間に津波がおしよせてきたことが分かりました。
- ・1933年におきた地震と津波では、およそ55000人が犠牲になったことが分かりました。
- ・何トンもの鉄の橋やバス停の看板をスクラップみたいにするのがちょっと怖かったです。
- ・津波のときには、「津波てんでんこ」を思い出すことが大切だと思いました。
- ・副読本にのっているこわれた消防車がほんとうにあって、すごく津波の威力が強いのが分かりました。
- ・津波の高さが14mから15m、マグニチュードは9.0だと分かりました。
- ・外国の方で起きた地震も分かるのですごいと思いました。
- ・津波の映像や津波で流された物を見ることができました。
- ・シアターで動画を見て津波が恐ろしいことがわかりました。

(3) 1・2年の取り組み

ア 「奇跡の一本松」

高田松原津波復興祈念公園内にある遊歩道を歩きながら移動し、「奇跡の一本松」を見学した。子ども達には次の3点のことを伝えた。

- ・この場所には海水浴場があり、夏になると多くの人を訪れて海水浴を楽しんでいた。多くの人にとって思い出の場所である。
- ・「高田松原海水浴場」と呼ばれるようにたくさん松の木があった。しかし、残ったのはこの木一本だけであった。
- ・残った一本の木は、現在はレプリカではあるけれど、震災当時はこの木に多くの人々が励まされた。



イ 「高田松原海水浴場」

新しくできた高田松原海水浴場へ移動し、みんな元気で遊んだ。子ども達には次のことを説

明した。

- ・みんなの願いでつくられた海水浴場であり、遊ぶときも大事にしなければならない。
- ・先生達も「もう一度、高田松原海水浴場で海水浴を楽しみたい」と思っていた。だから、「みんなの願い」の中の「みんな」には先生達もいる。そして、みんなの家の人たちもいるかもしれない。



ウ 児童の感想から

- ・伝承館を見てびっくりしたことは、家に神様がいるということです。
- ・昔の家には、わたしたちがもっていないものがあってびっくりしました。
- ・津波に流された人に花をあげていた人もいたし、手を合わせている人もいました。
- ・奇跡の一本松を見て心があつたまりました。みんなもすごく落ち着くと思います。
- ・津波のとき、つらかったときに励ましてくれた木だとはじめて知りました。
- ・海水浴場で貝がらやワカメがいっぱいとれてうれしくてたまりませんでした。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 東日本大震災津波の被害の様子を学ぶことで被害の大きさや津波の恐怖を感じるとともに防災への意識を高めることができた。
- (2) 陸前高田市の整備された街並みを観たり、高田

松原海水浴場を見学したりして、復興に向けて努力してきた人々の願いや努力を感じ取ることができた。

- (3) 自分たちが暮らしている沿岸地域の復興の様子を見たり聞いたりすることで、ふるさとに対する誇りや愛着を育てるよい機会となった。

2 課題

- (1) 復興教育計画について毎年度見直しを行い、実態に即した学習を継続して推進していくこと。
- (2) 実態に即した学習を継続的に進められるように新たな見学地や施設を見出していくこと。



「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：陸前高田市立高田小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

高田町は市の中心部に位置し、東日本大震災により、高田松原の流出、住宅の全壊等で街の景観は大きく変貌した。令和元年度、市の区画整備事業の実施により高台に新校舎が完成し、同年8月より新校舎での生活を開始した。区画整備による道路工事及び、公共施設、商店街等の再建が行われ、市街地の整備が進んでいる。住宅地の高台移転に伴い、新しい地域共同体がつけられている。

本校では、「周りへの感謝を忘れず、どのような状況でも前に踏み出す子」を目指し、「地域の人、文化、産業、歴史、自然を学び、ふるさとの未来を考える『つながる つなげる 高田学』というテーマを掲げ取り組んでいる。11月のフリー参観日においては保護者に対し授業を公開した。令和4年度も同様に、研究課題を「未来を切り拓いていく力の育成～『いわての復興教育』を通して」とし、未来の創り手となる児童を育成するため、「いわての復興教育」を研究に据えた展開を目指し取り組んだ。

II 取組の概要

1 各学年のテーマに沿った復興教育の推進

各学年の年間テーマを決めて、生活科、総合的学習の時間を中心に復興教育に取り組んだ。

(1) 1年生 「地域の良さを知る」

ア 地域で支えてくれている人の学習

学校の内外で出会った人たちが、あいさつや交通安全・災害の見守りなど、色々なことを通じて自分たちを支えていることに気付くことができた。また、そのことに対し「ありがとう」の気持ちを持ち、感謝の気持ちを表すにはどのようにしたらよいのかをみんなで考えた。

イ 感謝の手紙の作成

自分たちにあいさつをしてくれたり、交通安全や災害の時に守ってくれたりする方々に対して、「感謝の手紙」を作成した。

ウ 感謝の手紙の贈呈

交通安全や災害の時に守ってくれる方々に対して、「感謝の手紙」をお渡しした。

エ 感謝のメダルの作成

交通安全や災害の時に守ってくれる方々に

対して、感謝の会の時に渡す「感謝のメダル」を作成した。

オ 感謝の会での贈呈

感謝の会で、交通安全や災害の時に守ってくださる方々に対して、「感謝のメダル」をお渡しした。

カ まとめの学習

これまでの学習を振り返り、家族や教職員だけではなく、地域の人たちが大きく関わっていることにも気づき、「自分たちは一人ではない。もっともっと地域の人たちと関わってきたい」という前向きな意識も持つことができた。



(2) 2年生 「ふるさとのお店のよさを発見する」

ア 家族へのインタビュー

自分の家族がどのような思いをもって働いているのか、家族にインタビューをした。その中で、働くことは「お金を稼ぐ」ことだけでなく、「お客さん」のために頑張っていることもあるのだと気づくことができた。

イ 高田町にある「お店」について学習する

高田町にある「アバッセ」（集合商業施設）について、売っているものだけでなくどのようなことに気を付けて働いているのか学習をした。その中で、「地元」の商品を売ることや防災の視点でも気を付けていること学ぶことができた。

ウ アバッセ（集合商業施設）への校外学習

実際にアバッセへ行き、カフェや商店、図書館の方へインタビューをし、震災からの復興の歩みを学んだ。お店の人たちから、商品を売る為に気を付けていること、お客様の視点に立つて売ること、防災のことを聞くことができた。

エ 感謝の手紙の贈呈

商業施設(アバッセ)でインタビュー方々や対応してくれた方々に対して、「感謝の手紙」をお渡しした。

オ まとめの学習

これまでの学習を振り返り、ふるさとのお店は、地元の商品をより意識して販売していることを学んだ。自分たちも地元の商品をより意識して見ていきたいことをみんなで確認した。



(3) 3年生「高田の防災を支える人を知る」

ア 地域の防災についての学習

社会科の学習や総合的な学習の時間で、高田の人々は、災害から地域をどのように守っているのかを学習し、地域の防災に対し、より深い関心を持った。

イ 路上にある消火栓調べ

校外学習で高田小学校学区の道路近くにある消火栓の数や道路標識を調べ、置いてある意味や働きを学んだ。

ウ 消防署への校外学習

校外学習で消防署に行き、火事が起こった際の防火の仕組みや未然に防ぐ活動を行っていることを学習し、地域のために防災活動を先頭に立って行ってくれている存在に気付くことができた。

エ まとめの発表

高田の防災を支える人たちが、どのようにして自分たちを守ってくれているのかについて、今まで学習したことを発表した。

発表会では、防災を支えてくれている人任せではなく、自分自身が自己の命、身体を守ることが一番大切であることを発表した。



(4) 4年生「地域の復興・防災について知る」

ア 津波伝承館への校外学習

津波伝承館へ行き、震災の悲惨さや復興を学び、地域に対して自分たちにできることは何かを考えることができた。

イ 桜ライン3. 11桜の下草清掃

復興を支えた人々の想いをつなげる活動を通して、地域に対して自分たちにできることは何かを考え、草取りをすることで、自分たちの生き方や将来への希望をもつことができたようになった。

ウ 浅沼ミキ子様の講話

「ハナミズキのみち」の会代表 浅沼ミキ子様を招いて講話を聞き、復興に関わってきた人たちの想いを知り、自分たちにできることは何かを考えることができた。

エ 逃げ地図づくりフィールドワーク

地域の避難路の状況について、タブレットを用いて調査学習を実施した。その後は、逃げ地図を実際に作成し、防災意識を高めることができた。

オ 壁・個人新聞作り

復興に関わって、自分に何ができるかを考え集めた情報を整理・分析して、個人新聞・壁新聞にまとめた。

カ まとめの発表

まとめの発表では、東日本大震災から立ち上がる人々の「思い」を考えながら、自分の身を守るために一番良い方法をみんなで考えることができた。



(5) 5年生 「ふるさとから発信する」

ア 地域の商業施設の復興の様子について学ぶ

地域の中心市街地に目を向け、地域のお店や公共施設がどのような歩みを経て復興してきたのかを学習し、どんな「まち」を目指して造られたのかについて学習した。

イ 伊藤孝様（陸前高田商工会会頭）の講話

アバッセの復興の歩みを知り、再建や復興に込められた思いや願いに気付き、自分たちもまちづくりの担い手であるという意識を高めたり、態度を育んだりすることができた。

ウ アバッセに行き、そこで働く方々にインタビューをした。その中で、防災に関する取り組みなどを聞き、復興に関わる人々の想いを感じ取ることができた。



(6) 6年生 「高田の未来を創造する」

ア 総合的な学習の時間で、高田松原の再建について学び、これからの学習で追究したい課題を明らかにしていった。

イ 高田松原を守る会の方からお話を聞く会

講師 高田松原を守る会 会長 鈴木 善久 様
高田松原を再建しようとした思いや、植樹活動の実際についてお話を聞き、自分たちができることは何かについて考えた。

ウ まとめの学習で、被災した松原に対し、希望を失わず、再建していくための行動をとった人々の様子を詳しく学習したことで、自分は地域とどのように関わっていくか、将来どのようになってほしいかを考えることができるようになった。また、自分たちができることは何かを考え、行動できるようになった。



(7) 全校

ア 避難訓練

児童が主体的に行動できるよう、休み時間に予告を行わずに実施する避難訓練を実施した。

イ 感謝の会

交通安全や災害の時に守ってくれる方々に対して、「感謝の会」を開き、歌や踊りを披露し感謝の言葉をお伝えした。

ウ 保護者引き渡し訓練

大雨警報による児童単独での帰宅困難を想定した保護者への引き渡し訓練を行った。

エ「高田学の日」授業参観日（復興教育授業公開）

復興教育に関わって学習してきた内容について保護者に授業を公開した。

オ 氷上太鼓発表

音楽集会において、高田町に伝わる「氷上太鼓」の発表を行った。

カ 高田第一中学校生との交流会

中学校における復興教育の実践発表「思いのバトンパス」を聞く機会を設けた。中学生自身が作成した紙芝居やパワーポイントによる発表を5・6年生が聞き、交流した。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 震災からの復興に向かって一步一步着実に、誠実に活動している人たちの姿から、自分たちができることは何かについて児童自身が主体的に考え、小学生なりの視点から「自己の考え」を導き出すことができた。

(2) とにかく地域の人とのつながりを持つことができたことが、大変大きな成果であった。子供たちなりに人と人とのつながりを感じ、ふるさとへの誇りや想いを高めることができた。

2 課題

各学年での活動のみにとどまってしまう、上学年が下学年に学んだことを発表するなどの校内で交流を図ることができなかった。来年度は、計画段階で系統性を持たせられるようなテーマ・取り組みにしていくとともに、学年間での交流を図ってきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：大船渡市立末崎中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は大船渡市の南に位置し、眼下には太平洋を眺望することができる。とりわけ基石海岸は陸中海岸国立公園の絶景の一つに数えられ、例年多くの観光客が訪れる。地域の産業としては、わかめなどの養殖業及び冷蔵事業や民宿など水産や観光に関わる業態が特徴である。

本校では、地域の漁家の協力を得てわかめの養殖から販売までを行うわかめ学習を平成14年から実施し、修学旅行時に東京で販売を行ってきた。東日本大震災では、わかめ学習で使用していた養殖施設や養殖中のわかめをすべて流され、販売することはできなかった。しかし、全国からたくさんの支援をいただき、震災の翌年にはわかめ学習を再開させることができた。

現在は、「郷土を愛し、その復興・発展を支える人材を育成する」を目標に以下の3つの重点目標をたて、3年間を通して系統的に復興教育を実施している。

① わかめ学習を通して、自然の恵みや地場産業、漁業関係者との関わりをもつことによって、地域住民としての自覚を深め、勤労観・職業観を育成する。

【主に「かかわる」】

② 道徳の授業を中心に復旧・復興に向けて努力してきた先人に学び、目標を持って生きていこうとする態度を育てる。【主に「いきる」】

③ 防災学習や震災講話などを通して、大震災時の教訓を伝えるとともに、災害に備え身を守るための方法や情報の収集、日頃の備えなど防災について関心を深める。【主に「そなえる」】

本事業に関わるのは①の「わかめ学習」である。

II 取組の概要（本事業に係る内容）

1 わかめ販売（2年）

令和4年10月6日（木）、盛岡市の肴町商店街と盛岡駅おでんせ館において、2年生による復興「ふれあいわかめ販売体験学習」を行った。

生徒たちは事前の接客販売講習で学んだ成果を発揮し、大きな声を出しての呼び込みや笑顔での接客を心掛け、短時間で完売することができた。自分たちの手で育て商品として作り上げた『ふれあいわかめ』を直接お客様の手に渡し、笑顔で帰られる姿を見て、大きな充実感を得ていた。そして、職業に

携わることの意義ややりがいを実感するとともに、郷土末崎への誇りを強く感じていた。



2 わかめの種巻き作業（1年）

令和4年11月28日（月）、1年生25名が「わかめの種巻き作業」を行った。波風がほとんどなく快晴の絶好のコンディションの中、本校わかめ学習指導者の尾崎眞氏、大船渡市漁業協同組合末崎支所、わかめ養殖組合の皆様からご指導をいただきながら船上での作業を進めた。

生徒たちは、事前練習の成果を生かし、戸惑いながらもしっかりと種巻き作業に取り組んだ。作業の難しさに苦労しながらも、世界一の末崎中わかめに育ってほしいという思いを強くした。



3 わかめの早刈り作業（1年）

令和5年1月23日（月）、1年生25名が「わかめの早刈り作業」を行った。気温は低いものの波風ともに穏やかな海況の中で、本校わかめ学習指導者の尾崎眞氏、大船渡市漁業協同組合末崎支所、わかめ養殖組合の皆様からご指導をいただきながら船

上での作業を進めた。

「種巻き作業」とは異なり事前練習ができないためぶっつけ本番となり、慣れない手つきながらも丁寧に作業を進めた。今年は生育の遅れが見られ、例年より少ない約 60 kgの収穫となった。収穫したわかめは、さっそく岸壁で試食したのち、全校生徒へ配布し各家庭へ持ち帰った。

作業を終え、2月末に予定している「本刈り」に思いをはせ、あと一か月での急成長を祈っていた。



Ⅲ 取組の概要（本事業に係らない内容）

1 復興道徳と復興朝読書

各学年「先人に学ぶ道徳」として岩手県版中学校道徳資料集『郷土の未来を見据えて～先人の生き方に学ぶ』、「郷土の復興・発展を考える道徳」として岩手県道徳教育郷土資料集『故郷の岩手』を使った復興道徳授業を行った。また、復興教育副読本「いきる・かかわる・そなえる」を活用した朝読書週間を設定し、先人から学ぶ機会を設けた。

2 復興・防災学習

従来より避難訓練に合わせて防災体験学習（1年：消火・煙体験、2年：AED講習、3年：応急手当）を行ってきた。今年度はさらに体験学習の幅を広げ、復興・防災学習の深化に努めた。

(1) 1年生

【震災体験学習】

東日本大震災についての体験を家族など身近な人から取材し、全体で共有した。（7月）

(2) 2年生

【震災学習】

東日本大震災について「語り継ぐ」ことをねらいとし、『東日本大震災伝承館 いわて TSUNAMI メモリアル』を見学した。（12月）

【防災教室】

岩手県立大学から講師を招き、避難所運営ゲーム（HUG）を通して、災害時に共助として何ができるかを考えた。（12月）



(3) 3年生

【遠野西中学校との交流】

本校を会場とし、3年生の交流を行った。地震を想定し、海岸からの避難訓練を実施した後、合唱などの交流活動を行った。沿岸の中学生が来訪者を安全に誘導することや、内陸部の中学生が被災地で実際に避難体験をすることをねらいとし、改めて震災への理解を深めた。（12月）



Ⅳ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 生徒は「わかめ学習」を本校の誇りととらえており、意欲をもって学習に取り組んでいる。また、地場産業など郷土への関心も高まり、復興や発展について深く考える機会とすることができている。
- (2) 「先人に学ぶ道徳」では、郷土の先人の生き方に触れ、自分たちの住んでいる地域の復興を支えようとするという気持ちを高めることができた。
- (3) 「防災学習」により、災害時における行動の仕方を身に付けさせるとともに、自分の身は自分で守るという意識を持ち、共助という観点から自分のできることを考え行動しようとする姿勢を養うことにつながった。
- (4) 学年ごとに実施した震災学習や他校との交流を通して、震災への理解を深めるとともに、防災への関心を高めた。

2 課題

- (1) 全体での体験中心の学習が多く、個々の課題解決や探求を十分に深めることができていない部分もある。課題の持たせ方や振り返り、まとめの方法を検討する必要がある。
- (2) 「わかめ学習」にかなりの時数を当てているため、キャリア学習も含め、復興・防災学習と合わせて、総合的な学習の時間をどのように計画するかが課題である。体験させることを精選する必要がある。
- (3) 「わかめ学習」に必要な地域の人材と経費の確保。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：大船渡市立東朋中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

当学区である赤崎町と三陸町綾里は、大船渡市の市街地と湾を挟んだ東側に位置し、リアス海岸に面した水産業が盛んな地域である。東朋中学校は、令和3年度に赤崎中学校と綾里中学校の2校が統合した学校であるが、両校ともに東日本大震災では多くの被害や影響を受けている。赤崎中学校は、津波で校舎が全壊し、同じ市内の校舎の一部を借り、その後、仮校舎で授業が行われた。また、綾里中学校の校庭には仮設住宅が建てられ、学校生活が制限された。地域では、復興のための行事を行い、郷土芸能などの伝統行事も復活させながら地域を盛り上げている。コロナ禍で、中止せざるを得ない行事もあるが、行われた行事には中学生も参加し復興の一助となっている。

本校は、第二避難場所（避難生活をおくる場所）になっており、災害時には地域の方々が避難してくることが予想される。有事の際、生徒が地域の力となる実践力を身に付けられるように、復興・防災学習の柱として避難所運営体験を行っている。また、今年度は事前学習として、陸前高田市にある東日本大震災津波伝承館の見学と同市の岩手県野外活動センターで避難所運営ゲームの演習を行った。

II 取組の概要

1 避難所運営体験のねらい

- (1) 生徒が災害への備えと発災時の避難所について考え、実際に運営することで、留意点や支援の在り方を学ぶ。
- (2) 体験をすることで、より真剣かつ現実的に行動し、有事における実践力を身に付ける。
- (3) チームで行動することで、自分の役割を主体的に果たすことと、協力して活動することを学ぶ。

2 内容

(1) 事前学習

① 東日本大震災津波伝承館の見学

展示物について、解説員の方々の説明を聞いたりガイダンスシアターでの動画を視聴したりすることで、震災津波の発災時の様子や被害の実態を克明に学んできた。また、写真や被災者

の記録の証言により津波から命を守るための教訓を学んできた。



〈生徒のまとめより〉

・津波伝承館で見た動画の中で、私たちの印象に残ったのが、『100回逃げて、100回津波が来なくても、101回目は必ず逃げて』という言葉です。いくら震度が小さくても規模が大きいと津波が来る時があるので、油断しないようにしたいです。もし、今後大きな地震が起きたら、まずは自分の命が最優先です。自己犠牲は考えずに一目散に高台に逃げるのが大事だと学びました。



② 避難所運営ゲームの実施

災害時などの避難所の運営を紙上で体験する学習ゲームである。カードに書かれた避難者の状況への対応をチームで相談し、避難所に見立てた模造紙に配置することで避難所運営のポイントを学ぶことができる。

今回は避難所運営体験にいかせるように東朋中学校の体育館と武道場を模造紙にかき、避難所に見立てて避難所運営ゲームを行った。



<生徒たちのまとめより>

- ・避難所運営ゲームでは、いろいろ条件をもった人が避難してきたので、それに合わせて場所を分けたり、本部の場所や通路の作り方など、どうすれば避難者が避難所で快適に過ごせるかを考えたりすることができました。
- ・どんな人が来るか分からないから対応に困った。避難者を地域ごとに分けると良かった。トイレの使用状況への対処が難しかった。次々に人が来ることが大変だった。焦らず常に冷静でいることが大切だと思った。人のことを考えて行動することが大切だと思った。



③ 災害時に備えた校内の資源の確認

避難所運営体験の準備をする過程で、災害時に備えた校内にある資源の確認を行った。確認をする前に大船渡市の避難所運営マニュアルを元に運営側の生徒が6つの班に分かれ、それぞれの班ごとに準備するものをまとめた。生徒たちは、避難所運営ゲームで学習したことをいかし、様々な避難者に対応できるように準備することができた。

(2) 避難所運営体験

① 概要

<進め方>

- ・前半の2回に分けて運営を体験する。前半が終わって途中で振り返りを行うことで改善を図り、後半の運営体験にいかす。
- ・1年生と2年生は避難者役として、それぞれの条件の下で動いたり、イベントを起こしたりする。3年生は避難所運営をする側として、各班ごとにそれぞれの役割で避難者に対応する。

<状況設定>

- ・巨大地震が起こり、5mの津波が発生し、交通網が分断される。体育館を避難所として立ち上げ、体育館を中心とした避難所の開設を行う。震災本部の市役所職員が到着するまで、避難者の受け入れや負傷者等の看護を生徒が主体となって行う。

<6つの役割>

- ・受付・案内班…受付の設営、避難者への対応、誘導を行う。外国人への対応も行う。



- ・食料・物資班…物資の管理、食料等の配布を行う。体育館の中は寒かったため、温かい飲み物を提供したり防寒対策をしたりする。



- ・施設管理班…安全点検、避難所の区画整理、物品の管理を行う。



- ・保健・衛生班…トイレ、衛生活動、ケガ人対応、急病人対応を行う。



- ・要配慮者支援班…要配慮者の部屋・管理、子どもたちの保育を行う。

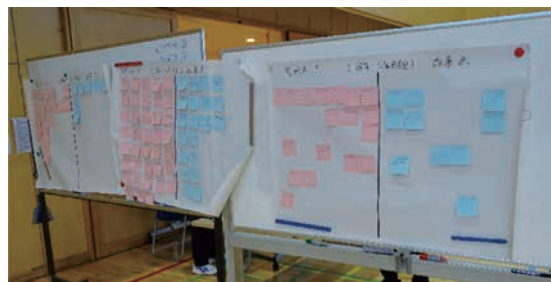


- ・本部…避難所の各係への指示、連絡、相談を行う。



② 改善の話し合い

前半終了後、避難者役の1・2年生が運営側の3年生の対応で良かったことと改善してほしいことを出し、その内容を3年生に伝えた。その伝えられたことを元に、3年生は後半に向けた改善の話し合いをした。例えば、避難所が混んでしまったことを受けて避難者への対応を早くすることや言葉遣いを丁寧にするなど、それぞれの役割の効率化のために本部が全体を見て振り分けることなどが話し合われた。



その結果、各班ごとの連携をすることで対応に余裕ができ、不安になっている避難者へも丁寧な対応をすることができた。

(3) 事後の報告会

避難所運営体験のまとめの報告を総合的な学習の時間の発表会で、生徒が以下のようにまとめ、発表した。(生徒の発表原稿より)

① 受付・案内班

主に避難者の受付や健康状態の確認、避難者の誘導、外国人の対応をしました。そこで私たちが1番感じたことは、スムーズにやらないと行列ができてしまうということです。そこで、奥の方から受付をするように2回目から工夫をしたらスムーズに受付することができたのでよかったです。

② 食料・物資班

避難者の人数が多すぎて物資の数が間に合わなかったり、手を挙げている人に気付かなかつたりすることがありました。後半に向けて改善を行った結果、一人一人その人に合った対応をすることができたので良かったです。

③ 保健・衛生班

新型コロナウイルスが流行しているので避難所の感染対策としてアルコール消毒の徹底を心掛けました。各地域の避難場所に消毒を最低でも1つ設置するように心掛けました。また、怪我人や体調不良者への応急処置をしたり、担架で運んだりしてテキパキ動いていたと思うのでしっかり処置の対応はできていたと思います。

④ 施設管理班

困っている人がいたら声をかけたり、いろいろな人の手伝いをしたり、危険区の仕切りをしたり、仮設トイレの設置場所を考えたり、迷子の人を探したり、いろんな班と協力しました。課題を解決できるように自分たちで考えて行動することもできたので良かったです。私たちはこの行事で本番を想定していろいろなことに対応することができたので良かったです。

⑤ 要配慮者支援班

持病のある方、高齢者、妊婦、小さな子供連れのお母さんお父さんを受け入れました。1回目は、部屋から子供を出して、注意することができませんでした。また、だれがどこにいるか、黒板に詳しく書くことができず混乱してしまいました。そのことを支援班みんなで話し合い2回目にしっかり対応することができたので良かったです。

⑥ 本部

ボランティアの方や、支援センターなどへの受け答えなどをしました。1回目では、対応がばらばらで遅れてしまったりスムーズに進めたりすることができないことがありました。2回目では、反省を生かして改善しながら各所対応できたので良かったです。

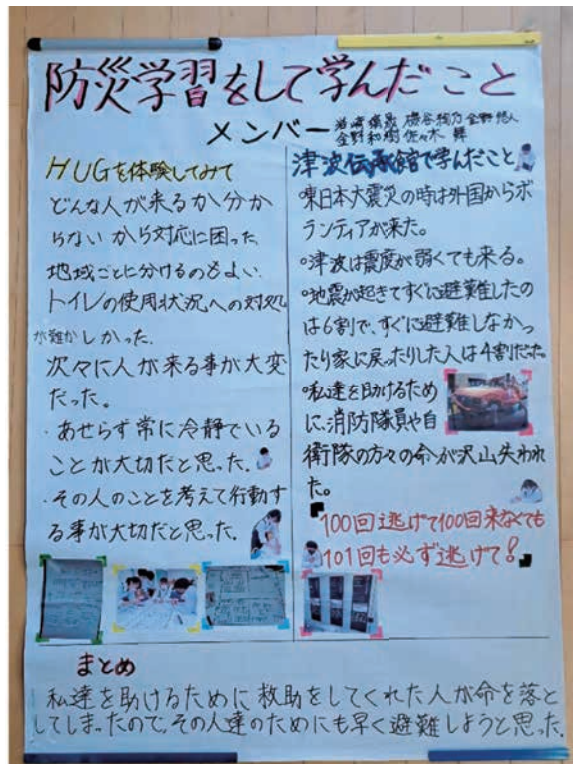
⑦ 全体のまとめ

今回の避難所運営体験を通して、災害時の避難所運営はとても難しい事だと分かりました。災害時の避難所には色々な条件を持った方々が避難して来るので、それぞれの人たちに合った対応をすることが重要だと思いました。1回目の時、全体的に、避難所がどんどん混んでいき、受付をはじめとし、どの係も対応が遅くなってしまいう様に感じました。2回目ではそれらを生かし、受付を奥から詰めてもらったり、その場だけでは対処出来ない問題は他の係りの人と連携して素早く対処したりすることが出来ました。またいきなりことで不安になってしまっている人にやさしい言葉をかけながら誘導していく事が大切だと実感しました。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 大船渡市の避難所運営マニュアルを参考に役割を分担したため、生徒たちが役割を把握しやすく、避難者のための支援の仕方を考え、主体的に動くことができていた。
- (2) 体験を2回行うことで、1回目の改善点を2回目にかいた体験ができていたので良かった。改善のための話し合いにより、協力することの大切さも学ぶことができた。
- (3) 東日本大震災津波伝承館を見学することで復興や防災について学び、岩手県立野外活動センターで避難所運営ゲームをすることで避難所運営の基本や役割を事前に学ぶことができ効果的だった。避難所運営体験を行う準備だけでなく、役割を自覚し協力することの大切さも実感とともに学ぶことができた。



2 課題

- (1) 生徒だけの活動にするのではなく、保護者や地域の方たちも巻き込んで行えると地域との連携や協働につながると思われる。また、避難所運営に現実味が生まれ、より実践的な体験になると考える。
- (2) 避難所運営をするにあたり、準備で物資等の資源の置き場所の確認をするが、置き場所のリスト等、毎年の成果を次年度に引き継ぐことで準備や後片付けを素早くしたり、有事における実効的な対応をしたりできると思われる。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：釜石市立釜石中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

近年、本校では学区全体が極めて災害リスクの高い地域になりつつあるという現状を踏まえて、「命を大切に学習」、「社会に参加する学習」、「地域を支える学習」の3つを課題とする「生き方学習」を設定し、復興教育や防災学習に力を入れていくこととし、取り組みの2年目となる。昨年同様、本事業の実施を1学年対象とし、郷土の歴史や文化について知る探究的な学習に取り組むことで、地域や郷土についての理解を深め、誇りや、愛着心を高めることを目標とした。

II 取組の概要

1 事前学習

(1) 個人テーマの設定

- ア 5月30日(月) 「釜石について知ろう」
テーマについての調べ学習
- イ 6月23日(木) 生涯学習まちづくり出前講座
設定した個人テーマに基づいて受講
- ①防災知識講座 ②釜石の観光
 - ③釜石市の水産業 ④釜石都市の計画
 - ⑤鉄の歴史について ⑥世界遺産について
 - ⑦釜石市の歴史

【生徒の感想から】

今日は、私も大好きなサケがとれなくなり、サクラマスに変更しているということを知りました。普段何気なく食べている魚も苦労してとった魚だということを知りました。(中略)細かいところも知れてとっても勉強になったのでこれから生かしていきたいです。また魚の大切さも知れたので感謝して食べたいと思います。



(2) 校外学習への準備

- ア 6月24日(金) 学年ガイダンス
イ 6月30日(木) 事前レポート作成
パソコン等を活用し、校外学習訪問先の事前学習を行い、質問を考える。

2 校外学習

(1) 校外学習 9月2日(金)8:30~15:30

(7月7日から9月2日に延期実施)

参加者：生徒119名 引率職員8名

コース

- ① 学校→橋野高炉跡→いのちをつなぐ未来館→復興スタジアム→郷土資料館→鉄の歴史館→学校
- ② 学校→いのちをつなぐ未来館→橋野高炉跡→復興スタジアム→鉄の歴史館→郷土資料館→学校
- ③ 学校→鉄の歴史館→郷土資料館→復興スタジアム→橋野高炉跡→いのちをつなぐ未来館→学校
- ④ 学校→郷土資料館→鉄の歴史館→復興スタジアム→いのちをつなぐ未来館→橋野高炉跡→学校

【生徒の感想から】

これまでの活動を通して気づいたことがあります。私たちは自分の町について知らないことがたくさんあるということです。艦砲射撃、震災、鉄のこと、まだまだ釜石にはたくさんあります。自分は知っているつもりでも調べてみると知らないことばかりでした。



(2) たたら製鉄づくり体験

- ・ 8月30日（火）・31日（水）8：20～16：00
参加者：生徒59名 引率職員4名
- ・ 9月5日（月）・6日（火）8：20～16：00
参加者：生徒60名 引率職員4名
旧釜石鉱山事務所（甲子町大橋）

		時間	
1 日 目	8：10	登校（教室集合）	
	8：20	バスへ移動	
	8：30	学校出発	
	9：00	旧釜石鉱山事務所着	
	9：15	築炉開始	
	12：00	お昼休憩	
	12：40	旧釜石鉱山事務所見学	
	14：00	炭割り再開	
	15：00	一日目終了・片付け	
2 日 目	8：10	登校（教室集合）	
	8：20	バスへ移動	
	8：30	学校出発	
	9：00	旧釜石鉱山事務所着	
	9：15	鉄づくり体験開始	
	11：00	ノロ出し1回目	
	12：00	お昼休憩	
	12：40	ノロ出し2回目	
13：00	炉解体・けら出し 鉄の観察		
14：50	2日目終了・片付け		
15：10	旧釜石鉱山事務所発		
15：50	学校着		



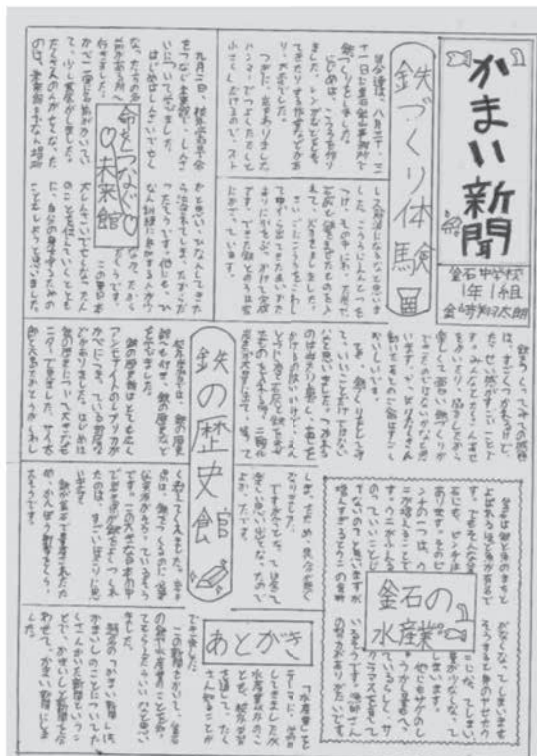
【生徒の感想から】

ものづくりをするのはとても大変だということが実感できた。鉄は、工場とかでしか作れないと思っていたが、自分たちで作れることに感動した。一番大変だった作業は炭割りだ。真っ黒になったし、決められた大きさに割るのは難しかったけれど、自分たちで鉄を作って、楽しみを感じた。

3 事後学習

地域や郷土について学んだことを、「アウトプット」するために、事後学習では、以下のことに取り組んだ。

(1) 個人新聞づくり



○個人テーマ学習や校外学習、鉄づくり体験についてまとめ、文化祭で掲示することによって、保護者の方々に発信した。

(2) 学年総合発表会

9月20日(火) 10:45~12:35

釜石中学校 体育館

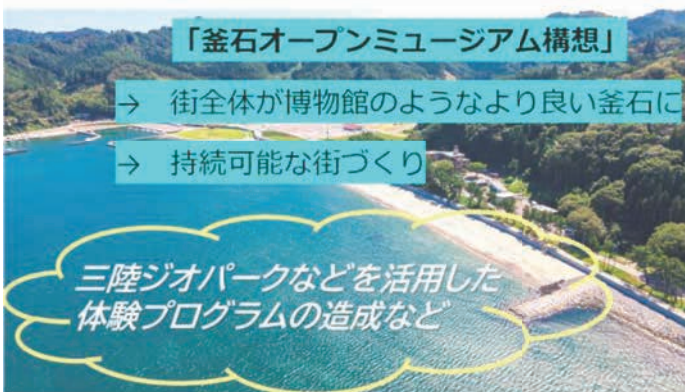
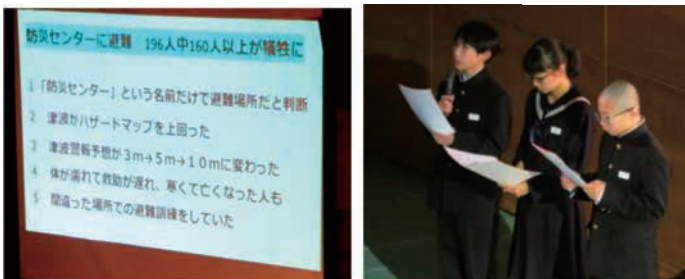
個人テーマについて全員が学級で発表を行った。
その後、代表を選抜し、学年の発表会を開いた。

【学級代表発表者のテーマ】

「東日本大震災」	「釜石の食」
「釜石の歴史」	「釜石市の農林業の秘密」
「釜石の自然」	「釜石艦砲射撃」
「かまリンについて」	「釜石の環境」
「釜石のまちづくり」	「釜石の史跡」
「釜石港について」	「釜石の海産物」
「五葉山」	「虎舞」

(3) 文化祭での発信

ア 学年代表による総合発表



【生徒の発表のまとめ「郷土に何ができるか」から】

今回、釜石の農林業と観光業について学んだことで、釜石市に人がもっと集まり、盛り上げてほしいと思いました。僕は将来、釜石市のために役に立つ仕事について、釜石により深く関わっていきたいと思います。

イ 壁新聞づくり



III 取組の成果と課題

1 成果

個人テーマにそって探究型の学習をすることで、生徒が主体的に取り組むことができた。その後、校外学習や鉄づくり体験を行ったことにより、興味を持って学習することができたと思われる。また、まとめ新聞や発表の内容からは、郷土の良さを発見し、それらを積極的に発信しようとする意欲が感じられた。

校外学習の実施だけでなく、事前学習や事後学習を計画的に丁寧に行ったことが効果を高めることにつながったと考える。

2 課題

これまでの学習を通して、自分たちが住む郷土の良さ、知らなかった歴史等を知ることができたが、郷土をさらに発展させ、次世代に繋ぐことが必要だと考える。「これから自分たちに何ができるか」ということを考えさせ、主体的に郷土の復興に関わっていく人材を、学校として育てていくことが課題である。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：宮古市立宮古小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、市街地の中心部に位置する。東日本大震災の際には、本学区も被災し、市街地の多くが浸水する等大きな被害を受けた。本校は、地域住民の避難所として数ヶ月にわたり運営にあたった。

被災後、学校の研究主題を「ふるさとの復興を担う『人づくり』の展開」とし、国語科、社会科、保健体育科、特別活動を中心に教育課程全般にわたり復興教育を取り入れ、それを「復興教育学習プログラム」と称し、10年間継続して教育活動を行ってきた。

今年度も、これまでと同様に教育課程全般にわたって復興教育学習プログラムを推進してきた。学習者である子供たち自身がそれぞれの活動につながりを感じ、最終的に目指す姿に向かって学習できるように、以下の2点を重点にして今年度も実践に取り組んだ。

1 「復興教育学習プログラム」の継続

カリキュラム・マネジメントの視点を大切にし、様々な学習活動を、学習者である子供たち自身が「人づくり」という視点で一つのまとまりとして捉えられるようにする。また、目標に向かって学習できるように、オリエンテーションを充実させたり、学期ごとに一つのユニットとして捉えながら実践したりする。

＜復興教育を通して目指す子ども像＞

- 主体的に学ぶ子
- ふるさとを愛する子
- たくましく生きる子
- 自分の命は自分で守る子

2 特別活動及び総合における防災教育の充実

ふるさとの復興を担うためには、「自分の命は自分で守る」ことが大前提であることから、特別活動を重点領域として取り組むこととする。

授業では、命を守る知恵や心構え、災害発生時の行動・判断に関する学びを通して、防災意識を高めることをねらいとする。

なお、復興副読本「いきる かかわる そなえる」を意図的・計画的に活用するように、復興教育学習プログラムに位置付けながら実践を積み重ねていく。

II 取組の概要

1 「復興教育学習プログラム」の継続

(1) 体験的な学習の充実

6年生は、6月に宮古市田老の「学び防災」の体験学習に取り組むことを通して、東日本大震災で甚大な被害を受けた田老地区の現状等を知り、防災意識を高めた。また、10月には、八幡平市立田頭小学校と交流会を開き、自校で取り組む防災学習の成果を発表した。

他の学年においても、講師を招いて震災に関する話を直接聞いたり、防災に関わって自分にできることを話し合ったりと、体験的な学習の充実を図っている。



6学年：田頭小との交流会の様子

(2) 意図的・計画的な避難訓練の実施

避難訓練は年間5回を計画している。6月には、「引き渡し訓練」を実施した。校庭から体育館への誘導や兄弟姉妹の引き渡し方法など、前年度の成果と課題をふまえながら訓練を行った。今年度も非常に多くの保護者が参加し、万が一の場合について、行動の仕方を確認することができた。



体育館での引き渡し訓練（6月）の様子

(3) 命を守る会の実施（3月に実施予定）

地震発生・津波警報発令時（予告なし）における避難行動の仕方について、全校で確認する。その後、東日本大震災から11年を経て、今後も防災意識を持ち続けていくこと大切さに関わる話を聞き、意識の高揚を図ることを目的としている。新型コロナの影響により、令和元年度から2年連続で実施できていなかったが、昨年度は各教室をリモートでつないで実施した。



講師（防災士）のお話しを教室にライブ配信

2 特別活動（学級活動）における防災教育の充実

(1) 授業参観の実施

9月の授業参観は、全ての学級が「防災に関わる内容」の授業を公開した。

○地震・台風・雷・大雨などの災害発生時は、どのような行動をすればよいのか。

○避難リュックの中には何が入っているのか。どのような使い方をするのか。

○「てんでんこ」とは、どうすることなのか。

○～家の防災マニュアルを作ろう。

など、発達段階に合わせながら、災害時の行動をより自分事として捉え、自他の命を守る力を育てるための授業を構想・実践した。



「避難リュック」の中身について考える授業（2年生）

(2) 復興副読本の効果的な活用

学級活動（防災教育）や総合的な学習の時間では、ねらいと「いわての復興教育における具体の21項目」を関連させて計画を構想している。また、年間を通じて「復興副読本（改訂版も含む）」の効果的な活用が図られるようにした。

3年生の例（学級活動）

題材名	津波てんでんこって？
21項目	⑧家族のきずな
副読本	P36～37、改P48
評価	「津波てんでんこ」をキーワードに、非常時の行動の仕方を理解するとともに、家族のつながりについて考えることができる。

5年生の例（総合的な学習の時間）

題材名	宮古を知ろう、伝えよう
21項目	⑮自然災害の様子と被害の状況
副読本	改P42～43
評価	ゲストの話の聞いたり、資料を調べたりして、震災及び生き抜いた人々の様子を理解することができる。

III その他（PTA活動）

学区内の各ポイントで出題されるクイズを親子で解きながら、災害時の避難場所を確認するPTA行事を10月に実施した。親子で楽しみながら、防災意識を高めることができた。



親子で避難場所を確認の様子

IV 取組の成果（○）と課題（◆）

○どの学年においても体験的な学習を充実させることで、実感を伴う学びを組織的に展開することができた。

○防災に関する授業参観、引き渡し訓練、PTA活動を通じて、家庭を含めた防災意識の向上を図ることができた。

◆より効果的なカリキュラム・マネジメントの実現を図りながら、本校の「『自分から』かわること」姿について授業を通して明らかにし、資質能力の育成をより充実させていくことが必要である。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：宮古市立河南中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

宮古市立河南中学校の学区は平成 23 年の東日本大震災津波により甚大な被害を受け、本校も避難所として避難民を受け入れた。当然、多くの生徒が被災し学校で寝泊まりを余儀なくされたという経験をした。その後の復興においては沢山の方々の支えにより現在のような平穏を取り戻すことができたが、自然災害ゆえの「また起きるかもしれない」という現実から目を背けることはできないという本校の実情がある。

さらに、現在の生徒は発災時には幼児であったため、震災体験に乏しい。そこで、震災時の様子を自分事としてとらえることができるような活動を生徒に体験させることで、今後再び災害が発生した場合にどうやって「生きる」のかということを知識・経験として学ばせることを目標としたい。加えて、震災後、多くの人との「かかわり」無くして復興は為し得なかったということと、再び来るかもしれない災害に対する「そなえ」についても考えさせるきっかけとしたい。

II 取組の概要

(1) 地域や学校の被災時や復興の状況を知る学習

ア 「学ぶ防災（田老）＋宮古の良さを知る（リアスハーバー）」…宮古で生きる

第1学年（41名）が宮古市田老の「学ぶ防災」の体験活動に取り組んだ。防潮堤に上ったり施設を見学したりすることで、東日本大震災で甚大な被害を受けた田老地区の現状や当時の様子を知り、防災意識を高めた。また、防災教育が単に恐怖の再生産に



ならないように地域の良さを知るという配慮が必要であると考え、午後からはリアスハーバーに会場を移し、シーカヤック体験をおし宮古の良さを知る活動を行った。



イ 「復興学習・遠野農村体験」…人とかかわる

第2学年（65名）が東日本大震災発災時、後方支援基地としての遠野市の果たした役割について学ぶ活動を行った。遠野市の東日本大震災後方支援資料館を訪れNPOの方から当時の様子について（物資の補給基地や、被災難民をいち早く受け入れたこと等）講話をいただいた。

特に、発災時、被災地を支えようと奮闘していた方々がいらっしやったということについて、生徒達は深い感銘を受けていた。また、民泊を行い農業体験することで、遠野市民との交流を図り、親交を深めることができた。この民泊は、ほとんどの生徒にとって、かけがえのない経験となったようで、事後の感想ではホストファミリーとの交流について述べている生徒が目立った。



ウ 「復興学習・大槌、陸前高田訪問」…未来にそなえる

第3学年(61名)は、大槌町のおしゃっちと、陸前高田市の津波伝承館を訪問した。同じ沿岸地域の発災から復興までの様子を知ることで、宮古市の復興について再考する学習を行った。大槌町では旧役場跡地見学や語り部の方からのお話をうかがい、ワークショップ等を行った。陸前高田津波伝承館では常設展示や解説をおして津波の恐ろしさや、復興の様子について深く学ぶことができた。奇跡の一本松を擁する公園内を散策するなどし、宮古市の今後の復興についても生徒一人ひとりが具体的なイメージを持つことができた。



(2) 地震・津波、土砂災害等の地域の災害リスクを学ぶ

ア 東北大学 今村教授による防災講演会(TV放送あり) 全校生徒170名と教職員参加

東北大学災害科学国際研究所所長、今村文彦先生による防災・減災についての講演会を行った。県から発行されている「防災手帳」の編者の1人でもある今村先生のお話は、非常に実践的であり、特に避難時に持って逃げるものリスト等は、その根拠とともに生徒が十二分に理解することができた。



イ 第2回避難訓練(3校合同避難訓練:登校時の津波を想定) 全校生徒と教職員が参加

河南中学校区3校(磯鶏小、高浜小、河南中)による登校時の津波(警報)を想定した合同避難訓練を実施した。例年行っている訓練ではあるが、今年度は小学校の保護者も参加してくださった。小中学生は自宅から一番近い避難場所を確認することができた。各避難場所において集会等の司会進行は中学生が務め、小中連携の面でも実りの多い取り組みとなった。実際の災害発生時にも、率先避難者としての中学生の役割が期待されるが、過度な期待にならないよう留意し、指導していきたい。



ウ 自衛隊による防災講演会

自衛隊岩手地方協力本部宮古地域事務所所長、丸山健太郎様を講師に、全校生徒170名と教職員で、防災についての講話をうかがった。浸水区域の確認や、自衛隊ならではの視点での地震・津波・土砂災害等から生き残るための知識を習得できた。

III 取組の成果と課題

1 成果

・実際に災害現場に赴き学習することで、「地震があったら津波が来る、だから高い所へ避難する」といった一連の行動を反射的にとることができる生徒の育成ができたと考える。

・防災教育を行う上で、地域の災害にのみスポットをあてて学ぶと、単なる恐怖の再生産につながりかねない。自分たちの地域の良さ、海の恵み等も併せて学習することで、自分達の故郷の良さを知る学習を行うことができた。

・発災時には災害現場に焦点があたるのは当然だが、復興を支援する後方基地の役割を知ることで、

人とのつながりを意識した学習をすることができた。

- ・3年間の復興学習のまとめとして、同じ沿岸地域の被災から復興までのプロセスを学習することによって、自分達の故郷の復興と比較し、宮古に必要なもの、あるいは宮古にしかないものについて考えることができた。今後の宮古市にとって大きなヒントを得ることができた。

- ・東北大学災害科学国際研究所所長、今村文彦先生による防災、減災についての講演を拝聴し、災害時何を持って、どのように避難すれば良いのかというロールプレイを、全校で学習できたことが大きかった。中でも生徒の質問に「防災手帳」編者の一人である今村先生に、直にご回答いただけるという貴重な機会が生徒にとって大きな経験となった。

2 課題

- ・事前学習を十分に行ってから実施しないと、復興学習のねらいが失われる危険性がある。例えば、なぜ被災地訪問と、地域の良さを学ぶ学習がセットなのかといった、系統性を事前学習等で十分に動機づけする必要がある。

- ・「かかわる」という価値において、民泊は最高の手段であるが、昨今のコロナ禍においてはリモートの導入等も検討していく必要がある。

- ・発災以来、中学校1年生に配布されてきた「防災手帳」であるが、まだまだ十分に活用できていない。

- ・合同避難訓練時、率先避難者として中学生の果たす役割が期待されるころではあるが、指導上、中学生自身が避難することとのバランスが難しい。

- ・教員側が、復興について高い意識を持って取り組まないと、活動あって学びなしに陥る危険がある。

- ・他の行事等と、復興学習の兼ね合いが日程的、人的、予算的にも調整が難しく、今後さらなるカリキュラムマネジメントの必要に迫られると考える。

- ・生徒の心情や心のダメージにも配慮して実施する必要がある。

生徒のまとめ・感想（3年生のレポートより）

- ・東日本大震災では、「今までの地震でも津波が来なかったから大丈夫！！」と言って、避難しなくて亡くなった人が多い。

- ・津波は押し寄せる波だけではなく引き波、火災と様々な要因があり、被害が拡大した。

- ・東日本大震災は多くの死者、被災をもたらした災害だったが、被災地の人々の努力、国内外の人達からの応援、支援のおかげで元気づけられた人がたくさんいるという事実を知った。これからも津波がもたらした被害の大きさを忘れず、後世に伝えていきたい。

- ・〈教訓〉100回逃げて、100回津波がこなくても101回目も必ず逃げる。

- ・「自然災害は人の命をうばうとても怖いものだが、一番怖いことは、昔あった災害のことを忘れ、大きな被害をおこしてしまうことが本当の災害の脅威である」ということを感じました。

- ・自分に今できることは「津波てんでんこ」を、世代を超えて受け継ぐこと。そして、各自で逃げる勇気を持つことを伝えていくことだと思った。30～40年に1回は津波が来る今、それに備えて生きていくことが私たちの使命だと感じた。

- ・「どうしてもっと早く逃げなかったのか？」と思ってしまうことでも、今回状況を詳しく聞いて、正常性（バイアス）の偏見が働いたのだとわかった。その時、自分だったらと考えたが、もしかしたら逃げなかったかもしれないと思った。まずは、自分が逃げること、最悪の事態を考えて行動したいと思った。

- ・これからは震災を知らない人が中心になっていく時代なので、そういう人たちに震災の恐怖を伝えていきたいです。特に自分は備えるということが大切だと思うので、それを踏まえて生活していきたいです。

- ・近い将来、大きな災害を経験するかもしれない。そこで、自分達にできることは、人とのかかわりを増やして、手と手を取り合い、協力しあえる関係を築いていくことだと考えた。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：野田村立野田中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は東日本大震災津波により甚大な被害を受けた野田村にある唯一の中学校である。平成 29 年まで校庭に仮設住宅が立ち並び使用できなかったため、テニスコートを校庭として利用し授業や行事を実施するとともに、部活動では村内の体育施設を利用しながらひたむきに努力を続け、好成績を収めてきた。年々地域の復興も進んできており、校庭に設置されていた仮設住宅は撤去され、平成 29 年 9 月には校庭使用の再開がなされた。現在校庭は、授業や部活動などの諸活動に使用できるようになった。

本校では、「郷土野田村を愛し、その復興・発展を支える人材の育成」を目指して、地域の素材や外部の人材を効果的に活用した教育活動「太陽プロジェクト」を展開している。地域の未来を担う「ひとづくり」が本校の使命であり、学校・保護者・地域が協働して、教育活動の充実を図っている。特に、創作太鼓の継承と発展を復興教育の大きな柱として位置づけ、表現力の向上を図りながら地域貢献活動にも取り組んでいる（復興教育）。生徒たちは「野田村の太陽になろう」を合言葉に、元気や笑顔を発信するとともに、今まで支援をいただいていた方々や学校に感謝の気持ちを表そうと、様々な活動に取り組んでいる。また、地域の災害リスクに関する学習や避難訓練を通して、自然災害発生のメカニズムや災害を回避するための知識や技能を身につけ、生徒が自らの命を守り、生きるためにどのような行動をとればよいかを考え、実践しようとする態度を養う取り組みを行っている（防災教育）。

II 取組の概要

1 創作太鼓への取り組み

(1) 創作太鼓指導会

ア ねらい

創作太鼓の活動を通して、表現力の向上を図りながら、自分たちの活動で地域を元気づけようとする想いをもち、主体的に地域に関わろうとする態度を育てる。

イ 活動内容

東日本大震災後、「野田村の太陽になろう」を合言葉に、自分たちが地域の方々を元気づけるひとつの手立てとして創作太鼓に取り組み、12年目となる。使用する太鼓は、歌手の稲垣潤一氏や台湾ロータリークラブ、全国校長会からの支援、タイヤを利用した手作りの太鼓である。外部の人材として、邦楽作曲家の佐藤三昭氏と太鼓演奏者の高橋理沙氏を招き、学年に応じた太鼓演奏を指導していただいている。指導会を中心として、それぞれの曲に込められた想いや背景を自分たちで考え、カタチにし、様々な機会をとらえ、創作太鼓を通して、支援への感謝や地域を元気づけたいという想いを発信している。



2 防災教育への取り組み

(1) 「逃げ地図」の作成（3年生）

ア ねらい

当時の野田中生が東日本大震災の発災後に作成したハザードマップをリニューアルするとともに、「逃げ地図」の作成を通して、防災意識を高める。また、作成した「逃げ地図」を保護者、地域の高齢者、高校生、小学生、野田村役場職員を対象にそれぞれ発表することで、野田村民すべての命を守る地図に、また、誰もが実用的に利用できる地図になるよう、発信を行う。

イ 「逃げ地図」の作成・発表

野田村役場総務課 工藤剛防災官の協力ののもと、野田村作成のハザードマップをベースに、避難所までの避難時間や、避難する上での注意

事項を記入した「逃げ地図」を作成した。完成した「逃げ地図」は、全校生徒、3年生の保護者、地域の高齢者に向けて、それぞれ発表する機会をもった。作成の過程や発表会の様子は、地元新聞社や地元テレビ局から取材され、県内に向けて広く発信されている。



3 県外地域・他校との交流

(1) 他校・他地域との交流

ア ねらい

学校間交流を通し、他校の取り組みの様子を知り、視野を広げるとともに、野田村の復興の様子や本校で取り組んでいる三大文化を発信することで、自分たちの成長に生かしていこうとする態度を養う。

イ 兵庫県西宮市立山口中学校との交流

東日本大震災以来、阪神・淡路大震災の被災地である兵庫県西宮市立山口中学校との交流を継続して行っている。コロナ禍の影響で、生徒同士が実際に行き来するような交流は3年ほど実施できていないが、創作太鼓の演奏や合唱などを互いに撮影した後、その動画をDVDにして交換し合うことで交流を継続させている。今年

度は、阪神・淡路大震災の追悼イベントが行われる1月17日にあわせて、山口中学校から届けられた「再生ろうそく」に野田中生全員で鎮魂のメッセージを記入して、山口中学校に返送した。追悼イベント後は、生徒会執行部同士のオンライン交流を行った。

ウ 兵庫県西宮市浜脇地区との交流

上述した山口中学校のほか、阪神・淡路大震災の被災地である西宮市浜脇地区との交流を継続して行っている。今年度は、浜脇地区青少年愛護協議会会長である米山清美氏を窓口にして、2月11日(土)に西宮市浜脇公民館で行われた「第4回被災地きずなコンサート」にDVDで出演し、西宮市立浜脇中学校の合唱部や吹奏楽部と交流を行った。

4 地域行事への参加

(1) 地域行事への参加

ア 野田まつりへの参加(8/26)

8月に行われた「野田まつり」のアトラクションとして、全校生徒で創作太鼓と野田中ソーランを披露した。コロナ禍のため、3年ぶりの実施となったが、久しぶりの中学生の発表に涙を流していたお年寄りもいた。改めて、野田中生は「野田村の太陽」として、地域に活力を与える存在であると実感し、今後の地域への貢献活動への意欲を高めた。



イ 野田村二十歳のつどいへの参加(1/8)

令和5年1月に行われた「野田村二十歳のつどい」の記念行事として、3年生が創作太鼓を発表した。今回は、創作太鼓10周年を記念して、語りと演劇を織り交ぜた戯曲化版「陽はまた昇る」として上演した。練習時間が少ない中、初めて演技を交えて創作太鼓を発表することには、大きな苦勞を伴ったが、会場内にいた多く

の方々から「感動した」「とてもよかった」「忘れていたものを取り戻せた」などと多くの称賛の声をいただき、自分たちの活動の意義や価値を再確認するとともに達成感を感じることができた。



(ウ) 津波防災教育講座（1学年）（6/10）

県北広域振興局土木部河川港湾課技師を講師に、野田水門や陸閘を見学した。防潮堤、水門、陸閘などの津波防災施設を中心に、震災当時の被災状況や被災からの復旧及び対策についての説明を受けた。

5 外部人材を生かした復興教育

(1) 外部人材を生かした未来を担う人づくり

ア ねらい

外部人材を招いての講話や活動から、講師の生き方や考え方などに触れ、学ぶことで、自己の生き方に生かそうとする態度を養う。

イ 活動内容

(ア) 復興講演会（2/3）

東日本大震災後に校長として着任され、創作太鼓の取り組みのほか、本校の復興教育の基礎づくりをされた岩手県立図書館館長の藤岡宏章氏と創作太鼓の指導者である佐藤三昭氏と高橋理沙氏を講師として復興講演会を行った。野田中学校が創作太鼓に取り組んだ経緯や、その中に込められた想いを全校生徒に向けてお話しいただいた。

(イ) 塩の道講演会（1学年）（6/8）

久慈広域観光協議会の貫牛利一氏を講師に招き、野田村で塩づくりが盛んになった理由や村おこし、復興への思いを講演していただいた。盛岡や秋田県まで塩を運んだ「塩の道」のルートに関する情報や、塩の運搬に用いた動物がなぜ馬ではなく牛であったのかなど、生徒が身近な疑問と感ずる点についても取り上げてもらい、震災後のボランティア活動などの内容と合わせて、興味深く講演を聞くことができた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 今年度もコロナ禍への対応として、様々な制約があり、これまで行っていた発表の機会の中止や規模の縮小などのため、活動を行う上で昨年同様の難しさがあった。しかし限られた条件の中で、「野田村の太陽になろう」を合言葉に、創作太鼓や野田中ソーラン、合唱など様々な活動に取り組む中で、自分たちの活動で地域を元気づけようとする想いをより強く持つことができ、それぞれの活動に意欲的に取り組むことができた。

(2) 外部の指導者を招いての太鼓指導会を通して、復興太鼓として始めた当時の願いや曲に込められ

た想いを考え、自分たちの太鼓に生かし、工夫しながら自分たちの想いを込めた太鼓を創り上げることができた。震災後に始まった創作太鼓を先輩から継承し、さらに発展、深化させていこうと高い意識をもって取り組み、その成果を学校行事などで地域の方々に向けて披露することができた。

(3) 塩の道講演会など、外部人材を講師とし、講師の生き方や考えから、未来を担う人材として自分の将来や今後の野田村のさらなる復興について考え、生かそうとする思いが高まった。

(4) 3年生による「逃げ地図」の取り組みが、新聞やテレビの取材を受け、県内に広く紹介された。災害が発生した際に、実際に村民の命を守る事ができる、「使える地図」として、今後活用してほしいという願いを込めて、保護者、高齢者、小学生、高校生、役場職員など、村内のさまざまな方々を対象として発表をしてきた。発表を参観した方々や取材した記者から、高い評価をいただいたことにより、3年生は中学生なりに村に貢献することができたという自信をもつことができた。

2 課題

(1) 生徒や教職員が年々入れ代わっていく中で、本校の創作太鼓に込められた想いや願いを風化させず、次世代にどのように継承していくかを考え、意図的な指導場面を設ける必要がある。また、これまで継承してきた文化を、次は伝統という段階にしていくために、どのような手立てが必要になっていくのかを、カリキュラムマネジメントの観点からも考えていかなければならない。特に、一昨年度からのコロナ禍の影響で、これまで行っていた老人介護施設などでの発表が3年続けて中止となっているため、これまでの活動を伝統として継承していくために、何らかの具体的な手立てを講じていくことが喫緊の課題である。

(2) 復興教育に関わる補助金や義援金が少なくなっていく中で、外部指導員を招いての太鼓指導会や諸活動を行っていく上での運営活動費を、いかに捻出し維持・発展させていくかが、継続した課題となっている。

参考資料

【太鼓指導会の感想：1年生抜粋】

- ・今回の経験を通して感じたことは、太鼓は楽しいことだけではないのだということです。これまで楽しく声出しやひざ打ちをしてきましたが、本番になると上手くいかなかったりして少し落ち込んでしまいました。だから、今回の経験を次に生かしていきたいです。
- ・三昭さんから、太鼓は生き物から命を頂いて作られることを教わった。太鼓の鼓面は生きていた牛の革でできていて、胴は生きていた木から作られている。命に感謝しながら、大切に叩いていきたい。

【太鼓指導会の感想：2年生抜粋】

- ・今までと違う新しいことをして、とても「路」の雰囲気合っていて、かっこよかったので、極めていきたいと思いました。詩の最後のかけ声にも意味があって、バチ打ちのときにも同じようにかけ声をかけるところがあるので、その意味が雰囲気伝わるようにしたいです。
- ・課題に対して皆が指導をもとにして体で表現しよう意識をして取り組んでいたと思います。少し前の太鼓と比べてみると前はテンポが一緒にゆるふわっとしていてキレが足りないと思っていたけれど、今回は太鼓の音だけでなく、体の動き、声にもキレと張りが出てきてとても良くなったと思います。

【太鼓指導会の感想：3年生抜粋】

- ・これまでの先輩方が積み上げてきた音を体育館に響かせて自分たちの「跡」が残ってきた。自分たち「十代目の音」を、そして「十代目の跡」を残したい。自分たちの願いと想いを、太鼓の音色に乗せて届けたい。
- ・理沙さんが「想いをもって叩かないと、音はどこまでも軽くなってしまうので、想いをもって叩いて」とおっしゃっていたことが印象に残った。自分が想いをもっていないと、聴いている人には伝わらないと思うから、想いをもって演奏し、それに音を込められるようにしたい。
- ・戯曲化は、私たち10代目だからこそやる意味があると感じ、役になりきり、それぞれが想いを込めた。このプロジェクトに関われたことに誇りと感謝の気持ちを持ち、震災の記憶を風化させないために、今後もこの創作太鼓の取り組みをつないでほしい。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立高田高等学校

I 事業の概要

東日本大震災の発災から 11 年の節目を迎え、学校を取り巻く地域の復興状況も大きく進展しているものの、発災時に小学校低学年や就学前の状態であった現在の本校生徒にとって、発災直後から復旧・復興に至る経緯については記憶に薄い。

そこで、地元にある「東日本大震災津波伝承館」を見学することで、地域や学校におけるこれまでの復旧・復興の歩みに改めて目を向け、自らのあり方と生き方について考える契機としたい。そして今後も発生が予想される自然災害においても、様々な制約が課された震災後の生活を乗り越えてきた本校生徒が、復旧・復興の中核を担うことができる資質を育成する。

さらに、陸前高田市は、防災・減災のまちづくりを進めるとともに、「ノーマライゼーションという言葉の知らないまちづくり」を目標に掲げ、障がいの有無等に関わらず、誰もが快適に過ごせるまちづくりに取り組んでいる。その事業を共創している株式会社ヘラルボニーの方を講師に迎えて、ノーマライゼーション講演会を聴講することで、今後の地域づくりを担うことができる資質を育成する。

II 取組の概要

1 東日本大震災津波伝承館見学

【参加人数：教職員 6 名、3 年 2 組・3 組生徒 59 名】

令和 4 年 5 月 17 日、主に進学を希望する 3 年 2・3 組の生徒を対象に東日本大震災津波伝承館の見学を行った。沿岸の小中学校では児童生徒の心の傷に配慮して防災教育を積極的に行っていなかった時期があり、進学で地元を離れる前に東日本大震災について体系的に学ぶという目的で実施されている。

当日は、新型コロナ対策もあり 2 班に分けて実施された。伝承館のご厚意により解説員の方を配置していただくなど細やかなご配慮をいただいた。卒業を機にふるさとを離れる生徒が多いクラスであり、復興防災・減災教育の一環として見学することで自らのあり方、生き方について考える機会となった。

生徒からは「すごい昔の津波からの教訓をしっかりと伝えていると知った。全国各地から支援してもらったり世界からも支援されたりしていたことを改めて知る



映像を見ながら解説を聞く生徒



見学の様子

ことが出来た」、「改めて地震が発生したらとにかく高台へ避難することは重要だと感じた。過去の事例にとらわれなくて冷静に行動すべきだと感じた」、「100 回逃げて 100 回来なくても、101 回目も逃げてという言葉から油断せずに絶対逃げて命を守ることが大事」などの感想が得られた。また、「防災リュックを作っておくべきだと思います」、「避難経路や近くの高台も知っておくべきだと感じました」、「避難場所や避難経路を家族と共有し、津波警報がでたら、安全な避難場所にすぐに逃げることを心がけていきたい」など、防災意識の高まりに関する感想も多く得られた。

2 高田松原再生活動

【参加人数：教職員 10 名、3 年 1 組・4 組、2 年 1 組・4 組生徒 97 名】

令和 4 年 5 月 17 日、主に就職及び専門学校を進路希望している 2 年 1・4 組、3 年 1・4 組の生徒により、高田松原のマツ植栽地で草取りの活動を行った。実施に際しては、地元の名勝再生を目指す NPO 法人・高田松原を守る会（鈴木善久理事長）に協力を頂き、その思いに触れながら、活動を行った。令和 3 年 5 月に高田松原再生の最後の植樹会が実施された際にも、高田高校の生徒が参加をしており、地元の高校として、草取りなどの活動に継続的に取り組んでいる。

生徒達は、植栽地のうち、昨年に同校の生徒らがマツ苗を植樹したエリアを訪れ、雑草取りを行った。生徒からは「震災前のようにマツが元気に育ち、みんなに愛される松原になってほしい。地元の大変な場所を守る活動なので、後輩たちにも続けて行って欲しい」、「震災前のような松原が戻るようにと思いを込めて臨んだ」との声が聞かれた。鈴木理事長は「最後の植樹活動に参加した高校生達が、昨年よりも背が高くなったマツを見て驚いていた。これまでの活動の記憶はきっとみんなの心に残る。これから先も陸前高田の発展に関わってほしい」と話していた。



高田松原を守る会の方による説明を受ける生徒



雑草の刈り取り作業をする生徒



鎌を使っでの作業

3 ノーマライゼーション講演会

【参加人数：教職員 12 名、1 学年生徒 124 名】



株式会社ヘラルボニーの松田文登氏

令和 4 年 6 月 7 日、1 学年生徒を対象にノーマライゼーション講演会が開催された。災害に強い、持続可能な街作りをするためにはすべての人が快適に過ごせるように配慮することが必要である。福祉に関する先進的な取り組みについての講演を聴講することで、他者の立場を慮る姿勢を育てることを目的に行われた。講師は『『異彩を、放て。』をミッションに、福祉を起点に新たな文化を創ることを目指す福祉実験ユニット』の株式会社ヘラルボニー代表取締役副代表の松田文登氏にお願いした。

松田氏からは、「障がい者」という人物は、この世に一人もいない。人と違うところを伸ばしていくことが大事。普通じゃないということは、可能性を持っているということ。「できない」を「できる」ではなく、彼らの「できる」にお金の文脈をつけていく。「できない」ことを「できる」ようにする社会は苦しい。「できる」ことに目をつけて伸ばしていく。障がい者が作った作品＝安いを変える。など、認識を新たにすキラー

ドがたくさん出てきて、聞き手の心を掴む内容だった。

生徒からは、「障がい者に対して、無意識のうちに差別してしまっているということに気づきました」、「一人ひとりの個性を認めていくことが大切」、「アーティストさん達の写真を見て、みんな笑顔だったので、かわいそうと思ったことのある自分が恥ずかしくなりました」、「社会と繋がりを持つために安い時給で働く、助けているようで助けられていないのだなと思った」

「普通じゃないことは可能性になるということを強く感じました」などの感想が得られた。



講義の様子



ヘラルボニーのネクタイ

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 東日本大震災津波伝承館見学

対象が進学クラスということで、ほとんどが一度は地元を離れる生徒達が、津波伝承館における見学を通して、被災から現在の復興の歩み、今後の課題について学ぶことで、今後の生き方や職業選択について考える機会になった。

(2) 高田松原再生活動

地元の名勝、高田松原の再生の取り組みに参加することで、地元の再生に自らも携わることが出来たという自信に繋げることができた。そして、地元の地域貢献に参画することについて、生徒が考えを深める機会となった。

(3) ノーマライゼーション講演会

防災・減災のまちづくりを進める上で、障がいがある方や日本語が通じない外国人における避難等の課題も存在する。「ノーマライゼーション」の進展が重要になってくる。株式会社ヘラルボニーで、ノーマライゼーションを最先端で実践してビジネスにも結びつけている方を講師に迎えてお話を伺うことで、生徒の固定観念を良い意味で壊し、ノーマライゼーションの実現に向けて、フラットに考えるための土壌ができたと考えている。

2 課題

本校ではこれらの企画以外にも震災・復興関連の教育を総合的な探究の時間を中心に展開しているが、いずれについても、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から内容変更や工夫、規模縮小などの措置をとることがあった。コロナ禍となって3年が経過し、出来ることも増えてきており、今後はその見極めが重要となってくる。

震災から11年が経過し、今後高校に入学してくる生徒は、震災の記憶がない生徒となってくる。震災から復興にかけての系統的な理解を深めるための企画も必要となってくると思われる。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立大船渡高等学校定時制

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は大船渡市の高台に位置しており、東日本大震災において校舎は津波による被災はなかったものの、在籍する生徒の多くがライフラインの断絶や避難所生活を送るなど、幼い頃に震災を体験した。

今年度は、学校がある大船渡市で大雨等による浸水時の避難所がわかる防災マップづくりや田老の震災当時の様子を学ぶ体験をとおして、発災時に避難行動がとれるようになることを目標として防災学習を進めた。また、復興教育を推進し、大船渡市を含む沿岸地域の歴史をより深く知る機会となった。

II 取組の概要

「総合的な探究の時間」のテーマを「復興教育」とし、防災教育・健康教育・キャリア教育の三本柱で構成している。防災教育を復興教育の「そなえる」に位置付け、以下の通り実施した。

1 4月20日 防災ガイダンス

防災学習の指導計画の流れの確認をした。また、2011年の東日本大震災当時の大船渡高校および大船渡の状況について、職員から説明を受けた。

2 4月26日・5月17日 防災マップづくり

大船渡市赤十字奉仕団の新沼真弓さんを講師にお迎えして防災マップづくりを行った。ワークショップでは、水害について、ハザードマップを元に大船渡市内の白地図に色を塗りながら危険な場所を確かめた。また、津波浸水区域を示す看板、大雨により増水した川、浸水の恐れがある場所等の写真を見た後、自分で色を塗った地図に避難所などを示すシールを貼った。自分たちが暮らす現実の町とハザ-



ドマップを結びつけた。今回の体験により生徒自身の安全意識が高まるとともに、自然災害の危険が身近にもあることに気づいた。自発的に身を守る行動をとる上で必要な知識を得る貴重な機会となった。

・自分自身、海の近くでアルバイトをしているので、津波でもしものことがあった際、動けなかったら本当に命が危ないので、防災教育を終え、またさらに危機感を感じられたので良かったです。ハザードマップを見るということは、例えば避難場所が危ない可能性があるということを確認できるチャンスでもあり、未来の自分を助ける繋がりを得ました。

3 5月24日 防災想定訓練

シェイクアウト訓練の後、応急手当を学んだ。はじめに学校のどこにAEDがあるか確認した。また、訓練用AEDにより仕組みを確認した。次にケガの種類と手当の知識を学んだ。足首を捻挫した想定で三角巾を使い固定の練習をした。三角巾は災害等で負傷した腕、膝、手のケガなどに対しても使うことができるもので具体的に折り方や結び方を学んだ。



・地震の時は、倒れるもの、移動してくるもの、落ちてくるものが危ないことが分かった。
 ・最近また地震が多いので、大きい地震が起きた際に、自分で何か行動できるようにしたい。
 ・シェイクアウト訓練を行った後にビデオで振り返りをし、とても勉強になりました。
 ・結び方が簡単な割にしっかりと足首が固定されていた。1回では忘れそうなので、よく捻挫する家族を練習台にして試してみようと思う。

4 5月31日 グループ研究①

防災体験学習の事前学習を行った。宮古市田老が津波による被害を何度も受けている歴史について、過去の新聞記事等を利用して情報収集した。

5 6月7日 避難訓練

調理室で実習をしているときに地震が起こり出火したという想定で訓練を行った。訓練に先立ち、調理台の上にあるもの（包丁や熱湯、熱した油、乾いた布巾等）が地震によって移動し、起こると予想される危険から身を守る行動を考える時間を取った。普通教室以外からの避難となるため経路確認をした後、訓練した。災害の際の安全行動を考えた。

・調理室では、道具の名前等が書いてある紙を用いて、地震や火事が起こった時に、その道具をどこに置けばよいのか、どうしたら身を守れるかなどを皆で考えた。危険なことやそれを防ぐ方法が分かった。調理中を想定した避難訓練はやったことがなかったため、包丁をシンクの中に入れるなどという発想がなかった。

6 6月15日 防災体験学習 ～学ぶ防災 宮古市田老地区～



120分の予定で道の駅たろうからスタートし「万里の長城」と呼ばれた田老の防潮堤へ向かった。船の舳先のような場所になり立ち、ガイドさんから「防潮堤は逃げる時間をつくるもの。そして、大切なものが流されないように守るものでもある。」と説明を受けた。自然がもたらす恵みと災害の恐ろしさを学んだ。ジオサイト「三王岩」を間近で見上げ、自然への畏怖の念を抱いた。津波遺構「たろう観光ホテル」においてホテルで撮影された津波映像を視聴した。また、当日撮影された車で避難し立ち往生しそうな映像を見て、いざという時に単純なことに気づけない人間の特性があることを教わった。その他にもガイドの方から当日の避難の様子等、震災時の体験談を聞くことができた。田老第一小学校付近の「昭和8年大海嘯記念碑」に刻まれている「大地震の後に津波が来る。遠くへ逃げては

津波に追付かる。常に近くの高い所を用意しておけ。」など先人の教えを学んだ。120分の体験は充実した内容であり、震災・防災・復興の多くを学んだ。

・防災体験学習を通して、教訓を生かすことが大切だと学びました。後世に伝えることも大切だと思いました。
・津波から11年たってもまだあの時のことを覚えています。今回の津波の映像などを見て鮮明に思い出さず感じていた。震災復旧も完成していった中、思いつくことや伝えていくことを忘れずに行っていきたい。

7 6月21日・6月28日・7月5日 グループ研究②・③・④（全学年）

3グループに分かれ、今年度の防災教育を振り返った。過去（備える）、現在（発災時）、未来（復興）のいずれかに焦点を当てて課題を見つけることとし発表資料づくりを進めた。どのグループも過去（備える）についてまとめることとなった。

8 7月12日 防災教育発表大会

グループ毎の課題は「地震の確率」、「震災の前はどう備えたらいいかわからないこと」、「災害時の行動」であった。主に田老での防災体験学習を振り返りながら、調べたり、話し合ったりした。自分たちでまとめることで、災害に対する危機感を持って、行動することの大切さに気づいた。

III 取組の成果と課題

1 取組の成果

防災学習・体験や外部の方々などの人材を活用し、様々な観点から災害時の避難について学ぶことができた。大船渡の防災マップづくりにより地域の危険に気づき、宮古市田老において歩きながら自然の力の大きさを感じることができた。まとめ、発表をすることで、地震後の避難行動について具体的に考えることができた。自然災害へ備える意識が高まり、命を守るための、いち早い避難の大切さを学んだ。

2 課題

今後も震災学習施設や外部の方々などの人材、地域資源の活用、体験から学べる仕掛けづくりをしながら防災教育を進めたい。また、防災学習だけでなく学校行事、授業と教育的価値「いきる・かかわる・そなえる」を結びつけ、つながりを持たせた復興教育を進め、生徒に生きる力を身につけさせるとともに、地域の担い手となる人材を育成したい。

「いわての復興教育推進事業 (いわての復興教育スクール〈沿岸〉)」実践事例

学校名：岩手県立釜石高等学校定時制

I 事業の概要 (地域の実情含む)

本校は釜石市の内陸側、仙人峠の麓に設置され、甲子川や五葉山など四季折々の表情を見せる自然に囲まれている。三陸道が全線開通し、復興事業が進んでいる一方で、東日本大震災から10年以上経過しているため、地域住民や生徒の震災の記憶の風化が懸念されている。

本校の生徒は、釜石市、遠野市の2市町から通学しており、令和4年度の生徒数は12名(5月現在)である。殆どの生徒が、様々な理由から小中学校時代に不登校や別室登校を経験しており、他者との関わりや実体験が少ないという実情がある。そのため多くの人々との触れ合いの中で、様々な体験を通じた学習が必要不可欠であると考えられる。

そこで本事業では、復興教育の教育的価値である「かかわる」や「そなえる」に位置づけられる「自分と地域社会」や「復旧、復興のあゆみ」を軸とした本校独自の復興教育を推進するものである。

II 取組の概要

1 釜石高校(全日制、定時制)、釜石祥雲支援学校合同避難訓練

6月28日(火)に火災発生時を想定した避難訓練を、全日制、定時制、釜石祥雲支援学校合同で実施した。定時制教室は5階建て校舎の1階、2階部分に位置している。避難指示の放送終了時点から本部報告完了までの時間は2分24秒であった。

【生徒の感想】

・校長先生が仰っていた通り、実際に災害が起こってからでないといちばん大切なことというのは学べない。しかし実際の災害時に少しでも冷静でいられるように、日頃の避難経路の確認や訓練を怠らないことが大切だと思った。

・今回は、事前に分かっていた上での避難だったので速やかに動くことができた。しかし今回とは違う状況で避難が必要になる場合もあると思うので、別の避難ルートも把握しておきたい。

2 第1回防災体験学習

10月14日(金)に実施した第1回防災体験学習では、気仙沼市の「東日本大震災遺構・伝承館」と陸前高田市の「東日本大震災津波伝承館いわてTSUNAMIメモリアル」を見学した。

午前中に訪問した気仙沼市の震災遺構・伝承館は、気仙沼向洋高等学校跡地に建設された施設である。最初に、写真や映像等の資料を見せていただきながら、実際に大震災を経験した語り部の方から当時の状況を詳細に伺った。次に、大震災によって破壊された向洋高等学校の旧校舎内を見学した。津波によって押し寄せた瓦礫や自動車などがそのまま校舎内に遺されており、東日本大震災の凄まじい破壊力を目の当たりにした。また、散乱した教材やむき出しになっている天井裏や電気配線等、震災が残した実際の爪痕を見ることによって、震災当時の様子を生々しく感じた。遺構が私たちに伝える震災の凄惨さ、平和な日常がある日突然壊される不条理さが、生徒の心に重くのしかかっていることが、その表情から読み取れた。

午後に訪ねた陸前高田市では伝承館を見学すると共に、青く美しい空に向かいまっすぐ伸びる奇跡の一本松を見学した。そこには大震災の凄惨さは見当たらず、穏やかで美しい自然が広がっているばかりであった。生徒たちの表情が幾分和らいだように感じられた。



向洋高校(気仙沼市)の旧校舎内を見学

【生徒の感想】

- ・ガイドの方のお話を聞かせていただいたり、写真や映像などを見せていただいたりしてとても苦しい気持ちになった。また、大震災を忘れず、必死に今を生きようとしている方々の言葉に勇気をもたらすことができた。今後も東日本大震災の記憶を語り継いでいくべきだと思った。
- ・実際の光景を生で見たのは初めてだった。画面越しではわからない津波被害の大きさが感じられた。自分も他人も守れるよう、日頃から防災意識を持っていたい。

3 普通救命講習会

10月24日(月)、本校第一体育館にて「普通救命講習会」を実施した。釜石消防署職員の方にご指導いただき、胸骨圧迫(心臓マッサージ)の方法とAEDの使い方について学んだ。生徒たちは救急車が到着するまでの救命処置の重要性を理解し、真剣に救命訓練を行った。



胸骨圧迫の方法を学ぶ様子

【生徒の感想】

- ・心臓マッサージをするときに、結構な力が必要であることと一定のリズムを保たなければならないことが分かった。また、AEDを使う際には注意しなければならないことが多く、落ち着いて対処しなければならないことも分かった。人命救助は協力者が多い方が上手くいくことを知り、万が一そういった場面に遭遇した場合は、周囲に声を掛け、救助活動をしたいと思った。

4 第2回防災体験学習

11月18日(金)に実施した第2回防災体験学習では、矢巾町の「岩手県立総合防災センター」を訪れ、防災総合コースを受講した。最初に、防災ビデ

オを見ながら地震が起こる仕組み、地震災害への備えと被災時の適切な対処方法について学んだ。次に、暗闇・煙体験をした。煙の充満した真っ暗な部屋を歩き、火災時の視界不良下での足場の悪さを体験するものである。そして、地震体験では、地震体験室で震度4～7までの地震を疑似体験した。その後、防災展示室を見学し、救助ロープの結び方を学んだ。



地震体験の様子

【生徒の感想】

- ・地震体験では、テーブルの下に頭を入れて守ることはできたが、体はどうやって守ればいいのか悩んだ。日頃から大きな地震が起きた時の身の守り方を考えていきたい。
- ・煙体験や地震体験など、学校の避難訓練では体験できないので、貴重な体験だった。

5 農業体験

農業体験は、毎年継続的に行われており、今年で5年目になる。今年は5月から11月までの7ヶ月間(全7回)、釜石市内の「創作農家こすもす」様から畑の一部を貸していただき、ジャガイモとサツマイモを育てた。全ての行程について「創作農家こすもす」を経営されている藤井サエ子様からご指導いただいた。概略は以下の通りである。

5月6日(金)に開講式を行い、ジャガイモの種芋を植え付けた。同月26日(木)には、サツマイモの苗を植え付けた。その後、毎月草取りや水遣りなどの環境整備を行いながら、時には隣接する公園の環境整備も行った。ジャガイモの収穫は8月23日(火)。サツマイモは10月18日(火)に収穫した。ジャガイモについては、9月に開催された釜高祭にて調理の上、販売。学習の締めくくりとして、11月8日(火)に収穫祭を開催。講師の藤井サエ子様を招待し、収穫したジャガイモとサツマイモを使用した料理を振る舞い、感謝の意を伝えた。



草取りの様子



ジャガイモ収穫の様子



サツマイモ収穫の様子



収穫祭準備の様子

【生徒の感想】

- ・昨年よりも収穫量が少なかったことは残念だったが、農業の難しさを知ることができ、良い勉強になった。畑に行くたびに様々な動植物の観察もできて楽しかった。
- ・農作業をもっと簡単なものだと思っていたが、実際は作業の度に足腰が痛くなり、大変な仕事だと知った。もっと体を鍛えて体力を付けたい。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

避難訓練と普通救命講習において、自分と他者の命を守るための術を学んだ。また、各生徒が自発的に考え、新たな発見をしたり課題を見つけたりすることができた。教育的価値「そなえる」を育むことができたと考える。

第1回目の防災体験学習は、自然が持つ脅威と美しさ、という二面性を肌で感じることによって、自然との共生について考える契機になった。また、当たり前のように感じている日常や家族の存在、命の尊さ等について再確認することができた。主に教育的価値「いきる」「かかわる」を育むことができた。第2回目防災体験学習では、自然と共生し、自他の命を守るために必要となる備えについて学んだ。主に教育的価値「そなえる」を育むことができたと考える。

農業体験学習においては、作物を育てる過程で自然に直接触れ、その厳しさや人間にもたらされる恩恵などを認識することができた。また、地域で農業を営む方と直接接し、ご指導いただくことで地域社会とのつながることもできた。教育的価値「いきる」「かかわる」を育むことができたと考える。

2 課題

本校生徒の多くは、東日本大震災発生当時幼かったため、震災の記憶が曖昧である。しかし今年度実施した様々な活動によって震災に関する理解や防災意識が高まった。今後は、これまでの学びを外に向けて発信し、震災の記憶が風化することを食い止められるような活動に発展させていく必要がある。また、多くの生徒が本来家庭で身に付けるべき基本的な生活習慣を身に付けておらず、心身が健康であるとは言い難い。そこで、次年度は今年度の体験活動に、身体の健康に関する活動を加え、教育的価値「いきる」の「⑥心の健康」「⑦体の健康」に繋げていきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立山田高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

自然とその景観に恵まれた三陸の大地には、有史以来何度も津波が押し寄せている。明治29年(1896年)、昭和8年(1933年)には三陸沖を震源とする地震、大津波が発生し、多数の死者、行方不明者及び負傷者を出した。そして、平成23年(2011年)の東日本大震災津波である。町は幾度も大きな痛手を負いながら、その都度、復興・再建を果たしてきた。現在も復興・再建は進行中である。

このような地域を背景として90有余年の歴史を刻んできた本校であるが、地域の歩みと同じく生徒数の減少に直面しており、平成22年度の卒業生は77名であったのに対し、令和4年度の卒業予定者数は30名と激減している。また、山田中学校からの入学者が例年85%以上で、子どもの頃からの知り合いに囲まれて生活しており、多様な考えや価値観に出会いにくい状況にある。これらの状況を踏まえ、復興への貢献、学び拡大、コミュニケーション力の伸張等を目標とし本事業を活用することにいった。

II 取組の概要

1 防災教育の推進

(1) 第1回避難訓練

6/14(火)、1階調理室より火災が発生し、有害なガスが発生しているという想定で行われた。全校生徒は口にハンカチを当て直ちにグラウンドへ。授業者の指示に従い避難した。

(2) 第2回避難訓練

10/31(月)、二部構成により第2回避難訓練が行われた。

第一部 地震発生(岩手県沖M8.0)→津波注意報発令→シェイクアウト訓練→避難命令→避難開始→生徒及び教職員の点呼・避難完了の報告→校舎内点検の指示→校舎内点検

第二部 災害時に本校が避難所になったときのための設営訓練が行われた。全校生徒で第1体育館ギャラリーに保管されている避難所用の畳を、バケツリレー方式で下に運び、隣との間隔を均等にとることを意識しながら、コート上に避難所を設営した。



2 震災伝承と震災学習

(1) TENDENKOクラブ

NHK盛岡放送局が主催し、本校生の力で地域の防災力向上と後世に向けた伝承の場を設けることを狙いとする。本校生13名が参加。

4～5月 防災授業スライド・台本作成

6月 模擬授業の実施

6/21 校内リハーサル

(NHK関係者等からの指導・助言)

6/30 防災授業リハーサル

(会場：山田町立船越小学校)

7/1 防災授業本番

(会場：山田町立船越小学校)

山田町立船越小学校へ赴き、生徒が先生役となって防災教室を行った。

第1グループ 1・2年生への授業

第2グループ 3・4年生への授業

第3グループ 5・6年生への授業



(2) 東日本大震災津波伝承館での震災学習

7/12(火)に陸前高田市で校外学習を行った。
ワタミオーガニックランド・東日本大震災津波伝承館での校外学習 (3 学年)
東日本大震災津波伝承館・気仙大工左官伝承館での校外学習 (2 学年)

【生徒の感想】

東日本大震災津波伝承館では、大地震からの津波を誰も経験したことがなかったため犠牲者が増えてしまったことや、震災直後から消防、警察、自衛隊、海外の方からたくさんの支援があったことを改めて詳しく知ることができた。

3 総合的な探究の時間「ふるさと探究」

(1) 1 学年「碑（いしぶみ）の記憶」

山田町の津波伝承碑のリーフレットや伝承碑横に設置する解説パネルの作成を通じ、過去の震災や防災のあり方について学習した。

【生徒の感想】

どの石碑も刻まれている内容はもちろん重要ですが、石碑が置かれている場所は実際に津波の到達した場所であり、先人が石碑を建てた時の気持ちを想像することが大切だと思います。歴史を知り、若い世代が防災意識を高めることが重要だと実感しました。

(2) 2 学年「復活の記憶」

インターンシップで企業の方から震災当時の様子や事業の復興までの軌跡についての話を聞き、震災後の地域産業について理解を深めた。

(3) 3 学年「明日への提言」

地域の課題を発見しその解決策について考えた。「高校生議会」で生徒が議員役となり、よりよい町づくりに向け提言を行った。



III 取組の成果と課題

1 成果

(1) 防災教育の推進

災害発生時を想定し、教員の役割分担を事前に告げずに訓練時に副校長から各教員に直接指示を出すことにより、生徒・教員共に緊張感を持ち迅速かつ安全に訓練を行うことができた。また、避難所の設営訓練においても、本校が東日本大震災発生時に町指定の避難所であったことを踏まえ、町役場職員の指導を仰ぎながら迅速に避難所の設営を行うことができた。

(2) 震災伝承と震災学習

TENDENKOクラブで本校の生徒が防災授業を行い、小学生へ震災当時の様子や防災に向けた取り組み等を丁寧に伝えることができた。また、震災を経験した若い世代（高校生）がさらに若い世代（小学生）に伝えるという活動の趣旨を踏まえ、生徒は主体的に活動し、震災伝承や地域に関わることの重要性を再認識することができた。

東日本大震災津波伝承館で生徒がガイドの説明を聞きながら見学を行うことにより、甚大な震災被害や震災時の被災者や支援者の様子等について理解を深めることができた。

(3) 総合的な探究の時間「ふるさと探究」

特に1 学年が、山田町の協力のもと津波伝承碑のリーフレットや伝承碑横に設置する解説パネルを完成させたことは、震災伝承の継続を重視する本校として大きな成果であった。

2 課題

(1) 防災教育の推進

本校は、東日本大震災発生時、町指定の避難所として最大約 1,300 名の方が利用した。当時の教職員から震災発生時や避難所のようすについて本校で話をしてもらい、経験者の話から震災について考える機会を設けることも必要である。

(2) 震災伝承と震災学習

震災学習や「ふるさと探究」で得た震災・防災に対する知見を、いかに生徒を主とした震災伝承活動につなげるか、その方策の検討が必要である。

(3) 総合的な探究の時間「ふるさと探究」

現在の探究活動の方向性は維持しながらも、新たな視点や他分野を取り入れ、特に課題の多い2 学年の「復活の記憶」を中心に、内容を見直し、改善を図る必要がある。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立宮古北高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、1学年1クラスの全校生徒66名の小規模校である。

震災以降、急速な人口減少が続いている田老地区の状況に鑑み、地域に存立する学校として、次代の地域社会を担う人材育成に努力したい。

本事業「たろう魅力発信プロジェクト」は、1学年を対象とし、生徒が主体的な姿勢で地域の多様な魅力を発見するとともに、地域住民とのつながりのなかで、様々な地域の抱える課題解決を目指して活動するなかで、生徒が自分らしさの発見し、自地域肯定感が育まれることを目指したものである。

II 取組の概要

1 事前学習

「たろう地域の魅力調査コース」として、3テーマ（施設、景観、食）を設定し、生徒に選択させた。

フィールドワークが充実するよう、選んだテーマに設定されている事業所や産業等について、調査方法を学習し、事前に情報収集等を実施した。

また、情報を分析しながら、現状やその課題等を発見し、ワークシートの作成や質問事項をまとめるなどグループ単位でフィールドワークにあたっての事前学習を行った。

2 フィールドワーク

選択した各テーマのコースに生徒が実際に足を運び、地域の方々や事業所の担当者から生の声を体感的に聞き取るなかで地域の多様な資源を知り、魅力を知ることができるように計画した。

新型コロナウイルス感染症の影響で訪問事業所の調整に困難さもあったが、宮古市田老総合事務所、漁協、各事業所、農園、NPO 法人みやこベース等、関係の皆様の協力を感謝したい。

公共交通機関の利便性が低い地域事情から、借り上げバスを学校発着、各テーマコース巡回運行とした。

事前のアンケートでは、大半の生徒は、「地元のことをあまり知らない」と回答している。自分の生まれ育った地域のことがわからないようでは、地域の多様な魅力を見つけ、自地域肯定感が育まれること期待できないと考える。



【田中菓子補 訪問グループ】

3 身につけさせたい力

生徒が自ら行動し、その場に出向き、関係者と直接話したり、質問したりすることで、「能動的に深く知ること」ができる。このことは、生徒の行動変容や意識変革にもつながると考える。新しい発見が次の学びへの動機づけとなり、課題の発見や問題意識へも発展する。

また、知識や技能を活用して、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度を養うことも期待できる。

柔軟な思考力を持ち、生涯に亘って学び続ける力、柔軟な発想力などの力を持った人材は、生徒からみて受動的な教育の場では育成することは難しい。

今後は、生徒が主体的に地域の魅力を体感しながら、地域肯定感を高め、地域の課題を発見し、解決策を見出ししていく、能動的な学びの場へと発展させたい。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 取組の成果

本事業「たろう魅力発信プロジェクト」の目的は、活動を通して、①生徒一人ひとりの主体性の向上を図ること、②生徒個々が自分らしさを発見すること、③自地域肯定感を高めることである。

そのため、活動の成果を発表する機会を多く設定し、他学年の生徒や保護者の方々に対して発表した。

生徒が人前で話すことに慣れ、自信をつけ、やがてプレゼン力を高めさせたいと意図して、全校集会である「宮北の森」や「宮北祭」等で発表する場を設けた。



発表の場を設けることによって、生徒が他のグループの発表を聴き、体験や情報を共有することができ、また、生徒間での学び合いのよい機会にもなった。

生徒の感想では、「地元についてあまり知らなかったので、今回の活動を通して深く知ることができた。」「事業所の方に丁寧に説明をしてもらいもっと知りたくなった。」「自分で考え行動する、伝える、課題について主体的に取り組むことなど、たくさんの力が身についた。」など、前向きな感想が多かった。これらのことから当初の目的は達成できたと思われる。

2 課題

(1) 計画的な3カ年を通した活動

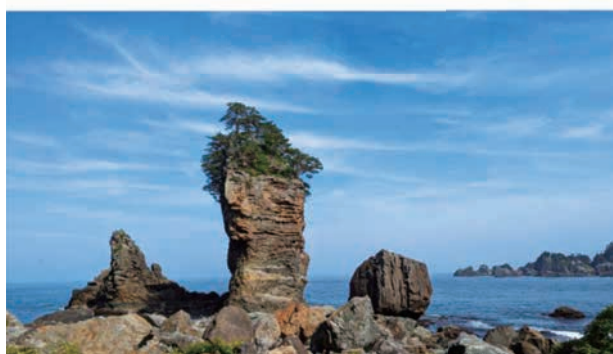
来年度は、今年度の反省を踏まえ、「県立学校復興担い手育成支援事業（就職等支援）」、「いわての復興教育推進事業」、「いわての高校魅力化ふるさと創生推進事業」などを活用し、1学年から3カ年通した計画を立案したい。

本校の教育目標である、「自らの将来をデザインする能力を育成するキャリア教育の充実」、「豊かな人間性を育む教育の推進」を踏まえながら、探究心・向上心旺盛で、周囲の人と協力し、課題解決に向け頑張り続けることができる生徒、また、将来をデザインし自ら進路実現できる生徒の育成に努力したい。

(2) 次代の地域社会を担う人材育成

生徒が、地域の自然や産業を知る経験は想像以上に乏しい。農林水産業をはじめ、地域に根ざした産業や地域の魅力を知ることは、同時に生徒が自分らしさを発見し、能力を開花させ、その力を伸張させることにもつながる可能性がある。

既に日本の多くの地域が、これまで人類が経験したことのない超高齢社会に突入し、生徒が生きる時代は、急激な人口減少、少子化などの困難な問題が山積する。勇猛果敢に挑戦し続け、たくましく未来を生き抜く力を持った人材の育成を目指したい。



「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立宮古水産高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

岩手県宮古市は、2011年の東日本大震災津波により、甚大な被害を受けた。その経験から平成28年熊本震災の際には、実習船りあす丸を運航し被災地への食料支援を行った。

この経験から震災等の非常時に実習船を活用し、被災地支援を行うことを目的に、その訓練を実施するために本事業が行われている。生徒はこの訓練を通して、ボランティア活動への関心を高める効果が期待される。

II 取組の概要

1 事業計画

コロナ前までは地域の小中学校を招待し、食事を提供するかたちで訓練を行っていた。コロナ発生後は、その感染リスクから中止していた。

本年度は、ウィズコロナの方針のもと事業の実施を検討してきたが、未だ落ち着いた感染状況のもとでは、発生前と同じ形態での実施は難しいと判断された。

そこで、本年度は実習船内での調理体験とともに過去に行われた実習船による炊き出し訓練の様子を生徒に紹介する形で実施した。

2 訓練の実施

(1) 食物科3年生を対象とした炊き出し訓練

令和4年11月24日（木）に実施した。

実施内容

13時に学校から実習船海翔に移動し、乗船した。乗船後、船内での過ごし方や陸上の調理設備との違いの説明、過去の炊き出し訓練を説明するオリエンテーションを実施した。



写真1 食堂でのオリエンテーション

15時に宮古港を出港。出港後、船内調理設備を使用し、調理体験を行った。



写真2 船内調理体験（厨房）



写真3 船内調理体験（食堂）



写真4 夕食調理



写真5 試食

18時に漁業体験として、イカ釣り実習を実施。体験後は宮古港に寄港して、就寝した。

翌25日6時に起床し、船内掃除を行ったのち、朝食を食べ、下船した。

(2) 食物科2年生を対象とした炊き出し訓練

令和4年11月25日（木）に実施した。

実施内容

24日13時に学校から実習船海翔に移動し、乗船した。乗船後、船内での過ごし方や陸上の調理設備との違いの説明、過去の炊き出し訓練を説明するオリエンテーションを実施した。

15時に宮古港を出港。出港後、船内で夕食を摂った。

18時に、漁業体験としてイカ釣り実習を実施。体験後は宮古港に寄港して、就寝した。

翌25日6時に起床し、船内掃除を行ったのち、船内の調理設備を使用して調理体験を行った。その後、朝食を摂って下船した。



写真6 朝食調理（厨房）

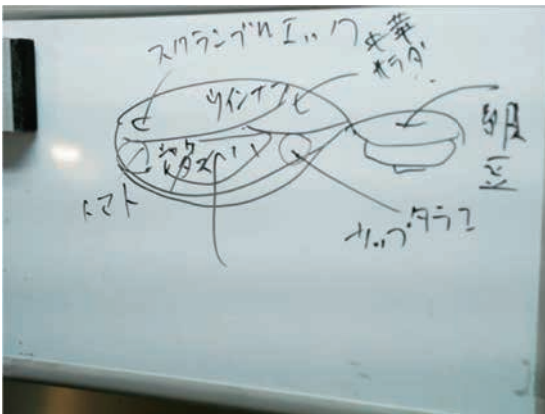


写真7 配膳方法の共有（ホワイトボード）



写真8 盛り付け（食堂）



写真9 朝食

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

本事業を通して、生徒たちに以下の変化が確認できた。

(1) 地域への印象の変化

日頃の授業では乗る機会のない実習船の生活を体験し、海をより身近に感じることができるようになった。

(2) ボランティア意識の向上

実習船を活用した過去の炊き出し訓練を知り、自分たちの調理技術が被災地支援に役立つことを知り、ボランティア活動への意識が向上した。

2 課題

感染症への対応

新型コロナウイルス感染症の発生により、食事時における感染リスクが浮き彫りになった。これは訓練時のみならず、非常時においても今後対応が求められる。

いかにすれば感染リスクを下げながら、非常時の対応ができるか検討を必要とする。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立岩泉高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 岩泉町

北上山地の東部に位置し、992.36平方キロメートル（東西51km、南北41km）の本州一広い町である。盛岡市など3市1町3村に隣接し、東方は北部陸中海岸の太平洋に臨む。耕地面積は少なく、林野率が高い。小本川、安家川、撰待川の流域に沿って集落を形成しており、人口は約9,000人である。

安家地区から岩泉地区に延びる石灰岩層は、日本三大鍾乳洞のひとつとして名高い龍泉洞をはじめ、氷渡洞、安家洞などの鍾乳洞群を形成している。

東日本大震災津波による小本地区の復興半ば、2016年台風10号（以下、台風10号）豪雨災害で町の多くが被災。また、2019年発災の台風19号でも小本地区を中心に被災した。

2 岩泉高等学校

地域の青少年教育の必要性が高まる中、凶事・凶作の解決のために町立農業学校として1943年に設置された。現在は県立の普通科高校、岩泉・田野畑地域唯一の高校として、2023年に創立80周年を迎える予定である。今年度は123名の生徒が在籍している。

3 復興教育について

地域の特質や課題を踏まえつつ、年間を通して継続的に防災・復興教育に取り組み、これまで発生した災害と、今後起こり得る災害について学ぶ。

また、これからの地域の復興に向けて、自身の将来と地域の現状を関連づけて考察することをおして、郷土を愛し、その復興・発展を支える意欲を涵養する。



【避難訓練の様子】

II 取組の概要

1 避難訓練（5月24日）

迅速かつ安全な避難を行い、災害時に備えることをねらいとして、地震を想定した訓練を実施した。新型コロナウイルスの関係で消防署員は立ち会わず、学校独自で実施した。

2 SDGs 演習

NPO 法人環境パートナーシップいわてから丸尾美由紀氏を招き、昨年1年次に探究学習で学んだSDGsの視点について、演習を通して検証し理解を深めた。



【講師の丸尾先生と、SDGs をカードゲームで検証】

3 復興教育

(1) 復興を考える科学的思考力養成講座

(10月18日)

岩手大学理工学部の高木浩一教授を招き、1・2学年対象に、研究リテラシーの基本ともいえる科学的思考力について、実演実験を交えながらガイダンスいただいた。



【講座での実演実験の様子】

(2) 事前ガイダンス (10月21日)

ア 1学年

うのすまい・トモス、東日本大震災津波伝承館を訪問する上で、大震災や釜石市・陸前高田

市に関わる事前学習を行った。

イ 2学年

インターンシップに臨む上での心構えや礼儀等のガイダンスを行った。

ウ 3学年

副読本「いきる」「かかわる」「そなえる」を使って、災害と復興に関する事前学習を行った。

(3) 復興教育事業当日

ア 1学年 (10月25日)

うのすまい・トモス、東日本大震災津波伝承館を訪問し、担当職員の方からさまざまな解説を聞くことで、当時の被害状況や現在までの復興の現状を知ることができた。



【1学年 見学の様子】

イ 2学年 (10月25日～27日)

岩泉町、普代村、田野畑村、宮古市あわせて26の事業所にてインターンシップを行った。企業での就労体験を通じて、企業や業界が抱える課題と向き合い、よりよい労働環境を作るためにSDGsを軸に探究した。インターンシップをとおして地元の良さを再発見するとともに、働くことの意義を培った。



【2学年 インターンシップの様子】



【2学年 インターンシップの様子】

ウ 3学年 (10月26日)

午前には避難所運営ゲームを実施し、午後は震災伝承のあり方について、NPO法人「おらが大槌夢広場」の神谷未生氏から講話をいただいた。



【3学年 講演会の様子】

4 学校安全研修

(1) 職員対象：救命救急講習 (6月13日)

10月に生徒を対象とした救命救急講習の実施を見据えて、教職員を対象にAEDの使用方や心肺蘇生法の講習を行った。



【救命救急講習 (職員) の様子】

(2) 生徒対象：救命救急講習 (10月12日～14日)

全校生徒を対象に、AEDの使用法や心肺蘇生法の講習を行うことで生命の大切さ・事故や災害の当事者として一人ひとり何ができるかを学んだ。新型コロナウイルス対策により、学年ごとに実施日を変えて行った。



【救命救急講習 (生徒) の様子】

(3) 職員対象：マップマヌーバー演習 (11月14日)

生徒の安全管理に係る初動の大切さの再認識をねらいとして、教職員を4班に分けてワークショップ形式で、2つのケースモデルについて演習を実施した。

5 復興教育を終えて (生徒のレポートから)

【1】「今回の復興教育での取り組みを踏まえて『いきる』『かかわる』『そなえる』のうち、どの教育的価値が心に残りましたか。

(1年) 私は「いきる」の価値が印象的です。なぜなら、災害が起きた際に、逃げ遅れそうな人を助けるか、自身の命を最優先して逃げるか？災害が起きた時には、優しさよりもまずは自分の命を守ろうという強い意志が大切であることを、復興教育で学び、気がついたからです。自分の命を守り抜いたならば、逃げ遅れそうな人を助けに行くべきなのか、その場の状況をよく考えて、助けに行け

ることが最も素晴らしいことだと思いました。

(2年) 私は「かかわる」が心に残りました。なぜなら、さまざまな人とつながって助け合うことは大切だと思うからです。実際、災害が起きた時に一人暮らしのお年寄りが一人取り残されてしまったことをテレビで観たことがあります。私の周りにもお年寄りは多いので、普段から関わりをもって、災害が起きた際には助け合えるような環境を維持していきたいと考えました。また、まずは自分自身が身を守れるように災害に対する知識を増やしていきたいです。

(3年) 私は「そなえる」を特に意識していきたいと思います。東日本大震災が起きた時、誰もがこんな大きな地震が来ないと考えていたと思います。実際に震災が起きた後、買い物に行けなくて食料や日用品を手に入れられないでいた人たちが多かったと思います。最近では、南海トラフの地震が近いうちにも起こることも予測されています。そこで、いつ地震が来てもいいように防災リュックの準備をしておいた方がよいなと思いました。また、自分たちの地域のハザードマップもしっかり確認しておきたいです。「そなえる」ことの必要性を感じました。

【2】今後災害が起きた際、どのように行動したいと考えますか。

(1年) 私が住んでいる地域は、津波の被害の心配はないですが、台風や大雨の被害は十分にあり得るため、気を緩めてはいけなと思いました。東日本大震災や台風10号を経験した時、あり得ない出来事に焦ってしまい、正常な判断ができなかった記憶があります。また、避難を始めるべきかわからず、川が氾濫する寸前に避難をしました。一步の遅れが今後に大きな影響を与えると身にしみて感じました。そのため、事前の準備が大切だと思います。近所との連携や、避難先の確認、地区での声かけ、次の世代につなげていくことなど、たくさんの課題がありますが、それを少しずつ解決していき、もしもの時に正しい判断と行動ができるようにしたいです。

(2年) 私はまず、自分ができることを探したいです。台風10号の時、私は小学5年生でした。何もわからず、ただ怖いという感情しかありませんでしたが、小学6年生の先輩は、体育館に来た物資を並べたり、トイレの水を汲んだり、自分のできることを率先して行っていました。あの時は何もできませんでしたが、今はある程度の知識と、勇気と、助けたい気持ちがあります。だから私は、も

しも災害が起こった時は率先してできることを手伝いたいです。また、私の身の周りで起こらなくても、近い地域なら手伝いに行き、遠い地域なら募金などで支援できるようになりたいです。台風の時には助けてもらって嬉しかったので、今度は私が助ける側になれるよう、「率先」という言葉を大切に、今後のことを考えていきたいです。

(3年) 自分の判断だけで行動するのではなく、周りの意見を十分に聞いた上で自信を持って行動したい。避難所運営ゲームをやる前は上手くできると思っていたが、実際にやってみると難しくて考えることが多く困難でした。まだまだ知識が足りないと思った。私は看護師を目指しているので、災害が発生した時、患者さんの安全も守る必要があります。どんな時も臨機応変に対応・行動できるよ



【KIZUKI 総括発表会の様子】

うに、看護についてだけでなく災害についても勉強していきたい

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

本校では、これまでも避難訓練、避難所運営ゲーム、東日本大震災津波伝承館見学など、主として「防災」に重点を置いて復興教育に取り組んできた。また、救命救急講習も毎年実施しており、ケガや急病人が発生した際にも生徒自身は、自主的に行動し救護活動に参加することが多い。これら復興や防災に関する取り組みを通して、自身の将来と、岩泉町という地域の現状を関連づけて考察することができたと考えられ、自他の生命尊重の精神を育てることができた。

2 課題

今年度も新型コロナウイルスの関連でさまざまな活動が制限されるなか、復興教育に関する事業の進め方においてもさらなる工夫を求められた。今後、事業を継続させていくためにも、「防災」だけの視点ではなく、復興を視野に入れた「地域づくり」など、本校の魅力ある活動の一つでもある郷土芸能も取り入れながら、地域の実情を理解する取り組みを増やし、実現可能な計画が立案できるよう進めていきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立久慈東高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

東日本大震災において、本校では平成23年3月11日に帰宅困難生徒13名が学校に宿泊し、3月12日には格技場に約70名の市民が避難してきた。また平成28年8月の台風10号や令和元年10月の台風19号により多数の生徒が被災したとともに、生徒や職員が居住する久慈市や岩泉町で甚大な被害が生じた。

このような状況から、災害発生時に自分の身を守ることに加え、地域の一住民として高校生ができる支援について考えさせたい。平成28年以降も大雨の際に河川の水位上昇が発生していることから、地域連携型指定校として近隣小中学校や地域住民と協働しながら防災意識を高め、実践的な防災行動をとるための共通理解を図ることを目標としている。

本校の環境緑化系列2年生および3年生は久慈市もぐらんぴあ水族館内「防災展示室あーすぴあ」、宮古市役所内「宮古市市民交流センター防災プラザ イーストピアみやこ」、陸前高田市「東日本大震災津波伝承館」にて見学研修を実施し、震災当時から現在までの取り組みを学習した。また、被災時における非常食として用いられることが多い「アルファ米」と「5年保存水」を用いた防災学習を実施した。

II 取組の概要

（1）校種を越えた地域連携に係る取り組み

地域の防災力の向上を図るため隣接する久慈小学校、久慈中学校に呼びかけ、地域防災推進委員会を開催する予定だったが、本校における新型コロナウイルス感染症拡大が見られたため今年度は開催を見送った。

2022年10月31日（月）に久慈小学校で行われた連携事業では、防災学習という形式で久慈小学校4年生児童104名と、本校環境緑化系列2年生22名および介護福祉系列2年生16名の合計38名が参加した。高校生が主導のもと基本的な自然災害について確認し、その後は実際に自分たちが取り組んでいる災害への備えについて情報交換を行った。学習会開始時はお互いに緊張していたが、情報交換を行う際には打ち解けて和やかな雰囲気で行うことができた。学習の最後には牛乳の空きパックを利用した「防災キット」を作成し、防災意識を高めることができた。防災キットには、内容物の賞味期限や緊急時の連絡先を記入しておくステッカーを添付し実用性を高めた。



【久慈小学校における交流事業の様子】

（2）宮古市・陸前高田市における学習会

①宮古市「震災遺構たろう観光ホテル」

2021年10月25日（月）に宮古市田老「震災遺構たろう観光ホテル」にて、たろう潮里ステーションのガイド職員が行う説明のもと学習会を行った。参加生徒は本校環境緑化系列および介護福祉系列2年生の合計41名である。自身が実際に被災した経験を持つガイド職員が、震災当時の状況を語ってくださり、災害ではとにかく第一避難者となることの重要性を再認識することができた。



【震災遺構たろう観光ホテル(防潮堤)にて】

②陸前高田市「東日本大震災津波伝承館」

陸前高田市の「東日本大震災津波伝承館（いわてTS UNAMI メモリアル）」において、本校環境緑化系列22名および介護福祉系列2年生16名が見学研修を行った。現地では施設職員のガイドによる説明を聞きながらの研修となった。



【東日本大震災津波伝承館にて】

(3) 地域連携に係る取り組み

防災だけの学習を行うのではなく、久慈市を本当の意味で復興させたいという生徒の思いから、久慈市を盛り上げる活動を行った。久慈市の原木シイタケ生産量は岩手県の市町村において第1位であり、岩手県も全国で第3位である。県北広域振興局林務部の依頼で、久慈産の原木シイタケ消費拡大に向けた連携事業を行った。令和4年12月15日(木)に、実際に全国で販売されているシイタケ製品の試食を行いながら、久慈市における販売方法、新商品、PR方法の検討を行った。内容をまとめ、令和5年1月19日(木)に、アイデアの発表会を実施した。そこでは、久慈市の特産である山形町の短角牛を使用したハンバーグ、野田村の塩を使用したシイタケ塩などの、久慈市の特徴を活かした製品のアイデアが多く発表された。



【シイタケ消費拡大アイデア発表会にて】

さらに、本校の海洋科学系列と連携し、ウニ漁において大量に廃棄されるウニ殻の活用方法として土壌改良剤や肥料として利用するための研究を行った。ウニ殻には植物の栄養分となるカルシウムや窒素、リン酸が含まれており、肥料としての利用はこれまでも行われた研究例がある。しかしながら植物にとって土壌塩分は枯死の原因となることから、塩抜きを行う例が多かった。本校ではウニ殻に含まれる塩分への対策として、土壌塩分を好む塩生植物であるアイSprantを用いて栽培実験を行った。実験の結果、ウニ殻を混合した土壌においてアイSprantは順調に生育しており、肥料としての利用が可能であることを確認できた。



【アイSprant移植の様子】

本校を中心に活動するばかりではなく令和5年1月12日(水)に岩手大学で実施された「高校生の集い」に参加することで、種市高等学校や山田高等学校の復興教育に係る実践発表を知る機会があった。ここでは自分の学校だけではなく、県内の多くの学校で復興教育に取り組んでいることを知る機会となった。





【高校生の集いにて】

Ⅲ 取組の成果と課題

(1) 校種を越えた地域連携に係る取り組み

地域連携型指定校としての指定は外れたが、久慈小学校、久慈中学校と継続して連携を行っている。久慈小学校との連携事業は実施できたものの、新型コロナウイルス感染症予防の観点から、久慈中学校との連携事業の実施を見送った。久慈小学校の児童は家族で避難場所を決めていたり、防災用品を備蓄していたりするが多かったため、連携事業を終えた本校生徒からは「私は東日本大震災の時は小学校に入る前であり、ほとんど記憶はありませんが、小学4年生の時の私は久慈小学校の子たちのように高い防災意識は持っていませんでした。小学生よりも私の方が年齢は上ですが見習いたいです。」という感想があった。地震や津波だけではなく、近年は大雨による洪水被害が目立っていることから、生徒自身が身近な災害に対して備えるべき知識や資材について考える貴重な機会となった。

本校の避難訓練は地震と火災を想定した内容になっているが、以前の避難訓練における久慈市広域連合消防本部長の講評では本校の立地条件から大雨による地滑りや土砂崩れの恐れがあることを指摘して頂いた。今後は大雨による浸水と土砂崩れを想定した避難場所の選定、避難後の保護者連絡と引き渡しといった、現状に即しているものを設定したい。

(2) 宮古市・陸前高田市における見学研修

今年度は東日本大震災を始めとして久慈市で発生した自然災害を事前学習し宮古市、陸前高田市で学習会を行ったため、岩手県沿岸部の北部から中部、南部の各地における被災状況の比較をすることができた。この学習を通して久慈市を中心に生活する本校生徒たちは、久慈市も被災地ではあるが久慈近郊の地域では被害が少なかったことを再認識し、その上で自分が何をすべきか、出来るのかという点についても考える貴重な体験となった。生徒からは「率先避難者となって動いた際に、実は被害が少なかったということであれば笑い話になりますが、避難しなかったばかりに誰かが命を落とすことに

なれば取り返しがつきません。どんな場合でもまずは自分が先頭に立って避難することを最優先したいです。」という声があり、生徒の防災意識の醸成を実感することができた。

(3) 今年度の活動を振り返っての課題

これまでの学習内容を発信する貴重な場である学習成果発表会や高校生の集いなどに参加できたため、今後も安全面に配慮しながら広く学習内容を伝えていく方法を検討する必要がある。例年までとは異なり、単純な防災教育にとどまらず、地域を盛り上げるために高校生が何をできるかという領域までたどりつくことができた。これまでは復興教育のもつ教育的価値である「かかわる」「そなえる」については充実した活動を行ってきたが、今回は地元を盛り上げてこれからの「いきる」という点でも活動を深めることができた。環境緑化系列および介護福祉系列の2年生が中心となって復興教育に取り組み、海洋科学系列とも連携して活動を継続中であることから3系列では横断的な教育活動を展開することができた。また、本校の2年生を対象とした「野田バイオパワーJ P」による地元企業講演会を実施することで、震災後に野田村を盛り上げるために事業展開している企業から、その事業内容と理念について知る機会を設定することができた。これにより学年全体で取り組む復興活動につながったといえる。

しかしながら、その他の系列や学年を超えた学習が活発というわけではなく、お互いの活動内容を共有したり、普段の授業にリンクさせたりする段階には至っていない。研修において3月11日が近づいてくる時期に「防災の日」を設定して学校全体で副読本を活用した防災学習を行って意識を高めている事例を知ったため、本校における「防災の日」を設定し、各クラスまたは系列にて防災学習を行い、学校全体の防災意識を高められることが期待される。

これまでの取り組みで復興教育に取り組んだ生徒たちは災害や復興に対する興味関心を持つことに成功し、さらには小学生との連携事業を通して高校生の自分たちもまた語り継いでいく世代なのだと考えられる生徒が確実に増えた。自分たちには実際にどんなことができるのか、またするべきなのかを考えられる生徒を育成するため、今後も継続的・体系的に働きかけていくことが重要である。



【2学年を対象とした地元企業講演会の様子】

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立種市高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

洋野町は、明治及び昭和の三陸大津波による大惨事が繰り返された過去がある。東日本大震災では平成22年に竣工した高さ12mの防潮堤が津波の侵入を防ぎ、奇跡的にも人的被害や行方不明者はなかった。しかし、船舶や漁業施設等は甚大な被害を受けた。震災当時は、本校の教育活動において、ホヤの養殖等で関わりの深い岩手県栽培漁業協会種市事業所の資材や瓦礫・土砂等の撤去を高校生が手伝い、地域を思い、協同して復興へと向かった事実がある。

東日本大震災発生からの時間経過に連れて、生徒たちの多くは記憶が薄らぐ中で、地域としての防災力が求められる昨今、本校独自の事業を展開することはできないかと模索した。

以上にに基づき、これまでの経緯や実施内容を踏襲しながらも、今年度は以下の2つの事業を展開していく。

まずは、「津波防災出前授業・地域貢献活動」である。平成26年度に東京大学海洋アライアンス海洋教育促進研究センターと連携協定を締結したことを契機に、近隣の小中学校への津波防災出前授業がスタートした。長さ約2mの水槽を用いて、波の速さと水深の関係を実験しながら、津波防災教育を主要なテーマとして出前授業を行う。本活動は、児童・生徒に津波などの自然災害についての理解を深めてもらい、地域の防災意識を向上に貢献することを目的としている。今年度は低気圧や台風による高潮の影響なども追加して出前授業を行った。また、出前授業と並行して、グラウンドの草刈りや校舎等の窓拭きを行い、各校の要望に応える地域貢献活動も実施した。

次に、「震災以後の海底調査」である。本校海洋開発科は、潜水や港湾工事など、海に関わる専門的な内容を学習している。東日本大震災において、防波堤の損壊やケーソンの流出などの被害を広い範囲で受けた。震災後に復旧・復興工事が進められ防波堤・防潮堤など新しい土木構造物が整備されており、多くの卒業生が工事に携わっている。震災から11年が経過した地域の海底の様子はどのような状況にあるか、本学科の教育活動の特色でもある潜水技術を生かし調査を実施した。

II 取組の概要

1 津波防災出前授業・地域貢献活動

以下のとおり、出前授業・地域貢献活動を実施した。

実施日	学校名	出前授業	対象	地域貢献
6月6日	道仏中			○
7月11日	角浜小	○	3～6年生 18名	○
8月22日	道仏小			○
8月29日	宿戸小	○	4年生 13名	○
9月12日	種市小	○	4年生 39名	○
9月14日	赤保内小			○
10月19日	中野中	○	1年生 9名	○
10月24日	中野小	○	6年生 11名	○
10月31日	種市中	○	1年生 47名	○
1月26日	角浜小		修繕したベンチの搬入	

(1) 津波防災出前授業

近隣の小中学校6校の児童生徒137名に対して、自然災害にかかる出前授業を行った。波と津波の違い、高潮と津波の違い、津波発生のメカニズム等についてプレゼンテーションを行った。長さ約2mの水槽を用いて水深と津波の速さを実験から検証した。防災に関する〇×クイズを出題し、児童生徒と楽しくコミュニケーションを図りながらも、正しい知識や行動を確認することができた。家庭での備蓄品や避難する時の服装や持ち物についても伝え、確認した。自宅や学校の他、家庭の買い物で訪れることが多いであろう近接の市街地のハザードマップを紹介した。正しく恐れて、被災時も冷静に行動できるように想定される災害、避難場所、経路の確認を行った。



【津波発生装置実験】



【〇×クイズの様子】

ア アンケート調査

出前授業実施後にアンケート調査を行った。回答結果から出前授業について印象に残っている部分は、水深と速度の実験および震災当時の映像という回答が多かった。以下に、感想の一部を紹介する。

- ・〇×クイズがあつて楽しく学ぶことができました。津波が発生する仕組みや津波の速さなど今まで知らなかったことが知れました。また、避難するときの服装や体に必要な水の量がわかりました。(小学生)
- ・今回の出前授業で、津波や高潮についてよく知れたし、津波が来た時の行動について知ることができました。話をただ聞くだけでなく、実験に参加したり、クイズに答えたりして楽しく授業を受けることができました。実験装置を操作することもできて良かったです。ハザードマップから身近に行っているショッピングセンターなども完全に浸水してしまうなんてびっくりしました。(中学生)
- ・津波の実際や恐ろしさ、防災についてお話いただき、大変勉強になりました。児童は高校生のお兄さんやお姉さんから教えていただき目を輝かせていました。動画や模型などを用いながらわかりやすく教えていただき、津波についての理解を深め防災の意識を高めることができました。(職員)

津波「命を守る、最優先に」



速度変化、体感実験も

実験を通して、津波の恐ろしさを体感し、命を守るための行動を学ぶ。

津波の発生は、海底地震や津波の伝播速度、津波の高さなどによって決まるといわれています。津波の伝播速度は、水深が浅いほど遅く、水深が深いほど速く伝播します。津波の高さは、水深が浅いほど高くなり、水深が深いほど低くなります。津波の伝播速度と高さの関係を理解し、命を守るための行動を学ぶことが重要です。

今回の授業では、津波の伝播速度と高さの関係を理解し、命を守るための行動を学ぶことが重要です。津波の伝播速度と高さの関係を理解し、命を守るための行動を学ぶことが重要です。

津波の発生は、海底地震や津波の伝播速度、津波の高さなどによって決まるといわれています。津波の伝播速度は、水深が浅いほど遅く、水深が深いほど速く伝播します。津波の高さは、水深が浅いほど高くなり、水深が深いほど低くなります。津波の伝播速度と高さの関係を理解し、命を守るための行動を学ぶことが重要です。

種市高生、種市中で防災出前授業

種市町立種市高等学校の生徒が、種市町立種市中学校で防災出前授業を行いました。授業では、津波の発生メカニズムや津波の伝播速度、津波の高さなどについて学びました。また、津波の発生時の行動についても学びました。

(2) 地域貢献活動

草刈りや窓拭きなどの奉仕活動にとどまらず、専門高校の特色を生かした活動を行った。各小中学校で困っていることを伺い、その要望に可能な範囲で応えることで、地域の高校の存在意義や地域連携を深める。

ア 草刈り・窓拭き

近隣の小中学校9校に対して実施した。事前希望調査に基づき、グラウンドや校舎周辺の草刈り、校舎の窓拭きを行った。小学校の昼休み時間に訪れることから、児童と一緒に遊んでほしいとの要望がある場面もあり、サッカーをしたり、グラウンドを走り回ったりしながら、小学生と交流する機会を与えていただいた。



【草刈り作業】



【高枝の剪定】



【窓拭き作業】



イ 既存ベンチの修繕(角浜小学校)

草刈り、剪定、窓ふき等が主要な活動であるが、校庭に置くベンチや空き缶回収所の屋根等の製作も行うようになった。ベンチの製作では、本校で行っている陸上・水中溶接実習(陸上の現場施工では頻繁に用いられ、ダイバーが行う水中溶接については特殊技能である)で学んだ技能を生かし、切断した角パイプを溶接して組み立てし、木材をボルトで取り付け座面を作り、鉄部には三層(さび止め・中塗り・上塗り)の塗装を行い、木部にはニス塗装を行って届ける。現在は、希望のあった角浜小学校に4脚のベンチを寄贈している。寄贈したベンチは、骨組み部(鉄材)には錆・座面部(木材)は毛羽立ちや塗装剥がれが出るので、1年に

1度回収し、骨組み部のさび落としと再塗装、座面部へのやすり掛けや塗装を行い、メンテナンスを行っている。



【修繕したベンチの搬入】

（3）震災以後の海底調査

以下のとおり、海底調査を実施した。

実施日	場所	対象
9月8日	種市漁港	3年生11名
9月29日	ウニ増殖溝	3年生10名

海洋開発科の実習で学んでいる潜水技術を生かし、地域の海底（水深5m程度）の様子を調査した。未だに震災瓦礫が沈んでいる現状であった。潜水調査を行った結果、ウニ増殖溝には瓦礫等を確認することはできなかった。しかし、漁港内では想像以上の瓦礫が沈んでいた。自分たちの目で11年前に起きた津波で流された瓦礫を確認することができた。

海底にあったプラスチック製のゴミ等が紫外線や波や熱の影響を受けて劣化し、海洋生態系にも影響を及ぼす可能性もある。今後も継続して観察していきたい。海中にある瓦礫の撤去・回収方法など自治体や関係団体と検討していきたい。

洋野町の海岸は三陸海岸の中でも漁業に適さないとされている。このような不利な環境下においても、洋野町のウニの生産量は岩手1位を誇る。洋野町のウニ増殖溝は特殊な地形を活用した全国初の試みであり、先人の知恵が詰まっている。漁協の方と連携して、ウニの移殖を体験することは、郷土への愛着や誇りをもつことにつながるものと考えられる。



【海底調査】



【ウニ増殖溝】



【震災瓦礫】

ア 海底調査を行った生徒の調査報告および感想

- ・ウニ増殖溝を潜水することで、地域産業(漁業)のことを理解し、守ることにつなげたいと思った。
- ・潜水技術を活用して、瓦礫撤去などといった活動を通じて地域に貢献したい。どうにかしたいと思うが、私たちだけの力では引き揚げが難しい。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

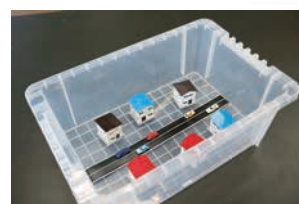
本事業の実施により、様々な体験を通じて、新たな発見や気づき、感動が生まれたように感じる。高校生が近隣小中学校の教育活動に参画することには大きな意義がある。学校の代表、学校の広告塔として赴き、活動を実施することで生徒たちの責任感やボランティア精神の向上につながった。普段、自分の意見を伝える機会の少ない生徒が堂々とプレゼンテーションを行ったり、児童生徒と接する際に視線を合わせてコミュニケーションを図ったりするなど、生徒の見方が変容する場面が数多くあり、感心させられた。生徒たちは責任を全うし、自信や達成感を得ることで成長へのきっかけとなった。また、近隣小中学校との連携を深め、相互に共助の関係性を築くことができた。

2 課題

出前授業の実施内容がマンネリズムに陥っており、新鮮味をもたせることが課題となっている。自然災害の高潮や液状化現象を目視で確認するための実験装置の製作を試みたが、精度面での問題があり、今年度の活用へは至らなかったため、次年度は実用化を目指したい。また、防災について考えるとき、地域との連携やつながりは不可欠である。本活動では近隣小中学校との交流はあったものの、役場や地域との関わりが希薄な側面がある。活動を継続しながらも、今後の取り組みを発展させるため、協働できる部分を模索したい。



【高潮実験装置】



【液状化現象実験装置】

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立宮古恵風支援学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、宮古市の北部に位置し、周りを山に囲まれ、学校周辺の通学路には土砂災害の危険個所が多数存在する。これまでも、通学路への土砂流出や道路の寸断により安全が確保できず、臨時休業となった経験がある。

本事業では、児童生徒の実態や学部での取組に応じて、防災教育・復興教育に関わる学習目標・ねらいを設定し、本校の特色を生かし、宮古恵風支援学校だからこそできる教育活動を計画し、実践を図る。また、体験的な活動を重視し、本校における防災教育・復興教育において保護者や地域との連携を図りながら、より「ひろがり」を意識した活動に取り組む。

II 取組の概要

1 全校での取組

(1) 避難訓練（年3回）

ア ねらい

- ・火事や地震を想定し、児童生徒の避難誘導を安全かつ迅速に行う。
- ・教師の指示に従い、きまりを守って速やかに避難する。

イ 内容

1回目：4月19日（火）

- ・火災想定・避難経路の確認
- ・スモークマシンの活用
- ・消防署員による講評及び助言

2回目：9月12日（月）

- ・火災（林野）想定
- ・近隣施設との合同訓練



3回目：3月上旬（予定）

- ・地震想定
- ・発生日時の予告なし

2 各学部での取組

(1) 小学部6年 校外での防災・復興教育

ア ねらい

三陸鉄道の乗車や被災施設の再建の様子を見聞きする経験を通し、その地域のよさや命の尊さに気付いたり、大切にしようとしたりする。

イ 内容

- (ア) 三陸鉄道の乗車や施設見学等を行い、被災地域の再建の様子を見聞きする。
- (イ) 地域の方々から伝統工芸品の作り方を教わりながら交流を図る。
- (ウ) 宮古市と県内の他地域の文化や特産品を比較し地域の特色について学ぶ。



(2) 中学部 防災学習

ア ねらい

- (ア) 防災に関する学習を通して、自分の身を守る、そなえるという意識をもつ。
- (イ) 災害時を想定した調理活動を行い、身近なものを使ってできることを知る。

イ 内容

- (ア) 防災について考える
 - ・身を守るための行動を考える。
 - ・今からできることを考え、日常生活に結び付ける。

(イ) 非常食体験

- ・非常時を想定した簡単な調理活動（ご飯とカレー）を行い、試食する。
- ・困った時に必要なものを考え話し合う。



(3) 高等部 宮古水産高校との交流

ア ねらい

- (ア) 学校間交流を通し、生徒間でのコミュニケーションを図りながら、他校の学習活動や他者との関わり方を学ぶ。
- (イ) 地域産業の特色を知り、今後の進路選択や生活にいかす方法について考えを深める。

イ 内容

- (ア) 宮古水産高校の生徒に新巻鮭の加工方法や技法を教えもらい交流を図る。
- (イ) 活動後に感謝の気持ちと、ともに宮古に暮らす仲間への思いを礼状に書く。



(4) 保護者連携：引き渡し訓練

ア ねらい

災害発生や天候の悪化等により、早期下校の対応が必要となった際の保護者への引き渡し手段について教職員及び保護者で共通理解を図る。

イ 内容

- (ア) 保護者が引き渡しカードへ必要事項を記入し、引き渡し場所（教室等）へ向かう。
- (イ) 課題点等をあげ、マニュアル及び引き渡しカードの見直しやより効率的で安全な引き渡し方法の確立に生かす。

III 取組の成果と課題

1 取組における成果

- (1) 小学部・中学部・高等部の各学部において、校内外での防災学習や復興教育に関わる学習活動を行い、地域の復興再建の状況、災害時の対応、地域産業を通して今の自分にできることを考えたり、地域の良さを知り、継承していくことの大切さを学んだりすることができた。また、地域や同年代の仲間から教えてもらうことへの感謝や身近な仲間と助け合うことを自発的にできるようになるなど、言葉や行動で相手に伝えることのよさを感じることができた。
- (2) 昨年度の課題としていた保護者や地域との連携では、引き渡し訓練や近隣施設との合同避難訓練においてこれまでの内容にひろがりをもたせることで非常時の対応や事前の備え、共通認識の重要性を再確認することができた。

2 今後の課題

- (1) ともに同じ学校で学ぶ児童生徒として身近なコミュニティをより効果的に活用し、生徒会活動だけでなく、各学部で学習の成果を発表し合ったり、学び合ったりする機会を設定し、人と関わる力や他者を理解しようとする力、行動力、発信力を育てていきたい。
- (2) 復興スクールの取組を重ねるにつれて、本校の特色を生かした復興・防災教育や児童生徒の個に応じた備えなど、本校における復興教育・防災教育が一段と明確に共有できるようになってきた。今後は、児童生徒が防災や安全について自分事として考え、児童生徒からの発信をいかした学習活動の展開や交流活動など、より児童生徒主体の復興教育を進めていきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての交流学习スクール）」実践事例

学校名：釜石市立釜石中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校では、「命を大切にする学習」「社会に参加する学習」「地域を支える学習」の3つを課題とする「生き方学習」を設定し、復興教育や防災学習に力を入れている。

本事業において3学年では、修学旅行先の北海道胆振地域の生徒との交流を通して、これまで積み上げてきた学習を相互発信することにより、自分の住む地域を再評価するとともに、自然災害への備えについて意識をさらに高め、交流から学んだことを生かしながら、これからの生き方を考えることを目標とした。

II 取組の概要

1 「釜中防災学習Ⅲ」

学習過程	内容
課題の設定	ガイダンス「釜中防災学習Ⅲ」
	①釜石で起きる「災害」と備え ②災害への備え ～防災倉庫を開けてみよう～
情報の収集	③ワークショップ 避難所の役割と使い方を考える
	④防災食づくり
	⑤避難所の共同生活とルールを考える
	⑥避難所運営の実際 ロールプレイングで避難所運営を体験しよう
整理分析	レポートづくり
表現	発表
振り返り	学習のまとめ

講師及び協力をいただいた方々

山形大学地域教育文化学部 講師 熊谷誠先生

岩手県地域防災サポーター 塚本 清孝さん

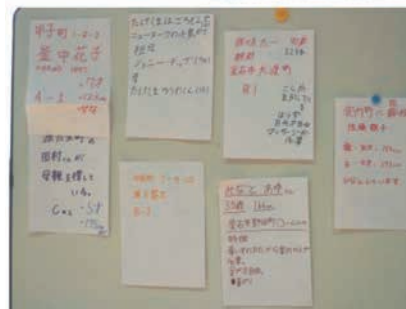
釜石市役所危機管理監 防災危機管理課

土橋さん、池口さん

釜石市社会福祉協議会 小原裕也さん

【生徒の感想から】

・私は、避難所運営を通して運営の難しさを感じた。避難所は、避難場所とは違い、災害の危険から避難し、当面の間安全に避難生活ができる場所だ。そのため避難者のスペース割や、避難者名簿の作成、避難者誘導、更に避難者の要望への対応など、とても慌ただしい。実際にロールプレイングをした際は、置いてきぼりにされている避難者がいたり、逆に1人の避難者に複数の案内人がついたりするなど対応に偏りが見られた。今回は運営前に係の分担をしたが、本当の災害時に係分担をする時間があるとも限らない。避難所運営をする際に一番大事なのは、全員がどの係になっても動けるようにすることだと思った。不足している係に人員をスムーズに補充することができると運営が効率よく進むと思う。今回の避難所運営を通して、今までの防災学習の学びをさらに深めることができた。急には難しいと思うが、今度は私たちが避難所を運営し、地域の皆さんを守ることができるようしていきたい。



2 修学旅行及び壮瞥中学校との交流学習

ア 修学旅行 8月30日(火)～9月1日(木)

行先：北海道胆振地方及び函館

参加者：生徒 104名参加(在籍116名)

引率教員 9名参加

行動日程：1日目 移動, 車窓見学

有珠山ジオパーク交流学習

2日目 アクティビティー体験

登別水族館, 車窓見学

函館夜景

3日目 函館班別研修

移動

イ 交流学習について

Step1: オンライン事前交流

○北海道胆振地域の中学生とオンライン交流をする。

○現地(有珠山) ジオパークの見学地の見どころや知識を学習する。



Step2: 現地交流

○北海道胆振地方の中学生が、有珠山の見学にガイドとして同行する。「地元中学生目線」でのジオパークやまちの魅力を紹介してもらいながら交流する。



Step3: オンライン事後交流学習

○釜石中学校の生徒がこれまでに学んできた防災学習について、壮瞥中学校の生徒に対してオンラインで発表する。

○釜石中学校の生徒が修学旅行の際の見学で感じたことについて発表し、交流する。



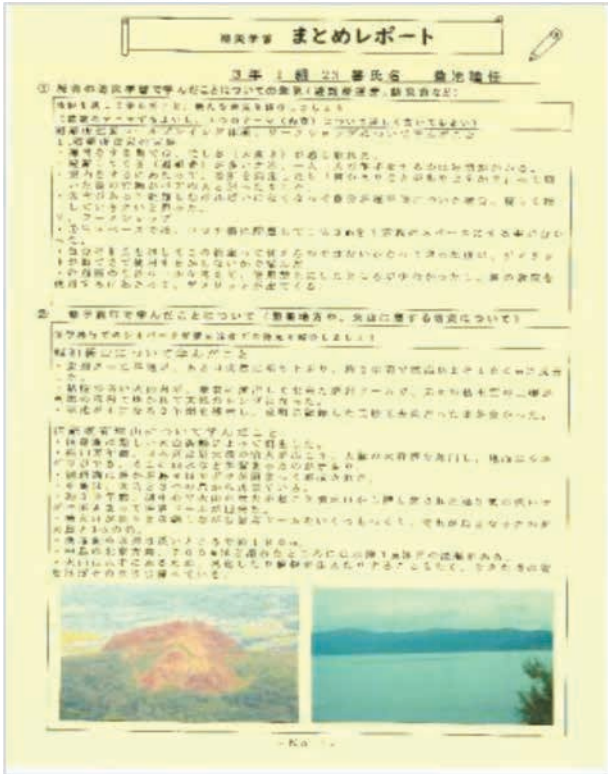
【生徒の感想から】

・修学旅行のジオパーク学習交流会では、壮瞥中学校の人たちがいろいろ準備をしてくれていて、昭和新山のことを教えてもらいました。昭和新山は11万年前に噴火してできた山で、9回も噴火している活火山です。噴火の周期は20年から30年に1回ですが、壮瞥中学校の人たちは日頃の避難訓練のおかげで一人も犠牲者を出していないそうです。なので、釜石に住んでいる私たちも、いつ津波が来ても逃げられるように準備しておいたり、避難場所の確認をしたりしていきたいと思いました。今回の修学旅行でも、どこにいても避難場所などの確認をする必要があると思いました。

3 事後学習

ア まとめレポート

防災学習について学んだことをレポートにまとめ発表した。



イ 壁新聞

本校では、学級ごとに壁新聞に取り組んでおり、防災学習で学んだ内容を記事に取り入れ作成している。



ウ 総合的な学習の時間の発表（文化祭）

これまで学習したことについてパワーポイントにまとめ、文化祭で代表者が発表した。



III 取組の成果と課題

1 成果

「釜中防災学習Ⅲ」として、今年避難所運営に取り組んだが、これまで学習した知識や体験が役に立つという「気づき」があった。防災学習の大切さそしてその知識の活かし方について生徒とともに考えることができた。

また、今回修学旅行で訪れた北海道の生徒と交流学習を行ったことでは、自分の住んでいる地域のみならず、どの地域にもその場所の特性に合わせた形での防災学習があることを知ることができた。これまで学習してきたことを発信することもでき、相互に良い影響があったように思われた。

2 課題

今後も「命を大切にする」「社会に参加する」「地域を支える」防災学習を進めていきたい。学習した知識は有事の際に必ず役に立ち、自分の命を守り地域を支える力となると考える。震災後時間が経過するとともに記憶が風化していかないように引き継ぎ、地域の担い手となる人材を育成したい。

【生徒の感想から】

・今回の防災学習を通して、今まで学んできた『備える』ことと違い、実際に災害が起きた時の自分の『関わり方』を具体的・実用的に学ぶことができ、これからは自分のことだけでなく、地域を支えていかなければならないのだと改めて感じることができた。東日本大震災で大きな被害を受けた沿岸部の釜石だからこそ学ぶことができた貴重な学習だと思う。地震や津波だけでなく、内陸でも起こりうる土砂災害や河川の氾濫など、どんな災害が起こっても、地域に協力し、関わっていきたい。

・私たちは3年間の防災学習でいろいろなことを体験し、災害や防災への知識を得ることができた。いつ被災するかは誰にもわからない。だからこそ私は、災害への備えを常にして置き、自分自身を守ることについて学んだことを生かしていきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての交流学习スクール）」実践事例

学校名：宮古市立田老第一中学校

I 事業の概要

(1) 地域の状況

田老地区は、過去何度も津波による大きな被害に遭い、そのたびに再建を遂げてきた。この苦難の連続を乗り越えてきた歴史を背景に、地域の人々の本校生徒に託す願いが、校歌3番に込められている。

ぼうろうてい
防浪堤を仰ぎ見よ 試練の津波幾たびぞ

乗り越えたてし 我が郷土

父祖の偉業や あと継がん

この歌詞に象徴されているように、本校では防災教育に力を入れるとともに、故郷の発展に貢献する人材育成に強い使命感を持って取り組んできた。

(2) 本校の復興教育の基本的な考え方

本校では「いわての復興教育」の視点を基盤にしながら、田老の歴史や特色を生かし、「学び、伝え、活かす人づくり」を学校経営の基本理念に据えて取り組んできた。その際、取り組みの拠り所としてきたものが、震災直後に語られた当時の生徒の言葉である。

「津波を忘れてはならないし、引きずってもいけない。田老の先人の跡を継ぐのは田老一中の生徒です。」(平成23年度入学式「新入生歓迎のことば」)

II 取組の概要

(1) 「震災からの学びを語り伝える」活動

本校では「田老を語り伝える会」という名称で、地域防災の担い手として災害の教訓を伝えることの意義や行動について考えることができることを目的とした、課題探求・表現する活動を2・3年生が行っている。

2学年では、震災について学ぶ活動を通して自分が感じたり学んだりしたことを、盛岡市内の中学校に語り伝える活動（「田老を語り伝える会」）に取り組んでいる。

松園中学校での発表
R04.9.15



時期	実践内容
4月	・先輩（3年生）の「田老を語り伝える会」から学ぶ。
5月	・自分たちの「田老を語り伝える会」では、何を伝えなければならないのか、そのために、何を学んでいきたいのかをピックアップしていく。 ・伝えたい内容を精査し、保護者アンケートを実施する。
6月	・台本の構成を考える。 ・小中合同で地震・津波を想定した引き渡し訓練を実施する。
7月	・八幡平市立西根第一中学校との交流会で1回目の「田老を語り伝える会」の実施。本校の学びの成果を発表するとともに、西根一中からは火山噴火に係る地域防災について学ぶ。
8月	・発表内容、方法、台本のブラッシュアップ。
9月	・盛岡市立松園中学校との交流会で2回目の「田老を語り伝える会」の実施。1回目から深まった学びの成果を発表するとともに、松園中からは中学生の視点からのSDGs取組等について学ぶ。
10月	・生徒会企画劇での表現活動。 ※ 詳細は後述
11月	・地域を知る一環としてワカメの種苗生育活動。※詳細は後述
12月	・発表内容、方法、台本のブラッシュアップ。
1月	・いわての復興教育児童生徒実践発表会

	で3回目の「田老を語り伝える会」の実施。
2月	・発表内容、方法、台本のブラッシュアップ。
3学年	
4月	・後輩に自分たちの「田老を語り伝える会」を見せる。
10月	・全校生徒、保護者や地域の方に最終的な「田老を語り伝える会」を発表する。

(2) 「田老を知り、田老の未来を描く」活動

田老地区は養殖業が盛んであり、特に「真崎わかめ」は町の特産品として有名である。本校では、地元の漁協の協力を得ながら、地域の産業について理解を深めるために、地域の漁業について学び、養殖体験に取り組んでいる。

令和2年2月には、県内初の成功例となる水槽内のワカメ種苗生育に成功し、その後も継続して行っている。

(3) 生徒会企画劇

本校では以前から、生徒会による創作劇に取り組んできた。津波による被害をテーマに取り組むようになったのは、平成19年度の文化祭からである。以降、当時の村長の偉業や人々が苦難を乗り越え復興を遂げてきた様子を、生徒が調べたり地域の人々から聞き取ったりした内容をもとに脚本化し、演じてきた。

学んできたからこそ表現に豊かさや真実味が出る。表現したことによって、改めて理解が深まる、という理解と表現の往還により、深い学びへとつながっている。

今年度の生徒会企画劇の概要を以下に示す。

タイトル：行先へ繋いでいく想い～	
東日本大震災当時の田老一中生へのインタビューをもとに、当時の様子やその後の生き様や想いなどを再現する。	
第1幕	3・11直後の避難の様子、津波襲来の田老を見ての心境等
第2幕	避難所での生活やボランティアの様子と避難所を利用していない人の心情や様子
第3幕	3・11を通して考えた自身の生き方、田老一中生に向けた思いや願い
終幕	学びの成果と今後の決意、全校合唱



Ⅲ 取組の成果と課題

(1) 成果

- ア 命の重さや防災への意識を高めることの重要性を訴え続けることは、被災地田老の中学生の使命であるという認識を持つようになった。
- イ 自分の故郷をどのような町にしていきたいか、将来自分はどのような大人になり、田老とどのように関わるかについて、真剣に考えるようになった。
- ウ 横軸連携校との交流があったことにより、沿岸地区にない地域の現状を知り、新しい発見をしたり、今までの学習とのつながりを感じたりすることができた。

(2) 課題

- ア 震災を知らない中学生に今後、震災からの学びを深めるためには、当時の状況を調べる際に、今以上に活動のねらいと視点を明確にするなどの工夫が必要である。
- イ これまでの取組で得たものを、今般のコロナ禍をはじめ、様々な災禍を乗り越える力を育てることに活かしていかなければならない。

「いわての復興教育推進事業（いわての交流学习スクール）」実践事例

学校名：野田村立野田小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

野田村は、平成23年3月11日の東日本大震災で甚大な被害があった地域である。最大約18mの巨大津波が沿岸部を襲い、37名の尊い命が失われた。家屋は全壊が311棟など、一部損壊まで含めると515棟が被害を受けた。

震災から11年が過ぎ、村は復興に向かって進んでいる。震災の爪痕を目にすることも、ほとんどなくなった。しかし、人々から震災の記憶が薄れてきているのも事実である。同じ悲劇を繰り返さないためにも、震災の教訓を語り継いでいくことが大切である。

現在の小学校6年生は、平成22年4月から平成23年3月に生まれた子どもたちである。よって、6年生の子どもたちに震災当時の記憶は当然ながらほとんどない。そして、5年生以下は全員が震災後に生まれた子どもたちである。震災のことを知らない子どもたちにどのように復興教育を進めていくのか、大きな課題である。

以上のことから、本事業では6年生を対象に震災や復興の状況を理解し伝える活動をとおして、復興やまちづくりへの参画意識を高めるとともに、ふるさと野田村を愛し、これからの野田村を担う人材を育成することを目指す。

II 取組の概要

野田村の復興の様子を調べ、修学旅行で訪問する秋田県大仙市立協和小学校で発表する。また、修学旅行で野田村の特産物の販売体験を行う。一連の取組をとおして、学んだことや思いを発信する。

1 震災を知る・復興を知る

7月20日（水）、小田祐士野田村長にお越しいただき、6年生に特別授業をしていただいた。テーマは「東日本大震災からの復興」。村長から震災当時の状況や、どのように復興を進めてきたのかを伺い、学習を深めることができた。6年生の子どもたちは、真剣な表情で村長の話に耳を傾けていた。改めて命を守る大切さを実感することができた。

※児童の振り返り

村長さんは、村民のことを一番に考えていると思いました。だからこそ、地震があったら津波が来るということを考え、冷静に行動したいです。自分の命は自分にしか守ることができないので、津波が来そうだったら、素早く避難所に逃げるようにしたいです。

自分の命を守る、遠いところや高いところに逃げるのが大事だということを、村長さんは一番伝えなかったと思いました。野田村の人たちは、助け合ったり交流したりしながら、いろいろなことに挑戦してきたことを秋田県の学校のみなさんに伝えたいと思います。

2 交流学习

9月7日（水）、修学旅行で秋田県大仙市立協和小学校を訪問した。震災当時の状況や野田村の復興の様子等、今まで学んできたことを発表した。また、復興への願いを込めた野田小ソーランを披露した。緊張しながらも、子どもたちは復興への思いを伝えることができた。



3 野田村特産品販売体験

9月8日(木),秋田市民交流プラザにおいて,野田村の特産物の販売体験を行った。見知らぬ土地で,見知らぬ人たちを相手にする販売活動は,子どもたちにとってハードルの高いものであった。最初は周りの雰囲気に戸惑い,おろおろする子どもが多かったが,徐々に慣れてくると,自分たちから積極的に動く子どもが増えてきた。ふるさと野田村のよさをアピールしようと,必死に動き回る子どもたち。終わった後は,満足感に溢れた表情が印象的であった。



※児童の振り返り

修学旅行では,目的意識や相手意識をもちながら行動できました。震災についての発表や販売活動などをやって,いのちの大切さや野田村のよさを伝えることができました。たくさん失敗しましたが,その失敗を生かし,働き方やルール,大人のやさしさを学びました。

4 学んだことや思いを発信する

11月23日(水)の学習発表会で,学んだことや自分たちの思いを発表した。どんなことを伝えたいのか,そのためにどんな発表にするのか,何が必要なのか等子どもたちで話し合い,内容を構成した。

本番では,堂々とした発表が保護者や地域の方から賞賛を得た。学習発表会に向けた取組をとおして,大きな成長が感じられた。

※児童の振り返り

今までの練習の成果を発揮して,一番いい発表ができたと思います。ソーランは,一つ一つの動きに切れを入れることを意識しました。歌は,仲間を信じて歌うことができました。地域・家族・親・支えてくれた人たちに感謝を届けられる発表になりました。



III 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 震災や復興の状況を理解し伝える活動をとおして,自分たちのふるさと野田村を改めて見つめ直し,野田村の更なる発展に向けて自分たちに何ができるか考える機会となった。復興やまちづくりへの参画意識を高めることができた。
- (2) 今回の事業をとおして,本校が今年度の学校経営で位置付けている,身に付けさせたい3つの資質・能力「ことばの力(思考・判断・表現)」「ととのえる力(相手意識)」「かかわる力(社会性)」を育成させることができた。

2 課題

- (1) 東日本大震災だけでなく,これまでも同等の災害が繰り返し起きてきたことから,一人一人が日常生活でどのように防災意識をもちながら学校生活・地域生活に取り組んでいくのか,学校と家庭・地域がどのように連携して取り組んでいくのが課題である。



「いわての復興教育推進事業（いわての交流学习スクール）」実践事例

学校名：岩手県立山田高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

山田町は過去に何度も津波被害に遭遇してきた町である。明治29年（1896年）、昭和8年（1993年）、平成23年（2011年）の津波により、多くの死者、行方不明者を出した。幾度も大きな痛手を負いながらその都度、復興を果たしてきた町である。

人口については、全国的な傾向である少子高齢化に加え、震災の影響が重なり、人口流出・減少が進行している。

このような地域を背景として歴史を刻んできた本校であるが、地域の歩みと同じく生徒数の減少に直面している。また、山田中学校からの入学者が大部分を占め、以前からの知り合いが多い環境であることから、多様な価値観に触れにくい。これらの状況を踏まえ、復興へ貢献すること、コミュニケーション能力の向上等を目標とし、本事業を活用するにいたった。



II 取組の概要

1 雫石高校との交流

(1) 交流の経緯

雫石町開催の講演会への参加、山田町での震災学習、空手道体験等の交流が行われてきた。その交流を発展させ、2018年より本校の「海の運動会」に雫石高校生徒が参加、雫石高校の「雪上運動会」に本校生徒が参加する交流活動が行われるようになった。

(2) 海の運動会

ア 場所

山田町 浦の浜海水浴場

イ 内容

①交流競技

砂上バレーボール、ビーチフットサル、海上カヌー競漕、ビーチフラッグ

②浜辺のクリーン作戦

会場として使用した海水浴場の清掃を両校生徒が協力して行った。

ウ 参加者

①山田高校

生徒71名 教職員13名

②雫石高校

生徒20名 教職員2名

エ 生徒の感想

①コロナウイルスの影響もあり、他校の人と触れ合う体験が少ない中で、このような活動ができて楽しかった。一緒に競技を通して盛り上がるのができ、いい交流会になったと思う。

②山田高校の生徒だけで運動会をするのも面白いが、雫石高校の生徒が入ることでより楽しい活動になった。もっと話す時間がとれればよかったと思うが、とても楽しい時間だった。

(3) 雪上運動会

ア 場所

雫石高校

イ 内容

①山田高校による復興・防災学習「碑の記憶」発表

②交流競技

長縄跳び、ドッジボール、すごろくりレー

③昼食

雫石高校PTAが用意した、豚汁と団子をいただいた。



ウ 参加者

①山田高校

生徒 18名 教職員 2名

②雫石高校

生徒 70名 教職員 13名

エ 生徒の感想

①総合的な探究の時間に行っている活動について、わかりやすく伝えることができたと思う。雫石高校の人にも防災について考えてもらうきっかけを与えられたと思う。

②雪があまりなく、体育館での交流になってしまったのは残念だった。それでもドッジボールなどを行い、一緒に楽しむことができて、よかった。地元の食材を使った豚汁はとてもおいしかった。

2 平舘高校との交流

(1) 交流の経緯

平成23年5月に復興援助のため、平舘高校山岳部の生徒が来校し、町内でボランティア活動を行ったのがきっかけで本校との交流が始まった。翌年か

らは、県高校校長協会横軸連携事業を経て、交流学習スクールへと発展した。交流内容も多岐にわたり、平舘高校家庭クラブの生徒が山田町商店街「いちび」で、八幡平市の特産品販売、子どもやお年寄りとの交流を実施することもあった。令和元年度より、交流の形態を変え、互いの学習成果を共有し、発表技術やコミュニケーション能力を高めるとともに、互いの町の特徴を理解することに重きを置く交流となった。

(2) 交流内容

- ア 生徒会による、震災学習、テーマ別協議会
- イ 道の駅「やまだ」の新飲食メニュー試作

上記の活動を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 雫石高校との交流

(1) 成果

東日本大震災当時、本校1年生は5歳であり、震災のことを明確に記憶している生徒が少なくなっている。そのような中で、町内の石碑を調査し、過去の津波被害の教訓を学ぶことは、町の歴史を知るだけではなく、生徒の防災意識を高めることにつながった。また、学び得たものを他者に発表することを通して、より確かな知識とすることができた。

被災地域においても記憶が薄れてきている中、内陸の雫石高校生徒に、震災の教訓を伝えることには次のような効果があると考えている。県民として被害の大きさ、復興に向けた思いを共有する。さらに、いつ発生するかわからない災害に対する備えを意識することにつながる。交流することで地域の特性を知るだけではなく、震災について伝えていくことができる交流となった。

(2) 課題

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、交流実施の可否、交流内容の変更等、柔軟に対応しなければならない状況が続いている。顔を合わせ交流できることが一番良いことであるが、オンライン対応を行う等、用意した発表内容を伝えられる手段をとれるようにしたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての交流学习スクール）」実践事例

学校名：岩手県立宮古商工高等学校商業校舎

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は1919年（大正8）年に、宮古尋常高等小学校に高等小学校卒業を入学資格とする町立宮古実業補習学校を認可併置し開校した岩手県立宮古商業高等学校と、1973年（昭和48）年に開校した宮古工業高等学校が統合し、令和2年4月に岩手県立宮古商工高等学校として開校した。設置学科は機械システム科、電気システム科、総合ビジネス科、流通ビジネス科、情報ビジネス科の5学科5学級で、それぞれの校舎を利用する県内初の校舎制が採用されている。

宮古市は東日本大震災による甚大な被害を受けながらも、地域防災の拠点となる市役所庁舎「イーストピアみやこ」のオープンや三陸沿岸道路の整備なども進み、震災以前よりも活気と魅力に溢れたまちづくりを目指して現在、歩みを進めている。しかし、令和元年に発生した台風19号によって、全線運行を再開した三陸鉄道が再び一部で運行不能の状況を余儀なくされ、また新たな観光および物流の交流ルートとして期待された「宮古―室蘭フェリー」が休止。新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、インバウンドが期待できた大型外国観光客船の来港も中止となり現状は決して易しいものではない。そのような中で本校は、地域に根ざした専門校として、社会に幅広く活躍する人材の育成を目指し、地域の復興を果たすために産学官と連携した様々な事業を継続して取り組んでいく必要があると考え実践を行った。

II 取組の概要

1 まちづくり学習会

東日本大震災による深刻な被害を受けた宮古市において、観光交流の活性化のため観光資源の集中する「浄土ヶ浜」地区の保全と整備、体験型観光の推進、観光の振興と施設の利活用促進に向けた取り組みが進められている。さらに平成25年に三陸復興国立公園の指定、三陸ジオパークの認定を受けたことから、地域の観光資源を生かした「観光ビジネス」の必要性が高まっている。

一昨年度より、宮古市の都市計画審議会会長でもある岩手県立大学総合政策学部宇佐美誠史准教授と岩手県立大学に通う学生を招き、震災以降の宮古

市の「まちづくり」について学びを深めている。目的は生徒自身のキャリア形成を行う上で地域の学びを深め、宮古地域の将来を創造する人材育成につなげることである。

昨年研究していた「魅力ある宮古市」「若者が活躍できる宮古市」「自慢できる宮古市にする」のテーマに沿った研究発表を行い、参加者から講評と実現可能かどうかの意見をいただいた。研究テーマの中から「公共交通の利用促進 三陸鉄道の利用促進を目指して」について継続研究が実現し、宮古市、三陸鉄道と連携して宮古商工生が提案したダイヤで実証運転を行うことができた。



令和4年5月9日の実証運転PR活動の様子

昨年研究していたテーマが実際に産学官と連携した活動として実現し、まちづくりに参画していく形となり研究の成果が評価していただいた。

ア 令和4年度まちづくり学習会の事業内容

期 日	内容等
7月20日	宮古市都市計画マスタープランについての講義（講義、グループワーク）
9月28日	昨年度の取り組みの説明 研究テーマの設定（グループワーク）

10月28日	旧キャトル跡地、宮古駅前、末広町、うみどり公園（実地調査、フィールドワーク）
11月25日	各班研究（グループワーク）
12月20日	各班研究（グループワーク）（発表準備等）
1月25日	各班研究（発表準備等）
2月1日	課題研究校内発表会 （全校生徒対象、本校第一体育館）

（2）今年度の特徴的な取り組み

ア 旧キャトル跡地の活用

今年度のまちづくり学習会は、流通ビジネス科3年38名で実施した。令和3年12月に宮古駅前のキャトル宮古が閉館し、宮古市の中心市街地活性化の中核施設がなくなったことから、宮古市の中心市街地の活気がなくなってきたことに注目した。

令和4年7月20日、宮古市都市整備部都市計画課まちづくり推進係長中野昇二様を講師に招き、「宮古市都市計画マスタープランについて」講義を頂き、これからの宮古市都市計画についての方針を聞き、旧キャトル跡地の活用について確認を行った。宮古市は商業、医療、福祉、教育、文化などの機能は持たせることや、広場や公園などの空間利用の例示をしているが、具体的なものはこれから議論が必要であると説明を受け、将来の活性化に図る方策を考えることになった。

令和4年9月に宮古市が旧キャトル跡地を取得し、再計画を検討していくことが報道等で明るみになったことで、自分たちが考える跡地利用を研究、提案していくこととした。



宮古市都市計画マスタープラン説明の様子

イ フィールドワーク

令和4年10月28日、旧キャトル跡地、宮古前から宮古市の中心市街地の末広町商店街を通り、旧宮古市役所跡地を活用したうみどり公園まで歩いて見学し、中心市街地の活性化に必要なものや足りないものを高校生の視点で感じ取ることができた。将来の宮古

市についてまちづくりを考え、参画していく姿をみる事ができた。アンケートを宮古市の中心市街地で実施し、年代を問わず多くの方々から旧キャトル跡地を活用した中心市街地の活性化が必要であるという意見が多く挙げられた。

旧キャトル跡地の活用にテーマを絞り込み、単に今まで通りの商業施設の誘致ではなく、持続可能な施設で中心市街地の活性化につながるテーマの設定をした。

3月、生徒が考えた研究内容を宮古市に提言する場を設けたいと考えている。



旧キャトル跡地の見学の様子



街頭アンケートの様子

ウ 令和4年度 各班の研究内容

1班	宮古市が活性化する最先端医療施設の建設
2班	VR体験やAR体験を用いた宮古市観光を誘導する施設
3班	宮古駅前の活性化を新魚菜市場と商業施設の融合
4班	旧キャトル跡地の再生へ商業施設と宮古短大の融合
5班	旧キャトル跡地の活用宮古を味わうテーマパークの創設
6班	将来性のある持続可能な商業施設

2 プログラミング講習会

（1）目的

- ア プログラミング学習で身につけた知識・技術を通じて具現化する。
- イ コンテンツの作成の技術を地域活性化に着眼した課題発見解決に活かす資質の向上を図る。

- (2) 場 所 本校総合実践室
- (3) 講 師 盛岡情報ビジネス&デザイン専門学校
山口 裕 先生
- (4) 使用教材等
 - ア 使用教材 PC一式
 - イ 使用ソフト アップインベンター
 - ウ 使用環境 生徒個人に Google アカウント
取得
- (5) 講義内容 アップインベンターによる
プログラミング学習
- (6) 対象生徒 情報ビジネス科 3年 35名
- (7) 実施内容

実施日	内容
9月26日	プログラミング 講義
10月 3日	
10月17日	
11月 7日	コンテンツ作成
11月28日	
12月12日	

- (8) 学習成果

プログラミング講義では、ブロック構成等について演習問題を通して理解を深め、基本的な知識を身につけることができた。

コンテンツ作成では、デジタルデータ編集・加工を演習用データでプログラミングと連動して表示させる技能を身につけた。



(演習問題に取り組む様子)

講義が完了したところで、山口先生から「宮古を紹介」するアプリの開発課題が与えられた。グループ学習に切り替えて、生徒の目線で宮古の食べ物、観光名所などの検索、画面設計等に取り組んだ。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

まちづくり学習会を踏まえた課題研究の取り組みは、これまで復興教育の一環で取り組んできた小中学校での防災教育を振り返るだけでなく、これからの地域社会が持続的な社会であり続けることに主眼を置き生徒自身の成長につながる発展的な学びとなった。自分たちの意見を反映し、良い街にしたいと地域を大切にしていける人材の育成ができたと感じた。

プログラミング講習会では、アップインベンターの学習で身につけた知識・技術を生かし、「宮古の紹介」アプリ開発に臨んだ。生徒目線で選定した食べ物・観光地などを誰が見ても理解できる内容にするためにプログラミングの基本に従いながら組み立てた。グループ毎に課題を決定し、お互いの意見を出し合いながら協業することにより、1つの作品を完成させた。コミュニケーション能力と知識・技術のインプットアウトプットを通じて学びを深めることができた。

2月に全校に対する取り組み成果の発表を行い、また、北東北の高等学校による「地域のPR作戦」として、開発したアプリを使用しながら「宮古をアピール」することで、校内外に発信し目的以上の成果を上げることができた。

2 課題

まちづくり学習会を継続したことで、地域の活性化について考える機会を作ることができたが、地域の産業や観光資源について今後も理解を深める必要があると感じた。また、復興教育スクール（交流学習スクール）の事業評価を行う中でいわての復興教育プログラムにおける3つの教育的価値と具体的21項目を達成できたか測定できる仕組みについても研究していきたい。

また、プログラミング講習会を実施したことで、既習のプログラミング学習で身につけた知識・技術が活かされ「宮古を紹介」するアプリ開発ができた。しかし地域の食べ物・観光地等を詳しく知らないのも、問題作り等に苦戦していることを感じた。今後は外部機関と連携しながら「おもてなし検定」を活用して、地域への理解を深めることができるような学習を取り入れていきたい。

「いわての復興教育推進事業（いわての交流学习スクール）」実践事例

学校名：岩手県立宮古水産高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本県の東端に立地する本校と西端に立地する西和賀高等学校とは、生産物や観光資源はもとより、自然災害に対する意識や備えも異なる。当事業は、このような環境にある両校の生徒が互いの地域を訪問し交流することを通して、生徒に復興の現状を理解させるとともに、地域の復興や町づくりへ主体的に参画する意識を高揚させ、学校や地域のリーダーとしての自覚と実践力を涵養することをねらいとする。

II 取組の概要

1 西和賀高等学校が宮古水産高等学校を訪問

(1) 参加生徒

- ア 宮古水産高等学校執行部（1・2年生）9名
- イ 西和賀高等学校執行部（1・2年生）9名

(2) 活動の概要

- ア 宮古水産高校での食品加工体験
宮古水産高校職員を講師として、海産物に触れたり、食品の加工（缶詰の製造）を体験した。



イ 田老町「学ぶ防災」学習体験

東日本大震災で甚大な被害が出た田老地区に行き、田老地区の現状や当時の状況を防潮堤に上って案内を受けた。

ウ 浄土ヶ浜見学

宮古の観光地である浄土ヶ浜を見学し、各校それぞれの自然環境の違いを体験した。



2 宮古水産高等学校が西和賀高等学校を訪問

(1) 参加生徒

- ア 宮古水産高等学校執行部（1・2年生）6名
- イ 西和賀高等学校執行部（1・2年生）7名

(2) 活動の概要

- ア 両生徒会による意見交換会
それぞれの学校からの質問事項に答えたり、共通の課題をどのように実行していくかを話し合ったりする等の交流を行った。



イ 湯田牛乳公社工場見学

地域に根差して成果を上げている湯田牛乳公社を見学。説明していただきながら実際の仕事現場を見学させていただいた。



ウ わらび餅製作体験

「雪の団子屋 団平」の社長から講演していただき、実際に作っているところを見学、試食し、作る工程の一部を体験させていただいた。



両校での活動内容について互いに質問することにより、学校生活を良好にするための検討課題を持ち帰ることができた。また、「ジェンダー」についてどう対応していくかという共通の課題について話し合い、制服をどのようにするか、いじめに発展しないようにする対処はどうすべきか等、様々な案が出て充実した会になった。

イ 湯田牛乳公社見学

地域から全国へ発信している湯田牛乳やヨーグルトの生産までの道のりや技術革新の仕方を説明していただき、並々ならぬ苦労と、あきらめない精神力等を学ぶことができた。また、作業現場を実際に見学し、仕事への取り組み方や設備のすばらしさを知ることができた。

ウ わらび餅作成体験

地域の特産品である「西わらび」を使用して作るわらび餅を試食し、生徒たちはとても感動していた。地域の特産品を使うことにより、地元をアピールし、貢献していくという姿勢を知ることができた。

エ 豪雪を体感

西和賀高校のグラウンドに積もった雪の近くに行き、圧倒的な雪の多さと雪景色を目の当たりにした。宮古地区ではほとんど降らない雪に囲まれることで、自然環境の違いを実感し、雪崩や落雪などの自然災害がどれほど大変なことであるかを知ることができた。



III 取組の成果と課題

1 取組の成果

(1) 西和賀高等学校が宮古水産高等学校を訪問

ア 食品加工体験

生徒たちが実際に缶詰を作成した。宮古水産高校が西和賀高校を訪れる際にもっていき、西和賀高校の生徒たちへ配付した。

イ 田老町「学ぶ防災」学習体験

被災物を目の当たりにして津波の破壊力や到達距離を実感した。また、命を守るための行動について改めて自分事として考えることができた。

ウ 浄土ヶ浜見学

地域ならではの物産や、その販売に関する工夫を学ぶとともに、観光資源の魅力や、その発信に関する知見を深めた。

(2) 宮古水産高等学校が西和賀高等学校を訪問

ア 両生徒会による意見交換会

2 課題

生徒の視野を広げ、地域に貢献する態度を養うためにも、今回のような交流学習を今後も継続して行っていく必要がある。また、3つの教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」を意識した行動を継続できるよう、4つめの教育的価値として学校独自の「かたりつぐ」を加え、東日本大震災の教訓を風化させない努力をしていく必要がある。

「いわての復興教育推進事業（いわての交流学习スクール）」実践事例

学校名：岩手県立久慈東高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は全校生徒 464 名の総合学科高校であり、北は洋野町、南は岩泉町まで、管内広域から生徒が通学している。久慈市は東日本大震災、台風 10 号、台風 19 号など、常に災害を想定して学校生活を送ることを意識しなければならない地域である。これまで7年間の復興教育スクール、3年間の交流学习スクールにおいては地域に根ざした活動を行うとともに、「自分たちの学びを復興に」をスローガンに、防災・復興に取り組んできた。今年度は新たに「北いわて介護福祉産学勉強会」を立ち上げ、福祉や地域に関心がある高校生、福祉施設・機関関係者、地域住民が自由にテーマを設定し、学び合う場を設けた。その中で意見交換や交流をしながら、気軽に連携できる環境を築き、「何かあった時に協力できる」「課題を共に解決できる」地域づくりを目指したいと考え、交流学习スクールを展開した。

II 取組の概要

1 実践校

○岩手県立久慈東高等学校

介護福祉系列 2年次 16名 3年次 12名

○岩手県立一戸高等学校

介護・福祉系列 2年次 6名 3年次 15名

2 実践日時・場所

○令和4年6月16日(木)

第1回交流会 於：一戸町コミュニティセンター

○令和4年7月21日(木)

第2回交流会

※新型コロナウイルス感染流行のため延期

○令和4年11月28日(月)

第3回交流会 於：久慈東高等学校

○令和4年12月15日(木)

第4回交流会 於：一戸高等学校

○令和5年2月2日(木)

第2回交流会(延期分) 於：もぐらんぴあ、久慈東高等学校

3 取組の概要

(1) 第1回交流会

第1回の交流会は一戸町コミュニティセンターにおいて「第1回北いわて介護福祉産学勉強会」を開催し、高校生、教職員、一戸町職員、施設関係者等合わせて77名が参加した。一戸高校の介護・福祉系列の生徒が現場実習を行っている施設の職員の方が講師を務

めてくださり、実際に介護現場で利用されている、眠りながらバイタルを測定するための機器である「眠りスキャン」の導入例について紹介していただいた。参加者も実際に機器に触れながら、メーカー担当者と質疑したり意見を交わしたりするなど、積極的に交流を図ることができた。生徒は「現場で働く方から直接お話を伺う機会は貴重で、こういう機器も使いながら利用者の方の生活を良くしようと努力していることがわかった」「将来は介護福祉士になりたいと考えているため、施設の方と知り合えたこと、声をかけてもらったことが嬉しかった」という意見があり、福祉関係者の方々からは「自主勉強会を通して、生徒と事業者の両者の意見や考えが聞ける貴重な機会となった。生徒からの質問は率直であり、気づきを大切にしたい良い質問だった。大人も積極的に発言していきたい」などの感想が出され、互いを知り合う機会、意見を交換しながら学び合う機会となった。



(2) 第2回交流会

第2回交流会は新型コロナウイルスの感染拡大を受け、2月に延期しての実施となった。自分たちの地域への理解を深めることを目的に、久慈市の「まちなか水族館もぐらんぴあ」を訪れた。もぐらんぴあは東日本大震災の伝承施設として位置づけられており、震災当日のお話を伺ったり、写真や震災を生き延びた生き物たちを見ることで、改めて震災の恐ろしさを実感するとともに、「一人でも避難をすることが大切」「命を大切にしよう」というメッセージを受け取ったようであった。また、交流会では「クロスロード久慈東高校編」を実施し、災害対応のジレンマについて「自分だったら？」という問いに真剣に向き合った。災害を自分の身に引き寄せて考えると同時に、他者のさまざま

まな考えを知り、互いの理解を深めることにつながった。生徒の感想には「災害が起こっても助け合える地域をつくるために、普段から関係を築くことが大切だと思った」「誰もが生きがいをもち暮らせる地域を福祉の力でつくることができれば、もっと他人にも優しくできると思った」「一戸高校との交流から学べたことが多くあったように、地域間交流を増やし、久慈市の良さを広めていきたいと思った」という感想があげられた。



勉強会の様子

(4) 第4回交流会

一戸高校において、本校、一戸高校、一関第二高校の3年生が同一事例を用い、立案した介護計画を発表し合う介護過程発表会を実施した。各校の2年生も参加し、県内で実務者研修を実施している3校合同での実施は2年目を迎えた。一関第二高校は今年もリモートでの参加であったが、各校が同一の介護事例（今年度は離島出身者の在宅復帰について）をアセスメントし、介護計画を立案したものを発表し合った。現場の実習指導者の方3名を講師として招き、トークセッションの中で意見交換を行ったが、互いの発表を聞き、新たな気付きを得ることで、よりよい介護計画が立てられることを学んだ。多面的な視点から物事を捉えたり、日常生活の中で信頼関係を築いたりすることで災害時にも生きた支援につながってくることを改めて理解した様子であった。



発表会の様子

(3) 第3回交流会

第3回交流は久慈東高校において「第2回北いわて介護福祉産学勉強会」を開催し、高校生、福祉関係者、地域住民等合わせて60名の参加があった。認知症VR体験を高校生と合同で行った他、洋野町大野で展開している「福祉でまちづくり」について講義を受けた。高校生の感想の中には「私たちがどのような地域にしたいか、自分自身も考え、地域の方々にも考えてもらえるよう、どんどん動いていきたいと思った」「いろいろな人とつながることが大切だとわかった」という意見があった。また、他の参加者からは「自分たちの地域課題を見つけることから始めることが大切だとわかった」「高校生と一緒に福祉の様々な課題を考えていくことが面白い取り組みと感じた。社会事業としての産学連携の取り組みが大変勉強になった、管内の関係機関・施設に情報発信していきたい」という感想があった。社会福祉法人と地域が協働しながら「福祉でまちづくり」という取り組みを行うことに、参加者の多くが興味関心を抱いたことから、今後の活動に広がり期待できる手応えを実感した。



もぐらんぴあ見学の様子

クロスロード実施の様子



認知症VR体験の様子

Ⅲ 取組の成果と課題

今年度最も大きな成果は福祉を学ぶ自分たちの手で「北いわて介護福祉産学勉強会」を立ち上げ、2回の勉強会を実施したことである。「自分たちの学びを復興に」をスローガンにこれまで取り組んできたが、それがようやく少しずつ形となって、地域の福祉を動かし始めた実感している。交流学习がなければ生まれなかった取り組みであり、地域を巻き込み、つながりを生み出す新たなきっかけとなると確信している。次年度も自分たちができることを積み重ね、福祉の力で復興を後押しできるよう、意味のある活動を続けたい。

「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：大船渡市立赤崎小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校学区は、東日本大震災津波により甚大な被害を受けた地域であり、旧赤崎小学校は、校舎の2階天井付近まで浸水し全壊した。震災後から旧蛸ノ浦小学校の校舎を間借りして学校を再開し、平成28年度まで2校による合同学習を行った。平成29年に旧赤崎小・旧蛸ノ浦小が統合し、新生赤崎小学校として新校舎での学校生活がスタートした。

6年生を除く多くの児童が震災以後に生まれ、地域の復興の様子を見ながら育ってきているものの、震災当時の状況や復興に携わってきた人々の思いに触れたり、地域のよさを実際に見たりする機会が少ない。

そこで、震災学習列車を活用し復興の様子を実際に見る活動を通して、東日本大震災について学習しながら復興教育を充実させるために本事業に取り組んだ。

II 取組の概要

1 ねらい

- (1) 震災学習列車を活用して被災地を見学し、復興の様子について理解を深める。
- (2) 市内巡りや海の様子、市の産業についての見学や調べ学習を通して、地域のよさについて理解を深める。
- (3) 震災関連施設の見学やフィールドワーク、地域の人の講話を通して、自然災害への備えや防災の大切さについて理解を深める。

2 具体的な取組

(1) 3年生～地域のよさを知る学習～

ア 市内巡り

ふれあいランドから基石海岸まで大船渡湾の周囲をバスで見学した。社会科学習を進める上で、地元を知るよい機会となった。また、市花である椿が多いことや、今も大切に育てられていること、守られていることに関心をもつことができた。



イ 潮干狩り体験

事前学習では、副読本改訂版「海のいきものをかんさつしよう」を活用し、海辺の生き物の観察から海の様子を詳しく知ることができることについて理解を深めた。また、潮干狩り体験では大船渡水産振興センターの方や漁協の方のお話を聞きながら、アサリの生息調査や自由観察を行い、赤崎の海の豊かさに触れることができた。



ウ カキ養殖場見学

船に乗り、対岸にある魚市場やカキを養殖している筏を見学した。養殖場では大きく育ったカキを目の前で見ることができた。また、貝の中で育ったカキを直に触れる体験もした。この見学で大船渡の海の豊かさについての理解を深めることができた。



エ 震災学習列車による被災地見学

<事前学習>

副読本改訂版「二度と悲しみをくりかえさないために」を活用し、震災の日の状況、津波に流された消防車のつぶれた様子から、津波の恐ろしさについて学習した。また、三陸鉄道や沿線の地域の被害状況について見学することを確認した。

<震災学習列車での講話や見学>

車中では三陸ひとつなぎ自然学校の伊藤さんから震災発災時の話を伺った。三陸鉄道がわずか5日で

一部区間の復旧ができたことに児童は驚いていた。3回の津波に耐えた越喜来地区にあるポプラの木（通称「ド根性ポプラ」）の話や釜石では下校した小学生が一人も逃げ遅れなかった話など、具体的なエピソードを通して、災害への備えの大切さを教えていただいた。

<事後学習>

副読本改訂版「『あの日』をずっとつたえるため」を活用し、東日本大震災の被害を伝え続けていくことの大切さについて学習した。震災学習列車での学習と合わせ、三陸鉄道の人たちが伝えたいことは何かを考えた。

オ 市の産業施設（バンザイファクトリー）の見学

代表取締役の高橋さんより、震災に負けない三陸椿の強さ、椿茶誕生の話、椿茶のおいしさの秘密について教えていただいた。また、椿茶を作る工程（葉を拭く、枝を切る、袋詰め）を実際に体験し、ほんのりと柔らかい甘さの椿茶を作り出す高橋さん達の椿茶にかける思いに気づくことができた。



カ ポスター作りによる事後学習

学習のまとめとして、震災から復興した大船渡のまちについて、ポスターにまとめた。

キ 児童のまとめ・感想

- ・魚や貝などは、干潟にいっぱいいることが分かりました。
- ・5年もかけてカキを育てているのがすごいと思った。もっとカキが育つように、もっと海をきれいにしたいです。
- ・海を見てきれいだなと思ったけれど、11年前はおそろしいものに代わったんだと思うと、すごくこわくなりました。
- ・これから、椿を見たら自然を大切に、もっと椿を増やせるようにしたいと思った。もっと椿のことを調べて、大船渡市の花でもある椿を増やしたい、椿でできることをもっと増やしたいと思った。

(2) 4年生～総合単元「守れ！わたしたちの町」の取組～

ア 東日本大震災津波伝承館・高田松原津波復興祈念公園の見学

社会科の自然災害の単元と関連づけ、副読本改訂版「災害から大切なものを守るためには」を活用し、東日本大震災の様子を調べた。副読本に掲載されている気仙大橋の橋桁や消防車の写真を見て、津波の威力の凄さに気づくことができた。

実際の見学を通して、東日本大震災の様子や被害の様子について学んだ。副読本に掲載されている写真と実物を比べることで、事前学習での気づき以上に津波の威力に驚いていた。



震災遺構のタピック45を見学し、震災の記憶や教訓を後世に残すために震災遺構が保存されていることを知った。また、実際に防潮堤に登ってみることで津波の高さを実感することができた。

イ 震災学習列車による被災地見学

震災学習列車に乗車するにあたり、副読本改訂版「沿岸部のまちを、人をむすぶ」を活用し、三陸鉄道の取組について理解を深めた。乗車中は、震災当時、蓬莱館で東日本大震災を経験した方の話を聞くことで、震災当時の様子を詳しく知ることができた。また、車窓からの見学を通し、きれいな海と地域の復興の様子を比べて、津波の怖さを改めて感じる児童もいた。

釜石鶴住居復興スタジアムでは、震災による津波で流された小中学校の跡地にスタジアムが建てられたことを知り、ラグビー体験を通して、このスタジアム建設に込めた地域の人の願いに触れることができた。



ウ 大船渡市防災観光交流センターの見学

同センターで防災学習に取り組んでいるNPO法人おはなしころりんの方々から、震災当時の大船渡の被害や防災の意味や心構え等の話を聞いた。また、水の代わりにジュースでご飯を炊いて試食したり、安眠マットで睡眠体験をしたり、防災すごろくのゲームを通して災害発生時の行動を体験したりなど、防災の大切さについて楽しみながら学ぶことができた。



エ 東日本大震災当時の話を聞く

大船渡市役所防災管理室の方から大船渡市全体や赤崎小学校の震災当時の様子を教えていただいたり、写真を見たりした。

学校の敷地内にある備蓄倉庫の中を見学させていただき、備蓄されている中身から防災への備えについて考えることができた。



オ 個人新聞作りによる事後学習

単元の学習を振り返り、学んだことについて個人新聞にまとめた。



カ 児童のまとめ・感想

- ・大きな地震が来たときは、揺れが収まったらすぐに山や高台に逃げて、自分の命を守りたいです。「津波でんでんこ」の意味が分かりました。
- ・最初は分からなかった津波3原則「想定にとらわれるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」のことが分かりました。
- ・この学習をする前は、どのように逃げればいいのか分からなかったけれど、学習したとおりに逃げればいいのだと分かりました。
- ・私が、震災学習を通して学んだことは、津波の威力や津波がいつ来てもいいように道具と心の準備をすることが大切だということです。これからも、災害の備えをしっかりと生活していきたいです。

(3) 6年生～総合単元「災害からみんなの命を守ろう」の取組

ア 「Pepper」を活用した防災教室

ソフトバンクの人型ロボット「Pepper」とのやりとりを通して、津波のメカニズムについて理解し、津波から命を守るための行動を考えた。



イ 副読本を活用した事前学習

災害とたたかう三陸鉄道の取組について、初版「三陸鉄道のたたかい」、改訂版「沿岸のまちを、人をむすぶ」をもとに調べた。さらに、NHKアーカイブスを視聴し、三陸鉄道復旧への取組について理解を深めた。

ウ 震災学習列車による被災地見学

三陸鉄道に乗車し、震災当時の様子(写真)と現在の様子を比べ、復興の様子について気づいたことをまとめた。



エ 蛸ノ浦地区・赤崎地区の防災マップ作り

蛸ノ浦地区や赤崎地区(後ノ入川沿い、山口・宿地区)のフィールドワークを行い、浸水区域の現在の様子や危険箇所、避難経路を調査した。蛸ノ浦地区では川沿いの浸水状況を知り、地域の危険箇所について確認することができた。赤崎地区では、津波や大雨による危険区域を中心に確認することができた。

フィールドワークでの調査結果を元に、学校周辺の災害危険区域を記した防災マップを作成した。



オ 東日本大震災時の様子を知る

市内で印刷・撮影業を営む村田さんから、震災当時の大船渡のまちの様子について話を伺った。自宅近くの高台から村田さんが撮影した津波の映像や写真に写る大船渡のまちを見て、津波による被害の大きさや災害から自分の命を守ることの大切さを改めて学ぶことができた。震災前後の映像を比較し、大船渡の復興の様子についても確認することができた。



カ 防災新聞づくりによる事後学習

学習した内容を防災新聞にまとめた。

キ 児童のまとめ「防災新聞」から

・防災マップを作ってみて思ったことは蛸ノ浦にも危険な所がたくさんあることが分かりました。理由は今まで津波や強い地震が来たら高台に逃げるとしか思っていなかったけど、実際に調べてみたら、清水川から水があふれる危険や防潮堤を越えて津波が来る危険などもありました。この危険

以外にもたくさんいろいろな危険が想定できるし、危険なことだけじゃなく、本当に起きたら蛸ノ浦保育園か蛸ノ浦小学校かふれあいランドに逃げるということを頭に入れて意識しながら生活していきたいです。

・たくさんの学習を通して、津波のこわさを学びました。たぶん私の人生の中であと1回は津波が来ると思うし、津波などの自然災害をなくすことはできません。でも、「災害から命を守るために」行動することは私にはできます。防災バックを準備したり、家族と話し合いをしたり、避難訓練に参加したりとまだまだたくさんあります。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 自分達が住んでいる赤崎・大船渡には、様々な生き物が生息できる、また、大きくおいしいカキが育つことができる豊かな海があることを実感することができた。
- (2) 市内巡りで見た椿が、自分達の住んでいる赤崎だけにあるのではなく、大船渡市全体にたくさん自生し、また、たくさん植えられたりしていることが分かった。そして、その椿が、東日本大震災にも負けない強さをもっていること、尊いものであること、そして、自分達も守っていきたいという思いをもつことができた。
- (3) 震災学習列車の乗車の前後に副読本を活用して学習を行ったことにより、津波の威力の大きさがどれほどであるかが分かった。そのことにより、三陸鉄道乗車で聞いたり見たりした復興の様子がどれだけすごいことか分かった。
- (4) 震災学習列車に乗ることで被災地の復興の様子を間近で見たり、学区内の被災箇所を实地調査したりすることにより、津波の被害の大きさや怖さを感じる事ができた。
- (5) 三陸鉄道の学習を通して、地域に貢献する企業や人々の努力に触れ、より地域を誇りに思う気持ちをもつことができた。

2 課題

- (1) 復興教育の年間指導計画を整備し、各学年のねらいに沿って、復興副読本と教科の学習や見学を関連づけながら計画的に実践する必要がある。
- (2) コロナ禍の影響で計画通りに実施できないこともあるので、コロナの感染状況を見ながら、見通しをもった取組ができるようにしていく。

「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：大船渡市立吉浜小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

吉浜地区は、これまでの津波による被害の教訓から民家の多くは高台に建てられており、甚大な人的被害は少なかった。しかし、漁業を営んでいる家庭は多く、漁港や漁船などは多くの被害を受けた。

現在、本校に在籍している児童の多くは東日本大震災以後に生まれており、復興の様子を聞いたり教わったりしながら育ってきているものの、震災当時の状況の人々の思いを知る機会が少なくなっている。

そこで、今回の震災学習列車に乗車し、東日本大震災からの復興の様子を直接学習するとともに、自然災害への心構えや備え、防災の大切さについて学ぶことを目的として本事業に取り組んできた。

II 取組の概要

1 実施学年

第3・4学年および第5・6学年

2 具体的な取り組み

(1) 第3・4学年

ア 実施日時

令和4年9月13日（火）8：45～14：45

イ 見学場所

・おおふなポート

大船渡市大船渡町茶屋前7-6

TEL0192-21-6001

ウ 活動内容

①車中より被災地見学（吉浜駅から盛駅まで）

②防災学習ワークショップ

- ・「水が無くてもご飯を炊こう」と試食
- ・「避難し備え工夫する」
- ・防災ゲーム「すごろく」「絵合わせ」
- ・安眠マット体験

(2) 第5・6学年

ア 実施日時

令和4年11月8日（火）8：45～14：45

イ 見学場所

①いのちをつなぐ未来館

②水門・防潮堤

③釜石鵜住居復興スタジアム

ウ 活動内容

①車中より被災地見学（吉浜駅から釜石駅まで）

②いのちをつなぐ未来館見学

・釜石市内における津波の歴史、東日本大震災の被害と「震災後7日間の動き」、自衛隊や消防を中心とした救助活動、ボランティアの活躍、全国各地からの救援物資の到着の様子

・当時の「鵜住居地区防災センター」とその被害の様子

・当時の市内の小中学生の防災教育と避難の実際（釜石東中学校・鵜住居小学校）

③水門・防潮堤

沿岸広域振興局土木部による水門や防潮堤の整備、地域の防災力向上、津波防災に係る啓発など

④釜石鵜住居復興スタジアム

鵜住居の復興の象徴としての存在、震災や建設のエピソード、ロッカールーム等の見学

III 取組の成果と課題

1 第3・4学年

(1) 成果

- ・写真やパネルを見たり建物の屋上にあがって現在の様子と見比べたりすることで、旧大船渡町内の様子や復興の現状を知ることができた。
- ・避難所で使われるマットレスに実際に横になるなど、避難所での生活がどのようなものかを疑似体験しながら知ることができた。
- ・ビニル袋に米とジュースを入れたものでご飯を炊く経験をした。緊急時の食料対応を学びながら当たり前で食事ができるありがたさを感じた。

(2) 課題

- ・列車内での説明の際に、車両の音やマイクの音量不足などで、説明が聞き取りにくかった。





2 第5・6学年

(1) 成果

- ・他市町村（釜石と大槌）の防災の取り組みと復興の現状を知ることができた。特に新しい水門や防潮堤、復興スタジアム、展示館では、それぞれの場所で詳しい説明がなされ、震災当時の様子から現在までの具体的なあゆみについて学ぶことができた。
- ・震災発生時に列車は停車し、乗客を誘導、避難させた。当時どのような様子だったのか、どのように避難したのかなど、列車内で説明を聞くことで具体的に知ることができた。
- ・帰校後、5・6年生が当日の写真をスライドに

して集会で発表した。低学年にもわかりやすい内容で、復興の様子を全校に知らせることができた。

(2) 課題

- ・防潮堤の説明が児童にとってやや難しい内容だった。内容の簡略化を検討するとともに、事前学習を充実させていきたい。



「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：釜石市立釜石中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

東日本大震災では、震度6弱の地震により、遡上高9.0mの津波が学区の海岸側の地区を襲った。生徒と教職員に人的被害はなかったが、家屋の被害、親の失職など今までの生活を維持することができなくなった家庭が約2割、被災認定家庭が約3割あった。校舎は、避難所になるとともに、釜石東中学校と共同で利用された。様々な制約があったが、「正常な学校運営」を目指して努力がなされてきた。しかし、校内には、甚大な被害を受けた海岸地区と、そうでない西側の地区との間で、生徒や保護者に被災に対する意識の差があり、配慮が難しかったという記録が残っている。その後の本校の防災学習の中でも、その意識の差は度々指摘されてきた。

ところが、令和2年、日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震による津波想定で、新たに本校も浸水地区に入ることが発表された。西側にも津波に備えなければならない地域が広がった。また、2019年には、台風19号の豪雨によって、土砂災害、浸水といった災害に襲われており、近年は、学区全体が極めて災害リスクの高い地域になりつつある。

この現状を踏まえて、昨年度から本校では、「命を大切にする学習」、「社会に参加する学習」、「地域を支える学習」の3つを課題とする「生き方学習」を設定している。学びのゴールの姿としては、「地域や社会に主体的に参画し、将来を担う人材となろうとすること」を掲げ、復興教育に力を入れている。

■学年ガイダンス資料より

2学年の総合的な学習について
テーマ「岩手の今を見つめる」
～未来のために私たちができること～

防災学習

①震災学習（震災列車） ②防災まち歩き

①震災列車
東日本大震災からの復興を学ぶ（人々の生き方）

②防災まち歩き
自分たちの暮らしている地域を知る（危険箇所・観光スポット）→観光大使

キャリア学習

①宿泊研修 ②釜石コンパス

①宿泊研修（企業訪問）
岩手の産業を知る

②釜石コンパス（職業講話）
釜石で暮らす人々の仕事を知る

1, 学習内容

- 震災学習を通して、岩手県沿岸の震災伝承施設等の見学や人々との出会いを通して、郷土の復興を学び、復興を支える社会の一員としての生き方を考える。
- 防災まち歩きを通して、郷土の魅力を再確認すると共に、いざという時に自分の身は自分で守ること、そして、地域のために自分たちができることを考え、行動できるような態度を身につける。
- 感同宿泊研修（企業訪問・見学）を通して、職業を学ぶ。働く人々から学ぶ活動を通して、自分の生き方を考える。
- 釜石コンパス（職業講話）を通して、職業を学び、将来の職業選択の幅を広げる。

2, 探求課題

- ①1年生の防災学習を土台とし、震災からの復興の歩みや自分の地域の地形などの調査活動を通して、郷土岩手についての理解、および、自分の地域への理解を深め、自分たちが未来のためにできることを考える。
- ②企業訪問、教育施設訪問など体験的な活動を通して、岩手の産業や職業、人々の生き方から自分の未来を考える。

3, 学習を通して身につけたい力

知識・技能

- ①岩手沿岸の復興の歩みについて探求的な学習を通して理解をする。
- ②感同市内の企業見学等を通して、産業や職業を理解し、収集した情報を活用することができる。

思考・判断・表現力

- ①岩手沿岸の復興の歩みや人々の生き方から、課題を設定する。
- ②震災からの復興の歩みや自分の地域の地形などについて情報を収集したり、必要な情報を選択したりする。
- ③自分で収集した情報や体験活動を通して分かったことを整理し、まとめる。
- ④学んだことが伝わるように表現の仕方を工夫し、伝えることができる。
- ⑤学習をふり返り、今後の学習や生活に生かそうとする。

主体的な学習態度

- ①進んで課題解決に取り組もうとする態度を身につける。
- ②周りの人とのコミュニケーションを大事にしながら、相手の気持ちを考慮することができる。
- ③郷土に誇りを持ち、積極的に郷土のために貢献しようとする意識を高める。

本事業は、2学年を対象とし、まず、震災学習列車の活用をしながら岩手県沿岸の復興の歩みについて知り、その上で「未来のために私たちができること」を考えていく。その過程で、復興の歩みや人々の生き方を通して学んだことを「整理・分析し、まとめ、表現する」という学習スタイルを習得しながら、「復興の歩を振り返り、復興を支えた人々から学び、郷土の復興や発展に貢献しようとする態度」を養うことを目標とした。

II 取組の概要

1 事前学習（震災学習列車に乗車前）

(1) 身近な災害時の危険について考える

1年次での防災学習（大雨・土砂災害・My 防災Book 作成）を踏まえ、地震で起きる被害や備えについて学習した。



【生徒の振り返り】

・家の中は、物や家具が多いので、少し危険だなと思いました。地震が来て、大きかったらすぐに逃げられないから、落ち着いて身を守ってから行動することが、命を守ることにつながるんだなって思いました。でも、普段から気を付けて備えたいです。

(2) 個人テーマを深めるために

6月14日学級毎 (PC 情報収集)

- ・個人テーマについて下調べ
- ・自分の行く地区の震災の様子や復興の状況についての情報の収集

2 震災学習列車の活用

(1) 各コースの内容

ア 陸前高田コース

- ・奇跡の一本松・旧気仙中学校・東日本大震災津波伝承館・盛駅<震災学習列車>釜石駅



イ 大船渡コース

- ・釜石駅<震災学習列車>盛駅
- ・キャッセン大船渡 (音声 AR 技術を活用した防災×観光アドベンチャーゲーム)
- ・大船渡津波伝承館 ・吉浜 (津波石)



ウ 田老コース

- ・釜石鶴住居復興スタジアム見学
- ・鶴住居駅<震災学習列車>宮古駅
- ・田老学ぶ防災ガイド (防潮堤での見学と説明・津波ビデオ上映)



エ 大槌コース

- ・釜石鶴住居復興スタジアム見学
- ・鶴住居駅<震災学習列車>宮古駅
- ・おらが大槌夢広場 (大槌フィールドワーク)
- ・大槌町文化センター



(2) 生徒感想

<陸前高田コース>

・旧気仙中学校では、当時の状況が分かりました。2時46分で止まっている時計や落ちてボロボロになっているぬいぐるみ、そのままになった黒板などを見て、とても胸が苦しくなるような気持ちでした。奇跡の一本松では、なぜ残ったのかななどの話を聞きました。市民の希望ということが分かりました。伝承館では、避難の大切さが分かりました。つぶれている消防車が特に心に残りました。ムービーも見れてよかったです。震災学習列車では、津波が来た時の当時の写真と現在の景色を比べてみる事ができました。話も聞いて、話している方の思いやこれから自分たちがどう生きていけばいいかということを考えることができました。今日学んだことをみんなに分かりやすく伝えられるように新聞にまとめていきたいです。

<大船渡コース>

・印象に残っていることは、キャッセンでのアドベンチャーゲームです。そのアドベンチャーゲームでは、スマホでキャッセン大船渡のエリア内にQRコードがあり、それを読み取って、生きる知恵と分かれ道というのが出てきて、それを指定の数集めると、避難場所への地図が出るというゲームで、その中でその状況になった時にどうすればよいか、震災を体験した人たちの話などが、詳しく聞けて、勉強になりました。新たに学んだことは、震災が起きた後は、水と食料だけでなく、トイレにも困ったということです。この話を聞いて、常日頃から、水や食料などを置いておいて、使うべき時のために、置いておきたいと思いました。未来のために自分ができると思ったことは、この聞いたことや体験したことなどを語り継いでいくことです。

〈田老コース〉

・震災学習を終えて、印象に残っていることは、ガイドさんの当時の状況についての説明です。自分はまだ小さいころだったから、恐怖という気持ちはなかったけれど、ガイドさんの経験などを聞いて、やっぱり津波は恐ろしいものなんだと、改めて考えさせられました。今回新たに学んだことは、地震が弱くても、揺れの時間が長いと津波が来る可能性があるということです。今まで自分は、小さい揺れの時は「大丈夫だろう」という考えを持っていましたが、揺れの大きさに関係なく、対応をしっかりするようにしたいと思いました。また、見学地では、津波の大きさを改めて感じました。田老の防潮堤は、高くて丈夫そうなものだったけれど、それが壊されるぐらいの威力があるんだなと思ったし、でも、防潮堤があったから津波を止めてくれていたと考えると、備えはやっぱり大切だと思いました。だから、「これぐらい大丈夫だろう」「自分は安全」などと勝手に決めつけずに、状況をしっかり確認し、その時に合った対応をすることや、災害が起きる前に必要なものを準備しておくことを意識したいです。また、今回の学習は、ガイドの方や先生方などのいろいろな協力によって行えたので、感謝の気持ちを忘れず、学んだことを無駄にしないよう、生活していきたいと思います。ありがとうございました。

〈大槌コース〉

・大槌では、津波のために山を2 m50 cm高くしたことが印象に残っています。その他にも危ない所には、コンビニや家を建てない、高い所に家を建てるなども知ることができました。そして、津波で一番被害を受けた地域は、高田だということが分かりました。見学地に行って分かったことは、避難場所が坂で急になっていることから、年配の方は登れずに亡くなったということを知って、僕ができることは、手をつないで一緒に登ってあげるなどをして助けたいと思いました。3月11日の2日前にも大きな地震があり、それが東日本大震災の予兆だったのだと思いました。津波では、死者と行方不明者を合わせると、1286人にもなり、津波の怖さを再確認することができました。そして、未来のために僕ができることは、津波を知らない子供に、津波のことを知らせることをしていきたいと思いました。今日は、このような学習をさせていただき、ありがとうございました。

・震災列車では、懐中電灯や笛が、「自分はここにいるよ！」って伝えるために役立つことが分かったのでよかったです。大槌町や他の所でも、たくさんかさ上げをして、津波で町がやられないようにしているのが分かったし、2 m以上も防潮堤がかさ上げをしているのが分かったのでよかったです。今後にも生かせるようにしたいです。

3 事後学習

(1) 全校「生き方学習」発表会

学年での報告会を経て、代表が文化祭で発表を行った。



(2) 副読本の活用事例

【関連して取り上げた題材】

【p24～25 12 家族を信じて 自分の命は自分で守る】

【p50 34 未来をつくる一東日本大震災津波伝承館いわて TSUNAMI メモリアルー】

【p52 35 地震・津波・火山噴火のしくみと被害】

【p58 39 災害時の情報と心理】

【p59 40 あなたに助かってほしいから】

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

震災学習列車活用後の生徒の振り返りの記述内容から、それぞれの地域が震災当時どのような被害を受けたか、そして、そこからどのように復興してきたのかを地元の方々からお話を伺うことで、他人事ではなく自分事として考えることができたことがうかがえる。また、震災学習列車活用を通して、今の自分ができること、そして、未来のために自分ができることを考えることができた。

2 課題

今回の学習で学んだことを、継続的に反復しつつ、地域へ広め、いざという時、率先して実行していく力を育てていきたい。

「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：宮古市立山口小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 地域や学校の被災や復興の状況

当学区は、東日本大震災における大きな被害は免れた地域ではあるが、被災した中心街に近い地域であること、長期間に渡り避難所としての役割を果たしたことなど、震災との関わりは深い地域である。

また、宮古市のハザードマップ改訂版で、本校校庭付近及び学区の一部が、新たな浸水想定区域に指定され、自分の命を守る学習の必要性がさらに高まっている。

2 児童の実態

児童は、震災当時、生後まもなく、大震災について知っていることが少ない。事前アンケートで「東日本大震災についてどのようなことを知っているか」について調べたところ、「たくさんの方が亡くなった」「たくさんの家や建物が流された」ということは知っているものの、他は、お家の方から聞いたことや、いわての復興教育副読本で学んだ知識などで、具体的なことについては知らない児童が多かった。

そこで、甚大な被害を受けた三陸沿岸を縦断する三陸鉄道の学習を通して、当時の被害の大きさや復興に力を尽くす職員の思いを学ばせたい。また、その学びから、今の宮古が多くの人々の願いや努力によって復興したことを理解し、これからの自分たちにできることを、防災と将来の姿という2つの視点で考えさせていきたい。

II 取組の概要

1 ねらい

- (1) 見学を通して、三陸沿岸の震災・復興について深く学習するとともに、その学習を通して、これからのまちづくりの一員であることを自覚し、自然災害への心構え、自らの生き方について考える。
- (2) 三陸鉄道に乗車することで、復興の様子を自分の目で確かめるとともに、地元の公共機関の復興に対する思いや三陸の海の景観の素晴らしさを実感する。

2 学習の内容

(1) 事前学習

ア オリエンテーション

「海」と聞いてイメージすることについて話し合い、海には楽しさを味わわせてくれたり、水産業を成り立たせてくれたり、私たちに恵みをもたらしてくれる反面、津波という災害を引き起こす怖さもある、というイメージを共有した。東日本大震災についても同様に、どのようなことを知っているか、聞いたことがあるかを全体で共有し、震災に対する理解の状況を把握した。その後、学習のねらいや学習計画について共有し、個々の学習課題を考えた。

イ 東日本大震災の被害の概要について知る

これから学んでいくことが、実際に自分たちが住んでいるこの地で起きたことであることを確認するために、宮古と釜石の津波到達時の動画を見た。動画を見て、津波の威力の恐ろしさ、被害の様子を実感することができた。宮古の被害の状況を映像資料やデータ等を使って説明し、自分たちが住む宮古でも甚大な被害があったことを知った。特に映像資料では、児童が知っている街並みの映像もあり、身近なところでの被害も知ることができた。

その後、「いわて震災津波アーカイブ～希望～」を活用し、東日本大震災の概要(発生時刻やマグニチュード、人的・物的被害など)について学んだ。さらに、当時高校生だった生徒の作文を読み、被害に遭った人たちがどのような思いであったかについて理解を深めた。東日本大震災での被災の状況の具体的な数(死者数、行方不明者数、家屋倒壊数など)を学び、それによって、大きな被害があったことを改めて理解したり、作文を読んで、数字だけでは分からない被害の大きさや悲惨さを感じたりすることができた。

ウ 三陸鉄道について理解する

児童に三陸鉄道の利用状況を聞くと、乗ったことがある児童が少なかった。列車に乗ることが初めての児童もいた。

三陸鉄道が震災後、どのような被害に遭い、どのように復興に尽力したかを知っている児童は少なかったので、「NHK 災害アーカイブス/三陸鉄道復興の軌跡」や復興教育副読本「いきる かかわる そなえる」を活用し、概要について理解を深めた。線路や駅、街全体がかなりの被害を受けた中で、たった5日で運行を再開したことに児童は驚いていた。

エ 見学先について理解する (校外学習事前学習)

震災復興列車に乗り、鶴住居の「いのちをつなぐ未来館」と「釜石鶴住居復興スタジアム」、「防潮堤や水門」を見学する計画を立てた。見学の事前学習として、「いのちをつなぐ未来館」や「釜石鶴住居復興スタジアム」がどのような施設なのかを担当が簡単に説明した。これまでの震災についての学習も踏まえた上で、東日本大震災でどのような被害を受け、そのときどのような思いでいたのか、どのようにして復興を遂げてきたのかを、見学で学んでくることを児童と確認した。

(2) 震災学習列車当日

ア 三陸鉄道震災学習列車

列車に乗る前の社長自らのあいさつ、出発時の社員総出の見送りなど、震災・復興について後世に語り継いでいく本学習を、大切にしたいという思いを感じた。

車内では、各駅付近に行くと、その土地の被災の様子やその後の復興について、震災当時の写真を見ながら、説明を受けた。現在の駅の様子を実際に見たり、震災当初の駅の様子の写真と比較したりすることで、被害の大きさや復興が進んでいることを実感することができた。

また、山や木々の切れ間から、時折、美しい海の景色を見ることができた。山田湾では、ほ



たてやかきの養殖が行われていることも養殖棚を見ながら説明を受けた。事前学習で話し合った「恵」の部分も実感することができた。

ガイドの方が、震災当時の様子や自らの経験を話してくださった。震災当時小学6年生だったということで、地震が起きたときの学校の様子やそのときの雰囲気、思いや感情を細かく教えてくださった。「これからどうなるのだろう」という不安や恐怖に苛まれていたことを知った。

日常生活の当たり前は、当たり前のことではなく、当たり前のように過ごさせていることがどんなに有り難いことであるかを感じることができた。



地震が起きたときの列車内の様子についても説明していただいた。乗客の命を守ることを最優先に考え、乗客を安全に避難させた運転手の話を聞いた。運転手の話から、冷静に判断することの大切さを感じたようだった。

また、列車がトンネルに入ったときに、車内の電気を消して、停電が起きたときの状況を再現した。電気が消えると、真っ暗で周りが見えず、



避難することの大変さを実感することができた。

イ 鶴住居の見学

① 「いのちをつなぐ未来館」の見学

鶴住居駅に到着し、「うのすまい・トモス」にある「いのちをつなぐ未来館」の見学をした。館内では、施設の方から説明を受けた。岩手県の被災の状況を知ることができた。特にも三陸は、地形が特徴的で、津波の被害が大きかったことも理解することができた。地震直後からの映像を見て、当時どのようなことが起きたのかを確認することもできた。館内には、当時被害を受けた建物の一部や、津波で流されたものも

展示されており、大きな被害だったことを感じた。また、この地の避難が、後に「釜石の悲劇」や「釜石の奇跡」として語られていることを教えていただいた。避難所と避難場所の違いについての説明を受け、自分の身を守るために、普段から安全な場所を知っておくことの大切さを理解することができた。

②「釜石鶴住居復興スタジアム」の見学

「いのちをつなぐ未来館」から「釜石鶴住居復興スタジアム」に移動した。スタジアムでは、



語り部より、震災当時の体験を聞いた。語り部の方は、震災当時、釜石東中学校の生徒だったということだった。地震が起きたときのことや避難の様子を話していただいた。津波が来たときの空気感や匂い、津波の色など、当時、そこにいた人にしか分からない感覚などを交えて話していただき、この地で本当に大きな災害があったことを実感した。とにかく遠くへ逃げなければと思い、「恋の峠」を目指して避難したことや、一緒に避難した小学生と手をつないだり声をかけたりしながら避難したことなども知り、当時の状況を知ることができた。「こうして助かることができたのは、日頃から防災について学び、訓練を重ねてきたからだ」という話もあり、今後も、地震や津波は必ず起こることを想定して、備えていかなければいけないことを学んだ。このスタジアムは、鶴住居小・東中の跡地に建設されたということで、こうした場所で、語り部からの話を聞くことも大きな価値があると感じた。

その後、スタジアム内の見学をした。VIPルームや選手が使う



ロッカールームにも入らせていただいた。貴重

な経験をさせていただき、子どもたちは、目を輝かせながら見学をしていた。また、スタジアムの建設に関わる話をさせていただいた。スタジアムは、地元の森林資源を活用していることや選手の高いパフォーマンスを可能にする芝を取り入れているなどを知ることができた。さらに、スタジアムは、試合を行うためのものだけでなく、水を蓄えていたり、災害時のヘリポートにもなったりするなど、万が一のときに対応できる設備を備えていることも知ることができた。

③「防潮堤や水門」の見学

復興スタジアムの近くにある、防潮堤や水門を訪ねた。防潮堤の上まで登り、上から海や街並みを確認し



た。震災で壊れてしまった以前の防潮堤も上から確認することができた。また、水門の見学では、機械も見て、どのような仕組みになっているのかを知ることができた。震災のときに、消防団の方々が水門を閉めに来たことで被害に遭われた経験から、遠隔かつ自動で水門の開閉ができるシステム（水門・陸閘自動閉鎖システム）が導入されたことを知り、震災の教訓を生かし、復興へ歩みを進めてきたことを実感することができた。

(3) 事後学習

ア 震災学習列車・鶴住居見学のふりかえり

見学を通して分かったことや感じたこと・考えたことをワークシートに書いた。児童からは、「駅や線路が全部流されたり、多くの人が亡くなったり、本当に大きな被害を受けたことが分かった」「鶴住居で、普段の避難訓練が実際にときに役立ったことが分かり、普段からの備えが大事なことが分かった」など、見学を通して学んだことについてふりかえることができた。また、見学で分かったことを学級全体で共有し、整理した。見学を通して分かったことをもとに、さらに深めていきたいこと、もっと知りたいことを考え、個々に新しく課題設定を行った。三

陸鉄道についてもっと知りたいと思った児童や復興への歩みについて知りたいと思った児童、防災について知りたいと思った児童など、見学を通して関心をもったテーマが同じ人でグループをつくり、さらに深める調べ学習を行った。

イ 地域の防災マップづくり

見学では、普段から安全な場所を知っておくなど、いつでも避難できるような備えをしておく必要があることを語り部の話から学んだ。事後の学習として、地域の安全な箇所や危険な箇所を調べて地図上に表す、「防災マップづくり」を行った。「がけが近くにある」「お年寄りが多く住んでいる」など地域の特徴を捉え、それに合わせて行動することの大切さも学んだ。

ウ 「いきる かかわる そなえる」での学習

初版⁴「三陸鉄道のたたかい」・改訂版²⁷「沿岸部のまちを、人をむすぶ」を全員で読んだ。全員で読んだことで、三陸鉄道のみなさんが、震災後、困難な中でも全線開通を目指して、力を尽くした思いを考えることができた。

また、初版⁴²「2011年3月11日東日本大震災」、初版⁴⁶「地震のしくみと被害」、初版⁴⁸「津波のしくみと被害」を参考にしながら、東日本大震災の被災の状況や地震や津波が起こるメカニズムについても全員で学習をした。鶴住居の見学やグループごとの調べ学習を通して、「地震や津波はどうして起こるのか」というような疑問が児童から多く出されたため、全員で学習を行うこととした。地震や津波のメカニズムを理解することは、小学6年生の児童には、難しい部分もあるように感じたが、「いきる かかわる そなえる」には、分かりやすく説明されており、多くの児童が理解することができた。

エ 学習のまとめとして

今回の見学で学んだこと、事後にグループごとに調べたことをプレゼンテーションソフトや文書作成ソフトを使ってまとめた。来年度、震災についての学習をする予定の5年生に向けて、発表会を行い、これまでの学習で学んだことや感じ



たことなどを伝えた。

オ これからの自分たちのことについて考える

見学や防災マップづくり、調べ学習などを通して、防災意識を高めたり、これからの自分の生き方について考えたりした。「お年寄りが近くに住んでいるので普段から声を掛け合って、いざというときに一緒に避難できるようにしたい」「医師になって、地域のために働きたい」というような思いをもち、これからの自分の生き方や在り方について考えることができた。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- ・三陸鉄道に乗車し、震災によって変わってしまった街並みや、復興の様子を見ることができた。現在の駅の様子や街並みを見ながら当時のことを聞くことで、震災でどれほど変わってしまったのか、復興がどれくらい進んでいるのかを実感することができた。
- ・復興の様子を実際に見たり、震災を知る方々から話を聞いたりすることは、児童が、これからの生き方を考える上で、価値のある体験学習となった。
- ・三陸鉄道の方の説明や鶴住居の見学から、津波の恐ろしさを改めて実感するとともに、命の大切さや当たり前の生活の有り難さを感じることもできた。

2 課題(今後の取り組み)

- ・震災当時の記憶がない世代の子どもたちに対し、震災復興列車の体験や鶴住居の見学は、地元が被害を受けた震災の経験を、自分事として考えていくために、とても効果的なものであった。しかし、事前や事後での学習で、震災を自分事として考え、自らの生き方を見つめていくための手立てや指導が必要であると感じた。
- ・今後も様々な場面で、体験したことや学んだことを想起させながら、震災のことをこれからの自分事として考え、防災意識を高めたり、一人一人がこれからのまちづくりの一員であることを自覚させたりする必要がある。
- ・地震・津波による災害だけでなく、大雨・洪水・土砂による災害に視野を広げ、当学区に必要な命を守る行動について考えさせていく必要がある。

「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：山田町立山田小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、令和2年4月に山田町内の6つの小学校が統合してできた新設校である。

統合前の各学校は、海沿いや山沿いに位置し、それぞれ立地条件が異なるため、東日本大震災の被災状況が大きく異なり、各学校で実施されてきた復興教育にも違いがあった。

そこで、統合の前年に三陸鉄道の再開やラグビーワールドカップ開催等の復興を間近に実感できる機会に触れ、また、統合に向けての児童の交流を図ることをねらいに、本事業を6校の5年生94名で実施した。以来、本校の復興教育の一環として、三陸鉄道と鶴住居「いのちをつなぐ未来館」での震災学習を軸に、毎年5年生で実施している。

震災から11年が経過し、児童の震災体験の記憶がなく、また、統合により児童の居住地の震災被害及び復興状況が一様なものではなくなっている中、震災の記憶を継承し、共通の学習土台を作る上で、有意義な事業であると考えている。

<参加>

5年生児童1・2組51名、引率5名

<日程>

9:25～10:00	三陸鉄道乗車（山田～鶴住居）
10:30～11:30	鉄の歴史館見学
13:00～14:50	いのちをつなぐ未来館見学等
15:50	学校着

II 取組の概要

1 事前学習

震災当時、沿岸部の学校に勤務していた教員の体験を聞いたり、復興教育副読本（改訂版）の「震災学習列車で知る東日本大震災」「助けられる人から、助ける人へ」、（初版）「三陸鉄道のたたかひ」を活用したりするなどして学習した。

<事前学習で学んだこと>

- ・鶴住居地区の震災の被害と避難の様子
- ・三陸鉄道の震災の被害と復旧への取組
- ・いのちをつなぐ未来館の施設の概要と取組

2 震災学習列車活用スクール

(1) 震災学習列車

三陸鉄道陸中山田駅から鶴住居駅まで乗車。初めて列車に乗る児童も多く、三陸鉄道の乗車を楽しんでいた。山田町内の旧鐵笠駅があった場所でガイドから説明を聞き、現在は何もなくなった現実を目の当たりにして、東日本大震災の津波で大きな被害があったことを実感したようだった。列車の中ではクイズに答えながら震災について考え、また、震災当時の写真を使った説明等で自分たちの住む沿岸地域で実際に起こった震災について多くのことを学ぶことができた。



(2) 釜石鉄の歴史館

鶴住居駅からバスで移動し、約1時間の見学。原寸大に復元された高炉の模型と映像、鉄と釜石との関わりなど、釜石の鉄づくりの歩みや製鉄業に携わった先人たちの業績と苦労について興味深く学ぶことができた。また、展望台から防潮堤を見て、東日本大震災の津波がどこまで来たか実際に知り、被害の大きさに驚いていた。



(3) いのちをつなぐ未来館 ア 未来館館内ガイド、語り部

釜石鉄の歴史館からバスで移動し、鶴住居アスレチック公園で昼食をとった後、徒歩で移動。学級ごとに館内見学と館外での防災ウォークラリーを交互に実施した。

見学では、震災当時中学生だった語り部の方の説明を写真や資料を見ながら真剣に聞いていた。特に、自分たちと同じ鶴住居小学校の児童が釜石東中学校の生徒と避難した様子については、「自分だったらどうするだろう。」と考えながら聞いている様子だった。



イ 防災ウォークラリー

館外で行われた「防災ウォークラリー」では、周辺施設に設置されたクイズを、グループごとに解いて回った。グループで解答を出すために一人一人が防災について考えることができた。最後に施設の方からクイズに関わって説明を聞いた。防災について知らないことがあることに気付き、命を守るために、今回学んだことをこれからの生活に生かしたいと感じたようだった。



3 事後学習

復興教育副読本の「沿岸部のまちを、人をむすぶ三鉄のたたかい」を活用し、震災学習列車で学んだことを振り返りながら個人で学習のまとめをした。その後、全体で交流し学びを深めた。

また、学習発表会で「20110311夕目いだい手い希る（夢いだいて生きる）」という劇を発表し、「震災学習列車」の学習を通して学んだことを校内の児童や保護者に発信した。

さらに、震災直後から交流をしている盛岡市立青山小学校の児童へ手紙を書き、「震災学習列車」の学習を通して学んだことを伝えた。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 保護者の感想、盛岡市立青山小学校への手紙

(1) 保護者の感想から

- ・ 震災を知らない子どもたちが震災学習列車で学んだこと、語り部の方の話を聞いて学んだ「津波の怖さ」、「命の大切さ」、「訓練の大切さ」を自分たちが経験したかのように劇の中できちんと表現できていて当時を思い出して涙が出ました。

- ・ ただ、説明を聞くだけではなく、今日の劇のように目で見て、震災を知らない小さな子どもたちから大人まで、これからも伝えていくにはとてもわかりやすく心に残ってよいと思いました。
- ・ 当時のことを様々思い出し、大切な人、物を失った方々のこと、それから立ち上がって「まち」を作ってきたこと、震災を経験した子供が今はそれぞれの道を歩んでいること…心の中でいろいろな思いを感じながら見ていました。
- ・ 釜石でたくさんのことを学んできたのだなと感じました。いい経験をさせてもらってありがたいです。先生方、たくさんの準備と練習、子供たちへの声かけなど、ありがとうございました。



- (2) 盛岡市立青山小学校への児童の手紙から
- ・ 「いのちをつなぐ未来館」では、語り部の川崎さんから、津波のおそろしさや、釜石東中学校と鶴住居小学校の避難の様子を学びました。
 - ・ 防災ウォークラリーで楽しみながら津波の時にどのように避難するかなどを知りました。
 - ・ 震災の来る前の写真と、来た後の写真では、景色が全然違いました。そのくらい、つらい震災だったということがわかりました。
 - ・ 震災学習列車で1回目の津波より、2回目の津波の方が大きい時があるからすぐに戻ってはいけないことを知りました。ガイドさんが話ってくれたことで当たり前の日常が当たり前じゃなかった。電気やガスも全く付かず、電話も使えなかったということを知りました。
 - ・ 今と昔の山田町を比べたとき、全然印象が違いびっくりしました。今の山田駅と昔の山田駅を比べてみると、色以外全く同じですごいなあと感じました。

- ・ 山田町は震災で被害に遭いながらも頑張って元の町に戻りました。山田町も良い所なので一度来てみてください。

2 成果

- (1) 東日本大震災で大きな被害に遭い、たくさん犠牲者が出たので、「震災は怖いもの」という意識が強く震災について知る機会が多くなかった。しかし、今回の「震災学習列車」に関わる学習を通して、命を守る行動について知ることができたことで自然災害への心構えが少しずつできてきた。
- (2) 震災の体験をしたガイドの話の聞いたり、まちの変化の様子を実際に見たりし、自分たちのまちの復興のために尽力している方がいることを知った。自分ができることを考え、行動することについて考えることができた。

3 課題

- (1) 今回の「震災学習列車」に関わった学習を通して、実際に話を聞いたり、自分の目で見たりすることで児童は多くのことを感じ、学ぶことができると改めて感じた。次年度以降も、地域の実態や児童の特性を踏まえた本校独自の復興教育計画を作成していきたい。
- (2) 「震災学習列車」に関わって、ねらいを焦点化し、体験談を聞くことや体験活動など、学習内容についてより吟味した活動計画を考え、教科横断的な取り組み（カリキュラム・マネジメント）を進めていきたい。
- (3) 学習発表会で発表したり、青山小学校への手紙を書いたりすることで学習のまとめを発信することができた。自分たちが学んだことを発信することで、学びを深めることができ、自分たちの地域について考え、地域の一員であることを自覚することにつながると思われる。今後、児童が学んだことを自分達が住む町「ふるさと山田」への発信の在り方について考えていきたい。

「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：岩泉町立小本小学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は、東日本大震災により校舎1階と体育館が浸水。その後、5年間、仮設校舎で不自由な学校生活を送った。平成28年、現在の新校舎への移転を機に大牛内分校と統合し、今年度で7年目を迎える。学区は平成28年に台風10号豪雨の被害も受けており、度重なる災害に見舞われてきた。しかし、大きな災害に対する意識は決して高いとは言えない状況も見られることがある。そのため、災害のリスクが高い地域に住む本校児童にとって、防災学習の充実を図り、災害への心構えを身に付けることは非常に重要であると考えられる。

そこで、本校では防災訓練や復興副読本を活用する時間を設定し、防災学習に取り組んでいる。本年度は本事業を、震災を体験していない4年生の防災学習に位置付けた。児童が災害についての理解を深め、自分の命は自分で守る態度を育むとともに、災害から力強く復興してきた自分たちの故郷への愛着をより深めることをねらいとして本事業を実施した。

II 取組の概要

(1) ねらい

防災学習列車活用スクールを活用した防災・復興学習を通して、災害に対する理解を深め、防災への心構えを高める。

(2) 取組の内容

ア 三陸鉄道職員による説明

三陸鉄道で野田村から田老駅まで乗車。三陸鉄道員から震災当時の各駅付近の被災状況について説明を聞いた。津波により防潮堤が作られ海岸の景勝が変わってしまった様子を直接目にし、津波被害の大きさを感じ取ることができた。また、災害の被害を防ぐための工夫についても学ぶことができた。



イ 防災ガイドによる話

防災ガイドの佐々木さんから田老地区の防災の工夫や復興状況について、説明を聞いた。津波被害から逃れた経験から「津波の時には高台に逃げること、自分の命は自分で守ること」「率先避難者になってほしいこと」を切々と訴えていた。「津波の教訓を児童に語り継ぎ、これからも守っていきたい」という強い願いが伝わってくる話であった。さらに、震災遺構のたろう観光ホテルの見学、そこでの津波映像の視聴を通して、児童は、津波の威力や津波の怖さを実感し、震災の恐ろしさと命の大切さについて再認識することができた。



《児童の振り返りから》

- ・線路が通しているところの高台は凸凹を利用して津波の威力を抑えるためにいうことを初めて知った。津波に備えて色々と工夫していることがわかった。
- ・普代では、12年もかけて水門を作ったことにびっくりした。町の人たちを守るために何年もかけて備えたのだということがわかりました。
- ・田老の町には避難路が44か所も準備されていて、住民ができるだけ早く逃げるができるようにしていることを初めて知った。
- ・たろう観光ホテルの社長さんが命懸けで映像に残しているのが心に残った。津波の勢いや町を飲み込んでいく恐ろしさが伝わってくる映像でした。きっと社長さんも怖かっただろうと思います。

ウ 学校備蓄倉庫の見学

小本小・中学校は避難所として利用されるため、校舎4階に備蓄倉庫を備えている。防災倉庫の備品について調べ、避難所として活用される設備の役割について気付くことができた。



エ 学習発表会での発表

防災学習を通して学んだ「災害に備える」ことについて学習発表会で発表した。見学を通して、感じたことや学んだ内容をせりふにし、自分たちで台本を作成した。全校児童や保護者に対して防災についての大切なことを発信した。



《保護者の感想から》

- ・子どもたちが学んできたことを伝えた、まさに「学習発表」だったと思う。家族でも地震や津波に対する備えを確かめていきたいと思いました。
- ・東日本大震災当時に生まれていなかった子どもたちにとって大切な学習だと思う。自分の命をしっかりと守れる人になってほしいと改めて思いました。
- ・子どもたちの発表からしっかりと「災害に備える」ことを考えないといけないなと改めて思うことができました。

オ 小本地区防災訓練での防災学習の実施

岩泉町防災訓練とタイアップし、小本小・中学校合同で防災訓練を実施した。地震津波災害を想定し、学校生活や家庭など様々な場面での避難の仕方について学習した。実際に地震や津波が起きたときにどのような行動をとればよいのかを考え、災害時に対する心構えを高めることができた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- ・津波災害を受けた学区の地域と他地域とを比較することで、被害の様子や復興状況についてより深く学ぶことができた。
- ・三陸鉄道で沿岸地域を移動しての学習を通して、多くの沿岸地域が津波の被害を受け、防潮堤等、津波襲来に備えた工夫がなされていることを直接見て学ぶことができた。
- ・三陸鉄道の方からの話や田老地区の震災ガイドの方の話を通して、災害時、命を守るためにどのように行動すればよいか、物品だけでなく気持ちも災害に備えておくことが大切であるということ学ぶことができた。
- ・学習を通して、自分たちの住む地域を災害から守り、率先避難者として命を大切にすることへの意欲を高めることができた。

2 課題

- ・今年度、第4学年の総合的な学習の時間において本事業を活用した防災学習を実施した。防災・復興学習について、地域の防災訓練や防災士の参加など、地域との連携も含めた年間計画の整備と計画的な実施をしていく必要がある。
- ・現在、震災時に生まれていなかった児童が小学校の大半を占めている。児童は、津波災害が想定される地域に住んでおり、防災に対する知識と意識を一層と高めていくため、さらに充実した防災教育を実施していく必要がある。

「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：宮古市立第二中学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

(1) 地域や学校の被災や復興の状況

当学区は、鉾ヶ崎地区を中心に多くの世帯が被災し、甚大な被害を受けた。

震災直後、本校の体育館や校舎が避難所となり、校庭に仮設住宅が建てられた。その後、仮設住宅が撤去され、平成29年8月に校庭が復旧するまで校庭が使用できず、6年間、体育祭の取り組みや部活動などは、他施設を借用して実施した。

当地域は、水産加工場等も多く、古くから水産業で栄えてきたところであり、地域の方々の復興への思いは強いものがある。11年経った今、その思いと地域の方々の協力により復興が大分進んだ。

(2) 生徒の実態

生徒は明るく元気に登校しており、合唱・あいさつ・清掃を三本柱として、意欲的に活動している。

先にも述べたように本校は大震災で被災した地域があり、避難所や仮設住宅に住んでいた生徒もいるが、震災当時は就学前であり、はっきりと記憶している生徒は少なくなってきている。

昨年度から、陸中宮古青年会議所事業、東日本大震災復興祈念～夢をつなぐ灯火～「夢あかり」へ参加し、全校で牛乳パックによる灯ろう作りで鎮魂の活動をしている。

また、3月11日には全校で追悼集会を行っているが、その際にも灯ろうを製作し、夕方には学校のフェンスに吊るすなど「忘れない」取り組みをしている。

II 取組の概要

1 ねらい

今回の震災学習列車の学習を通して、三陸鉄道の被害と他地区の東日本大震災の被害や当時の人々の状況を改めて学ぶことで「**いきる**」大切さや生かされている事を学び、これからの未来に伝達していく大切さ「**そなえる**」こと、これからの復興や自分の生き方あり方「**かかわる**」を考えさせたい。

(1) 三陸鉄道

三陸鉄道職員の講話の中で、自分の生まれた地域の被災の状況や、地域の住民のために復興を願い、尽力した方々の思いや取り組みを改めて知る。

(2) 講話（金 賢治先生）

陸前高田市まで足を伸ばし、金賢治先生（元大船渡市立大船渡中学校校長・元陸前高田市教育委員会教育長）に講話して頂くことで、震災当時の人々の状況・思いや考えを知る。支援して下さった全国・世界の人々とのつながりや優しさを学び、命の大切さを学ぶ。

(3) 東日本大震災津波伝承館

宮古市を含め三陸を襲った津波の被害の概要と恐ろしさを知り、先人たちの英知・自然災害への心構え・教訓を学び、復興への願いを感じ取り、自然と共に生きる私たちの生活を考えながら後世に伝承する大切さを考える。そして、宮古に暮らす私たちのこれからの役割（生き方・あり方）を考えさせる。

2 学習の内容

(1) 事前学習

ア オリエンテーション

東日本大震災について、「いきる かかわる そなえる」の副読本を使用。平成26年度版の作文「語り伝えよ」では家庭や地域で語り継いでいることについて、令和2年度版の19「真崎わかめ復活物語」では地域の中で後世に残したいことを考えるなど、当時のことを思い浮かべるだけではなく、地域のことに触れ自分達が郷土にできることを考えさせる導入とした。

イ 訪問先の学習、個人の課題設定

資料として「いわて震災津波アーカイブ」から、宮古市だけではなく、訪問先である陸前高田市等他地域も含め被災状況を学習するとともに、津波で亡くなられた方々の人数を比較して、数字から考えられる当時の避難状況を班ごとに予想した。復興に向けての取り組みや災害時の対応についても触れ、この事業のねらいを伝え、震災に対しての個々の学習課題を立てた。



(2) 震災学習列車当日

ア 三陸鉄道：車窓から見る町並み・話を聞く

三陸鉄道職員が、パネルを用いて、震災当時のこと、震災直後のことをお話ししてくださった。



震災時に三陸鉄道の運転手さんが脱線した車両から乗客を誘導して避難させた話をはじめ、震災からの復興の様子、多くの方からの支援があったと今があるといった内容を職員の方自身の体験談を交えてお聴きした。

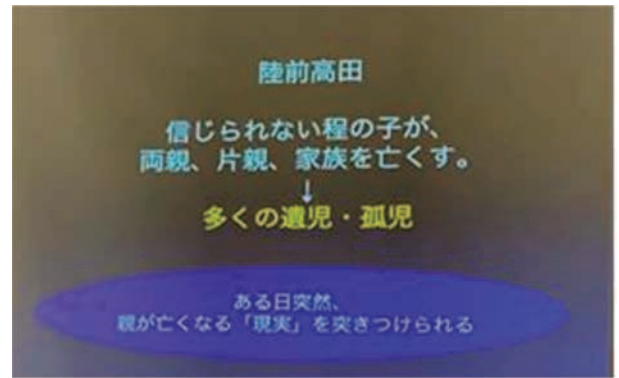
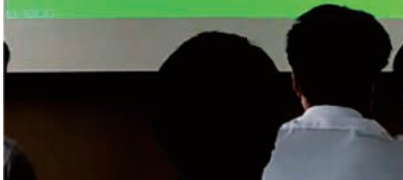
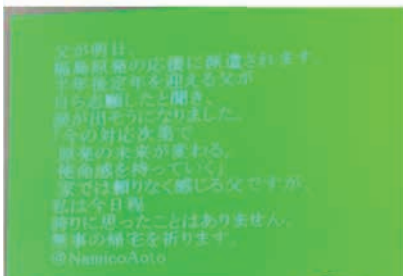
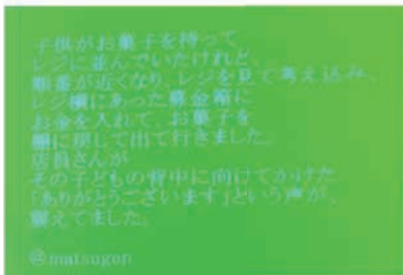
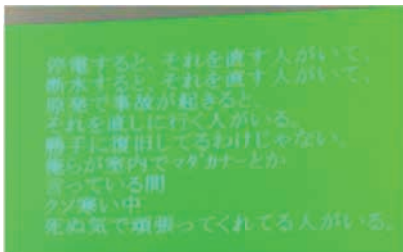
車窓から見る風景は、11年前の震災の爪痕がまだ残っている建物があったり、以前の場所ではないところに駅ができていたり、生徒たちの日常ではなかなか知り得ないことを学習した。

イ 講話（金 賢治先生）を聞く

金賢治先生の講話は、あなたにとって「一番大切な人」は誰ですか？あなたのことを「誰よりも大切に思ってくれる人」は誰ですか？「今」を精一杯生きていますか？という問いから始まった。

その後、当時のSNSの画像が音声もなく流されると、生徒は微動だにしない様子で見入っていた。

当時校長だった金先生は、居るはずの人、あるはずの風景が突然なくなることの現実を目の当たりにした当時の中学生の話を教えてくださいました。当時の大変さももちろんであるが、人間の強さ、中学



生の頑張り、そして全国や世界の人々の温かさを伝えてくださった。

恩返しではなく恩送りをしていこうという気持ち、震災を言い訳にしない当時の中学生から学ぶことがたくさんあった。

ウ 東日本大震災津波伝承館の見学

奇跡の1本松は凜と立ち伝承館の芝生でスクスクと育っている子どもの松を見守っていた。

～いわて TSUNAMI メモリアル～命を守り海と大地と共に生きる～二度と東日本大震災津波の悲しみをくり返さないために～の見学。

- 1 歴史をひもとく
- 2 事実を知る
- 3 復興を共に進める
- 4 教訓をまなぶ

学級を2つに分けて解説員の方に案内をしていただき、上記の4つのゾーンを回った。

その前に聴いた金先生の講話がずっと胸に残り、その後の見学だったので、生徒の顔つきが違っていたように思えた。

事前に送っていただいていた「震災津波伝承ノート」に見学したことを記入しながら回っている生徒、展示物の数字をメモしながら回る生徒、想像を遙かに超える津波の力でねじ曲げられた展示物を見つめ自然の驚異を感じている生徒、昔からの言い伝えや当時の人々から教訓を学び取っている生徒、それぞれのゾーンでとても熱心に学び取っていた。

(3) まとめ学習（振り返り）

ポートフォリオ作成によって、振り返り学習を行った。事前学習でそれぞれが自分のテーマを作り、そのまとめを最終的に形にすることとした。これからの生徒のまとめには、教訓を学び生かすこと、語り継いでいくこと、日々の生活を大事に生きていくことなどがたくさん書かれていた。

生徒のまとめ (ポートフォリオ)

「自分のテーマ」の答えには、生徒がこの事業を通して感じた素直な言葉が書かれている。11年経ち、生徒たちは当時あまりにも小さかったが、目の当たりにした展示物から津波の威力を・当時の人々の言葉から悲しみや願いを・震災の事実や真実をしっかりと受け止め、この先自分達には何ができるのか、自ら感じ取り考えていたことが大きな成果である。

ここに上げたポートフォリオに書かれた言葉を是非見ていただきたい。

「何十年も語り継いでいきたい。」

金賢治先生のお話

- 「こんな早くお母さんがいなくなるなら、僕は生まれてこなければ良かった。」
- 津波で両親や片親を亡くして、1人になってしまった子どもも(孤児)も多かった。
- 被災地の子どもが仮設住宅の人を招請して「母らね」と合唱した。
- 被災地の子どもたちが帰宅旅行などができなかったため、名古屋で暮らして、名古屋に無料を招待した。
- 根拠のない自信で逃げないとかは絶対しないぞ!

自分のテーマ
当時の状況から、伝えることを考える

- 「100回津波が来なくても101回目も必ず逃げて!」
- 自分が大切に思っている人を悲しませないように、自分の命も守る行動をしてほしい。
- 1日1日を大切に「一生懸命」に生きてほしい。
- 思ったこと
 - 津波のおそろしさは分かったし、津波も体験していない世代にも、映像を見たり、伝えていて、何十年後も語りついでいきたい。

復興列車について

- 語り部さんの話
 - 3月11日に、小学生の下校時間あたりには大きい地震。いつもと違ってなかなか止れずおさまらなかつた。
 - 津波が来る実感がわかなかつたが、家裏と再会して「津波がくる」と言われた時に初めて実感がわいた。
 - 町が中れりくらいの大さな揺れが起きた。
 - 津波が到達する時間は30分~40分
 - 避難する時間があつたのになぜ逃げられなかったのか?
 - 負荷が大きい、冷静な判断ができなかった。
 - 「これは大変」といって逃げた人があつた。

TSUNAMI メモリアル

- 実際に流されたものの展示
 - 産産と産産: ぐらぐらと揺れていた、泥まみれになっていた。
 - 道標: 丈夫につくられているのにも関わらず、変形していたり、ドアがはずれてしまつておぼれていた。
- 伝承していききたいこと
 - ちがう地域に住む時も、その地域のハードマップや防災マップも見せておく。
 - なるべく避難できるように!
 - 避難所で安心しないで、「より高く、より安全な場所」に逃げる!

~復興列車~
宮古駅から鶴居駅までの約1時間15分の旅。
車内からはとても綺麗な海が多く見え、津波が来たとは思えなかつた。
しかし、反対側の山側からの景色はまだ空が澄み渡り、家や建物も少なく、津波が来る前までの活気ある姿には完全に思えない感じがした。
被災地が元々静かな感じがした。見たい列車に乗りたいです。

「あなたが一番大切な人は誰?」
金賢治先生に伝えたいこと

「あなたが一番大切な人は誰?」この問いかけられたとき、最初に頭に津波で亡くなった人、他の何人何人何人の死に重く感じました。私はこの言葉を聞いた時、本当に死の通り道に思いました。今家族はいる、百連はいる、目に見えて話すことができて、触れることが出来る。こんな普通だと思っている日常は、ある日突然、無くなってしまうかもしれない。だから、今の日常を大切にしたい。一日一日を感謝して大切に生きていきたいです。

「復興とは人が『今』と『これから』を生き生きといきること。」

「将来自分の子に伝えていきたいです」

個人テーマ
「現在の復興状況を知らず、感じた事や学んだ事は、未来に伝えておけばならない大切な事」

現在の若手県では、漁業や養殖業の復興が進んでいて、船着き場も整備されています。新しい建物や土地の整備が進められていく中、津波の影響を受けた建物をそのまま残すなど、被害のリスクを未来に伝えていけるような取り組みが、防災の取り組みにも力を入れています。

津波伝承館

それに「各自で」という意味の方言。孫が津波から逃げ遅れることのないように「命はでんごん」としてきてきました。「命を守るために何が必ず生き残る」と強い思いが込められています。

津波により、多くの人が犠牲になるという悲劇がくり返される中から生まれた、命を守るための教訓。それが「でんごん」です。

金賢治先生の講演

- ▼ 悲しい思いをさせないために、悲しい思いをしないために、想定を信じ過ぎず、より安全な方へ逃げる。
- ▼ 大切な人の1は他の1000より重い。
- ▼ 自分の子供を亡くしてしまつた先生も自分の生徒や学校を何とかしなかつた無我夢中だった。
- ▼ この当時の子供達には深い悲しみを抱えながら、自分の置かれた環境のせいになつた。そして、社会に歩み出した時、「こんどは、自分が誰かを助けたい」という思いで、人に関わる仕事につく人が多かつた。

テーマ

「陸前高田市が震災時どのような状況だったかを知る」

- 今回の学習を通して、改めて「震災のすごさ」を感じました。そして、後の人たちにちゃんと伝えなきゃいけないと感じました。避難所に行けばいいのではなく、より安全な場所へ 想定を信じ過ぎず とにかく 逃げる。それが「大切だ」と思っています。私が一番心に残っている言葉が当時の中学生が書いた。

「100回逃げて100回来なくても101回目も必ず逃げて」というメッセージです。今回学んだ事や震災を知らない子達や将来、自分の子供に伝えていきたいです。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 事前学習

- ・現在使われている「いきる かかわる そなえる」の副読本だけではなく、改訂前の副読本も利用することで当時の人々の考えや活動、具体的な災害の状況等を知り、災害に対する意識を高めることができた。同じ三陸沿岸にある陸前高田市の被災状況を知ること、宮古市だけではなく震災状況を学習することができた。
- ・自分のテーマを設定することで、目的意識を感じさせることができた。

(2) 当日

- ・震災学習列車（三陸鉄道）に乗車し、いつもは気にしていなかった車窓から見える風景に、震災の爪痕や復興の様子があることを知った。また、職員の方から話を聞くことで、それぞれの場所や立場で遭遇した津波の影響、そして復興までの道のりを知り、命を守るために大切なこと、多くの人々の支援があり復興できたことなど、震災への理解を深めていた。
- ・講話や伝承館の体験を通して、ぼんやりとしていた東日本大震災の恐ろしさが明確になった。更にその当時を生き抜いてきた人々の思いを知ること、人々の苦労の末に今があること、自分達もその思いを伝えていかななくてはならない使命があることを強く感じる事ができた。

(3) まとめ

- ・事前学習時に自分自身でテーマを明確にすることにより、その答えを探すことでこの事業の目的により一層近づくことができたと思われる。
- ・学習を通して、避難することの大切さ、過去やハザードマップの浸水地域を過信しないで逃げること、「てんでんこ」の必要性など、訓練の大切さや、家族との避難方法の確認をすること、防災

の備えをすることなど、防災についての意識が高まった。

- ・東日本大震災での教訓を語り継ぎ、復興の担い手として地域の復興に貢献していこうという思いを持つことができた。
- ・震災学習を通して、日々を大切に生きることや命の尊さについて考えを深めることができた。

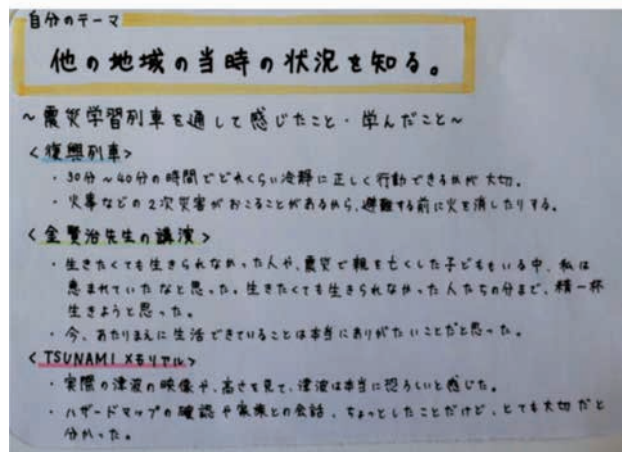
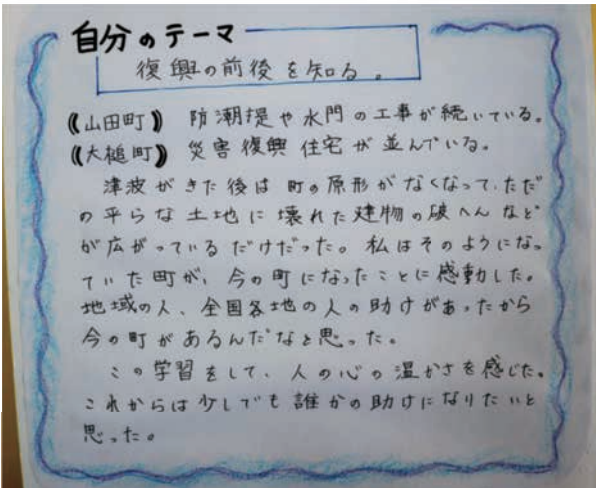
2 課題

- (1) 今後は震災後に生まれた子どもが中学生になってくる。東日本大震災の体験や教訓をどのような学習方法によって自分事として捉えさせていくかを考えていかなければならない時期に来ている。
- (2) 津波や地震だけではなく、風水害等の災害も近年増えてきている。どのような災害でも臨機応変に対応できるよう、避難訓練や引渡し訓練などを通して防災に関する知識や関心を持たせ、生徒個々が災害への備えを考え、一般化していくことが必要である。そして被災を経験した地域の学校として、先人の教えや思いを風化させないことが大切である。
- (3) 被災地として保護者を含めた地域の活性化・復興がこれからのテーマ（課題）だと感じる。新型コロナウイルス感染症収束の際には、コミュニティスクールなどの活動を活発化し、更に小中連携、地域の方々とのコミュニケーションを高めていくことの重要性を感じる。

震災の時の様子について 詳しく学んでくる

震災学習列車や金賢治先生の講話、東日本大震災津波伝承館見学して震災について沢山の学びができた。その他にも、命の大切さを改めて感じる事ができた。

震災の時に、沢山の支援物資をもら。当時のように今度は私たちが恩返しをするようにしたいと思った。
三陸は何回も津波が起きて、次もまたくるかもしれない。二度この悲劇をくり返さないためにも、もし震災が起こったら震災学習列車で学んだことを活かせるようにしたいと思う。今、自分にできることは、生きていることが感謝して一日一日を精一杯頑張ることだと思った。



「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：岩手県立山田高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

山田町は、三陸海岸のほぼ中央に位置し、豊かな自然に恵まれた地である。海岸線は、典型的なリアス海岸で、牡蠣やホタテの養殖が盛んであり、水産業は町の基幹産業となっている。しかし、リアス海岸の特性上、津波発生時には波のエネルギーが集中し、遡上高は凄まじいものとなる。有史以来、幾多の大津波に襲われ、その被害は甚大であった。

2011年の東日本大震災では、巨大津波と、それに伴う津波火災で、実に町内の38.4%（データは山田町より。以下同じ）もの家屋が全壊した。さらに、半壊や一部損壊も含めると、被災家屋は46.7%にのぼり、海に面する地域では、まさに壊滅的な被害を受けた。死者・行方不明者は825人で、多くの尊い人命が失われた。

町の人口は、震災前は1万9千人を超えていたが、令和4年12月現在では14,538人と、大きく減少している。また、町の児童・生徒数も減少していることに伴い、本校も今年度の入学者数は19名と、定員を大きく割り込んでいる。しかし、小規模校の特性を生かし、きめ細かな少人数指導や探究学習に力を入れている。

今回の震災学習列車では、町の中心部にある陸中山田駅を出発点とした。1学年全員が1両に乗車し、三陸鉄道のガイドから説明を受けながら、釜石駅までの区間、沿岸部の復興状況を確認した。

下車後、釜石駅から陸前高田市の東日本大震災津波伝承館まで貸切バスで移動し、徒歩で震災遺構や「奇跡の一本松」を見学した後、入館して震災学習を行った。館内では、ガイドの説明のほか、自由見学の時間も設けられた。



II 取組の概要

1 事前学習

三陸鉄道への乗車に先立って、三陸海岸を襲った津波の歴史を学習した。生徒は、東日本大震災については、幼い時期のことながらも記憶が残っているということであったが、それ以前にも幾多の津波が襲来していることは、あまり知らない様子であった。そこで、グループを編成し、1人1台の情報端末を活用しながら、明治三陸大津波・昭和三陸大津波・チリ地震津波の歴史（発生メカニズム・被害状況等）を学んだ。

生徒は、明治以降だけでも、三陸沿岸に大津波が4度も襲い、およそ30～40年に1度の頻度であることなどを学習し、歴史を語り継ぐことの重要性を再認識した。

2 フィールドワーク

本校は、山田町と包括連携協定を締結していることから、山田町教育委員会生涯学習課文化係の案内・解説により、町内に点在する津波伝承碑を巡り、先人からの教訓を読み解いた。課題発見力を涵養するためにも、現地調査には大きな意義がある。生徒は、石碑は劣化が進んでいるうえ、旧字体で書かれていることから、先人の遺した教訓が失われつつあるという課題を、自らの目で見出し、確認することができた。

3 震災学習列車

三陸鉄道の震災学習列車に乗車し、担当者による解説を受けながら沿岸市町村の現状を確認した。また、陸前高田市の東日本大震災津波伝承館において、ガイドの説明を受けながら、被災状況を学んだ。

4 発表会にむけて

2月には、「自治体との協働による津波碑の伝承事業～災害を後世に伝えるために～」と題し、町民や保護者も招き、震災学習の成果を発表する。探究学習や、震災学習列車で得た成果を発信する機会として、山田町と協働しながら、学習内容を振り返ってスライドを作成するなどの準備に取り組んでいる。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 震災学習列車

生徒が、三陸鉄道の震災学習列車に乗車し、車窓から実際に沿岸部の状況を確認できたことには、大きな意義があった。列車内では、ガイドの講義を受けながら沿岸市町村の被災と復興の状況を確認することで、沿岸市町村の震災からの歩みと現状を学ぶことができた。ガイドは、一方的な説明に終始するのではなく、生徒に対して問を投げかけていた。そのうちの 하나가、「海を取り囲むような巨大な防潮堤をみて、あなたはどうか考えるか」という問いである。生徒からは、「津波を防いだり、威力を弱めたりできる」といった意見のほかにも、「防潮堤の大きさを過信してしまい逆に避難が遅れるのでは」といった声もあった。

また、三陸鉄道では、震災学習列車以外でも、様々な形で、地域の観光・復興に尽力していることも生徒は学んだ。ガイドは、高校生も自分事として未来の岩手を共に考えていくことの重要性も訴えていた。



(2) 東日本大震災津波伝承館

ガイド付きの学習により、巨大津波の猛威と被害の甚大さを再認識し、防災・減災意識を涵養した。焼け焦げた史資料や、生々しい映像から、震災の悲惨さに衝撃を受けたように見受けられる生徒もいたが、目を背けることなく、震災の実態に向き合う姿が印象的であった。

また、近隣に残る震災遺構や、「奇跡の一本松」も見学することで、過去の記憶を将来に残すことの意義も学んだ。生徒は、総合的な探究の時間において、津波伝承の石碑をテーマにしており、陸前高田市の取り組みから多くの示唆を得たようである。

(3) 生徒の感想

伝承館には以前家族と来たこともあり、津波のことについてはわかっているつもりでいましたが、津波の

高さが 14m にもなった震災当時の状況について初めて知ることがたくさんありました。「てんでんこ、自分の命は自分で守る」ということを忘れず、いざという時には実践しようと思います。

震災学習列車に乗車し、社員の方の話を聞いて、三陸鉄道が、自分たちが知らないところで、三陸地域を守る災害対策や、県外の方への震災伝承、自然と寄り添える多くのイベントなどを開催していることを知りました。沿岸地域にしかない良い所をたくさん見つけることができたので、今後は自分もPRをして山田町だけではなく全ての沿岸地域の発展に貢献できる人間になれるように努力していきたいです。



2 課題

(1) 地域との連携の維持

今回の震災学習列車では、三陸鉄道の協力を得ることができたことに加え、総合的な探究の時間では、山田町と連携して震災学習を行っている。学校と地域・事業者との連携は、「社会に開かれた教育課程」を実現するうえでも重要な意味をもつ。協力・連携体制を、一時的なものとするのではなく、継続的なものにするための体制づくりが課題となる。

(2) 感染症への対応と対話の継続

震災学習では、地域の語り部との交流も案としていたが、コロナ禍で高齢の語り部の方々の体調面を考慮し、断念した。感染症の予防も講じつつ、地域の方々との交流をどのように展開していくかが課題である。

今後も、本校1学年では、石碑を題材とした震災伝承学習を継続していく予定である。可能な限り、語り部や、石碑を保存している地域の方々、役場職員などとの対話を深化させていきたい。

「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：岩手県立種市高等学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

東日本大震災発生から約10年が経過し、生徒たちの多くはその記憶がかなり薄らいでいるようである。当時、幼少期だった生徒たちにとって状況等を理解することは困難であり、日々の生活を受け入れながら過ごしてきたように考える。本地区は本県沿岸地域において人的被害がなく、全国的にも防災に関して注目を浴びたこともあった。そのため、地震や津波に関してあまり危機感を持っていない人もいる。今後も故郷で生き続ける生徒たちは、この未曾有の大災害を決して忘れず、なぜ人的被害がなかったかを知り、それを語り継いでいく責任があると考え。また本校には県外（関東・関西圏）から入学してきた生徒も在籍しており、本県への進学を選んだ生徒たちに対し、防災についての学習や復興の足跡を見せることも我々の使命と考えている。



【震災当時のボランティア活動（種市漁港周辺）】

今年度、本校では体験を通した学びを軸とし、生徒たちの防災・減災意識の向上を図るとともに、震災の教訓を生かした防災施設の整備や避難時の心構え、非常時の生活について学ぶことを目的に以下の3つの事業を実施することにした。

II 取組の概要

1 三陸鉄道「震災学習列車」乗車

（久慈→田野畑）

今年度は2・3年生を対象に実施した。三陸鉄道の社員の方が乗車し、パネル等により震災直後の風景や当時の悲惨な状況についてお話があった。またそのような中から復興していく様子や県内外問わず、たくさんの方々からの支援についての講話をいただき、自身

の命の大切さ、命を守ることへの取り組みについてたいへん参考になった。また、津波発生時の線路の役割を停車して説明して下さったことで、普段見ることのできない設備を間近で見ることができ、それと同時に県北沿岸の美しい地形も見ることができた。



【三陸鉄道社員の方の講話風景】



【田野畑駅で降車】

2 「学ぶ防災」研修(宮古市田老)

今年度は2・3年生を対象に実施した。県内でも甚大な被害を受けた宮古市田老地区を見学研修し、防災・減災意識の向上を図るとともに、避難経路を実際に歩きながら避難時の心構えについて学んだ。宮古観光文化交流協会により体験学習を実施した。ガイドの方から田老地区の防災面における工夫や復興の現状についてのお話があった。新設された防潮堤や三王岩、震災遺構の田老観光ホテル等の見学により、生徒たちは震災被害を現実のものとして捉えることができ、防災・減災の大切さについて改めて考えることができた。特に田老観光ホテルでは東日本大震災の当時の映像を視聴し、津波の規模の大きさや早期避難の大切さを痛感させられた。



【新設された田老の防潮堤上での説明】



【三王岩での説明】



【田老観光ホテル内の見学】

3 非常時体験(非常食の試食と簡易トイレの使い方)

アルファ米の炊き出しや簡易トイレの使い方等を全校生徒対象に実施した。アルファ米は一人一食分をお湯でもどし、昼食時に試食した。簡易トイレの使い方については、水道水を用いて模擬的に排泄物を用意し、実演したり、生徒に体験させたりしながらの実施だった。また、水が凝固剤で固まる様子を観察した。生徒はアルファ米の脱酸素剤を取り出すことに少し時間がかかっていた。



【脱酸素剤を探している様子】



【お湯を入れた後にアルファ米をかき混ぜる様子】



【簡易トイレの中(水)に凝固剤を入れる様子】



【水が凝固剤で固まる様子を観察している様子】

4 生徒の研修報告より

- ・震度が大きくないからといっても、津波が来ないとは限らないので、地震が来たら次は津波が来るという認識を強く持ち続けることが大切だと思った。
 - ・映像や写真で見たことはあったが、防潮堤や震災遺構の田老観光ホテル等を実際に見て、改めて地震の恐ろしさを知った。
 - ・このぐらいの震度なら逃げなくてもいいや等、自分に都合の良い判断をしてしまいがちなので、津波に対して甘い考えをもってはいけなと感じた。
 - ・災害時、停電しても役に立つのはソーラーや手回し発電、電池等を動力とするラジオであることを学んだ。
 - ・今回の学びを総合的な探究の時間の自分の探究テーマに生かし、防災に関する話を伝えていきたい。
 - ・まず自分の命を守るために避難に対する意識を高めていきたい。
- ・凝固剤は、多量の水でも一瞬で固まらせていたので、すごいと思った。
 - ・聞いたことはあったがしっかりと使用方法を聞いたのは初めてだった。災害時は今回のことをしっかりと覚えておいて困らないようにしたい。
 - ・非常食の仕組みや保存食とはなにかについて理解が深まり、これからは活かしていこうと思った。
 - ・思っていたよりも美味しく食べることができたので凄いなと思った。
 - ・災害が起きた時用の道具は知っていたけど、使ったことはなかったから良い体験になったと思う。
 - ・あのような便利なグッズは一回使ってみてどのように使うかというのはやはり事前にやるのはいいことだと思った。
 - ・災害時いつもの当たり前前の生活が急に出来なくなるので普段から備えをしっかりと災害に備えたいと思いました。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

・本事業の実施により、生徒たちの震災に対する知識や経験の希薄さを感じた。今年で12年の年月が経過し、幼少期だった生徒たちにとって東日本大震災は実際に経験したことでなく「語り継がれていること」のように感じる。そのような生徒たちが被災した現場を訪問し、体験された方々のお話を見聞きする機会は貴重であり、忘れられない事業となった。また、非常食や簡易トイレ等の知識があったとしても、体験したことのない生徒が大半を占めており、アルファ米の炊き出しや簡易トイレの使い方を学んだことは、生徒たちが

有事の際に安心感を持って使うことができることにつながった。

・これまでも県内に限らず災害に遭遇してきたが、そのたびに多くのボランティアや地域の方々の協働により復旧・復興がなされてきた。実際にそのような現場を訪問し、これから地域の復興や防災・減災の中心となり得る生徒たちの使命感を喚起できたに違いない。

2 課題

今年度は「防災・減災について体験を通して学ぶ」を軸として事業を実施した。各事業の教育効果については、生徒のアンケートを見る限り、防災・減災への意識が大きく向上した。その高まった意識がさらに有効的なものとなるように、普通科の総合的な探究の時間や海洋開発科の課題研究、全校としては避難訓練やボランティア活動といった、すでに本校で実施されている復興教育に係る活動を関連付けて、目的を明確にして実施することで、復興教育を恒常的に持続可能な取り組みとしていきたい。

また、防災について考えるときに地域とのつながりは非常に大切なものとなっている。そのため、各事業や諸活動において、地域住民や役場、近隣の小中学校と交流・連携して実施していくことで、より実践的な体験を通して、生徒の学びとしていきたい。



「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：岩手県立気仙光陵支援学校

列車活用

I 事業の概要（地域の実情含む）

今年度の「震災学習列車活用スクール」は、全校児童生徒56名中、中学部10名の生徒を対象として実施した。

本校の経営方針の中に「健康・安全教育及び防災教育、復興教育の推進」が明記されており、中学部の重点項目においても「地域での活動や交流などの実際的な経験をとおして自己有用感を育み、役割意識を高める。また、地域の復旧・復興の状況を知るとともに、安全な避難や災害に備える学習をとおして自らの身を守る態度を育てる。」とある。

これらの教育目標を達成するにあたり、本校の所在地である大船渡市には三陸鉄道の路線があり今回の「震災学習列車活用スクール」の事業を活用することとした。

また、事前学習を行った際に生徒に質問してみると実際に三陸鉄道を利用したことのある生徒が少なかった。本校卒業後や日常生活の中で利用するという意味からも、地域の交通機関を活用する本事業を計画した。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、実施可能かどうか危ぶまれたが参加者及び受け入れ側にも感染者等はなく実施することができた。（当初の実施内容を変更して行った。）



2 鶴住居復興スタジアム見学

当初は、スタジアム施設内の見学も計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大による日程変更のため外観およびスタンド席の見学とした。



II 取組の概要

1 震災学習列車活用スクール

三陸鉄道盛駅から釜石駅までの区間で乗車体験をした。車内では、三陸鉄道職員による三陸鉄道や復興の道のりなどの説明を聞くことができた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 取り組みの成果

(1) 震災学習列車活用スクール

ア 地域の交通機関を利用することができた。

本校中学部の生徒は全員大船渡、陸前高田地区在住である。概要欄にも記載したが、実際に地域の交通機関を利用したことがある生徒が少なかった。今回活用させていただいた三陸鉄道についても「駅があることは知っている」「三鉄という名前は知っている」程度であった。地域の公的な交通機関を利用することにより「自分の家の近くにも駅がある」など身近な存在として感じることができた。(昨年度の復興学習では盛駅から陸前高田駅までBRTを利用した)

イ 住んでいる地域の震災からの復興の様子を自分たちの目で確かめることができた。

事前の打ち合わせで特別支援学校の生徒対象ということをお願いした。当日の三陸鉄道の職員さんも震災の内容だけではなく三陸鉄道に関するクイズや時々ユーモアを交えながらの説明で生徒も集中して話を聞くことができた。また、途中の駅でホームに降りて駅舎を見学しながら三陸鉄道が復旧してから多くの方が訪れている様子や車両についての説明も聞くことができた。

各停車駅でも震災直後の写真と現在の様子を見比べることによって「変わっているところ」「変わらないところ」を説明だけでなく直接目で見て確かめることができた。

今回は生徒一人一人がタブレットをもって参加した。車窓から見える風景や町の様子を各生徒が撮影しその後の事後学習での振り返りにも役立てることができた。



(2) 鶴住居復興スタジアム見学

近隣地域にある復興の象徴的な施設を見学することにより全国的に有名な施設を身近に感じることができた。

実際にスタンドの客席に座ってフィールドを見ながらここでラグビーのワールドカップが開催され世界的にも注目されたことを説明すると驚きの声を上げていた。当日、地域のこども園の子どもたちがフィールドに入って運動していた。「いいなあ」「入ってみたい」と話す生徒もいた。「サッカーもできますか？」など積極的に質問してくる生徒もいて予想以上に興味関心をもって見学している様子だった。

2 今後の課題

コロナ禍の中で地域に出向いての復興学習を実施しにくい状況が続いている。実際に生徒が直接体験できる学習を計画実施できればいいが、リモートでの学習など活動の幅を広げていく必要があると感じた。



「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：岩手県立久慈拓陽支援学校

I 事業の概要（地域の実情含む）

1 学校概要

本校は久慈市侍浜に位置し、小学部28名、中学部15名、高等部31名が在籍している。寄宿舎を併設しており、久慈市、洋野町、二戸市、宮古市、九戸村から児童生徒は通学している。東日本大震災や豪雨災害で被災した児童生徒もおり、学校では年に数回の避難訓練や非常食体験などを通して防災意識を高めている。

2 対象生徒について

今回は高等部3年生を対象に、震災復興学習を実施した。生徒たちは震災当時6歳で小学校入学直前だった。避難所で生活した生徒も多く、当時の映像や関連資料を見ることに抵抗を感じる生徒もいる。しかし被災経験から防災意識は高い。

3 学習のねらい

- (1) 復興の歩みと社会変化を理解する。
- (2) 自分たちが復興・防災のためにできることは何かを考える。
- (3) これからの社会の生き方を考える。

II 取組の概要

1 久慈市の復興の歩みを学ぶ

久慈市が発行している「久慈市復興事業記録集」から市内各地の被災状況、復興事業内容、事業による効果を読み取り、ポスターにまとめた。震災で被害を受けた建物や防潮堤などが、強度を上げて再構築したことや、避難しやすいように道路を整備したことなど、久慈市が災害に強い街へと変化したことを学んだ。また観光施設が復興拠点としての機能も兼ね備え、復興・防災について発信していることも知ることができた。



＜制作したポスターを使って発表する様子＞



- 2 「いきる・かかわる・そなえる」の観点で学ぶ
久慈市の取り組みと自分たちが学校や日常生活で取り組んでいることを各自で調べたり考えたりし、クラス全体で意見交換をし、意見をまとめた。

(1) 久慈市の取り組みについて

「広報くじ」の掲載記事から読み取り、3観点到該当するものを選定した。

ア いきる

復興には人材が必要である。その人材（＝命）を守る取り組みに心身の健康維持に関わる物が含まれると捉えた。久慈市では「こころとからだの健康づくり講座」を開催している。心の健康にも着目し、普段から気を配っていく重要性に気付くことができた。

イ かかわる

スポーツ交流会や清掃ボランティア活動を通して、人々の関わりを促進していることが分かった。自主防災組織を結成することで関わりだけでなく、地域住民の防災意識を高めていることが分かった。

ウ そなえる

避難訓練の実施、ハザードマップの公開、防災士の養成に取り組んでいることが分かった。久慈市の広報は防災・災害対策情報が普段から多く掲載されていることから、市民の防災意識を常に高めるねらいにも気付くことができた。

(2) 自分たちができる取り組みについて

ア いきる

災害時にどのように避難するか全員で確認した。また普段から体力を保つためにしっかり食べ、運動し、睡眠を取ることが、自分の命を守ることにつながるという考えを全員で共有することができた。

イ かかわる

本校高等部では、学校がある堀切地区の清掃活動「堀切クリーン作戦」や花壇整備事業、田屋町組みこし会との「みこし交流会」などに取り組んでいる。地域住民と関係を築き、地域の活性化を促す役割だけでなく、交流を通じて築いた関係性が災害時に生かされるという意見が出た。避難所で地域住民とともに過ごす可能性から、円滑に避難所運営を行うためにも、普段から地域住民と顔見知りであることが望ましいということである。地域交流の意義と効果について考えを深めることができた。

ウ そなえる

図書から防災対策について知識を増やし、考えを深めることができた。家の中での避難経路の確保やハザードマップ、避難場所の確認など必要なことを改めて見つめなおすことができた。



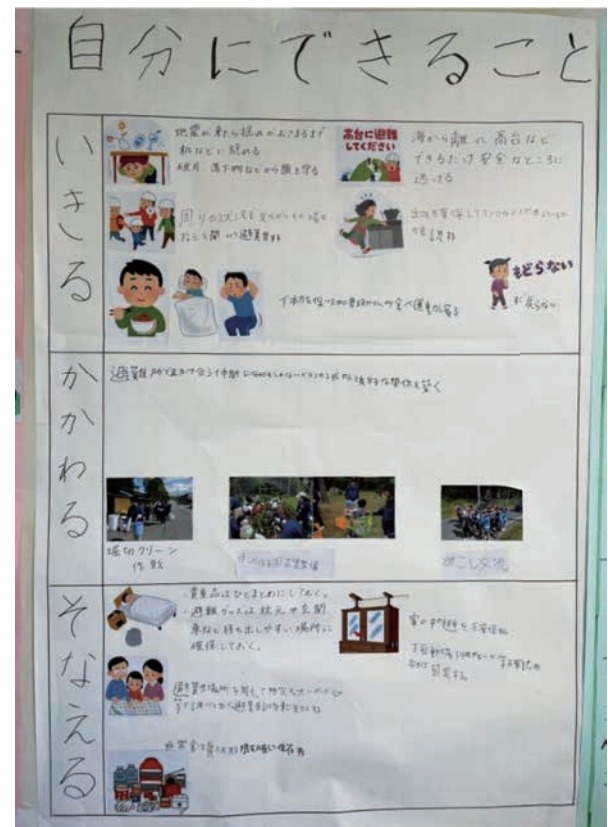
<久慈市の取り組みに関するポスター>



<資料を読み解く様子>



<分かりやすいイラストと説明文を添えてポスターを制作している様子>



<自分たちができることをまとめたポスター>

3 自分たちのこれからの生き方について

今後どのように生きていくか、復興とどのように関わっていくかを各自でワークシートを用いて考えた。その後、学年全体で意見交換を行った。

(1) 「いきる」の観点

4月から社会人となる生徒たちは、労働と生活の両面で考えた。自分たちが働くことで社会の活性化につながる、社会の役に立つという意見が出た。そのためには趣味や夢を大事にしながらか心身の健康を維持し、しっかりと仕事に励んでいくという考えに至った。

(2) 「かかわる」の観点

地域の人や家族、友達、職場の人との関わりを深めること、災害時に自ら困っている人を助けに行くこと等が挙げられた。関わりを深めるための具体例には地域清掃などのボランティア活動や祭りなどへの参加といった地域を活性化させる内容が挙げられた。

(3) 「そなえる」の観点

防災グッズを購入すること、避難訓練をすることが挙げられた。具体的にどのような点に留意するか話し合い、より考えを深め、以下の通りにまとまった。

- ・防災グッズは自分が災害時に必要になる物をよく考えて購入し、玄関や移動用の車内など複数かつ分かりやすい場所に設置する。
- ・避難訓練では、避難場所を地図で確認するだけでなく、訓練に参加して、いざというときのために見通しを持てるようにする。



4 震災復興学習列車での学び

三陸鉄道の震災学習列車「田野畑駅～久慈駅」の区間に乗車し、ガイドによる説明を聞きながら、被災状況や復興までの歩み、三陸鉄道の復興に対する思いを学んだ。

三陸鉄道は震災で線路も列車も流され、再び列車を走らせることは無理であると思われていた。しかし地域住民や地元企業、自衛隊の支援を受けて震災からわずか5日後に列車を走らせた。困難な状況でも立ち上がった、三陸鉄道の復興にかける熱意と思いを聞き、生徒たちは震災の教訓を次世代に伝えていく必要性を感じる事ができた。



5 久慈市立図書館の復興に関する取り組み

久慈市立図書館は令和2年7月に開設された久慈市情報交流センターYOMUNOSUの2・3階にある。従来の図書館とは異なり、観光案内所と図書館がひとつになった複合施設で、地域内外の人々へ情報を発信し、交流を促進する場所である。災害時には避難施設としても活用できる。

震災学習列車に乗車後、姉帯裕子館長より復興に関する図書館の取り組みと役割について講話をいただいた。

【取り組み内容】

- ・災害に関する記録の保管
- ・市民への災害記録や情報の寄贈募集
- ・防災に関する図書の展示
- ・震災関連図書の作者によるトークショー
- ・震災関連図書の読み聞かせ



防災に関する図書の展示に際しては、より注目してもらおうために防災センターから防災グッズを借り、併せて展示した。また年齢に応じた選書を行い、幅広い世代が図書から知識を得られるようにした。災害の記録に関しては、学校等で作成した文集も保管し、災害の記憶が風化しないように努めている。

「いざという時に少しでも命を守り、助かる確率を上げる」そのための知識を伝える図書を揃え展示し、市民に生き抜く知識を伝えることが役割だとおっしゃっていた。生徒たちは図書館の復興における役割を実際に聞くことで、自分たちが本学習に取り組む意義を再確認することができた。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 震災後の社会変化を学ぶ

市内の様々な設備が持つ役割を知ることができた。道路が被災後に市民がより使いやすいよう、災害時には避難しやすいように整備されたこと、観光施設が復興の歩みを伝える場所でもあることを知り、街づくりに関心を持つことができた。

(2) 「いきる・かかわる・そなえる」

3観点で考えていく中で、2つの観点を併せ持つ取り組みもあることに気づいた。例えば、避難訓練は「そなえる」に分類される内容だが、訓練を通じて地域の人と「かかわる」こともあるという意見が出た。「いきる・かかわる・そなえる」はそれぞれが関連し合っていることに気づき、久慈市の取り組みへの関心を高めることができた。

事業が行われる意義を学び、自分たちが街づくりにどのように参画していくか具体的に考えることができた。

(3) 三陸鉄道と図書館の役割を学ぶ

震災の記憶を後世に伝え、防災に取り組んでいることを学んだ。被災経験をどのように生かすか、防災のために何ができるか、それぞれができることは異なる。生徒たちが自分にできることを考える有意義な学習であった。

(4) 互いの意見を尊重しながら話し合う力

互いに意見を尊重しながら話し合う力を伸ばすことができた。意見の表出が苦手な生徒も積極的に発言し、学年全体で話し合

うことができた。具体的な理由を添えて相手に自分の考えを伝えられるようになった。また適切な語彙・表現が見付からず上手く意見をまとめられない生徒に他の生徒が助言し、生徒同士で互いの意見を生かしながら学年全体の考えをまとめようとする場面も増えた。

(5) 社会とのつながりを感じ、次につなげる

一人一人の行動が地域全体の復興と防災につながることを感じ、社会参画意識を高めることができた。そして自分たちには、経験や知識を次世代に伝える役割があると気付くことができた。今回の学習では制作したポスターを使用し、保護者と高等部1・2年生に発表会を行い、学んだことを実際に伝えることができた。

2 課題

(1) 授業実践の方法について

意見交換の場面を多く取り入れた学習を実施した。話し合っている内容を十分に理解できない生徒もおり、途中で内容を確認したり、分かりやすい言葉に言い換えたりする必要があり、実態に応じた支援の重要性を感じた。意見を適切な言葉で表現することが難しい生徒も多く、国語の内容とも関連付けながら指導することの必要性を感じた。他教科や普段の場面でも、表現や語彙の拡充を心掛け、生徒たちの力になるようつなげていきたい。

(2) 年間を通じた復興・防災教育への位置づけ

生徒は一連の学習を通して、日頃の学習活動や日常生活で取り組んでいることが復興防災につながることを、命を守る大切さを理解できた。避難訓練や非常食体験とも関連付け、生徒の理解を深めていきたいと感じた。年間を通じた復興・防災教育の在り方についても検討し、生徒の防災意識を高めていきたい。

(3) 学習内容の設定

次年度以降も継続的・持続的に取り組んでいくためには、そのとき対象となる生徒の実態に応じて内容を検討する必要がある。同時に生徒の被災経験や心理的負担も十分に考慮すべきである。生徒にとって負担が少なく、学びや生きる力となるような内容を協議、実践していきたい。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：住田町立世田米中学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

中間山間地域である住田町は、気仙川の氾濫や土砂災害等自然災害の発生が懸念され、自然災害の発生時に、教職員及び生徒が危険予測と自らの生命や身体を守るために判断し、主体的に行動できる力を育成する必要がある。また、沿岸南部の気仙地方に属し、東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市、大船渡市と隣接している。震災直後に本町は、後方支援にあたり積極的にボランティア活動に励んだ。翌日からの炊き出し、公民館をボランティアの宿泊施設として貸し出す、更には、町内に一戸建て木造仮設住宅を建て、被災者に無償で貸し出しを行った。

東日本大震災から11年が経過し、震災を知らない現在の生徒を対象に「郷土の自然的・社会的要因をつかみ、災害から命を守るための能力や資質の向上を図るために、人間としての在り方・生き方を考え、命を尊重する心を育成する」という目標のもと本事業に取り組んだ。

II 取組の概要

1 専門機関と連携した活動

(1) アドバイザーを活用した研修会の実施

本校では、自然災害の危機に際して自らの命を守り抜くため「主体的に行動する」態度を養うことを目的として全校防災学習を設定している。今年度は『いわての師匠』派遣事業を活用し、あいおいニッセイ同和損害保険㈱より講師を派遣いただき、「身の回りのリスクと備え」と題し講演会を行った。常時携帯しているスマホの防災アプリ『cmap』を活用しながら、被害予測やハザードマップ、避難場所の確認等を行った。生徒はタブレットを持参し、グループで協力しながら操作方法を確認した。また、講演を通して災害に備える方法を確認した。



〈講演の様子と cmap を活用している生徒の様子〉

(2) 避難訓練・救命講習会の実施

ア 地震や火災などの非常災害発生時に安全かつ迅速に避難し、命を守るための避難訓練を年2回実施した。地域の大船渡消防署の方に参加していただき、避難時における留意点や、防災・減災に関する講義により、防災に対する意識の向上を図ることができた。

イ 大船渡消防署の方を講師に招いて、全校生徒で救命講習会を実施した。1・2年生(救命入門コース)、3年生(普通救命講習I)を行い、応急手当の基礎知識、救命措置・手当の方法、AEDの使用方法について実践的に学んだ。



〈避難訓練の様子と救命講習会の様子〉

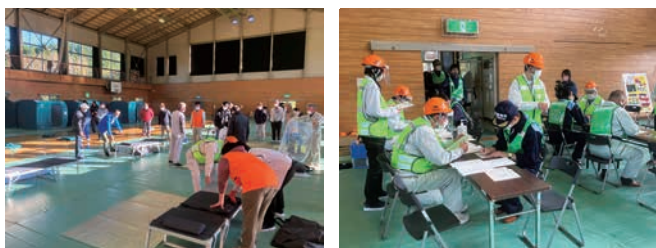
(3) 岩手県総合防災訓練への参加

災害対策基本法、住田町地域防災計画に基づき、防災関係機関、岩手県、住田町(公民館、消防団、婦人消防協力隊等)、自衛隊の協力のもと総合的かつ実践的な訓練が本校体育館で実施され、本校の防災担当職員が参加した。

台風の接近により、大雨(土砂災害、浸水害)、洪水警報が発令されたことを想定し、円滑な応急対応ができるよう関係機関の協力体制の確立を図る取り組みを行った。地域住民の一人として防災意識の高揚を図るとともに、地域の災害時における本校の役割の大きさについて改めて認識する機会となった。後日、参加した職員による校内研修を実施し、訓練の様子を記録した映像を活用して教職員全体で取り組みの確認を行った。

【訓練項目】

- ・防災マップ使用による避難訓練
- ・自主防災組織による災害時要援護者の誘導
- ・災害対策本部の設置訓練
- ・防災行政無線等による情報伝達訓練
- ・避難所開設
- ・運営訓練広域避難受入れ訓練
- ・ヘリコプター情報収集訓練 等



＜岩手県総合防災訓練の様子＞

2 「地域創造学」への取り組み

住田町では、文部科学省より研究開発学校の指定を受け、教育研究課題「自立して生き抜く力を身に付け、他者と協働してよりよい豊かな人生や地域づくりを主体的に創造することのできる人材の育成」に向けて、幼、小中学校及び高等学校が協力して「地域創造学」の学習に取り組んでいる。

(1) 1学年防災学習の実施

住田町で取り組んでいる「地域創造学」のカリキュラムに位置付けられている「地域の防災意識を高める」という単元の中で、1学年において下記の内容で実施した。東日本大震災を機に、地域防災や減災の意識が高まってはいるものの、まだまだ身近に感じていない生徒が多い。今年度は『知る・分かる・生かす』をテーマに学習に取り組んだ。

ア. 住田町の災害についてと震災当時の取り組みについて知る	【事前学習】
イ. 被災地(陸前高田市)訪問	【訪問学習】
東日本津波伝承館見学	
陸前高田震災語り部ツアー	
陸前高田市街地フィールドワーク	
ウ. 陸上自衛隊による講話と実習	【体験学習】
エ. 個人新聞作成 (個人)	【事後のまとめ】
オ. まとめ、発表(グループ)	【事後のまとめ】

ア 復興教育副読本『いきる・かかわる・そなえる』の31住田町の後方支援の内容を取り上げ意見交流しながら理解を深めた。

イ 訪問学習において、陸前高田市街をフィールドワークしながら、自分たちの目線で、被災地ならではの防災の工夫などを感じ取る活動を取り入れた。

ウ 『学校防災アドバイザー』派遣事業を活用し、自衛隊の方々を講師に「災害時の支援についての講話、災害時に活用できる技能等の実習」を実施した。実習では、簡易担架の作り方・ケガ人の搬送方法・ロープワークを教わった。県総合防災訓練の映像を活

用して災害時の備えについても学習した。

エ 防災学習全体を通して感じたこと、今後に生かしていきたいことなどを個人新聞に書きまとめ(振り返り)とした。

オ 訪問学習や体験学習の様子を紙媒体にまとめて掲示するとともに、一連の学習の写真や映像の記録も活用してグループごとに発表し、学びを共有した。



＜自衛隊の方々による講演・実習の様子＞

(2) 学習指導検証部会の実施

地域創造学年間指導計画に基づいて授業実践・評価を行い、児童生徒の実態に応じて、他部会(学校カリキュラム検討部会、評価検証部会、就学前教育研究部会)や地域と連携しながら、防災学習の単元計画の見通しや指導の改善を図った。また、幼、小、中、高の異校種との連携を深めた。

【研究内容】

- ・年間指導計画に基づいた授業実践を行い、児童生徒の探求的な学習活動の充実に向けた、探求のプロセスに基づく多様な授業展開の在り方を探る。
- ・年間指導計画及び単元計画の作成
- ・社会的実践力の系統表の作成

【年間活動内容】

- 4月 第1回住田町教育研究所全体会
第1回学習指導研修部会
- 7月 第2回学習指導研修部会
- 12月 第3回学習指導研修部会
- 2月 第2回住田町教育研究所全体会



＜学習指導検証部会の様子＞

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- 外部機関の人材を活用することで、様々な専門的な観点から防災・減災について学ぶことができた。より身近な問題としてとらえることができた。
- 全校防災学習においては、『いわての師匠』派遣事業を活用したことで、例年と異なる角度から防災について考えることができた。
- 防災アプリや記録映像を活用することにより、学習の効果を一層高め、実際の防災に役立つ知識を身に付けることができた。

〈生徒の感想〉

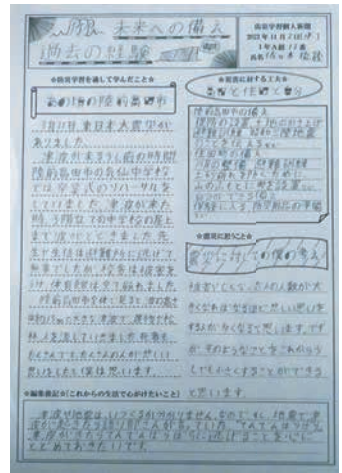
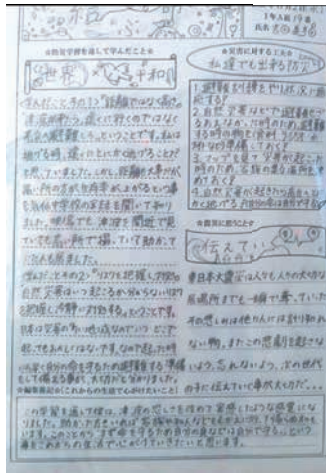
「cmap」を使えば1つのサイトで様々なことを調べられるのがよいと思いました。また、自分は今、何を備えればいいのかを知ることができて、より防災への意識が高まった。

- 東日本大震災の被災地の近隣でありながら、震災についてなかなか知る機会がなかった生徒たちにとって、津波伝承館や震災遺構の見学は貴重なものとなった。感じるものも多く心に残すことができた。

〈生徒の感想〉

東日本大震災は人々も人々の大切な居場所までも一瞬で奪っていった。その悲しみは計り知れないもの。この悲劇を起ささないよう忘れないよう、次の世代に伝えていくことが大切だ。

- 全校生徒で救命講習会を実施することで、応急手当の基礎知識や救命処置の仕方、AEDの操作の仕方学ぶとともに、「命」を助けるという別の視点でとらえることができた。
- 各防災学習において、事後のまとめや振り返りを大切にして取り組むことで、様々な場面に応じた判断や行動についての学びを実感することができ、今後の生活や学習につなげる意識を高めることができた。



〈学習のまとめ〉

2 課題

- 1学年防災学習については、地元の災害について知る時間の設定が少なかつたので、事前学習の計画の再構成が必要である。
- 1つ1つの取り組みが単発で終わることがないように、学校教育活動に関連付けて計画的に見通しをもって進めていく必要がある。また、今年度の反省を次年度へいかしていく必要がある。
- 今後は、異校種（小学校、高校）や他の中学校と連携を更に進めて、より防災・減災への意識を高め、主体的・対話的な深い学びへつなげていきたい。
- 地域の実態に応じた持続的で発展的な防災・減災学習を関係機関、地域、保護者と連携し一体となって取り組んでいく体制を構築する必要がある。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：盛岡市立桜城小学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

本学区は、盛岡市の中心部にあるが、学区の東西に2つの河川が流れており、本校及び近隣の中学校区は要支援者配慮施設に指定されている。そのため、水害から自らの生命や身体を守るための正しい判断や対処について学習する必要があると考え、中学校区の小中学校3校で連携し、復興防災教育に取り組むこととした。

II 取組の概要

1 ねらい

- 3つの教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」と関連付けた地域の防災に関する課題の解決に向け、各教科等で身に付けた知識等を横断的に活用する力を身に付けさせる。
- 起こり得る水害の危険について知ることにより、防災意識を高めるとともに、安全な避難方法(垂直避難・保護者引渡し)についての理解を深め、安全な行動をとるための判断力を高める。
- 地震、及び地震と火災を想定し、避難訓練・煙体験を実施し、安全に避難する判断力を高める。
- 様々な災害から、生きるためにどんな備えが必要であるか考えることを通して、防災意識を高める。

2 学習内容

(1) 水害時引渡し訓練

大雨により北上川の水位が上昇し危険と判断した場合を想定し、校内で避難、その後、水位が下がったと想定し、児童の安全を考えて保護者への引き渡しを行った。

1、2階の低学年、さくら学級は、水位が上がってきたら高いところに避難することを学習し、3階へ実際に避難した。



3、4階の中・高学年は、昨年度の学習を生かし、資料を用いながら大雨の際に考えられる危険や避難の仕方を学習した。

その後、保護者にメールを配信し、担任が確実に保護者への引き渡しを行った。

今回は大雨による避難訓練を想定したが、保護者引渡しとなる状況は他にも考えられるため、実施したことで成果もあり、また新たな課題も見つかった。



(2) 地区調査活動 2022in 下橋

本来であれば、実際に地区を歩きながら危険個所を確認し、中学生と共同で安全マップを作成する予定であったが、コロナ蔓延により中止となったため、夏休みを利用して個々に危険個所を調べた。その後、調べた危険個所のマップを持ち寄り、中学生作成のマップに書き加えて、地域の安全マップを完成させた。様々な視点で危険個所を確認することができ、より地域を知ることができた。



(3) 命を守る学習

児童はこれまでに、水害の起こる状況や水害が起こった際の危険、避難の仕方等を学習してきた。

そこで、今年度は5年生を対象に「そなえる」に重点をおき、災害時にライフラインが途絶えた時のために必要な備えについて考える学習を行った。

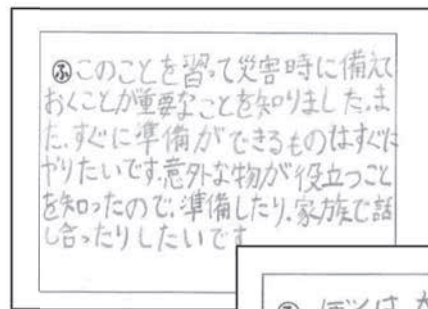
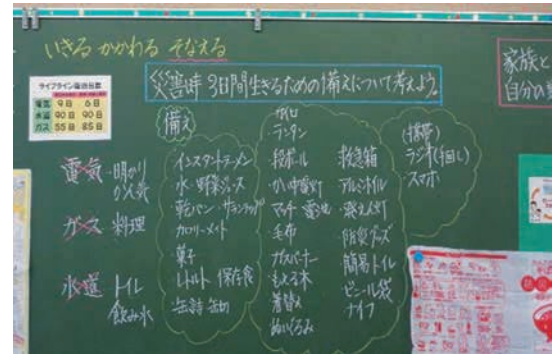
命を守る学習 ～いきる かかわる そなえる～			
1	ねらい 災害時にライフラインが途絶えた状況下での生活を考えることで、日頃から災害に備えよとする実践的な態度を育てる。		
2	授業の展開		
1	学習内容 近年起こった災害（地震・水害など）を振り返るとともに、災害時の生活で困ること考える。	教師の支援 ・写真を活用しながら、避難所での生活の困窮さに気づかせる。 ・ライフライン復旧の表を示しながら復旧まで時間がかかることを押さえる。課題へつなげる。	備考 ・災害の写真 ・避難所の写真 ・ライフライン復旧の表
2	課題を設定する。 災害時の工夫や災害への備えを考えよう。	・大きな災害のとき、3日間は生きることが命をつなぐことになることを押さえる。	・学習プリント
3	災害時に必要なものや工夫して活用できるもの考える。	・12月、電気・ガス・水道が使えなくなったことを想定させる。	・学習プリント
4	紙で考えたことを共有し、分類に書く、分類しながら発表に臨む。	・話し合いながら、必要だと想うものを調べ、分類しながらまとめさせる。 (食/草子/寝具/医薬品/生活用品/貴重品/その他)	・付箋紙・ペン ・分類した色画用紙
5	全体で共有する。	・分類した項目を確認しながら、アルファ米を紹介する。	・消毒液 ・アルファ米（1袋300g）
6	アルファ米を作って試食する	・お湯なら1.5分、水なら6分までで炊けることを紹介し、本時はお湯で作ってみる。 ・もし避難所を持って行くならば無理であること、日頃から実践で話し合い準備する必要があること、ローリングストックを押さえること。	・ボット ・椀皿・スプーン ・ゴミ袋
7	共有したことをもとに、「我が家の備えリスト」を作成する。	・小さな子どもや赤ちゃん、お年寄りなどこの家族構成によって必要なものが変わってくることを押さえる。	・学習プリント
8	振り返りをする。	・初めて知ったことややってみたいと思ったことなどを発表させる。	

東日本大震災を経験していない子どもたちに、副読本「いきる かかわる そなえる」を使用して、当時の被害の様子や避難所となった体育館の様子などの資料を見せたり、電気・ガス・水道といったライフラインが復旧するまでにかかった日数を提示したりしながら、避難所生活がどれだけ大変だったかを考えさせた。そのうえで、備えとしてあったらよいものを考えさせた。児童からは、食に関する備えが多く挙げられた。

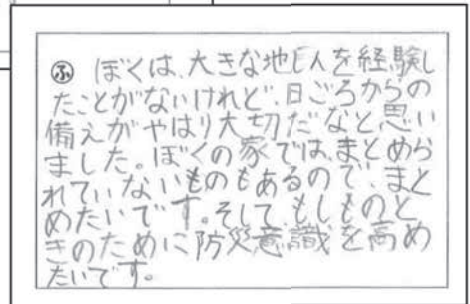
そこで、保存が利き、簡単に調理して食べられるアルファ米を紹介、試食した。初めて目にする児童も多く、お湯や水でも簡単に調理できること、おいしいことに驚いている児童も多かった。



その他、懐中電灯など明かりを灯すもの、毛布などの寒さ対策となるもの、ラジオなど情報関係の備えが挙げられた。寒さ対策にアルミホイルが役立つことを発表した児童もいた。



【児童の感想より】



Ⅲ 成果と課題

1 成果

- (1) 災害時、子どもたちの命を守るために、様々な想定下での避難訓練を実施することができた。中でも、保護者引渡し訓練は実際に想定して行うことができた。
- (2) これまでの防災学習（災害の怖さ、避難の仕方）に加え、小学生でもできる「備え」について考えることができた。個々の防災意識を高めることができた。

2 課題

- (1) 実際に大雨で北上川の水位が上昇したこともあり、災害は身近なものになっている。発達段階に応じた防災学習を系統的に整理していく必要がある。
- (2) 保護者引渡し訓練では、悪天候の中での引き渡しになること、学区外の児童や迎えに来られない家庭があることなど、より安全に迅速に行うことの検討が必要である。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：盛岡市立杜陵小学校

I 事業の概要 (地域の実情含む)

本学区は市内の中心に位置し、学区は商店街として人の往来の多い肴町・内丸・菜園・大通り、そして昔のたたずまいの残る大沢川原・清水町・馬場町・下ノ橋町・南大通からなっている。盛岡城跡公園や、鮭が遡上する清流中津川を目前に、自然環境、学習環境に大変恵まれている。

中津川は、過去に洪水・水害を繰り返してきた歴史がある。本校では児童が、水害や地震等の自然災害から自らの生命や身体を守るために、正しい知識や判断に基づいた行動について学習する必要があると考え、中学校区の小中学校3校で連携し、令和3年度から復興防災教育に取り組むこととした。

また、河川は、自然災害をもたらす危険なものであると同時に、海とつながる豊かな恵みや環境をもたらす大切なものであることを理解させるための環境学習にも取り組むこととした。

II 取組の概要

1 ねらい

- 学区で過去に起きた自然災害や地域の様子、特に中津川水害の危険について知ることにより、防災意識を高めるとともに、安全な避難方法についての理解を深め、安全な行動をとるための判断力を高める。
- 各教科等で身に付けた知識等を横断的に活用する総合的な学習(こずかた学習)を通して、復興教育の3つの教育的価値「いきる」「かかわる」「そなえる」と関連付けた地域の防災に関する課題解決を図る。

2 取組内容

(1) 水害避難訓練・引き渡し訓練

本校の間近を流れる中津川は、約800m下流で北上川・雫石川と合流する。そのため、本校周辺地域は水害時0.5~3.0mの浸水が予想されており、いるため、水害を想定した避難訓練を令和2年から実施している。



水害時避難行動

今回の水害避難訓練では、防災アドバイザーの助言を参考にして避難場所までの順路を見直し、より安全で確実な避難を心掛けた。課題であった保護者対応や引き渡しも緊張感をもってスムーズに行うことができた。



避難場所で待機中の児童

(2) 防災教育 2年「いのちのまもり方」

本校では、火災や地震を想定した通常の避難訓練の他に毎年9月の盛岡市シェイクアウト訓練に全校で参加している。各学年に応じた事前事後の指導をしているが、2学年では、訓練後に学級指導で地震発生時の行動について学んだ。教室の中を見渡して地震の時に危ない物や場所を見つけ、それらがなぜ危険なのか、どうすれば自分の命を守れるか一人一人が考えた。

さいがいりがおきたときのいのちのまもり方を考えよう	
児童の学習プリント	
1.教室をチェックしよう	
あぶない場所・もの	どうしてあぶないか(わけ)
上にあるものがあるたの近く	上にあるものがおちてくるかもしれないから。
黒はん	黒はんがたおれてくるかもしれないから。
電気の玉	電気がおちてくるかもしれないから。
せんぷう	豆頁におちてくるとあぶないから。
本	手とかにおちたらあぶないから。
ランドセル	ものが入っているとあぶないから。

児童の振り返り

- ・教室で地震が起こったらダンゴムシのポーズで机の下に避難するのいいとわかったので自分の命を守りたいです。
- ・学校にいないときは、自分のランドセルを頭に持ってくれば頭を守れると思いました。

(3) 第5学年こずかた学習「わたしたちの中津川」
ア 身近な自然の中津川を学ぶ

中津川は盛岡市民の憩いの場でもあり、児童にとっても身近な存在である。その一方で、中津川の自然環境についての知識は多くなく、調査活動を通して環境に対する関心を高めた。



中津川の水質・生物調査

中津川が豊かで美しい流れであることを知った児童は、国土交通省の方や地域の方の話から、清流中津川の魅力や洪水の歴史について学んだ。



GT講話「中津川の洪水の歴史」

さらに、サケの発眼卵を譲り受け、管理・飼育活動を通して中津川を守るために自分たちができることを考えた。



サケの発眼卵贈呈

調べてわかった中津川

- ・災害があつて危険だけど、昔からずっと人々や生き物に愛されている川だとわかった。
- ・中津川は過去に洪水が起きたことがある。避難所や洪水対策もあることが分かった。
- ・だれのお話を聞いても、中津川への思いが伝わってきた。地域の人にも生き物にも愛されてきた川だと思う。

イ 津軽石小学校との交流

被災地の宮古市訪問は、新型コロナウイルスの感染状況から、津軽石小学校5年生とのZoomによるオンラインでの交流となった。お互いの学習の成果を発表・意見交流する際にロイロノートを活用することで資料提示等が効果的にできた。

杜陵小から津軽石小への質問

- ・サケの育ち方について教えてください。
- ・サケの稚魚にはどんな餌をやればよいですか。
- ・サケの回遊ルートは決まっているのですか。
- ・津軽石小では、環境を考えたSDGsの取組を何かしていますか。



津軽石小とのオンライン交流



(4) 下橋中学校区3校連携の取組

※下橋中学校の実践事例(地区調査活動2022 in 下橋)を参照

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 水害避難訓練では、避難経路の複線化と垂直避難について助言があった。状況に応じた避難の在り方や改善点が明確になった。
- (2) 宮古市の直接訪問が中止となったが、結果的に津軽石小とのオンライン交流ができたことは、今後の被災地との交流継続に大きな成果となった。

2 課題

- (1) 実際の水害時を想定して、関係機関や地域の防災組織との連絡体制を整えていきたい。
- (2) コロナ禍による中止や変更が相次ぎ、当初の計画通りに活動が展開できなかつた。中止や変更を想定した代替案や計画の立案を考える必要がある。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：盛岡市立下橋中学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

本校区は、盛岡市中心地に位置し、学区に盛岡駅、菜園繁華街、官公庁を有する。校舎は、中津川沿いに立地し北上川も近い。近年の気象災害の状況を鑑みると、水害への対策が必要な地域である。

本校区は、昨年度に引き続き盛岡市教育委員会より、「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール)の指定を受け、本事業の取組を行うこととした。内容としては、昨年度を踏まえ、「地区調査(生活安全・防災安全)」「安全マップ作成」「防災講演会」を加えて実施することとし、本事業の成果として挙げられた「小中連携」を推進することを本事業の柱として計画した。

II 取組の概要

1 「いわての教え」としての復興教育

本校では、「復興教育」を「いわての教え」という名称で取り組んでいる。これは、東日本大震災の経験やこれまでの「復興教育」で積み重ねてきた生徒の学びを、「これから先も引き継いでいくもの」の意味をより強く意識していきたいと考えたからである。また、本校がこれまで取り組んできた環境教育やSDGs、NIEなどの諸活動と、復興教育の考え方を改めて整理することにより、既存の活動をカリキュラムマネジメントの視点で見直すことにもつながっている。

2 3校による合同研修会【6月9日(木)】

6月9日(木)に、校区3校の教職員を対象に「防災教育研修会」を開催した。本研修会では、講師に、岩手大学客員教授 越野修三氏を招聘し、講義と演習を行った。演習では、「MM (Map Maneuver)」の概要と「状況判断(ケーススタディ)」の実際を体験することができた。いずれも、災害時の危機(リスク)をどれだけ具体的にイメージし、適切な判断をすることができるかを求めるものである。学校現場におけるリスクマネジメントとして必須の資質・能力であり、管理職のみならず、本中学校区の多くの教職員が研修を受けることができたことに、大きな意義があると考えている。

特に、学校防災は、近隣の小中学校等を中心に地域全体で連携していくことが大切であり、今回の講演は、同じ地区の教職員が共通認識をもち、

児童生徒の安全を守っていくという意識を高める機会となった。

また、今回の研修会は、教職員だけでなく、保護者にも参加いただいた。演習において、保護者と教職員が同じグループで意見交流することができたことは成果である。今後も、近隣小中学校との連携にとどまらず、この取組を近くの高等学校や地域の児童センター、公民館等の職員などにも周知し、地域全体に広めていくことが、今後起こりうる災害に備えることにつながると考えている。



3校の教職員混合でのグループ協議。越野教授も協議に参加していました。

3 地区調査活動2022 in 下橋【7月25日(月)】

本事業は、「自分たちで災害等から身を守ることができる」「小学校と連携し、地域清掃や自分が住む地域の安全マップ作りを通して防災や安全に対する意識を高め、地域に誇りをもつ」ことが目的である。

昨年度の成果と課題を踏まえ、「多くの保護者の参加」「(成果物である)安全マップの地域への配布」を新たに付け加え計画した。

しかし、計画していた時期に新型コロナウイルス感染症が急拡大し、やむなく、児童生徒、保護者の合同調査を中止することとなった。

代替え事業として

- (1) 児童生徒の「地区調査活動」は、保護者の協力のもと、夏季休業中に個人で行う。
- (2) 個人調査のワークシートをもとに、中学生が地区ごとに、昨年度の地図を更新する。

- ① 中学生が地区ごとに、昨年度の地図を更新する。
 - ② 中学生によって更新した地図をもって小学校を訪問し、小学生の調査結果を加え、再更新する。
- (3) 完成した「安全マップ」を業者に依頼し、ポスターとして制作、地域に配付する。

児童生徒の調査する危険箇所については、下記のとおりとした。なお、中学校での活動、小学校での合同活動をデジタルビデオカメラに録画し、次年度以降も継続して活動できるように記録した。

- ① 防犯上の危険箇所 (暗がりや不審者の危険 など)
- ② 交通安全上の危険箇所 (歩道が狭い、信号機のない横断道 など)
- ③ 災害時 (水害・地震) の危険箇所と避難場所の確認



中学生による安全マップの更新。昨年度作成したものに、今年の調査結果を書き加えていった。



中学生が更新した安全マップに、小学生の調査結果を書き加える。小中の視点の違いが明確になっていく。



本活動は、児童生徒が「自分ごと」として自分の地域を調査し、その結果を安全マップにまとめるものである。この活動を通して、児童生徒自らが、災害時のリスクマネジメントや安全な避難方法について理解を深め、防災意識を高めるとともに、「津波てんでんこ」に集約されるように、災害時に安全な行動をとるための判断力を高めることのできる児童生徒の育成を図りたい。

4 『いきる』『かかわる』『そなえる』シンボルマーク」の作成

本校では、美術の授業で『いきる』『かかわる』『そなえる』シンボルマークを作成している。これは、「いわての復興教育21の教育的価値」を生徒が具体的にイメージし、デザイン化、マークとして表現するものである。文(文章)でまとめられた教育的価値を、一人一人が解釈したことをもとにデザイン化することは、生徒の深い理解につながり、さらに、他者に発信するという主体的な取組になっている。



完成した作品と、作成途中のアイデアスケッチ。

III 取組の成果と課題

1 成果

(1) 既存の活動との整理

本校がこれまで取り組んできた環境教育やSDGs、NIEなど諸活動と、復興教育の考え方を改めて整理することができた。その上で、既存の活動をカリキュラムマネジメントの視点で見直すことにつながった。

(2) 小中連携の推進

復興教育スクールの取組により、コロナ禍であっても小中連携を推し進めることができた。特に、安全マップ作りを通して児童生徒、教職員の交流が推進されたことは大きな成果である。

2 課題

復興教育として、「地域防災」に取り組むためには地域連携が必須である。町内会等と連携し、今年度の活動をブラッシュアップし継続していきたい。

また、コロナ禍における合同事業の在り方を検討しながら、児童生徒や地域との連携を推進したい。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：盛岡市立巻堀小学校

I 事業の概要 (地域の実情含む)

本学区は、北上川と松川に挟まれ、大雨のたびに避難勧告が出る地域である。そのため、自然災害の発生時に危険を予測し、主体的に行動できる力を教職員及び児童生徒が身に付ける取組が必要である。

II 取組の概要

(1) 避難訓練

ア 第1回避難訓練 4月25日

(火災発生時の避難及び避難経路の確認)

イ 第2回避難訓練 7月1日

(3校合同引き渡し訓練)

今年度2回目の避難訓練では、大雨、洪水被害を想定し、巻堀中学校区3校合同による引き渡し訓練を実施した。

準備として、事前に保護者に引き取り計画書を提出してもらい、当日、児童と共に帰宅する流れを確認した。

ウ 第3回避難訓練 6月13日

(不審者対応避難訓練)

児童に、不審者侵入時の合言葉を伝え、不審者が侵入した際の身を守るための訓練を行った。

エ 第4回避難訓練 9月1日

(地震発生時の避難訓練)

盛岡市シェイクアウト訓練に合わせて実施した。

(2) 防犯教室 6月10日



盛岡市少年センターから、専任補導員 石川氏を講師として招き、防犯教室を実施した。

不審者に遭遇したときの対処の仕方や、情報モラルについて学ぶことができた。

(3) 自衛隊滝沢駐屯地見学学習 6月24日



昨年同様、4、5、6年は、自衛隊滝沢駐屯地を見学し、東日本大震災等、自然災害発生時に復興支援にあたる自衛隊の働きについて学んだ。

災害派遣についての話を聞いたり、防災グッズ作りなどを体験したりすることができた。

(4) 修学旅行 7月14、15日

修学旅行は、昨年度同様、岩手県沿岸部に行き、様々な活動を行った。

ア 山田町立山田小学校6年生と交流学習



それぞれの地域の良さを伝え、伝統芸能を披露するとともに、啄木カルタを通して交流を深めた。

イ 東日本大震災津波伝承館見学



陸前高田市にある津波伝承館を見学した。津波のもつエネルギーやその被害の大きさに、児童は真剣な顔で説明に聞き入っていた。

帰りには、一人ひとりが献花台に花を供えてくることができた。



ウ イオンタウン釜石での情報発信活動



イオンタウン釜石において、買い物客に巻堀神楽を披露するとともに、手作りの姫神小桜ストラップを販売し、巻堀の魅力を発信した。

(5) 学習発表会 11月18日

ア 全校による防災学習の情報発信発表



昨年度の防災学習の発表に引き続き、今年度は、全校で、巻堀地域において自然災害が発生した際、どのように行動したら良いか、どんなものを普段から準備しておいたら良いかということなどについて発表し、地域の方々に情報発信した。

イ 巻堀神楽の発表



地域の伝統芸能である巻堀神楽を伝承会の方々からご指導いただき、学習発表会で発表した。

保護者にも、衣装の管理や着付けを協力してもらっている。来年度は、巻堀橋の開通式において、巻堀神楽を披露する予定である。

(6) ふるさと学習

ア 姫神小桜ストラップ作り



姫神山（巻堀地区）のふもとでしか採れない貴重な石「姫神小桜」を使って、ストラップを作り、情報発信活動の際に販売し、巻堀地区の魅力を伝えている。

イ 「プラザおでって」での情報発信活動



昨年に引き続き、4、5、6年生は、「巻堀の良さを発信し、地域の活性化を図る」というねらいで、「プラザおでって」において情報発信活動を行った。

地域の伝統芸能である巻堀神楽を披露するとともに、自分たちで作成した姫神小桜ストラップや、米づくり活動において収穫したもち米を販売した。

盛岡バスセンターが新しくなった時期でもあり、県内外の人や修学旅行生も足を止め、児童が作成したリーフレットを受け取り、巻堀神楽の発表に見入ったり、児童の姫神小桜の説明に耳を傾けたりしていた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 避難訓練（3校合同引き渡し訓練）

今年度は、7月に巻堀中学校区3校での合同引き渡し訓練を実施することができた。

保護者に、気象警報が発令された際の児童・生徒の安全な引き渡しについて確認してもらうことが大きなねらいであったが、初めての取組なので、小学校と中学校に兄弟がいる場合の保護者の動きや、迎えにくる車の渋滞状況、駐車場における誘導など、様々考えなければならないことが多く、想定外のことが起きてしまうことも念頭に入れながらの実施となった。

学校の場所や規模により、引き渡し状況に多少の違いはあったものの、保護者や職員の防災意識を高めることができた。また、今後、必要な役割や事前の準備などについても明確になった。

(2) 不審者対応避難訓練・防犯教室

具体的な事案を受けての説明や、実際に不審者が校舎内に侵入した場合の避難訓練により、自分の身を守るための行動について、日々から意識を高くもつことが大切だということを実感することができた。

夏休み前に実施したことも効果的だった。

(3) 陸上自衛隊岩手駐屯地見学

見学学習では、災害派遣で自衛隊がどのような役割を担っているか、ということを学んだ。特殊車両により、食事の提供や入浴の世話等、被災地の人々の暮らしを支える仕事を行っていることを知り、児童は自助、共助、公助について深く考えることができた。

(4) 修学旅行

昨年度に引き続き、沿岸の被災地を見学し、被災地の小学校と交流したことにより、災害の恐ろしさや防災の大切さを学ぶことができた。

特に、津波伝承館での見学や、献花台での献花は、一人一人の児童の心の中に様々な思いを抱かせる体験となった。

(5) 学習発表会・情報発信活動

巻堀神楽の披露、リーフレットを用いての人々との交流、姫神小桜ストラップ、もち米「ひめのもち」の販売を通して、児童は、地域の伝統や良さを見つめ直し、改めて郷土を愛する心情をもつことができた。

2 課題

(1) 今後、小中連携による災害時の引き渡し訓練を実施していくにあたり、各学区の地域にも見回り、誘導などの協力を依頼し、学校、保護者、地域が連携した避難訓練ができるようにしていく。

(2) 小学校合同や小中合同の防災に係る学習会等を実施し、中学校区の交流を図るとともに、自助、共助の意識を高めていく。

(3) 校内での復興教育を推進する上で、各学年の発達段階に応じた学習内容を教科横断的に計画し、今後も実施していく。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：盛岡市立好摩小学校

I 事業の概要 (地域の実情含む)

本校学区は岩手山麓を源流とする松川沿いに位置し、かつて低地が広く分布する地形条件にある。県の松川浸水想定区域になっており、平成 25 年には台風による洪水が発生し、住宅等に被害が出ている。

また、岩手山が間近に見える地域であり、県のハザードマップでは火山泥流の流入が想定されている。

以上のような地理的状況から、児童一人一人が災害の多様性を認識することや、それらに対応した「自らの身を守る行動」を身に付けることが必要となる。

そこで、以下のような計画を立て、命の大切さと身を守る学習を推進することとした。

定の時間まで児童を待機させ、教職員とともに下校させる。



【3階教室への垂直避難】

II 取組の概要

1 小中合同引渡訓練 7月1日(金)

(全校児童及び保護者対象)

(1) 訓練目的

ア 児童に大雨による浸水被害から身を守るための行動を学ばせる。

イ 教職員が災害の際に保護者への確実な児童の引渡ができるようにする。

(2) 訓練の流れ

ア 浸水被害のおそれから身を守るために全校児童を校舎3階へ垂直避難させる。

イ 一斉メールを用いて保護者に児童の迎えを要請する。

ウ 浸水被害のおそれが無くなったと仮定し、保護者の迎えを体育館で待たせる。

・地区ごとに並ばせる。(兄弟姉妹は隣に並ばせる。)

・中学校に兄弟姉妹がいる場合には、教職員が中学校へ引率し、兄弟姉妹の隣に並ばせる。

エ 保護者の受付を昇降口で行い、そこで引渡まで待機させる。

オ 保護者が到着した児童氏名を受付より体育館に連絡し、児童を移動させ昇降口で保護者に引き渡す。

カ 訓練に参加できない保護者がいる場合、一



【中学校の兄弟姉妹への引率】



【昇降口での受付 体育館への連絡 保護者への引渡】

2 防災アドバイザーによる講話 10月25日(火)
(5、6年児童対象)

講師：防災士 荒屋敷武則先生

(1) 学習内容

「防災意識の向上」～水害から命を守る避難について～という演題でご講話いただいた。講話内容は下記のとおりである。

- ・日本の河川の特徴
- ・洪水の要因
- ・ハザードマップの見方
- ・「マイタイムライン」の考え方

児童は、学区にある水害における危険箇所について改めて知ることにより、思いの外身近な地域に危険性があることを知り驚いた様子であった。「マイタイムライン」の考え方の学習では、危険が迫っている状況はそれぞれが違うので、自分で判断し避難を始めること、助けられる人から助ける人になることを教えられた。

(2) 学習後の児童の感想

この学習を通して防災は意識ということを知りました。そして水害は急には発生しないことや線状降水帯という用語をわかりやすく説明いただき、水害が起きる前の対処方法を考えてみたいと思いました。

今回の学習で、いつ水害がきてもよいように、防災グッズの用意が必要なこと、防災マップの正しい見方がわかりました。今後こうした知識を頭に入れ、意識した行動ができるようになりたいと思いました。

災害時に河川を見に行っては危険なことがわかりました。また、防災マップを見てどこが危険なのか正しい情報を知ることができました。



【防災士による講話】



【タブレットを用いて防災マップを閲覧し、身近な危険箇所を探す】

3 実践授業「災害に備えよう」 12月21日(水)
(5、6年児童対象)

(1) 実践内容

災害の様子を紹介する映像（火山の噴火、洪水、地震・大津波と災害直後の避難の様子）を見せ、自分たちの身の回りにも災害の危険性があることを考えさせた。さらに被災した場合や避難所に避難した後にはどのような困難が待ち受けているかについて話し合った。児童からはライフラインの停止による不便さ、食糧の不足などの不安が出された。

本校は、盛岡市から避難所として指定されているため、各種の避難用具が備蓄されている。そのことに加え、復興教育スクールの予算から防災用品を購入しており、それらを実物を示しながら紹介した。（停電時に備えての発電機や非常用バッテリーやマルチパワーステーション、非常時でも必要な情報を取り入れるための防災ラジオ、寒さに備えての保温アルミシートや毛布、断水時でも使用できる簡易トイレ、空腹をしのぐことができるアルファ化米やカンパンや缶に入ったパン等）また、それぞれの防災用品については、児童が手に取って確認できるようにするとともに非常食については、実際に試食も行った。

(2) 実践後の児童の感想

災害が起きると、不便なことがたくさんあると思ったし、その中でも特に電気が使えなくなるとたいへんだと思いました。

私の家には、大きな災害が起こったためのために備えているものがあまりなかったので、いざとなったときのことを考えて準備しておくことも大切だなと思いました。

災害が起きると、ライフラインが止まって普段の当たり前前の生活ができなくなることがわかった。家には非常食など見たことがないから手軽に買えるものを準備したいと思った。他にも役立つグッズがあった。その中でも便利だったのがアルミシートで毛布代わりに使えることがわかった。

最初は、非常食はおいしくないと思っていたので、今日食べてみてこんなにおいしくてびっくりしました。家では非常食は備えていないので大切だと思いました。



【災害時に想定される不便さについての学習】



【防災用品のアルミシートを体に巻き付け、保温性を体験する】



【非常食の試食】

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 小中合同引渡訓練について

ア 大雨災害の際の校内での垂直避難の方法を構築することができた。

イ 小学校から中学校に兄弟姉妹のいる児童を連れて行き中学校で保護者の迎えを待つことで、保護者への引き渡しの時間を短縮させることができた。

ウ 保護者の迎えを待つ児童の待機場所と、保護者の受付及び引渡場所を分けたことにより、整然と引き渡すことができた。

(2) 防災アドバイザーによる講話について

ア ハザードマップを用い、学区の危険箇所を確認させたことにより、より身近なところに危険があることを児童に実として捉えさせることができた。

イ 非常災害の被害の様子から「防災は意識すること」が一番大切であるということを学ばせたことにより、日頃から非常時に備える必要性を児童に理解させることができた。

(3) 実践授業「災害に備えよう」について

ア 大きな災害時に考えられるライフライン停止の際に、どのような不便なことが想定されるか資料から考えさせることができた。

イ 様々な防災用品を目のあたりにしたり、非常食を試食したりすることによって児童自らが親に相談しながら災害に備えようとする意識をもたせることができた。

2 課題

(1) 小中合同引渡訓練について

今回は事前に複数の案内を出し周知の上行ったことで、保護者の迎えを滞りなく行えたが、非常災害の場合、迎えが集中し混乱することも予想されるため、次年度以降も継続して行い、改善を図る必要がある。

(2) 防災アドバイザーによる講話について

講話の内容が豊富であったため、講師との事前の打合せの際に講話内容の時間配分についても確認する必要があった。

(3) 実践授業「災害に備えよう」について

児童個々が災害に備えることの必要性については理解することができたが、実際に非常災害が発生した際に助けられる立場ではなく、助ける立場となって動くことのできるような学習も必要であると考える。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：盛岡市立巻堀中学校

I 事業の概要 (地域の実情含む)

巻堀中学校区は、盛岡市の玉山地区の最北部の中央付近に位置し、東に北上川、西に松川が流れ、両川に挟まれる地域が、主な住宅地になっている地区である。平成25年9月16日、台風18号がもたらした豪雨によって松川が氾濫した際に、好摩の小袋地区が浸水して住宅や橋、道路等に被害が生じている。近年、線状降水帯の発生による、ゲリラ的な豪雨や岩手県沿岸部に甚大な被害をもたらした台風10号のような台風の来襲によって、二つの河川がある巻堀中学校区では、豪雨による洪水、土砂災害等が起こり得る災害として想定される。

また、岩手山が噴火した時を想定した盛岡市のハザードマップによれば、積雪時に火砕流が発生すると雪が溶けて、火山泥流が流れ下る危険性がある地域として、松川の流域が指定されている。

巻堀中学校区では、地域住民が参加する自治会等を巻き込んだ防災訓練は実施されていない。また、今回の事業は、巻堀小、好摩小、巻堀中の3校が連携して巻堀中学校区として取り組む事業として位置づけられており、実際の災害を想定して、できる限り実践的な場面で役立つように計画を立案する必要があると考えている。

今年度は、地域で想定される豪雨による浸水や土砂災害が発生した場合について、避難する際の正しい知識、行動する際の判断の仕方、避難所が開設された場合の知識やスキル等を学ぶことを重点にして計画を立案することとした。

II 取組の概要

(1) 避難訓練 (地震・不審者侵入想定)

5月18日(水)の6校時、最初に、地震を想定した避難訓練を行った。年度始めの避難訓練なので、基本的な避難経路の確認、誘導、集合、点呼等を確認をした。集合場所で振り返りを行った後に生徒を教室に移動させ、続けて不審者侵入想定での避難訓練を実施した。今まで一度も実施してこなかったことから、不審者が侵入した場合の放送の暗号文を予め知らせておき、放送が流れたら施錠をして安全を確保するよう行動させた。最後に、体育館で振り返り集会を行った。

(2) 3校合同避難訓練・保護者への引き渡し訓練

7月1日(金)の6校時から放課後にかけて、

巻堀小・好摩小・巻堀中の3校が連携して、合同避難訓練及び保護者への引き渡し訓練を実施した。保護者には、約1カ月前から事前に案内を配付した。

事前に「引き渡し計画書」を保護者に配付し、引き取りにくる保護者等の名前、引き取る児童・生徒の名前、帰宅又は避難する場所等を記載してもらった。

当日は、最初に校舎が浸水の危険があるという想定で、最上階の3階に生徒が避難する垂直避難訓練を実施した。保護者への引き渡し訓練では、好摩小学校と巻堀中学校が近接していることから、引き渡しの煩雑さを避けるために巻堀中に兄弟がいる好摩小の児童は、教師の引率により移動し中学校で一緒に保護者等に引き渡すようにした。巻堀中学校では、駐車場にコーンや白線で、自家用車の経路を分かりやすく表示し、混雑が生じないよう5列に車列が並ぶように工夫して誘導を行った。教職員を、引渡し係、受付係、生徒呼び出し係として配置して、スムーズな流れで引き渡し訓練を実施できた。



〈駐車場で保護者へ引き渡し様子〉

(3) 避難所運営ゲーム (HUG) の実施

夏休み中の8月2日(火)の午前、学校防災アドバイザー派遣事業を活用し、講師の地域防災サポーターの塚本清孝氏による避難所運営ゲーム(HUG)を実施した。生徒会の新旧地区長・副地区長19名が参加した。岩手県等での大雨災害についての講話を聞いた後、避難所運営ゲームのやり方についての説明を聞き、4つのグループに分かれて実践した。講師が、次々と避難者のカードを読み上げ、パニックに陥りそうになる中、コミュニケーションを密に取り、「避難者をどのエリアに収容するか」、「どんな対応を行うか」を判断することは大変そうであった。また、避難者の立場に立

って考えることは、利己的な気持ちを抑え、相手のために奉仕する気持ちを養う訓練ともなった。



<グループ演習の様子>

(4) 被災地訪問体験学習

ア 第1学年 気仙沼市・陸前高田市訪問学習

1年生は、9月8日(木)に気仙沼市と陸前高田市の被災地の伝承館を訪問した。気仙沼市の伝承館では、各グループにガイドがついて、震災遺構内を歩いて、生々しい話を聞き、知識を得ることが、命を守ることに繋がること等を学んだ。



<震災遺構でガイドからの説明を聞く>

イ 第2学年 石巻市訪問学習

2年生は、9月8日(木)にみやぎ東日本大震災津波伝承館を訪問し、事前に各グループで追究するテーマを設定して調べた内容について、実際に被災地訪問の中で確認した。新たな気づきを得る等、深く学習をすることができた。



<慰霊碑の鐘で祈りを込めて>

(5) 避難所運営体験学習 (HUT) の実施

12月9日(金)の4~6校時、学校防災アドバイザー派遣事業を活用し、地域防災サポーターの塚本清孝氏による避難所運営体験学習 (HUT) を実施した。講師と1か月に渡って事前打合せや準備

を行い、12月5日(月)に、職員との打ち合わせ会を行って実施することができた。当日は、4校時に1・2年生がそれぞれ打合せと準備を行い、5・6校時に合同で体験学習を行った。1年生は、避難者役を事前の設定どおり演じてもらい、2年生は、運営委員、受付係、誘導・物品係、保健・衛生係、食事係に分かれて運営を行った。講師から、次年度以降も是非実施して欲しいと要望が出た。



<避難者を受付する様子>

III 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 巻堀中学校区の小学校2校、中学校1校が連携・協力して、3校合同垂直避難訓練及び保護者への引渡し訓練を実施することができた。
- (2) 避難所運営ゲーム (HUG) を、地区長を集めて行うことで、避難所を運営する際に大勢の避難者が押し寄せ、多くの情報を処理し、相手の立場に立って考えることをシミュレーションすることができた。
- (3) 東日本大震災等で被害があった、石巻市、気仙沼市、陸前高田市の震災記念館等を実際に訪問し、津波災害の凄まじさ、命の大切さ、その後の復興の様子について学ぶことができた。
- (4) 避難所運営体験学習 (HUT) を実施することで、実際に避難所を開設した際に、運営スタッフの仕事の内容や避難者の気持ちや行動を疑似体験することができ、災害が起こった時に、適切な行動を取って中学生が貢献する資質を養うことができた。

2 課題

- (1) いわたの復興教育スクールの指定を受けて、新しい実践にも取り組んできたが、多忙な中、次年度以降も同様に取り組めるかどうかは未定である。
- (2) 巻堀中学校区の小中3校が連携して、この中学校区の地域に相応しい、小~中学校の復興教育課程を整備していくことが課題である。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：矢巾町立不動小学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

本校は、盛岡市の南約13km町の西南部に位置し、開けた田園地帯の中にある。近年、岩手医大の移転、矢巾スマートICの開通にともない、県央経済圏の中に組み込まれ、新興住宅地の造成に伴い、盛岡のベットタウン的な様相も加わってきている。学区は9つの行政区からなっていて、学区民は、古くから教育尊重の気風が強く、学校教育に対する関心も高く、協力的である。

本校では、学校教育目標の具現化に向け、「いわての復興教育」プログラムに基づく教育活動の推進に取り組んでいる。復興教育の3つの教育的価値「いきる」「そなえる」「かかわる」を教育活動全体で取り組み、本校の学校教育目標である「考えを広め、深める子」「思いやりがあり、よく働く子」「健康で、気魄ある子」を育て、社会を創造する能力を育てる「人づくり」を行っている。

II 取組の概要

1 地域安全の取組

(1) 児童による安全マップづくり

第4学年では、総合的な学習の時間において、自分たちが生活する地域の安全について見直し、交通、防犯、災害などの危険箇所を探し、どのような点に気を付けて生活すればよいかについて考える学習を行った。児童はそれぞれ自宅周辺や通学路等の危険箇所を略地図にまとめ、廊下に掲示し、全校児童への注意喚起を行った。



【第4学年児童が作成した「安全マップ」】

(2) 地区懇談会の実施

各地区の保護者と公民館長、学校関係者が集まり、地区懇談会(参加者31人)を実施した。各地区では、通学路の危険箇所等の情報を取りまとめ、参加いただいている。危険箇所について各地区の参加者で共有し、スクールガードや地区巡回指導の留意点を確認し、町への改善要望についても協議した。

(3) 矢巾中学校区デジタル安全マップの作成

矢巾中学校、徳田小学校、不動小学校の3校が共同で矢巾中学校区の「デジタル安全マップ」を作成した。

本校では、第4学年の児童が作成した安全マップ、地区懇談会での地域からの情報に加え、第6学年の児童と保護者の協力を得て、データ入力を行い、作成した。QRコードから記載されていない危険箇所についても確認ができる。

印刷物「デジタル安全マップ(A3版)」を各家庭には配付し、デジタル安全マップについて周知を図るとともに、各家庭で安全について話し合うなど、安全への意識を高めることができた。

【児童の感想】

- この安全マップを作ってみて、危険な場所が身近にあることを学びました。気を付けていきたいです。



【矢巾中学校区デジタル安全マップ】

(4) 地域の安全を皆で守る日

日常的に、児童の登下校の様子については、地域の方(スクールガードボランティア、PTA、民生児童委員)のご協力をいただき、見守り活動を行っている。

令和5年1月16日には、「地域の安全を皆で守る日」として、矢巾中学校、徳田小学校と同日に、児童の登校を見守り、安全についての呼びかけ活動を行った。児童会執行部が2か所に分かれ、のぼりを持ち、元気な挨拶と、安全な登校について呼びかけた。



【地域の安全を皆で守る日】

2 引き渡し下校訓練の実施

本校では、これまで、定期的に集団下校訓練を実施してきたが、昨今の自然災害の甚大化を踏まえ、初めて、保護者の協力を得て、直接児童を保護者に引き渡す下校訓練を実施した。

実施の際、以下の点に配慮した。

- ・ 引渡しカードの作成と運用
- ・ 学校連絡網メールシステムの利用
- ・ 駐車場の確保(車両の動線)
- ・ 保護者来校から下校までの流れ(分担)

初の試みではあったが、スムーズに実施することができた。保護者と学校が、「引き渡し下校」について共有できたことを大きな成果ととらえている。今後、さらに工夫改善を図っていく。

【保護者の感想】

- ・ いざというときに備え良い取組だと思う。コロナもあり、思うようにいかない時もあると思うが、定期的に行えるといいと思う。大人も子どももいざという時のために、できることから準備することは大切なことだと思う。
- ・ スムーズに引き取りができた。実際には

祖母が迎えに行くことになると思うので、今回の訓練のことを話しておきたい。

- ・ 緊急時のために、家庭でも迎えに行ける人を確認する良い機会となった。今回は授業参観後の実施だったので、すぐに迎えに行けたが、実際にそのようになったときに、誰が早く迎えに行けるかという課題が見つかった。引き渡しの流れが分かり、訓練をしていただいていたよかったです。

3 総合的な学習の時間「東日本大震災を忘れない」の学習(第6学年)

～修学旅行の体験活動をもとに～

第6学年では、総合的な学習の時間に、復興教育の単元を位置付けている。修学旅行では沿岸被災地を訪問し、そこでの体験を単元の中心に据えている。



【津波遺構たろう観光ホテル】

児童は、修学旅行で宮古市田老を訪れ、防波堤及び津波遺構のホテル等を見学しながら、当時の様子や復興に向けた取組について説明を受けた。

児童は事前学習を行っていることもあり、それぞれが自分の課題意識をもって、見学した。

旅行後には、修学旅行のまとめとしてグループ新聞を作成し、また、復興教育については、修学旅行の体験をもとに、さらに探究活動を進め、最終的には、一人1台端末(タブレット)を活用してまとめ、それを学級で共有し合った。

児童にとって、命、地域、暮らしを改めて見つめる貴重な機会となった。また、復

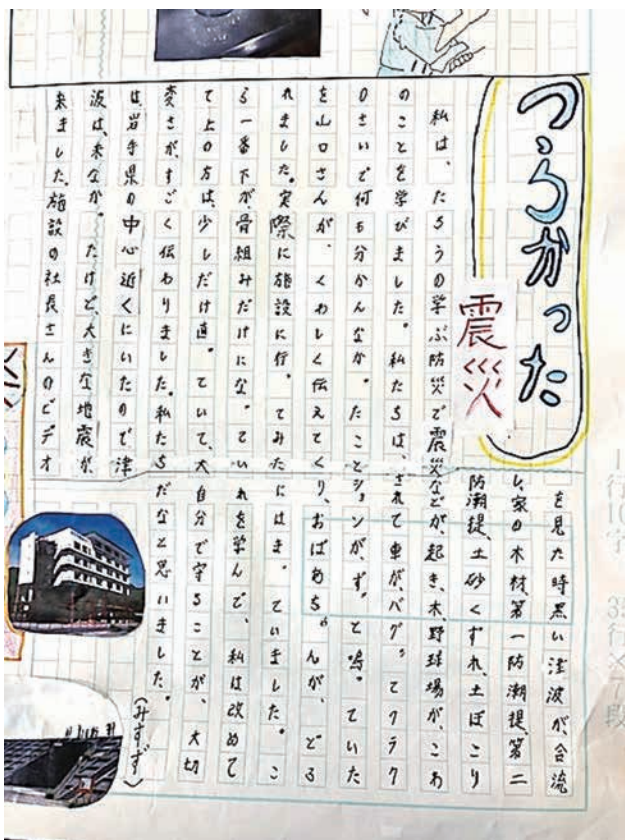
興の様子その他、三陸沿岸の自然や文化に触れる体験活動を行うことで、岩手のよさを再発見する機会ともなった。



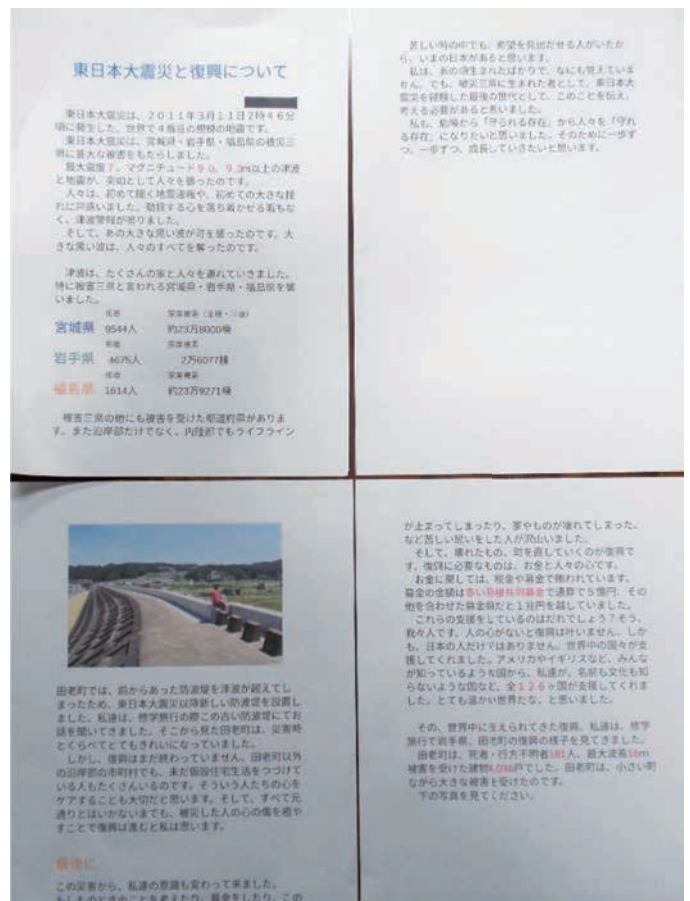
【田老の防波堤で説明を受ける児童】

【児童の感想（修学旅行新聞より）】

- ・ 動画を見て、あらためて自分の命は自分で守らなければならないということを強く感じた。
- ・ 内陸のここには津波はこないけど、「てんでんこ」という言葉が印象に残った。いざというときのために覚えておきたいと思った。



【修学旅行のグループ新聞（一部抜粋）】



【児童が作成した単元のまとめ】

III 取組の成果と課題

1 成果

- ・ 中学校区の3校や保護者、地域等との連携を図った取組を実施することができ、安全への意識を地域全体として高めることができた。
- ・ 復興教育の取組をとおして、児童は、命やくらしの大切さを再認識することができ、今後の行動について自分なりに考えることができた。

2 課題

- ・ 今後、中学校区内の学校が連携した引き渡し下校訓練を実施するなど、地域と学校が一体となった取組の推進を検討していく必要がある。
- ・ 復興教育については、児童にとって魅力的で価値ある学びとするために、絶えずPDCAサイクルを回していくことが必要である。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：矢巾町立德田小学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

本校は、国指定史跡「徳丹城跡」内に立地し、来年度で創立150周年を迎える。史跡公園となっている芝生地を自由に利用させていただき、子どもたちののびのびとした活動が可能となっている。また、本校の特色として、学校と家庭、地域が一体となった読書活動の積極的な推進があげられる。教育振興運動における読書体験記や標語の募集・製本・発行、読み聞かせボランティアの活動、朝読書や読書祭りの活動等は、今後も継続発展させていきたい。

また、本校ではコロナ禍による修学旅行先の見直しを行い、東日本大震災の被災地である県内沿岸部への学習旅行を実施してから3年目となる。実際に被災地を訪れ、自然災害に対する意識を高めるとともに、それぞれの児童が感じた復興に対する思いを、秋の学習発表会の中で他学年の児童や保護者に向けて発信してきた。

今後も、安全・防犯・災害等に対する意識を高め、学校や家庭、地域が連携しながら復興教育の推進を図っていきたい。

II 取組の概要

1 地域の関係機関と連携した安全の取組

(1) 交通安全の見守り活動の実施

本校では、毎年、地域の方々に交通安全の見守りボランティアを募集し、今年度も34名の方々にスクールガードとして、児童の登下校の安全を見守っていただいている。

2月に行われる児童会行事「6年生を送る会」に、スクールガードの皆さんを招待し、児童からのお礼を述べるとともに、PTAの生活指導委員会からも感謝状等を贈る機会を設定している。

(2) デジタル安全マップの作成

11月に、矢巾中学校区の三校が合同で、学区内の危険箇所を調べ、矢巾中学校の生徒が中心となって「矢巾中学校区デジタル安全マップ」を制作した。本校からは6年生の親

子が参加し、地域内の危険箇所に対する危機意識や自ら危険性を判断し、対応していく力を高めることにつながる取組となった。

(3) 県警見守り地蔵贈呈式並びに啓発活動

12月に、紫波地区少年ボランティア協会の方が来校し、地域の方が作成した見守り地蔵の贈呈式が行われた。児童を代表し、生活安全委員会の6年生3名が参加し、子どもたちの健やかな成長と安全を願って丁寧に木彫りされた見守り地蔵を受け取り、各教室に1つずつ飾った。

その後、協会の方には給食時間の放送を利用し、全校児童への安全に関わる啓発をしていただいた。



(4) 地域の安全を皆で守る日

1月に、矢巾中学校区三校合同での「地域の安全を皆で守る日」として、朝のあいさつ運動と交通安全への呼びかけ活動を実施した。本校からは、児童会執行部の6年生と各委員会の委員長を務める6年生9名が参加し、交通安全の呼びかけ活動を行った。



2 震災からの復興～未来への扉～

(1) 修学旅行での震災学習

4月27日～28日に、本校で3年目となる県内沿岸部被災地への修学旅行が実施された。今年度は、久慈～田老～宮古を廻るルートでの実施となった。

久慈市「もぐらんぴあ」での震災学習では、震災から現在の「もぐらんぴあ」の再開にいたるまでの道のりについて、6年生の児童たちは、職員の方の説明に真剣に耳を傾けていた。



その後、児童たちは、初めての三陸鉄道に乗車し、「震災学習列車」で、被災地の今を列車で移動しながら直接「見て」「聞いて」「感じて」という貴重な体験活動を実施することができた。目の前の美しい景色が、当時どようになっていたのか、三陸鉄道や沿岸の町並みがどのように復興してきたのかなどをガイドしていただくことは、6年生の児童たちにとって大きな財産となった。



2日目の見学地となった田老町では、「田

老の学ぶ防災ガイド」を体験した。震災遺構「たろう観光ホテル」を見学し、津波の恐ろしさを目の当たりにする貴重な体験学習となった。

(2) 津波伝承館での見学学習

8月25日、6年生の総合的な学習の時間及び社会科の学習として、陸前高田市の東日本大震災津波伝承館を見学した。

津波伝承館では、津波の被害や復興の様子について、それぞれが課題をもって調べ、その後の学習発表会や総合的な学習の時間、社会科の学習に生かすことができた。



(3) 震災からの復興～未来への扉～

6年生の児童たちは、修学旅行や陸前高田市見学をとおして学んだことや、総合的な学習の時間の中で深めた震災に対する思いを学習発表会の中でのびのびと表現した。

「震災からの復興～未来への扉～」と題された演目は、グループごとのエピソード紹介、タブレットのスライドを使って作成した「もぐらんぴあ」「三陸鉄道」「田老」「陸前高田」の紹介、自分たちにできることの決意発表という構成で行われた。一人一人の児童が、今の自分にできること、これからの自分にできそうなことを考え、他学年や保護者に向けてその思いを発信することができた。



3 復興教育の3つの教育的価値「いきる・かかわる・そなえる」に関する指導実践

(1) 各学年の指導実践

本校では、各教科や道徳科、総合的な学習の時間を活用し、復興・防災に関わる3つの教育的価値「いきる・かかわる・そなえる」を育てるために、復興教育副読本の効果的で計画的な活用を図っている。

〈具体の21項目に関わる指導の実践例〉

⑦体の健康

自分の生命と健康を大切にしようとする心情を育てる。(1年 道徳科)

⑫自分と地域社会

地域の自然や産業について関心を高め、地域を誇りに思う。(3年 社会科)

①かけがえのない生命

生命のたくましさや自然とともに生きることの大切さを考える。(3年 道徳科)

⑰自然災害の歴史

日本の主な自然災害について理解を深め、災害に備える意識を高める。(4年 社会科)

⑳学校・家庭・地域等での日頃の備え

災害が起きたときに生き延びるための備えや防災意識の高め方について学ぶ。(4年 社会科)

④夢や希望の大切さとやり抜く強さ

奥州市から世界へとびたつた大谷翔平選手の生き方や考え方について学ぶ。(5年 道徳科)

⑥心の健康

目に見えない「心の思い」を見つめ、自分の気持ちを言葉に表すことの大切さについて考える。(5年 特別活動)

⑳学校・家庭・地域等での日頃の備え

災害が起きたときに生き延びるための準備について学び、自分自身が生き延びるためにできることについて考える。(5年 特別活動)

⑬復旧・復興のあゆみ

復旧・復興に対する地域住民の願いを知り、自然災害に負けないまちづくりについて理解を深める。(6年 社会科・総合的な学習の時間)

⑪ボランティア・救援活動

ボランティア・救援活動の意義について学

び災害時の支援活動の実際について理解する。

(6年 総合的な学習の時間)

⑮自然災害の様子と被害の状況

津波の威力や被害の状況について、東日本津波伝承館の展示物をもとに理解し、自分にできる防災の取組について考える。

(6年 総合的な学習の時間)

(2) 学校図書事務補助員の先生による読み聞かせの実施

本校では、3月11日を「絆・思いやりの日」と位置付け、学年ごとに復興教育副読本や震災に関わる映像資料、津波体験作文集等を活用した学習を行っている。

今年度は3月10日(金)に設定し、指導実践を予定している。また、3月6日～10日までの期間中に、学校図書事務補助員の先生による震災にまつわる本の読み聞かせを計画している。(複数学年で実施)

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- 交通安全に関わる取組について、地域の関係者と連携し、見守り活動を実施したり、安全マップを作成したりしたことで、児童が交通安全に対する意識を高めることができた。
- 復興教育を中核に据えた修学旅行並びに見学学習を実施したことで、児童が震災当時の様子や復興に向けた人々の思いについて理解を深めることができたとともに、自分たちにできることについて考え、発信することができた。

2 課題

- 6年生が中心となった実践となっており、他学年における実践について、計画的に取り組んでいかなければならない。
- 防災学習に関わる実践や、復興教育副読本により合科的で計画的な実践について検討し、校内研究等で実践例を交流する機会を設定するようにしたい。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：矢巾町立矢巾中学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

矢巾町は、岩手県のほぼ中心部に位置する紫波郡に属する町である。幣掛(ぬさかけ)の滝・南昌山・矢巾温泉・徳丹城跡など、町内に名所旧跡は多い。稲作に適した自然条件をそなえ、豊かな田園風景が広がっている一方で、駅周辺の中心部は岩手医大の移転に伴う開発が急速に進んでいる。町の施策として、町民が音楽に親しみ、活動に愛着と誇りを持つまちづくりを進めており、「音楽のまちやば」宣言のもと、豊かな音楽資源が育まれている。

本校では数年前から3年生が被災地である陸前高田市を訪問し、津波伝承館での学習や椿の苗木植樹を通して復興や防災の意識を高める取り組みを行ってきた。



また、岩手医大の移転による交通量の増加や車の流れの変化に伴い、本中学校区における通学路の安全対策が喫緊の課題となり、危険に「そなえる」活動が必要であった。そこで、以下の2点について今年度は重点的に取り組むこととした。

- (1) 本校生徒および学区の小学校児童が連携したデジタル安全マップを作成し、自らの生命や身体を守る意識を高めるとともに、地域の安全を呼びかける活動を行う。
- (2) 被災地訪問を通して学んだことをもとにさらに実践的な態度を育てるため、講演会を開催して自分たちの地域の防災安全につ

いて理解を深める。

II 取組の概要

(1) デジタル安全マップづくり

ア 実施期間 2学期 11月～12月

イ 取り組み内容

- ①各地区の危険箇所について、以下の視点を参考に考える。
 - ・交通量が多い、道路が狭い、横断歩道がない等の交通安全の視点での危険箇所
 - ・川や用水路、崖などの危険箇所
 - ・街灯がなく暗いなど、不審者予防の視点での危険箇所

- ②①で考えた危険箇所について、Google Mapのマイマップ機能を活用し、危険箇所を指摘するデジタル安全マップを作成する。Google Map共同編集機能を用いて、学区の地図にポイントを打ち、その場所でのどのような危険があるのか、安全を守る方法等について書き込む。また、現地の写真も見られるようにする。



- ③レイヤー(層)機能を活用して、矢巾中学校・徳田小学校・不動小学校それぞれが安全マップを作成し、それを重ね合わせて学区の危険箇所の情報を追加していく。

- ④安全マップのデータを1つにまとめ、矢巾中学校区安全マップを作成し、注

意喚起することで児童生徒の安全を守る。また、QRコードつきの安全マップを作成に関わった小中学校の全児童生徒および職員に配布し、家庭でも活用していただく。

(2) 学校防災アドバイザー講演会

ア 実施日 令和4年11月16日(水)
イ 場所 矢巾中学校 南昌ホール
ウ 講師 岩手河川国道事務所
地域防災調査官

高橋 宏実 氏

エ 参加者 3学年生徒(126名)、教職員
オ ねらい

復興教育の一環として、地域における過去の災害や今後の備えについて学ぶことにより、生徒の安全に対する意識を高める。

カ アドバイザーからの指導・助言

- ・北上川周辺で発生した過去の水害の状況
- ・矢巾町を流れる河川の特徴
- ・矢巾町は水害を受けやすい地形であること
- ・災害時の基本行動は「逃げる（避難する）こと」



キ 生徒の感想〈一部抜粋〉

矢巾町は洪水になりやすい地域だと初めて知ったので、より意識を高めたいと思いました。北上川が氾濫して洪水になるのかと思っていましたが、実はそうではなく、その周辺の小さな川が洪水を起こすのだということを知ることができました。

(3) 「地域の安全を皆で守る日」の取り組み

ア 実施日 令和5年1月16日(月)
イ 時間 7:30~8:00
ウ 場所 各小中学校周辺の通学路
エ 参加者 各校生徒会・児童会の代表
教職員、スクールガード、
交通指導員、教育委員会

オ ねらい

「地域の安全を皆で守る日」の一斉交通安全運動を通して、地域の安全は地域の皆で守るという意識を高める。



III 取組の成果と課題

1 成果

- ・昨年度、矢巾北中学校校区で取り組んだデジタル安全マップづくりのノウハウを引継ぎ、矢巾中学校校区でも取り組んだことで、町内全域の危険箇所をマップに表すことができた。また、児童生徒に配付されているchromebookの活用を通して、同時編集という新たな機能にも触れることができ、操作の仕方を習得するよい機会となった。
- ・学校防災アドバイザーによる講演会は、身近な地域で過去に大きな災害があったことを知るよい機会となり、生徒個々の災害に備える意識を高めることができた。
- ・「地域の安全を皆で守る日」の取り組みは、児童生徒が地域の方とともに交通安全を呼びかけることで、地域の安全に貢献することができた。

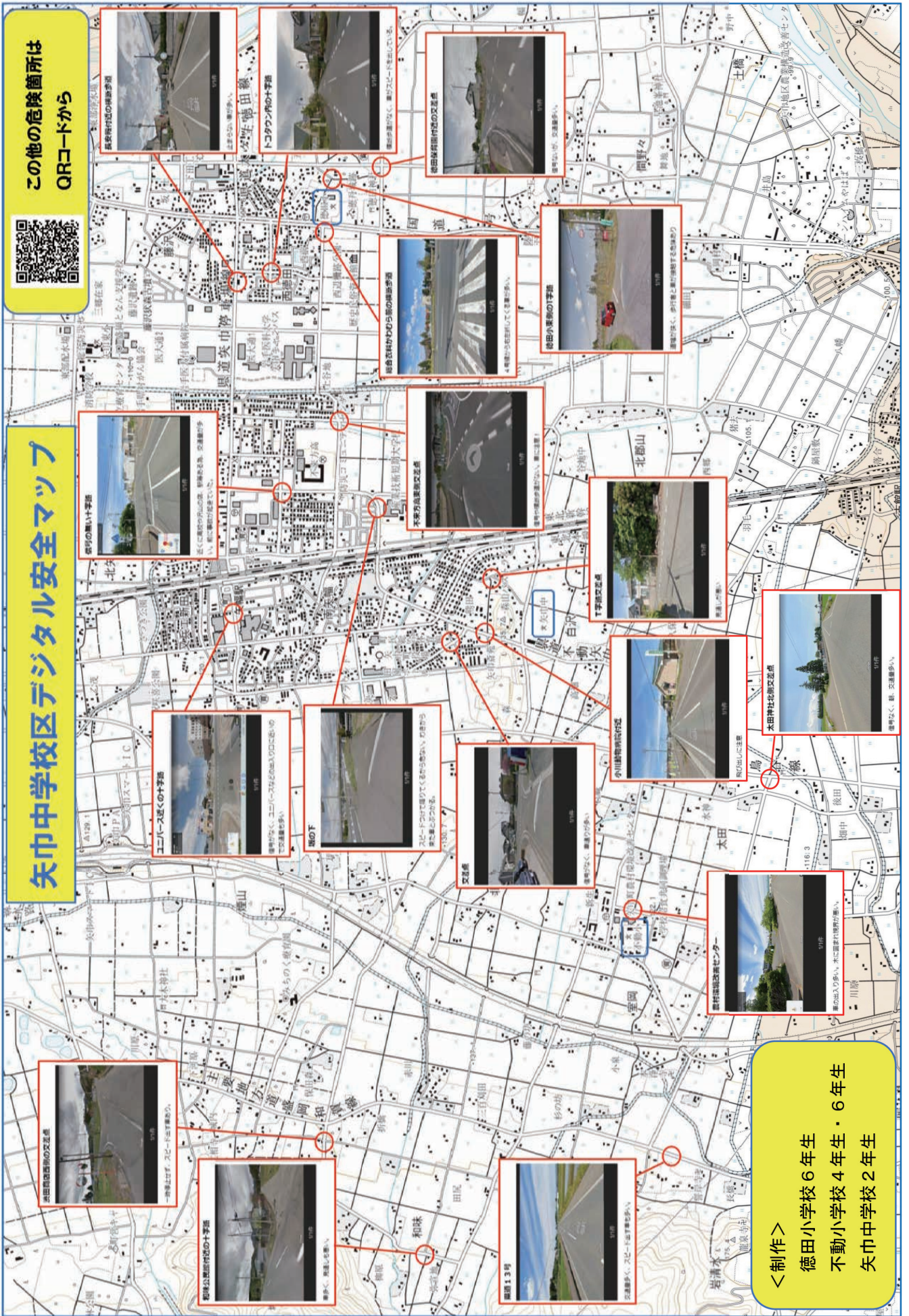
2 課題

- ・デジタル安全マップは、町内の交通事情の変化に合わせ、今後も更新していく必要がある。
- ・災害時の行動について、学校・地域・家庭の連携の仕方を皆が理解できるようにする必要がある。

この他の危険箇所は
QRコードから



矢巾中学校区デジタル安全マップ



<制作>

- 徳田小学校 6年生
- 不動小学校 4年生・6年生
- 矢巾中学校 2年生

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：八幡平市立田頭小学校

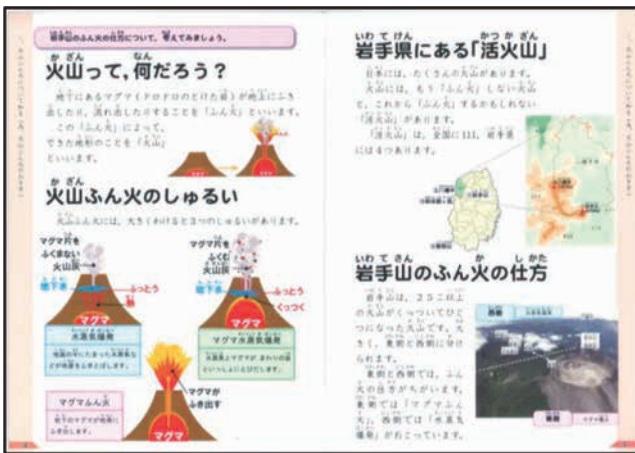
I 事業の概要(地域の実情含む)

八幡平市は、十和田八幡平国立公園を有し、岩手山や八幡平など、四季折々の美しさがあり、自然豊かな地域である。本校学区は、活火山である岩手山が南西に位置し、火山泥流や降灰の被害が想定されている地域である。

そこで、児童にとって、岩手山の火山噴火を想定した防災学習が不可欠である。火山噴火の災害や備え等について学習するとともに、緊急時における避難の仕方を身に付けることで、防災意識や、「自分の命は自分で守る」という意識を高めていきたい。

そのために、本校では、次の3点を柱とし、全学年で計画的に取り組んでいく。

- ◇ 火山防災副読本を活用した防災教育(小中連携)
- ◇ 防災意識を高める取組
- ◇ 八幡平市の豊かな自然に触れる地域学習



<八幡平市火山防災副読本>

II 取組の概要

(1) 八幡平市火山防災副読本を活用した防災教育

ア 3・4年生「岩手山噴火の可能性を考えよう」

焼走り溶岩流の写真から、岩手山が噴火したことに気付かせ、焼走り溶岩流がいつできたか教師が問いかけることで、岩手山の噴火の歴史に興味をもたせる。児童は、副読本等を使って岩手山の噴火の歴史について情報収集するとともに、今後、岩手山の噴火の可能性について考えた。



イ 5年生「噴火時の避難について考えよう」

既習事項である噴火警戒レベルに合わせた避難行動について想起し、実際に岩手山が噴火した場合、避難行動や避難所について副読本を参考に考えたり、交流したりした。避難所については、同じ地区の児童同士で火山防災マップを使って調べ、災害を想定しての避難経路についても考えることができた。



(2) 防災意識を高める取組

ア 「防災だより」をとおして学ぶ



毎月11日を「防災の日」とし、防災だよりをこの日に合わせて発行している。児童は、防災だよりを通して、災害やそれにもなう被害、避難行動等について学んでいる。また、家庭でも、

復興(内陸)

防災だよりを読んで児童と話し合うよう、意識付けを図っている。

イ 沿岸部の小学校との交流

沿岸部の宮古市立宮古小学校と互いの学びの交流を行った。本校児童は、「命を守る」「宮古小学校の6年生に伝える」という目的意識、相手意識をもって、意欲的に学習に取り組むことができた。交流会では、本校児童が、岩手山の噴火の歴史や仕組み、噴火に対する備えについて、スライドショーを使って発表し、宮古小学校の児童が、東日本大震災当時の被害や備えについて発表した。また、本校児童一人一人が、「火山の恵み」として、自分たちの住む八幡平市の魅力をワークショップ形式でプレゼンした。

交流を通して、児童は、地域や災害は違うが、共通点もあることに気付くことができ、学びの多い大変有意義な学習となった。



<調べた内容の発表>



<火山の恵みについてプレゼン>

ウ 八幡平市総合防災訓練への参加

(ア) 防災リュックの中身の学習

実際の防災リュックに入っている物を見て、防災リュックには、どんなものが入っているか、どんなことに使うか、各学年で理解を深めた。子どもたちは、なぜ必要かを考え、避難の際の自分たちの行動について考えることができた。



(イ) 様々な訓練への参加

児童、保護者が、様々な体験活動に参加したり、消防署員からの具体的な説明を聴いたりしながら、非常時おける行動様式を実際に学ぶことができた。保護者も初めて体験したという声が多く、日頃からの備えの大切さを感じ取っていた。



<消火訓練・心肺蘇生訓練>



<煙体験・応急救護物品見学>

(ウ) 岩手山の噴火を想定した避難訓練、引き渡し訓練

学校独自で、岩手山の噴火を想定した避難訓練を実施した。岩手山が噴火した際、本校は学区の田頭コミュニティセンターが避難所であるため、全校で避難した。

避難後は、予め保護者が田頭コミセンに移動して準備していた防災食の試食をした。また、引き渡し訓練を実施し、児童のみならず、教職員・保護者にとっても有意義な訓練となった。



<岩手山噴火を想定した避難訓練>



<防災食の試食・引き渡し訓練>

(3) 八幡平市の豊かな自然に触れる地域学習

ア 火山の恵みを知る～地熱探検隊～

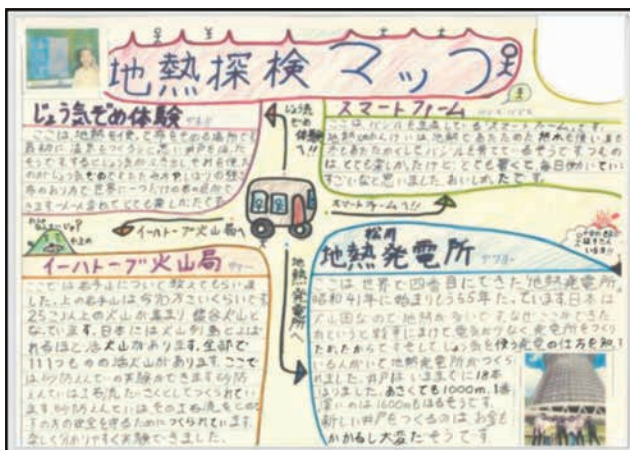
地熱を利用した施設を見学したり、地熱染めや地熱を利用して育てているバジルを摘む体験をしたりした。自然エネルギーである地熱が、発電・染物・ハウス栽培等、様々なことに利用されていることを学んだ。見学や体験をとおして、自然と共存する郷土に直に触れ、「火山の恵み」について実感を持った理解をすることができた。



<地熱発電所見学>

<バジル摘み体験>

<地熱染め>



イ 館山・八幡平登山

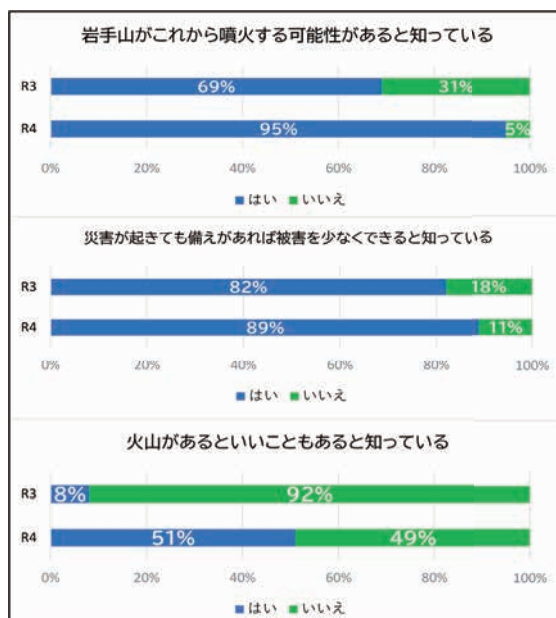
学校近くにある山（館山）に上って遊んだり、植物等と触れ合ったり、ツツジの苗木を植えたりしている。また、八幡平に登って植物や雄大な景色を観ながら歩くことで、自然の美しさ・豊かさを体感している。このように、地域の自然と直接関わることで、児童は、地域の自然に対する愛着を深めている。このことが防災学習の土台となっている。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 児童意識調査からわかる通り、防災副読本を活用した防災学習により、岩手山が噴火する可能性があること、減災につながることを、火山は怖いだけでなく恵みもあること等、確実に子どもたちの知識として身につけてきた。また、防災学習について西根中学校と連携することで、9年間を見通した防災学習を共有することができた。
- (2) 八幡平市の豊かな自然に触れる学習や行事をとおして、八幡平市への愛着を深めることができた。（児童アンケート 八幡平市の学習をとおしてこの町が好き 100%）
- (3) 防災意識を高める取組、津波被害についての学びを行うことで、「自分の命は自分で守る」という意識を高めることができた。



<児童意識調査>

2 課題

- (1) 小中連携をしながら9年間を見通した防災教育の継続
- (2) 家庭や地域との連携を図り、実効性のある防災教育の在り方

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：八幡平市立西根中学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

本校区は、八幡平市の南半分の地域を有している。南部は岩手山の北側斜面であり、中腹に国の特別天然記念物「焼走り溶岩流」がある。麓を松川が蛇行しながら東に流れる。西部は丘陵と沖積地帯で、遠く八幡平火山縦列を望むことができる。北部は七時雨山の麓で丘陵が南にのび、高原状の田代平になり、涼川が南に流れる。東部は段丘が発達し、火山泥流で生じた流れ山が点在する地域である。

本校では、平成25年度より東日本大震災津波の教訓を踏まえ、被災地において災害ボランティア活動等を行うことにより、安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高め、復興・発展を担う人づくりを目的として復興学習をスタートさせた。そして、令和2年度より1学年時に宮古市田老地区の震災遺構見学を通し復興学習の基礎を学ばせ、2学年以降は1年時の学習体験に加え、世界的に活躍する日本赤十字社の講話を通し、身近な郷土に目を向けさせ、洪水や土砂災害、火山噴火災害など地域の防災学習に発展させる学習を行ってきた。今回は、それらの学習に加え、八幡平市火山防災教育カリキュラムや八幡平市火山防災副読本を活用し、岩手山の噴火等を想定して、自然災害の発生時に主体的に行動できる力を身に付けさせることを事業の柱とした。

II 取組の概要

1 救命講習：7月19日(火)

7月19日(火)の5・6校時に2年生において救命講習を実施した。日本赤十字社岩手県支部の種田伸吾さんを講師として災害時における救命についての講話と心肺蘇生法・AEDの使い方について演習を行った。



救命に関する講話の様子



心肺蘇生法の実習の様子

2 防災セミナー：8月24日(水)

8月24日(水)の5・6校時に1年生において防災セミナーを実施した。日本赤十字社岩手県支部の種田伸吾さんを講師に招き、防災についての基本知識を学習した。

命を脅かす様々な災害から命を守るためには、それぞれの災害の発生のメカニズムや自分達の住んでいる地域について知ることが大切であることを学ぶことができた。さらに、災害時には「自助」と「共助」の力を高めることで、災害から命を守るための基盤づくりができることを理解することができ、日頃から災害時に対しての心構えをつくることができた。



防災セミナーの講話の様子

3 被災地訪問学習：9月8日（木）

9月8日（木）に1年生で被災地訪問学習として宮古市田老地区を訪問した。

午前中に、「学ぶ防災」のプログラムを体験し、実際に防潮堤から見る海の景色や津波遺構である田老観光ホテルの建物内の見学を通して、事前に学習していたもの実際にその場に立ってみると改めて津波の恐ろしさについて感じる事ができた。

午後は、田老観光ホテルの社長である松本勇毅さんとの交流会を行った。松本さんから、震災時のことや復興までの苦労などについて話していただいた。その後、お礼として合唱と応援を披露した。



交流会での応援披露の様子



防潮堤から海を見る様子



津波遺構の見学の様子



田老観光ホテル社長：松本勇毅さんの講話の様子

4 防災講演会：10月20日（木）

10月20日（木）の5校時に全校生徒に火山防災講演会を実施した。

地域防災サポーターの小原千里さんを招き、岩手山の火山防災に関する講演をしていただいた。現在も岩手山の調査を続けている方から直接話を聞くことで、身近にある岩手山の噴火のしくみや調査について詳しく知ることができた。さらに、噴火による避難だけでなく、様々な災害においても対策を講じておくことの必要性を学ぶことができた。



Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- (1) 本校がこれまで行ってきた復興学習の考え方を改めて整理することができた。さらに、火山防災副読本を活用することにより、より身近な災害についての防災に対する意識を高めることができた。
- (2) 復興教育スクールの取組により、火山防災副読本を活用した授業について、小中連携を図ることができ、9年間を見通した防災学習を進めるきっかけづくりとなった。

2 課題

- (1) 授業だけでなく、合同避難訓練等の小中連携を図り9年間を見通した防災教育の継続を図っていくこと。
- (2) 今後は、「地域防災」という視点も取り入れながら、より家庭・地域との連携を図っていく。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：岩手県立軽米高等学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

- 本校では総合的な探究の時間をメインに復興防災教育に取り組んでいる。
- 総合的な探究の時間(以下「総探」と略す。)では「カルマイ Research=Cultivate our mind」というテーマで地元軽米町について理解を深め、町の未来の発展に貢献することを目的に様々なテーマについて探究した。この取組は、次世代の軽米町を担う人材の育成を目指した地域連携型中高一貫教育の中に盛り込まれている。地域学習を通して、多くの方とかわり、有事の際に地域と学校が助け合える関係性を構築していくこともねらっている。
- 軽米町では平成11年に総雨量230ミリの豪雨による雪谷川の氾濫によって町の中心部が水没や流出するなど、壊滅的な被害を受けた経緯がある。そのような過去の災害(雪谷川の氾濫等)について振り返りながら調査し、その後の町の防災や安全対策について学んでいく。



【写真1 軽米町総務課『広報かるまい』(2019.7 vol724)】

- 軽米高校の周辺は、山々に囲まれた場所であり、軽米町を見下ろせるくらい高い場所の斜面に建設されている。そのため、校舎のすぐ脇が法面になっており、軽米町発行「防災マップ」によると「土砂災害特別警戒区域(急斜面地)」に指定されており、学校も土砂崩れなど危険な場所に立地している。それでも町の避難所に指定されており、現在見直し中である。



【写真2 軽米高校、校舎周辺の様子】

- 軽米中学校と共同で地域の清掃活動を行いながら、地域との関わりを深め、避難所までの経路や学校周辺の危険箇所の確認を行い、地域防災の共通認識を図る。
- 東日本大震災津波被災地を訪問し、住民や自治体と交流をとおして、震災からの教訓を学び、防災意識を

高める。校内の復興防災訓練では、避難経路の確認のほか、防災機器の操作確認や点検、消火訓練、降下訓練を取り入れた訓練を行い、災害時の安全や避難所の運営方法について、生徒だけでなく職員も一緒に共通の認識を図っている。

II 取組の概要

本校では「いわての復興教育」で掲げている3つの教育的価値のうち、特に地域に「かわり」、地域が災害に見舞われたときには高校生がリーダーとなって町を支えようという気概を備えた防災リーダーを目指しながら、災害に「そなえる」という2つの柱をメインに、総探での地域学習をはじめとして郷土の皆さんと、その都度積極的にふれ合い、顔見知りの関係を築き、有事の際に助け合える関係を日常から築いていくことをねらいとし、さらに保健講話等による「命の尊さ」についての学習も通して、自分たちの人生を主体的に見つめながら、正しい方向に向かうよう判断ができ、よりよく「生きていく」ことをねらいとして学習している。

1 「かわる」について

- (1) 登校時一声運動：軽米高校生徒会・軽米中学校生徒会・軽米高校PTA生活指導委員会



【写真3 登校時一声運動の様子中学生やPTAの皆さんと一緒に】

軽米高校生徒会を中心に軽米高校PTA、軽米中学校生徒会、本校職員による登校時一声運動が5月に2回実施した。登校する生徒たちと爽やかに朝の挨拶を交わしながら交流を図り、学校での様子が垣間見えてよかったという声も聴かれた。

- (2) 「軽米町インターンシップ」：2学年



【写真4 2学年インターンシップの様子】

2学年就職コースの生徒が地元軽米町の企業でインターンシップ・就業体験を実施した。軽米町内外の公共機関や事業所で福祉関連の仕事や接客、商品管理、施設管理などを体験し、社会や地域の一員としての意識や自覚を高め、自己の将来設計・進路選択に役立てた。様々な仕事をとおして、地元企業を知り、郷土とのつながりを深め、進路意識を高めることができた。コロナ禍にも関わらず、受け入れていただいた企業の担当者から軽米高校生に対して沢山の激励を頂戴し、交流を深めることもできた。

(3) 「総探町民交流班（軽米秋まつりにて駄菓子の販売実習）」：2学年

【写真5 2学年 軽米秋まつりに出店した際の様子】



探究活動を通して、町民の皆さんともっと関わりたいという思いから、生徒たちは地域おこし協力隊の方のご協力のもと、コロナ禍で3年ぶりの開催となった軽米秋まつりに駄菓子屋を出店した。特に幼児や児童の皆さんに喜んでもらい、生徒も交流を深めることが出来たと充実した表情だった。

(4) 「軽米秋まつりに参加」：生徒・PTA・職員の有志



【写真6 軽米秋まつりに参加し、活躍している様子】

コロナ禍により3年ぶりの開催となった「軽米秋まつり」に高校生はもちろん、PTA、職員の多数が参加した。山車の運行、大太鼓、神楽、流し踊りにそれぞれの生徒が携わり、一人ひとりがまつりを盛り上げようと練習から参加し、汗を流して本番を迎え、祭に臨んだ。日常にない活動をとおして、日ごろ見ない様子が伺え、様々な立場の人との連携も深まった。また、町民の皆さんには、沿道からたくさんの声と応援を掛けていただき、町民の皆さんと交流と絆を深める貴重な機会となった。

(5) 「中高一貫クリーン作戦」(中止)：1学年・2学年・軽米中学校3学年

軽米高校生徒会を中心に本校生徒と軽米中学校3学年の生徒と連携して班ごとに通学路の清掃活動を計画した。今年度はさらに危険を想定される場所を探索し、その情報を持ち寄って中高合同のハザードマップの作製を計画したが、台風の為中止とした。是非来年実施したい。

(6) 「総合的な探究の時間・カルマイ Research 研究発表」(軽高祭)：2学年



【写真7 文化祭での発表の様子】

2学年の生徒が総探の研究成果を文化祭にて発表し、全校生徒や保護者、職員で探究の成果を共有した。テーマについては、町民同士の交流や公園の建設、町の防災に関わるものなど多岐にわたるが、高校生らしい若々しい考察が発表された。生徒たちは探究を進めることで、自分たちの考えの浅さに気付き、足りない部分を互いに補いながら、アイデアを出し合って結論を導き出していた。今後は軽米町への提言を目標に活動していく。

2 「そなえる」について

(1) 「防災避難訓練」：全校生徒、全職員



【写真8 消火訓練・降下訓練の様子】

大規模地震からの火災を想定した防災避難訓練を実施。避難訓練後には、実際の火を消す消火訓練や、救助袋での降下訓練を行った。地震発生時の想定では、生徒たちは自然に机に身を隠し、頭を守る行動をとることができていた。降下訓練では、校舎4階から降下するのだが、思った以上に高く、高さへの怖れも学んだ。今年度は従来の避難経路を見直し、数パターン考えたり、消防署職員の方よりご指導をいただきながら、考えた。また、職員についても防災機器の操作についてもマニュアルを確認したり、チームズに挙げ、全職員で共有を図った。

(2) 「被災地訪問学習」：1学年



【写真9 語り部さんからお話を聞き、復興列車に乗車して学習している様子】

1学年で東日本大震災津波の被災地である野田村を訪問した。観光協会の方に、野田港、お台場を案内していただき、震災当時の被害の様子とその後の復興、暮らしの再建状況について説明いただいた。また、三陸鉄道震災学習列車に乗り込み、田野畑〜久慈間を移動しながら被災地の様子や防災の取組について学んだ。訪問学習を通して、震災を教訓として減災・防災への取組を継続していく重要性を学んだ。

(3)「防災学習（非常用持ち出し袋の学習）」：1学年



【写真10 非常時持ち出し袋の中を確認しているところ】

3年前の台風19号に見られる広域水害や今年度熱海での土砂災害などを例に、災害はいつでも・どこでも起こりうることを確認し、非常持ち出しリュックの中身を確認させた。「ラジオと懐中電灯と充電器が一体となった発電機や、サバイバルナイフ・ホイッスル、水や食料を温められる袋への関心が高かった。

(4)「防災学習（段ボールベッドの作成と使用法）」：1学年



【写真11 段ボールベッド組み立て風景】

避難所で使用されている「段ボールベッド」を5～6人で1台組み立てさせた。この体験を例に、避難所での協力の必要性について考えさせた。その後、座ったり、横になったりしながら段ボールベッドの利便性や必要性を体感させた。生徒からは「思った以上に頑丈」「温かさを感じる」「高齢者が立ち上がるのに楽」などの感想が聞かれた。

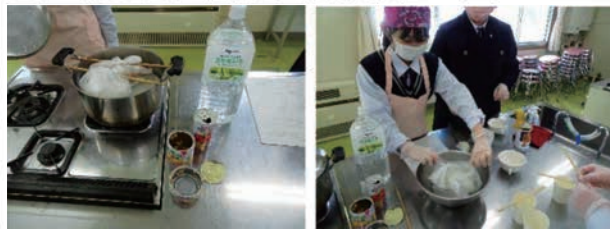
(5)「防災学習（災害時の食事①）」：1学年

α米やローリングストックによる防災レシピの実習。あまりおいしくなかったという正直な声もあがったが、災害の時はぜひいたくは言わず、まずは命を守る行動をとることの大事さを確認し合った。



【写真12 災害時の食事についての実習（α米他）】

(6)「防災学習（災害時の食事②）」：1学年



【写真13 災害時の食事についての実習（缶詰パン他）】

非常用持ち出し袋の缶詰パンへの関心が高かったことから、乾パンを試食して比較させた。乾パンより「やわらかくそのままおいしい」が「家族分だと量が少なく他の食料も必要」などの感想が出された。また、体を内臓から温める食事として「ポリ袋で炊くご飯とスープ」を体験させた。α米が不評であったことから、米は軽く研いで加熱用ポリ袋に入れ30分以上浸水させたものを15分以上加熱した。スープはローリングストックの缶詰・乾物で作るミネストローネとして加熱用ポリ袋に入れて15分加熱した。ポリ袋に入れる水はペットボトルの水、鍋に入れる加熱用の水はバケツに用意した湧き水を使用させることで、少ない水を大事に使う意識を持たせた。水つばい飯や加熱不足の班もあったが「温かい食事ができる有難さ」と「水の大切さ」を感じた感想が多かった。非常時の食事について深く考える機会となった。

(7) 学校安全計画、危機管理マニュアル、防災避難訓練避難経路の検討と確認

現在の危機管理マニュアルや避難経路が生徒の実態に即しているか、令和5年度に向けた検討と見直しを行った。校内分掌等の調整を図りながら、職員会議で職員に共通理解をしながら進めていく。

(8)「令和4年度「いわての復興教育」児童生徒実践発表会」に参加」：2学年・総探防災班



【写真14 実践報告とパネルディスカッションの様子】

「いわての復興教育」児童生徒実践発表会（岩手県民会館大ホール）に総探で「防災」について探究している生徒たちが、軽米高校での実践報告と、パネルディスカッションに参加した。

生徒たちは、軽米町に社会貢献したいという希望から

メンバーが集まり、探究を進める中で、避難場所にありながら土砂危険箇所の学校のことや、川の氾濫があった軽米町の過去に注目するようになり、「防災をとおして地域貢献したい」という結論に至り、探究に励んでいる。

探究で分かったことは以下のとおりである。

- 「避難所」というと、どこも安全という感覚があったが、どうもそうではない。『軽米町 防災マップ』から調査したところ、地震や土砂災害、洪水の災害の危険性が高いところでも、避難所に指定されていることがわかった。
- 自宅付近の避難所について調べておく。どの災害で不適であるかをしっかり把握しておく。
- 授業で「非常用持ち出し袋」について学んだ経験を生かさないかと思い、災害時に持つべき物を紹介する取り組みも行いたい
- ライト、雨具、ラジオ、救急セット、水・食料などの避難をサポートするアイテム、メガネ、補聴器、薬など、それがないと生活できないアイテムは欠かせない。
- 緊急事態のさなか、余裕はない。百均ショップで調達できるものも多いので、災害に備え、日ごろから準備しておくことが大切。

そこで、見えて来た課題として、ハザードマップの複雑さと分かりにくさだった。そこで生徒たちは、現在は小学生以下の小さな子どもにもわかる「高校生目線のハザードマップ」を制作し、町に配布し役立ててもらいたいという見通しで活動していく。



【写真15 防災班のメンバーと探究の様子】

Ⅲ 取組の成果と課題

（成果）

- 本年度も新型コロナウイルス感染拡大防止を最優先に考慮しつつも、少しずつ活動の規模を従来に近づける形で進めてきた。見学や実践的な訓練を比較的多く実施することができ、生徒自身の防災意識を高めることができた。また、職員間でも、避難の仕方や設備、新型コロナウイルス等感染症対応について考え、確認することができ、貴重な機会となっている。
- 地域ぐるみの取組は、生徒が地元を目を向ける機会になり、地域の長所や課題、危険な場所等について、これまで当たり前で生活していたことから気付かなかったことに気付き、どうしたらいいんだろう、自分

だったらこうする、という考え方や視野の広がりをもたらしてくれる。また、企業や行政など、多くの方と接することができ、人とのつながりを広げることができ、自分の活動の幅を更に広げることができた。

- 被災地訪問学習では、東日本大震災津波を直接知らない生徒が、震災を教訓として減災・防災への取組を継続していく重要性を学んだ。また、人の痛みや人の役に立ちたいというボランティア精神、防災減災意識が醸成され、自らのこれからの理想の人間像や人生について見つめなおす機会となった。

（課題）

- 新型コロナウイルスをはじめとする感染症の感染拡大防止を念頭に、三密を避けるなど、対策を講じながら実践内容の工夫が必要である。
- 職員間の連携を密にして、学校として、また地域として外部機関等の横の連携を図り、主体的かつ継続的に計画的に取り組むこと、また、担当者も他の関係機関とのつながりや関連性、目的を整理して実践していくことが必要。
- 学校運営委員会（コミュニティースクール）を活用し、地域との連携を図り、実践に取り組む。
- 小・中・高校が連携した取組が事情により実現できなかったため、今後も協働の取組を企画し、校種間の枠を超えた縦の繋がりを深めていきたい。

（展望）

- 過去に豪雨災害の経験がある地域なので、後世まで災害に備える危機管理意識を持つ生徒を育てていかなければならない。（忘れてはならない）
- 復興防災学習や地域探究は、地域に主体的に目が向き、「発展させたい」、「守りたい」、「そのための行動がしたい」という生徒が増えていく。人間関係の幅も広がり、視野が広がり、自らの将来について見つめなおす機会になっている。
- 新型コロナウイルス感染症についても災害と捉えて、「備えなければ」という考え方ができるようになった生徒もいる。感染拡大防止で人間関係が希薄になってきた昨今だが、このような時だからこそ人のつながりの大事さを学ぶことができるのではないかと考える。今後も岩手を担う生徒たちの熱い郷土愛を育むためにも復興防災学習に力を入れていきたい。



「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：岩手県立金ケ崎高等学校

I 事業の概要 (地域の実情含む)

本校が位置する金ケ崎町は奥羽山脈の裾野に位置し、冬季の積雪量が多く、自然災害においては風害の備えが必要な地域である。町の重点課題は高齢化、生産人口の減少である。人口流出が進行する一方で県内最大の工業団地があり、5千人を超える社員が従事している。本校は、学校安全総合支援事業(いわての復興教育スクール〈内陸〉)の指定校となり2年目となる。昨年度実施した取組で生徒の反応が良く教育的効果があったと思われる取組を継続し、復興教育を行ううえで内陸で生活する生徒達に伝えるべきことは何かを考えたが事業を進めた。

II 取組の概要

1 起震車体験 (7月13日)

金ケ崎消防署に依頼し起震車体験を実施した。全校生徒対象にクラスごとに2～4人グループに分かれ、実際の大地震の揺れを体験した。体験後は「思っていたよりずっと揺れが大きくて驚いた」「とっさの時、何もできなくて頭が真っ白になるのだと実感することができた」という感想が寄せられた。生徒達は教室に戻ってからも暫く地震について話をしていたようだった。11年前、自分がどこで何をしていたのかを思い出すことで家族の有難みを感じ入ったり、今度は自分が家族を守りたいという強い気持ちも生まれたりしたようだった。



～ 起震車体験 ～

～生徒の感想文より～

「私は東日本大震災の地震を体験したが、6歳の時に経験したあの特徴のある揺れのはっきりと思い出した。初めは揺れがゆっくりでその後、揺れが大きくなった。一番印象的だったのは揺れが始まってから終わるまでの時間が長かったことだ。大きな揺れが収まったと思ったら、また大きな揺れがやってきて地震が収まっても暫く恐怖心が消えなかった」

同日の7校時相当で防災講演会を実施した。水沢消防署金ケ崎分署長から東日本大震災時の金ケ崎町の被災状況、災害時の備えについて御講話をしていただいた。「内陸だから津波がないから大丈夫」ではなくて「もしも」を考えて備えることの必要性、また、「共助」について知る機会となり日頃から地域の人達と交流することの大切さを知ることができた。

2 HUG避難所運営ゲーム (9月21日)

1年生を対象にHUG避難所運営ゲームを実施した。講師は学校防災アドバイザー、塚本清孝氏に昨年度に引き続き指導していただいた。



～HUG避難所運営ゲームで指導する塚本清孝氏～

事前説明を受けた後、グループに分かれ、札(避難してくる人のプロフィールを記したもの)を読み上げる人を選出し、グループ内で話し合いながら避難所運営を行った。

次々と避難してくる避難者を各部屋に誘導していくうちに作業が追いつかなくなると、避難者を誘導する生徒と掲示板を書く生徒に役割分担するようになった。



～役割分担をして作業をする生徒達～

最後に各グループの設営状況を見せ合うことで各グループの工夫を知ることができた。塚本氏からは「この演習を通してできなかったことを日常生活を送る上での課題とし、自分なりの対策を立ててみること、震災の疑似体験として今日の演習を記憶して欲しい」という話があった。

3 沿岸震災学習 (11月21日)

1学年を対象に沿岸震災学習を実施した。昨年度は陸前高田市・鶴住居を見学したが今年度の1年生は中学時に陸前高田市の伝承館を見学している生徒が多いため、見学先を山田町、宮古市田老とした。語り部ガイドを依頼してそれぞれ1時間コースで震災当時の話を聞いたり、復興の様子を見学した。

午前中は山田町の商店街を新生やまだ商店街のガイドさんに案内していただいた。



～沿岸震災学習・山田町～

～生徒の感想文より～

「震災をきっかけに、住民が暮らしやすいような新しい町づくりをしていることがわかった。11年経った今でも自然と向き合う中で、より良い町を目指す姿に深い郷土愛を感じた。9.7mもの高さの防波堤に囲まれた町並みは内陸に住む私達にとっては新鮮で、同時に海と共に生きることの大変さ、難しさを感じた。町民の防災意識を高めるために置かれた15時27分で止まったままの時計を見ると辺りの景色が少し物寂しく感じた。」



～宮古市田老 旧たろう観光ホテル～

宮古市田老では旧たろう観光ホテルの社長室に行き、ガイドさんから東日本大震災のときに津波が襲ってきたときの様子を聞いた。実際にホテルの社長がこの部屋で死を覚悟して津波を撮影した映像を見て、生徒達は驚きと共に肅然とした様子を見せていた。



～宮古市田老 防波堤を見学～

ホテル見学の後、高さ4.5mの防波堤に上って周辺を見学した。四方を防波堤に囲まれており、海が全く見えない光景に生徒達は圧倒されていた様子であった。

～生徒の感想より～

「過去に何度も津波の被害を受けた田老だが、それでも海を愛し漁をすることを誇りに思っている方がたくさんいらっしゃることに驚いた。自然の驚異に対抗するため、避難の時間をかせぐことのできる防波堤の造設や山に登る際、スムーズに登れるよう道路をまっすぐにするなど、防災意識の高い町づくりとなっていることがわかった。震災当時のビデオを視聴したとき、防波堤を越えて波が迫ってきて、ホテルの社長さんが自分の命はこれまでだと覚悟して撮影したカメラが、衝撃で天井を向いて戻った一瞬の瞬間に町全体が波にさらわれていた。強い恐怖を感じた。」

III 取組の成果と課題

1 起震車体験

(1) 成果

- ア 実際の揺れを体験することで地震の恐ろしさをリアルに体感し、地震の際に必要なことに気づくことができた。
- イ 東日本大震災の被害の甚大さを思い出し、自然災害の記憶を伝えていくことの必要性を実感した
- ウ 水沢消防署金ヶ崎分署長の講演を通じて、金ヶ崎町の被害状況について具体的に知り、内陸で生活する上での備えについて考える機会となった。

教育的価値 [いきる] ①かけがえのない生命
[かかわる] ⑧家族のきずな
[そなえる] ⑮自然災害の様子と被害の状況

(2) 課題

- ア 防災講演会については、講師に事前に話していただきたいことを簡単にお願ひした。生徒が学びたい内容についても情報収集するなどの工夫があれば生徒の主体的な学びに繋げることができた。次年度も実施する場合は講話内容について工夫したい。

2 HUG 避難所運営ゲーム

(1) 成果

- ア 瞬時に判断して的確に避難誘導するためには、情報を共有して話し合うことが必要なこと、そ

のためにはコミュニケーション能力が必要であることが理解できた。日常からコミュニケーション能力を身に付けられるように意識して生活することが大切であるとの気づきに繋がった。

- イ 活動を通して生徒一人一人の特徴を知りうることができた。

教育的価値

[いきる] ①かけがえのない命
[かかわる] ⑨仲間とのつながり
⑩地域とのつながり
⑭災害に備える地域づくり
[そなえる] ⑳身を守り、生き抜くための技能

(2) 課題

- ア 1年生対象で実施したためグループ分けに工夫が必要であった（リーダーとなる生徒が不在で運営がうまくいかないグループもあった）。
- イ 実施時期の検討が必要（他行事と重なった）

3 沿岸震災学習

(1) 成果

- ア 沿岸地区2ヶ所を見学することにより、それぞれの復興への工夫や苦勞の違いを際立てながら知ることができた。
- イ 命を尊び郷土を愛し地域と共に生きる人々の生き方に触れることができた。
- ウ 地域で生きるということについて考える機会となった

教育的価値 [いきる] ①かけがえのない生命
②自然との共生
[かかわる] ⑧家族のきずな
⑫自分と地域社会
⑬復旧・復興のあゆみ
[そなえる] ⑮自然災害の様子と被害の状況
⑳身を守り生き抜くための技能

(2) 課題

語り部の案内で実施したが「沿岸震災学習」を通して何を教えたいかを指導者側が明確化して生徒に示すことが必要だった。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：岩手県立平館高等学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

八幡平市は、豊かな自然あふれる地域であるが、岩手山の噴火や大雨による河川の氾濫や土砂災害など、自然災害への備えが必要な地域である。又、県境の内陸部に位置しており、東日本大震災津波による被害状況を知らない生徒が多く、現地を訪問することで、震災の仕組みや被害、防災に関する知識を学びたいと考え、陸前高田市訪問を実施した。本校は市内唯一の高校であり、日頃から八幡平市内の小・中学校と交流事業を行っているが、事業の指定により、合同で防災学習を行うことで連携して地域の災害に備える意識を高める取り組みを行った。

II 取組の概要

- 1 事業計画に関する連携校と市役所との情報共有
小学校、中学校の担当教員が参加し、現状の把握と今年度の取り組みの確認を行った。又、八幡平市防災安全課にて今年度の取り組みの内容を確認した。
- 2 震災学習事業

(1) 陸前高田市訪問

6月15日に3学年生徒が、沿岸の陸前高田市を訪問し、現地で研修を行った。

ア 陸前高田市内見学

陸前高田市商工会会長の伊東孝氏、副会長の磐井正篤氏を講師に、市内中心地をバスで巡回しながら、震災当時の被害の状況や避難時の様子等を伺った。実際に被災した場所で、震災を経験し、復興までの道のりを現地でリードしているお二方にお話を伺った。

イ 岩手県立高田高等学校見学

高田高等学校の伊藤副校長先生を講師に、震災当時の様子や避難行動、避難後の生活、旧校舎跡地にある希望の鐘の由来等のお話を伺った。



ウ 東日本大震災津波伝承館見学

施設ガイドさんに案内いただきながら、震災当時の被害状況、支援の内容、復興の道のり等実物やパネル展示を見学し研修した。



<生徒感想>

- ・陸前高田市を訪問し、自分の目で実際に見ることで地震や津波の恐ろしさを実感し、命の大切さを改めて考えた。
 - ・地元への愛があるからこそ、復興への取り組みができる実感した。復興の道のりから、今自分達が住んでいる地域も、長い年月を経て今があると感じた。
- (2) 陸前高田市訪問のまとめ

訪問の内容を各グループで、発表スライド、展示用ポスターにまとめる活動を行った。完成したものを文化祭で展示し、学習内容を校内生徒や、保護者に発表した。



3 防災意識の向上事業

(1) 防災講習会

7月20日に、八幡平市防災安全課の防災対策専門員の瀬川正雄氏を講師に、3年生を対象に防災講習会を実施した。連携校である平館小学校・西根第一中学校の担当教員も参加し、合同防災学習の取り組みとして行った。講習内容は、地域で想定される火山噴火・洪水等の災害について、災害と防災マップについて、避難情報と避難行動について、キキク

ルの活用方法について。八幡平市の防災マップ製作にかかわっている瀬川氏から、防災マップをもとに、情報収集の方法や活用方法を学んだ。



(2) 火山防災学習

八幡平市は、岩手山の火山噴火が起きた場合の被害が想定されていることから、7月5日に市内田頭小学校の中軽米利夫校長先生を講師に、3年生を対象に火山防災学習を実施した。講習内容は、岩手山の火山噴火について、平舘高校で想定される被害について、火山からの恩恵の活用について、八幡平市内小学校の防災学習について。

(3) 大雨洪水ワークショップ

学校防災アドバイザー派遣事業を活用し、12月6日、盛岡気象台の方を講師に、地域で発生する災害を想定したワークショップを全校で実施した。

本校施設の一部が土砂災害区域に想定されていることから、大雨・土砂災害の講義の後、グループに分かれ、それぞれの条件をもとに、避難情報の収集方法や備え、避難方法などを話し合い、ワークの結果を発表した。



<生徒感想>

- ・自分の生活する地域の災害について、また、実際に発生した場合の避難行動を学ぶことができた。
- ・地域のことを知るなかで、改めて夢や希望のつまった自分の住んでいる地域を大切にしようと思った。

4 合同防災学習事業

(1) 平舘小学校訪問

10月11日、陸前高田市訪問や防災講習会で学んだことを、連携校である平舘小学校に3学年の代表生徒が訪問し、4～6年生に発表スライドを用いて

発表した。



(2) 西根第一中学校訪問

10月28日、3年生の代表生徒が陸前高田市訪問についてまとめ、連携校である西根第一中学校を訪問し、2年生の生徒と交流した。西根第一中学校も沿岸被災地を宿泊研修で訪問しており、お互いの沿岸訪問の内容をスライドを用いて発表し、その後、グループにわかれ、高校生がグループリーダーとなり、意見交換会を行った。



(3) 八幡平市防災教育研修会参加

八幡平市は、火山防災副読本を活用した防災教育を実践している。8月31日に平舘小学校を会場に、担当教員の授業実践を含む防災教育研修会が行われ、高校の担当教員が参加し研修した。八幡平市の火山防災副読本を活用した先進的な教育実践を研修することができた。



(4) 西根第一中学校の避難所運営訓練参加

西根第一中学校は、総合的な学習の時間に学年ごとにテーマを持ち、防災教育に年間を通じて取り組んでいる。その中で11月5日に開催された、全校生徒が参加しての避難所運営訓練（HUG）を高校の担当教員が参観し研修した。継続的に行われ、保護

者も参加した規模の大きな避難所運営訓練であった。



<生徒感想>

- ・小学校に出向いて自分たちが学んだことを発表したことから、震災のことを後世に伝える大切さを実感した。
- ・中学生も沿岸訪問をしていて、お互いの発表を聞くことで、わかることが多くあった。
- ・小中学生に教えるために自分の学んだことをわかりやすくまとめたり、知識を深めることができた。
- ・小学生の頃から取り組んでいる復興教育だが、年少者に伝える側になって、気づくことが多くあった。

5 取り組みの発表

(1) 児童生徒実践発表会参加

1月23日に岩手県民会館で行われた児童生徒実践発表会に、本校代表生徒が参加し、今年度の取り組みをスライドを用いて発表した。また、本校他3校の高校と一緒に、パネルディスカッションに参加した。

(2) 八幡平市市議への取り組みの発表

2月に八幡平市役所を会場に、八幡平市市議会議員の方に、本校の復興教育の取り組みと八幡平市の防災に関する提言を発表した。

<生徒感想>

- ・同じように復興教育に取り組む他校の発表を聞き、高校生同士のディスカッションは貴重な体験だった。課題を共有できたことで、今度の目標を明確にすることができた。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

(1) 生徒の意識について

沿岸被災地を東日本大震災後訪れたことがない生徒が15%おり、今回の陸前高田市訪問が現地を知る学びの機会となったことがわかる。訪問先で、現地の復興の取り組みを直接伺う中で、日頃からの備えや、地域での関わり、命を守る行動が大切であることを学んだと生徒の感想から読み取れる。

防災講習会やワークショップをとおり、地域で想定される災害や具体的避難行動を学んだ。「地域で想定される災害(火山噴火・土砂災害等)発生時に、自分が取るべき行動を知っているか」の間に、実施前(6月)では、50%の生徒が「知っている」と答えているが、実施後(1月)では、95%が「知っている」と答えており、講習の効果が高いことがわかる。

また、陸前高田市訪問や防災講習会の内容をまとめ、連携校である小中学校を訪問し、児童生徒を前に発表したり、交流会を行うことで、伝えるために生徒自身の理解や考えが深まったことが感想からわかる。また、年少者へ伝えるという取り組みが、生徒に使命感と意欲をもたらし、実施後は達成感から自信を持った。

実施後(1月)のアンケートで、本事業全体をとおり「防災意識が向上したか」という問に対して、70%が「おおいに向上した」、25%が「やや向上した」と回答しており、今年度の取り組みが生徒の防災意識を高めたことがわかる。

また、自分の住む地域の災害や防災について学ぶ中で地域を知り、地元への感謝の気持ちが高まり、地域を大切にしたい、地域のために貢献したいという思いが深まり、他者と共によりよく生きるための力を身につけることができた。

(2) 小中高連携について

小中高でそれぞれが実施している、防災学習に参加し合うことで、共通の認識を持つことができた。また、八幡平市内小中学校で実施している防災教育を高校教員が研修することで、高校での防災教育の在り方を検討することができた。

小中学生と高校生が復興教育をとおりて交流することができ、今後の交流事業の可能性を見出すことができた。

2 課題

(1) 継続的取り組みについて

大震災を風化させず、教訓を引き継ぐために、継続して活動を行う必要がある。校内で引き続き取り組める内容を精査して実践していく。

(2) 小中高の連携について

小中学校で取り組んで来た内容を踏まえて、高校での防災教育が行われ、積み重ねが行われるように、情報の共有が必要である。復興教育以外の場面でも今回の交流を機に、生徒同士の交流や教員の連携を継続していきたい。

「学校安全総合支援事業」(いわての復興教育スクール〈内陸〉) 実践事例

学校名：岩手県立盛岡みたけ支援学校

I 事業の概要(地域の実情含む)

本校は、小中学部、高等部からなる知的障がいを対象とした特別支援学校である。小中学部は滝沢市、高等部は盛岡市と校舎が分かれており、本事業を主として進める高等部は平成21年度に開設し、令和4年度で14年目を迎える。本校中学部の他、盛岡及び近郊の中学校特別支援学級・他支援学校から入学する生徒もあり、実態は幅広い。学校経営計画に沿って日常的に復興教育に取り組み、3月には「防災教育の日」を定め、東日本大震災の日の本校高等部の被災の様子や状況を示し、風化が進まないよう「いきる」「かかわる」「そなえる」をキーワードに学習し復興教育を進めている。

高等部開設以来、年3回の避難訓練を地域協力隊(盛岡西消防署・17消防分団・婦人防火クラブ)の参加をいただきながら実施している。また、隣接する警察学校との交流も盛んに行ってきた。一方で同じく隣接する児童養護施設や近隣の小学校・中学校との交流については、その機会がほとんど持たれていない状況である。

本事業をとおして、障がいの有無にかかわらず、地域でたくましく生きていくために体験的学習を発展させながら、近隣の学校を含めた地域との連携体制づくりや組織づくりの礎としたい。

II 取組の概要

1 ねらい

- 体験的学習をとおして非常時に生き抜く知識と技能、災害時の行動を身に付ける。
- これまでに構築してきた関係機関等の連携の拡大を図り組織づくりに取り組む。
- 沿岸地域の復興について実際に現地に赴き、当時の様子や現在の様子について学ぶ。

2 取組内容

(1) 令和4年度学校防災アドバイザー派遣事業

実施日 令和4年7月19日(火)

参加者 高等部生徒41名

厨川中学校特別支援学級生徒24名

講師に防衛省自衛隊岩手地方協力本部募集課広報班広報係の西館幸尋氏と他2名を迎え、「防災に役立つ知恵袋～身近にあるもので防災に備えよう～」をテーマとし、学習した。「新聞紙スリッパの作成」「ロープ

ワーク」「濡れない防災バックの工夫」「ペットボトルランタンの作成」に取り組んだ。

【参加した生徒の感想】

- ・新聞紙スリッパは履き心地が良くて作り方がとても簡単で、いざとなったら作って使えそうだと思います。
- ・袋の中にライトとペットボトルを入れて縛ると、いつものライトより大きく光を出すことができることを知りました。



【新聞紙スリッパ作成】



【ロープワーク】



【ペットボトルランタン】

(2) 岩手県立総合防災センター訪問

実施日 令和4年8月24日(水)

参加者 高等部生徒8名

岩手県立総合防災センターにて防災体験コースを受講した。生徒会執行部と次期リーダー候補生とで編成した復興教育プロジェクトリーダー(以下PL)が参加した。自然災害について学び、スモーク体験や地震体験、放水体験を学習した。

【参加した生徒の感想】

- ・スモーク体験では、視界が見えなくても下の避難誘導を見ながら出口に向かって避難することを学びました。防災についていろいろな話を聞くことができ良かったです。
- ・放水体験では、水圧が凄く、体幹の力が必要だと感じました。



【放水体験】

(3) 避難訓練①(火災)

実施日 令和4年9月16日(金)

参加者 高等部生徒41名

厨川中学校特別支援学級生徒24名

警察学校生29名

厨川中学校と合同避難訓練を実施した。火災により発動した防火扉通過体験、スモーク体験やバケツ消火リレーを体験した。スモーク体験の事前学習において、PLが先日の防災センターで学習してきたことを全校生徒(本校・厨川中学校)に示したことでスムーズにスモーク体験を行うことができた。バケツ消火リレーでは、本校生徒、厨川中学校生徒、警察学校生と交流しながら実施することができた。

コロナ禍で警察学校と交流ができていなかったが、3年ぶりに交流することができた。

【参加した生徒の感想】

- ・スモーク体験は前が見えなくて恐怖を感じました。実際に火事になって前が見えなくなったらパニックになりそうと思いました。低い姿勢で口をハンカチで覆う事を忘れないようにしたいです。
- ・バケツ消火リレーでは警察学校生に渡したり渡してもらったり声を掛け合いながら取り組むことができ良かったです。警察学校生のバケツリレーの模範は速くて見惚れました。そして、格好良かったです。



【防火扉通過体験】



【バケツ消火リレー】

(4) 避難訓練② (総合：地震→火災)

実施日 令和4年11月11日(金)

参加者 高等部生徒41名

厨川中学校特別支援学級生徒15名

警察学校生32名

厨川中学校と警察学校生と合同避難訓練を実施した。本校高等部生徒と厨川中学校生徒が教室から警察学校生と一緒に避難するなど交流を深めた。火災により発動した防火扉通過体験を前回同様体験した。警察学校生が模範となった水消火器訓練を見学した。最後は、警察学校生と一緒に地震体験車「そばっち号」で地震体験を行った。警察学校生が生徒に「大丈夫、怖くないよ」などと優しい声掛けをしているのが印象的であった。「関東大震災」「岩手・宮城内陸地震」「阪神淡路大震災」「東日本大震災」と同等の地震の揺れを体験した。



【「そばっち号」による地震体験】

【参加した生徒の感想】

- ・「そばっち号」を見学して、「あんなに揺れるのか」と思いました。大きな地震が起きたときは慌てず避難できるように準備したいと思いました。
- ・いろいろなパターンの揺れがありました。「縦揺れ」「横揺れ」そして、同時に揺れて驚きました。
- ・「そばっち号」の地震体験では、しっかりつかまっていたけど、手が離れそうでした。短い時間の体験でしたが乗ってみると長く感じました。

(5) 被災地訪問

実施日 令和4年11月22日(火)

参加者 高等部第2学年生徒8名

本校2学年生徒が高田松原津波復興祈念公園内の見学及び東日本大震災津波伝承館を訪問し、津波被害の恐ろしさを学んだ。また仮設住宅を活用した

施設「たまご村」の「カフェフードバーわいわい」の店長より、震災後の事やこれからの復興に懸ける思いなどを学ぶ事ができた。東日本大震災当時を知らない生徒がほとんどであったため、陸前高田での学習のほか、事前学習や事後学習において震災当時の事や自分で自分の身を守ることの大切さを学習した。

【参加した生徒の感想】

- ・事前学習で被災した画像も見ていましたが、最初は「こんな感じか」と思っていました。今日、実際に陸前高田に行き、自分たちが調べた建物を見たときは画像で見ることと実際に見ることでは、意味が違いすぎて心がとても痛みました。(中略)津波が来てあの場所に流されることなく残った松に元気をもらうことができました。私も奇跡の一本松のように強い人になりたいと思いました。



【高田松原「奇跡の一本松」】



【東日本大震災津波伝承館】

(6) 避難所生活体験

実施日 令和4年12月19日(月)

参加者 高等部生徒41名

高等部生徒及び職員が「避難所生活体験」をテーマにし「α米試食」「段ボールベッド作成」「段ボールトイレ作成」「段ボールパーテーション作成」体験を通して避難所設営に関することを学習した。生徒たちはそれぞれ段ボールトイレやベッドに座ったり寝転がったり感触を確かめていた。また、段ボールのパーテーションで区切り自分の部屋のようにレイアウトした学年もあった。

【参加した生徒の感想】

- ・段ボールベッドは、組立てが難しかったけど、みんなで協力して組立てることができて良かったです。順番に寝てみたら硬くて背中が痛くなりそうだと思います。
- ・段ボールなのにしっかりしていると感じました。一番作ってみて良かったのはトイレで、座り心地が最高でした。



【段ボールトイレと段ボールベッド】



【水からのα米とカレーライス試食】

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

今年度は例年の避難訓練の内容に加え、体験学習を充実させることができた。体験学習の内容が生徒に大変わかりやすく伝わり、楽しくも臨場感ある学習となった。これまでの地域協力隊(盛岡西消防署・17消防分団・婦人防火クラブ)や警察学校に加え、新しく厨川中学校と交流しながら合同で避難訓練等を行うことができ、地域の学校と連携する良い機会になった。また、地域の方々から多くの支援をいただく本校の生徒が中心になり様々な事業を進めることができたことは貴重な経験になった。

2 課題

地域の拠点校として、年度初めに避難訓練等の年間予定を各学校や児童養護施設に案内をしたが、それぞれ、目標としている連携モデルの実現には至らなかった。次年度も本校の取組の様子、成果と課題を連携校と情報共有することで、取組の充実を図り、防災体制のさらなる拡大と構築を目指していきたい。



【水を入れて準備をする「α米」】



【陸前高田「たまご村」】

「いわての復興教育」
実践事例集

2023（令和5）年3月

発行：岩手県教育委員会事務局

所在地：〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1

電話番号：019-629-6139

印刷：有限会社セーコー印刷

